山形県埋蔵文化財センター調査報告書第61集

高松Ⅱ・Ⅲ遺跡

発掘調査報告書

1999

財団法人　山形県埋蔵文化財センター

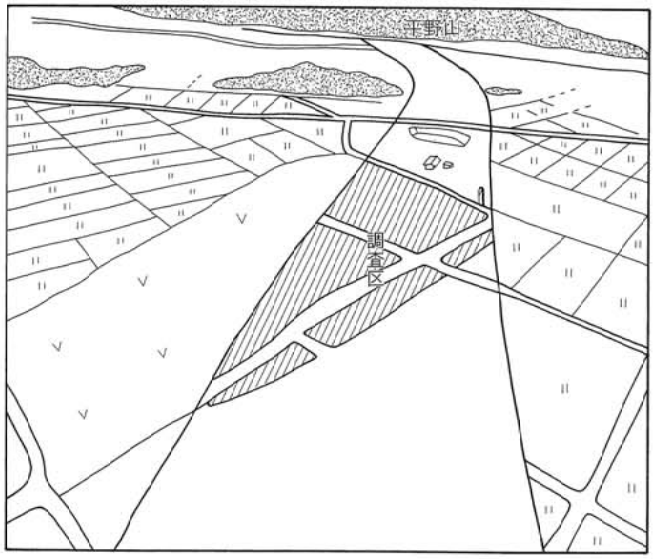
高松（たかまつ）Ⅱ・Ⅲ遺跡

発掘調査報告書

平成11年３月

財団法人　山形県埋蔵文化財センター

高松Ⅱ遺跡俯瞰写真（南東から）



巻頭図版２

高松Ⅱ遺跡　ST25 遺物出土状況（北から）

高松Ⅲ遺跡　SE3 柱根出土状況（西から）

序

本書は、財団法人山形県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した、高松II・III遺跡の調査成果をまとめたものです。

高松II・III遺跡は、山形県のほぼ中央に位置する寒河江市に所在します。寒河江市は、東に奥羽山脈、西に月山・朝日の連峯を望み、南に蔵王、北に葉山を擁し、山形盆地の西部に位置します。盆地の中央を南北に最上川が、西から東に寒河江川が流れ、自然条件に恵まれた地で、「さくらんぼの里」として特に有名な所です。

この度、東北横断自動車道（寒河江～西川間）建設工事に伴い、工事に先立って高松II・III遺跡の発掘調査を実施しました。

調査では、高松II遺跡が平安時代と中世、高松III遺跡は奈良～平安時代の集落跡と考えられる遺構が検出され、多くの遺物も出土しました。特に、高松II遺跡で確認された中世の竪穴住居跡は、県内でも類例が少なく、当時の集落を研究するうえで大変貴重な資料となるものです。

近年、高速自動車道やバイパス、農業基盤整備事業など国県等の事業が増加していますが、これに伴い事業区域内で発掘調査を必要とする遺跡が増加の傾向にあります。これらの埋蔵文化財は、祖先が長い歴史の中で創造し、育んできた貴重な国民的財産といえます。この祖先から伝えられた文化財を大切に保護するとともに、祖先の足跡を学び、子孫へと伝えていくことが、私たちの重要な責務と考えます。その意味で、本書が文化財保護活動の啓発・普及、学術研究、教育活動などの一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査においてご協力いただいた関係各位に心から感謝申し上げます。

平成11年3月

財団法人　山形県埋蔵文化財センター
理事長　　木　場　清　耕

例　　言

1　本書は東北横断自動車道酒田線（寒河江～西川間）建設工事に係る「高松II・III遺跡」の発掘調査報告書である。

2　調査は、日本道路公団仙台建設局（現東北支社）の委託により、財団法人山形県埋蔵文化財センターが実施した。

3　調査要項は下記の通りである。

遺　跡　名	①	高松II遺跡	遺跡番号　平成元年度登録
	②	高松III遺跡	遺跡番号　平成元年度登録
所　在　地		寒河江市大字柴橋字高松	
調査主体		財団法人山形県埋蔵文化財センター	
受託期間		平成７年４月１日～平成11年３月31日	
現地調査	①	平成７年８月７日～平成７年10月27日	
	②	平成７年７月10日～平成７年８月11日	

発掘担当者	調査第二課長	佐藤　庄一（現研究課長兼調査第一課長）
	主任調査研究員	阿部　明彦（現山形県立博物館）
	調査研究員	氏家　信行（調査主任）
	調　査　員	志田　純子
整理担当者	研究課長兼調査第一課長	佐藤　庄一
	主任調査研究員	佐藤　正俊
	調査研究員	氏家　信行

4　発掘調査及び本書を作成するにあたり、日本道路公団仙台建設局（現東北支社）山形工事事務所、寒河江市教育委員会、山形県教育庁文化財課、山形県寒河江建設事務所、西村山教育事務所等関係機関に協力いただいた。

5　本書の作成・執筆は、氏家信行が担当した。編集は、丸山晶子、森谷昌央、志田純子が担当し、全体については佐藤庄一が監修した。

6　委託業務は下記の通りである。

基準点測量は、株式会社大洋測量設計社に委託した。

遺構の写真測量・実測については、アジア航測株式会社に委託した。

遺物実測の一部については、株式会社シン技術コンサルに委託した。

7　出土遺物・調査記録類については、財団法人山形県埋蔵文化財センターが一括保管している。

凡　　例

1　本書で使用した遺構・遺物の分類記号は次の通りである。

ＳＴ…竪穴住居跡	ＳＢ…掘立柱建物跡	ＳＥ…井戸跡
ＳＫ…土　坑	ＳＧ…河川跡	ＳＡ…柵列跡
ＳＤ…溝　跡	ＳＸ…性格不明遺構	ＥＬ…住居跡内カマド
ＥＫ…住居跡内土坑	ＥＰ…住居跡内柱穴	ＥＢ…掘立柱建物跡の柱穴
ＳＰ…単独のピット	ＲＰ…登録土器	ＲＱ…登録石器
ＲＷ…登録木製品	Ｐ…土　器	Ｓ…礫

2　遺構番号は、現地調査段階での番号をそのまま報告書の番号として踏襲した。

3　報告書執筆基準は下記の通りである。

（１）　調査区概要図・遺構配置図・遺構実測図中の方位は磁北を示している。

（２）　グリッドの南北軸は、N―27°―Eを測る。

（３）　遺構実測図は、1/500・1/300・1/250・1/200・1/80・1/50・1/40・1/30の縮図で採録し、各々スケールを付した。なお、実測図中の●は遺物の出土地点を表す。

（４）　遺物実測図・拓影図は、石器・ミニチャア土器・土製品は1/2、土器・陶磁器・木製品は1/3、大形の須恵器甕破片は1/6として採録し、各々スケールを付した。遺物図版については、実測図・拓影図に準じた。但し、木柱は1/6で採録した。

（５）　遺物実測図中の古代土器について、土師器は断面白抜き、須恵器は断面黒ベタとした。また、土器内面の網点は黒色処理を表す。土器破片資料の拓影図は右側に外面を左側に内面を表した。木製品実測図の濃いスクリントーンは漆紙を、薄いスクリントーンは漆を表す。

（６）　挿図中の遺物番号は、本文、図版、表とも共通する。

（７）　遺物の観察表中の（　）内の数値は、図上復元による推計値を示している。

（８）　遺構覆土の色調の記載については、1987年版農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版標準土色帳」に拠った。

目　次

Ⅰ　調査に至る経過……1
Ⅱ　遺跡の立地と環境……1
Ⅲ　調査の経過……3
Ⅳ　高松Ⅱ遺跡
　1　遺構と遺物の分布……4
　2　検出遺構……4
　3　出土遺物……28
　4　調査のまとめ……51
Ⅴ　高松Ⅲ遺跡
　1　遺構と遺物の分布……53
　2　検出遺構……53
　3　出土遺物……65
　4　調査のまとめ……82

報告書抄録……84

表

表１　土器・土製品観察表……48
表２　陶磁器観察表……48
表３　尖頭器属性表……49
表４　石匙属性表……50
表５　石篦属性表……50
表６　掻器・削器属性表……50
表７　遺物観察表（１）……80
表８　遺物観察表（２）……81

挿　図

第１図　遺跡位置図……2
第２図　調査区概要図……3
第３図　高松Ⅱ遺跡遺構配置図……5
第４図　ＳＴ25住居跡……8
第５図　ＳＴ25住居跡土器分布図……9
第６図　ＳＴ25住居跡ミニチュア土器・土製品分布図……10
第７図　ＳＴ１住居跡・ＳＫ９・10土坑……11
第８図　ＳＴ33住居跡……12
第９図　ＳＴ78住居跡・ＳＫ106土坑……13
第10図　ＳＴ80住居跡……14
第11図　掘立柱建物跡……16
第12図　井戸跡……17
第13図　ＳＫ4・7・8・18・82土坑……21
第14図　ＳＫ86・88・111土坑・ＳＸ65性格不明遺構……22
第15図　ＳＫ66・74・75・101・104土坑……23
第16図　ＳＤ22・23溝跡……25
第17図　ＳＤ31溝跡……26
第18図　ＳＤ96・97溝跡・ＳＧ119河川跡……27
第19図　ＳＴ25住居跡出土遺物（１）……32
第20図　ＳＴ25住居跡出土遺物（２）……33
第21図　ＳＴ25住居跡出土遺物（３）……34
第22図　ＳＴ25住居跡出土遺物（４）……35
第23図　ＳＴ25住居跡出土遺物（５）……36
第24図　遺構・包含層出土遺物……37
第25図　木製品……38
第26図　尖頭器実測図（１）……42
第27図　尖頭器実測図（２）……43
第28図　尖頭器実測図（３）……44
第29図　尖頭器実測図（４）……45
第30図　石錐・石匙・石篦・掻器実測図……46
第31図　削器・加工痕のある剝片・砥石実測図……47
第32図　尖頭器模式図……49
第33図　石匙模式図……50
第34図　石篦模式図……50
第35図　高松Ⅲ遺跡遺構配置図……54
第36図　ＳＴ１住居跡……55
第37図　ＳＢ20掘立柱建物跡・ＳＥ３井戸跡……59
第38図　ＳＫ２・４・７・21・32土坑……60
第39図　ＳＡ８柵列跡……61
第40図　ＳＤ10～12溝跡・ＳＸ15・16性格不明遺構……62
第41図　ＳＸ14性格不明遺構……63
第42図　ＳＸ17～19・30・31性格不明遺構……64
第43図　石匙・削器実測図……68
第44図　ＳＴ１・ＳＥ３・ＳＫ２・４出土遺物……69
第45図　ＳＫ32出土遺物……70
第46図　ＳＸ14・15出土遺物……71
第47図　ＳＸ16・18出土遺物……72
第48図　ＳＸ18出土遺物……73
第49図　ＳＸ18出土遺物……74
第50図　ＳＸ18出土遺物……75
第51図　ＳＸ18出土遺物……76
第52図　ＳＸ18・31出土遺物……77
第53図　ＳＰ・包含層出土遺物……78
第54図　包含層出土遺物……79

図　版

巻頭図版１　高松Ⅱ遺跡俯瞰写真
巻頭図版２　高松Ⅱ遺跡ST25遺物出土状況
　　高松Ⅲ遺跡SE３柱根出土状況
図版１　空中写真・作業風景・
　　遺構検出全景
図版２　ＳＴ25住居跡
図版３　ＳＴ１住居跡・ＳＫ９・10土坑
図版４　ＳＴ33住居跡
図版５　ＳＴ78住居跡
図版６　ＳＴ80住居跡
図版７　ＳＢ130掘立柱建物跡・
　　ＳＥ15・16井戸跡
図版８　ＳＫ４・７・８・18・66土坑
図版９　ＳＫ74・75・82土坑
図版10　ＳＫ86・104・106・111土坑
　　ＳＸ65性格不明遺構・ＳＰ69柱穴
図版11　ＳＤ22・23溝跡
図版12　ＳＤ31溝跡
図版13　ＳＤ96・97溝跡・ＳＧ119河川跡
図版14　Ａ・Ｂ・Ｃ区・トレンチ完掘全景
　　空撮状況・調査説明会
図版15　出土土器（１）
図版16　出土土器（２）
図版17　出土土器（３）
図版18　出土土器（４）
図版19　出土土器（５）・陶器
図版20　青磁・青白磁
図版21　木製品
図版22　尖頭器（１）
図版23　尖頭器（２）
図版24　尖頭器（３）
図版25　尖頭器（４）
図版26　石錐・石匙・石篦・掻器
図版27　削器・加工痕のある剥片・砥石
図版28　俯瞰写真・作業風景・
　　遺構検出全景
図版29　ＳＴ１住居跡
図版30　ＳＢ20掘立柱建物跡・
　　ＳＥ３井戸跡
図版31　ＳＫ２・４・７・21・32土坑
図版32　調査区北東部全景・
　　ＳＡ８柵列跡・ＳＤ10・12溝跡
図版33　調査区南西部全景・
　　ＳＸ15・16性格不明遺構
図版34　ＳＸ14・18・31性格不明遺構
図版35　ＳＸ18性格不明遺構・
　　調査区完掘全景
図版36　石匙・削器・出土土器（１）
図版37　出土土器（２）
図版38　出土土器（３）
図版39　出土土器（４）
図版40　出土土器（５）
図版41　出土土器（６）
図版42　出土土器（７）
図版43　出土土器（８）・陶器・柱根

Ⅰ　調査に至る経過

高松Ⅱ遺跡及び高松Ⅲ遺跡は、平成元年度に山形県教育委員会が行った寒河江・大江・西川地区基礎調査によって発見・登録された遺跡である。当時の調査では、両遺跡とも微高地に若干の遺物が散布し、高松Ⅱ遺跡は東西60m、南北250mの範囲で縄文時代、高松Ⅲ遺跡は東西300m、南北120mの範囲で縄文・平安時代の遺跡と推定された。

その後、両遺跡の範囲内を東北横断自動車道（寒河江～西川間）が横断することとなったため、平成６年５月に遺跡の範囲や性格をより詳しく調べ、事業との調整に資する目的で、同教育委員会が工事予定地内について試掘調査を実施した。

高松Ⅱ遺跡は28ヶ所の試掘区を設定し掘り下げた結果、ほぼ全域で遺構・遺物が確認され、縄文時代の石器や平安時代の須恵器が出土したため、縄文・平安時代の２時期の遺跡と推定された。

次に、高松Ⅲ遺跡は５ヶ所の試掘区を掘り下げた結果、１ヶ所から赤焼土器・須恵器片が多量に出土した。また、二次堆積の可能性はあるものの、他の試掘区からも土器片が出土し、平安時代の遺跡と推定された。

以上の結果をもとに県教育委員会と日本道路公団による協議を経て、平成７年度に財団法人山形県埋蔵文化財センターが日本道路公団から委託を受け、事業区域内に係る高松Ⅱ遺跡6,000㎡・高松Ⅲ遺跡1,000㎡の面積の発掘調査を行い記録保存することになったものである。

Ⅱ　遺跡の立地と環境

高松Ⅱ・Ⅲ遺跡は寒河江市大字柴橋字高松に所在し、両遺跡は直線距離で約300m程離れて位置している。

高松Ⅱ遺跡は寒河江市金谷集落から北東約500mに位置し、周辺の水田から約１m程高い微高地に立地し、標高は約108mを測り、地目は果樹と一部水田である。

高松Ⅲ遺跡は、寒河江市金谷集落から北東約400mに位置し、高松Ⅱ遺跡から北西に約300mの場所に所在する。標高は約108～109mを測り、周辺より２m程高い微高地に立地し、地目は果樹・畑地である。

寒河江市は山形県のほぼ中央、山形盆地の西部に位置し、西に月山・朝日連峰、南西に蔵王連峰を望み、平野部の北端で最上川と寒河江川が合流する自然豊かな街であり、サクランボをはじめ果樹の一大産地として全国に知られている。

また、寒河江市には旧石器から近世に至るまでの遺跡が多く所在する。高松Ⅱ・Ⅲ遺跡の周辺にも、高瀬山古墳（Ｃ遺跡）や４基の経塚が確認されたＥ遺跡などを含む平成６年度から発掘調査を実施している高瀬山遺跡群の他、今年度発掘調査が行われた落衣長者屋敷・三条・平野山古窯跡群・富山・富山２の各遺跡や、柴橋蛇塚遺跡・柴橋窯跡・高松Ⅰ遺跡・高松Ⅳ遺跡・金谷原遺跡・柴橋遺跡などが最上川沿いの丘陵地帯を中心に数多く確認されており、太古から途切れる事なく人々の生活が営まれてきたことが伺える地域である。

1．高松II遺跡（平安・中世）
2．高松III遺跡（奈良・平安）
3．高瀬山遺跡群（旧石器～中世）
4．落衣長者屋敷遺跡（縄文・平安～中世）
5．三条遺跡（縄文・弥生・奈良～鎌倉・江戸）
6．平野山古窯跡群（縄文・奈良～平安）
7．富山遺跡（旧石器）
8．富山２遺跡（平安）
9．石田遺跡（縄文～弥生）
10．寒河江城跡（室町）
11．山岸遺跡（縄文）
12．石持原遺跡（縄文）
13．柴橋蛇塚遺跡（縄文）
14．柴橋窯跡（平安）
15．高松Ⅰ遺跡（縄文・平安）
16．高松IV遺跡（平安）
17．金谷原遺跡（旧石器）
18．柴橋遺跡（縄文）
19．うぐいす沢遺跡（縄文）
20．平塩経塚（鎌倉～室町）
21．明神山遺跡（旧石器）
22．向原遺跡（縄文）
23．左沢城跡（中世）
24．中谷沢遺跡（縄文）
25．富沢Ⅰ遺跡（縄文）
26．富沢II遺跡（縄文）
27．西覚寺遺跡（旧石器）
28．日和田遺跡（縄文）
29．白岩館跡（中世～近世）
30．上谷沢遺跡（縄文）
31．躑躅山遺跡（縄文）

第１図　遺跡位置図(S＝１：50,000)

Ⅲ　調査の経過

現地調査は、高松Ⅲ遺跡を最初に、引き続き高松Ⅱ遺跡を実施した。両遺跡の調査概要を以下に述べる。

〈高松Ⅲ遺跡〉

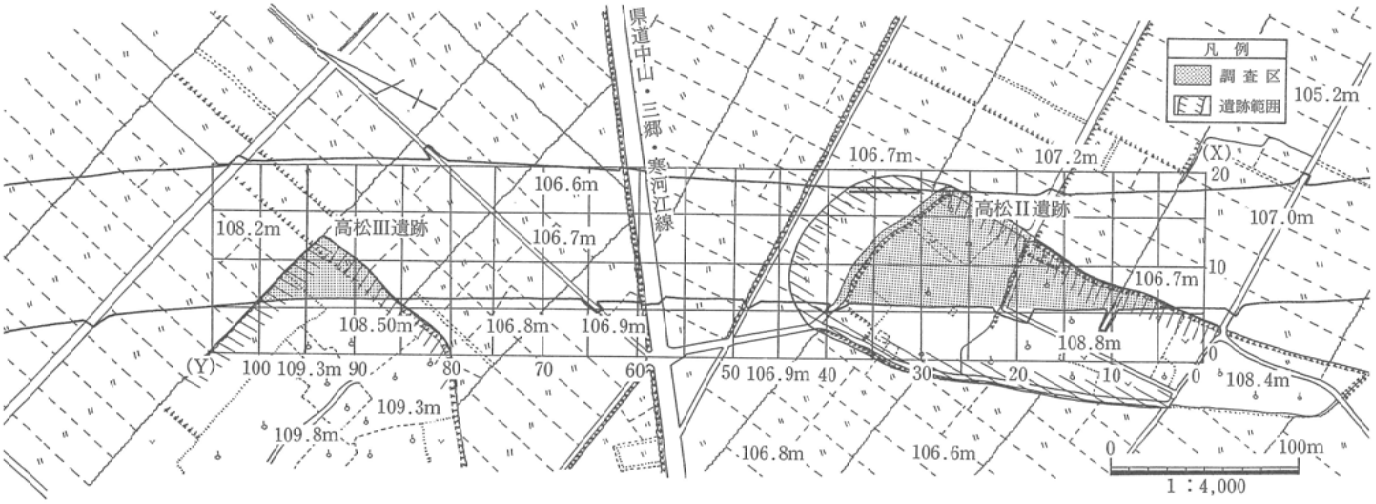
調査対象面積1,000㎡について平成７年７月10日～８月11日まで実施した。

調査は、県文化財課の試掘調査の結果をもとに、重機を使用して表土除去した後、計画路線内のセンター杭No44･45を基準として、調査区に５ｍ×５ｍを単位とする方眼グリッドを高松Ⅱ遺跡と共通軸にして設定した。その後、人手により土を丁寧に削り遺構を検出する面整理作業を行った。次に、検出遺構に登録番号を付け、土層観察のため覆土をベルト状に残したり、半截したのち完掘していった。遺物は、完形品・一括出土品について登録番号を付し、他は遺構・グリッド毎に取り上げた。また、遺構精査と並行して写真撮影と図面作成を行った。８月３日には、現地で調査説明会を開催し多くの参加者を得た。調査最終日の８月11日に空中写真撮影を実施し調査を終了している。

〈高松Ⅱ遺跡〉

調査対象面積6,000㎡について平成７年８月７日～10月27日まで実施した。

最初に調査区をＡ・Ｂ・Ｃ区に分割し、調査は工事工程の都合により東西両側の側道部分幅12m、約2,000㎡を先に調査した。この側道部分については、９月14日に関係者のみの調査説明会を開催し、空中写真撮影も合わせて行い終了した。その後、本道部分約4,000㎡の調査に入り、概ねＡ区→Ｃ区→Ｂ区の順に進めていった。途中、北側に遺跡範囲が広がる可能性が推測されたことから幅２ｍ、長さ33mのトレンチを設定して重機械で掘り下げ遺構・遺物の確認をした。調査も終盤に近づいた10月17日には調査説明会を現地にて開催し、多数の参加者を得た。翌日には、本道部分の空中写真撮影を実施し、10月27日に器材撤収を行い調査を全て終了した。なお、調査の方法は、高松Ⅲ遺跡と同じである。



第２図　調査区概要図(S＝１：4,000)

Ⅳ　高松II遺跡

1　遺構と遺物の分布

今回の発掘調査で検出された主な遺構は、竪穴住居跡・掘立柱建物跡・井戸跡・河川跡・溝跡・土坑・柱穴等である。分布状況は調査区西側のＡ・Ｂ区に集中し、Ｃ区は希薄となる。

Ａ区は、区画溝と考えられるＳＤ22を境として、北側に多くの遺構が集中する傾向にある。南側は、竪穴住居跡が検出されたが、他は土坑が数基と柱穴のみである。同様に、Ｂ区でも区画溝ＳＤ31の西側と東側で遺構の密集度の違いが顕著に現れている。西側が主要な遺構が竪穴住居跡１棟と土坑数基であるのに対して、東側は竪穴住居跡・掘立柱建物跡・土坑等、多くの遺構が検出された。中でも、Ｂ区東側端の密集度が高いことが特徴である。また、Ｃ区は土坑数基と溝跡・河川跡が各１条が主要な遺構で、北側の区域に多く検出されたが、その分布は希薄である。

遺物は、整理箱に45箱出土した。その分布は、縄文時代の石器・剝片はＣ区の水田盤土及び、ＳＤ31覆土上層から出土した。特にＳＤ31からは、尖頭器が二十数点まとまって出土している。これら縄文時代の遺物は、出土状況から二次的混入とも推測される。

平安時代の土師器・須恵器・土製品の大半はＢ区ＳＴ25竪穴住居跡からのもので、他はＳＤ31とＳＫ74から数点出土したのみである。また、中世の陶磁器はＡ区のＳＤ22とＢ区東側端の遺構、Ｃ区の土坑から、木製品はＣ区の土坑や河川・溝跡から出土した。以上のことから、平安時代と中世の遺構・遺物の分布の違いがみられ、平安時代はＢ区ＳＤ31の西側、中世以降はＳＤ31東側及びＡ・Ｃ区を中心とした広がりをもつと推測される。

2　検出遺構

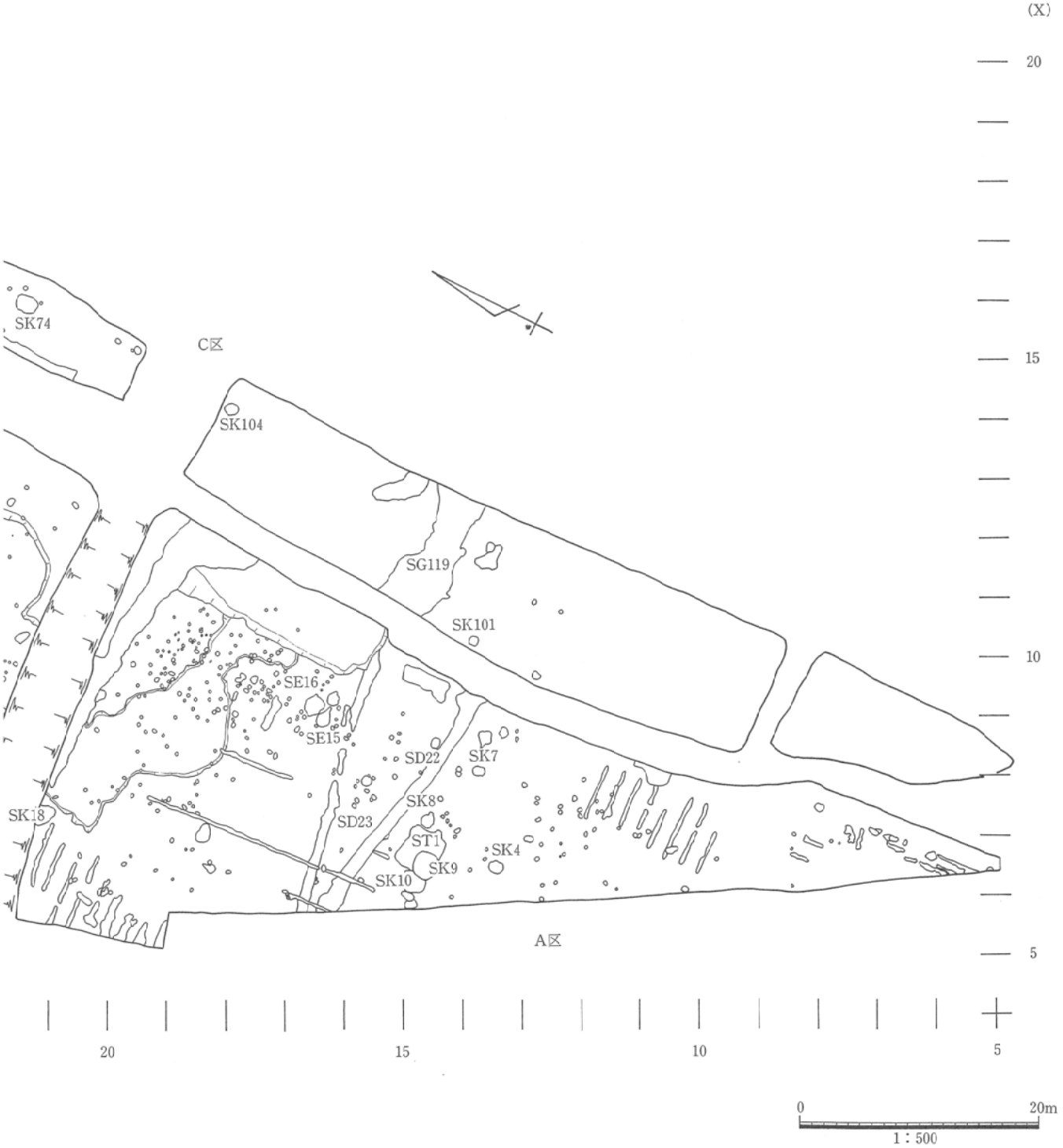
今回の調査で検出された遺構は、竪穴住居跡５棟・掘立柱建物跡２棟・井戸跡２基・河川跡１条・溝跡10条・土坑54基・性格不明遺構・柱穴などである。遺構はＡ・Ｂ区に集中し、Ｃ区は希薄になる傾向が見られた。遺構の時期は概ね平安時代と中世の二時期に大別される。以下に主な遺構の概略を述べる。

(１)竪穴住居跡

ＳＴ25住居跡（第４～６図　図版２）

Ｂ区西側、９―30･31Ｇで検出され、南壁の一部が攪乱を受けている。平面プランは約4.8m四方の正方形を呈し、床面までの深さは確認面から約40～50cmを測る。主軸方位はＮ―11°10′―Ｗを測る。壁は垂直に立ち上がり、床面は堅くしまり平坦である。内部施設は、カマド（ＥＬ３）が南東壁に１基の他、長径40cm・短径20～30cm・深さ15cmを測る貯蔵穴（ＥＫ１・２）がＥＬ３の東西両横に各１基確認された。柱穴や周溝は検出されなかった。

カマド（ＥＬ３）は、両袖の端部に土師器甕（ＲＰ21・24）を逆位に口縁部を床面に埋め込み設置して補強を行っていた。また、燃焼部奥に土師器の鉢を別個体の鉢で内包した状態で設置しており、鉢を支脚として使用していたと推定される。



第３図　高松II遺跡遺構配置図(S＝１：500)

第３図　高松II遺跡遺構配置図(S＝１：500)

遺物は、覆土及び床面から、須恵器の蓋・高台付坏・坏・双耳坏、土師器の椀・鉢・甕・甑、黒色土器の坏などの他にミニチュア土器や土製品が、貯蔵穴（ＥＫ１・２）覆土から土師器の鉢片・ミニチュア土器・土製品が出土した。特に、カマド付近に遺物が集中し、甕などは潰れた様相を示している。また、出土した甕・鉢の大半に二次加熱が見られた。

住居跡の時期は、出土した土器から９世紀前半頃と考えられるが、出土した遺物に、ミニチュア土器・土製品が15点も含まれており、当該期の竪穴住居跡と様相を異にする。このことから、本住居跡は祭祀に関わる住居跡とも推測される。

ＳＴ１住居跡（第７図　図版３）

Ａ区西端、６・７―15・16Ｇで検出され、南西部分をＳＫ９・10土坑に切られる。平面プランは長辺約3.6m・短辺3.3mの不整方形を呈し、床面までの深さは確認面から約30cmを測る。長辺の主軸はＮ―95°50′―Ｅを測る。壁は緩やかにに立ち上がり、床面は堅くしまり平坦である。柱穴が東側壁付近に５基（ＥＰ１～５）検出された。時期等の詳細は、出土遺物が無いため不明である。

ＳＴ33住居跡（第８図　図版４）

Ｂ区北東端、17―27Ｇで検出された。平面プランは長辺約3.3m・短辺2.7mの不整長方形を呈し、床面までの深さは確認面から約12～18cm、長辺の主軸はＮ―105°―Ｅを測る。

壁は緩やかにに立ち上がり、床面は堅くしまり平坦である。内部施設は、住居中央に地床炉と考えられる焼土が検出され、炭化物の広がりが炉跡の周囲１m四方に確認された。また、長径1.9m・短径0.9m・深さ30～40cmを測る貯蔵穴と考えられる土坑（ＥＫ１）が南西隅に検出された。柱穴は北西壁に２基（ＥＰ２・３）と東側壁に１基（ＥＰ５）、そして北東隅に１基（ＥＰ４）の計４基検出された。住居跡の時期は、覆土から鎬連弁文の青磁碗が１点出土していることから14世紀後半頃と推測される。

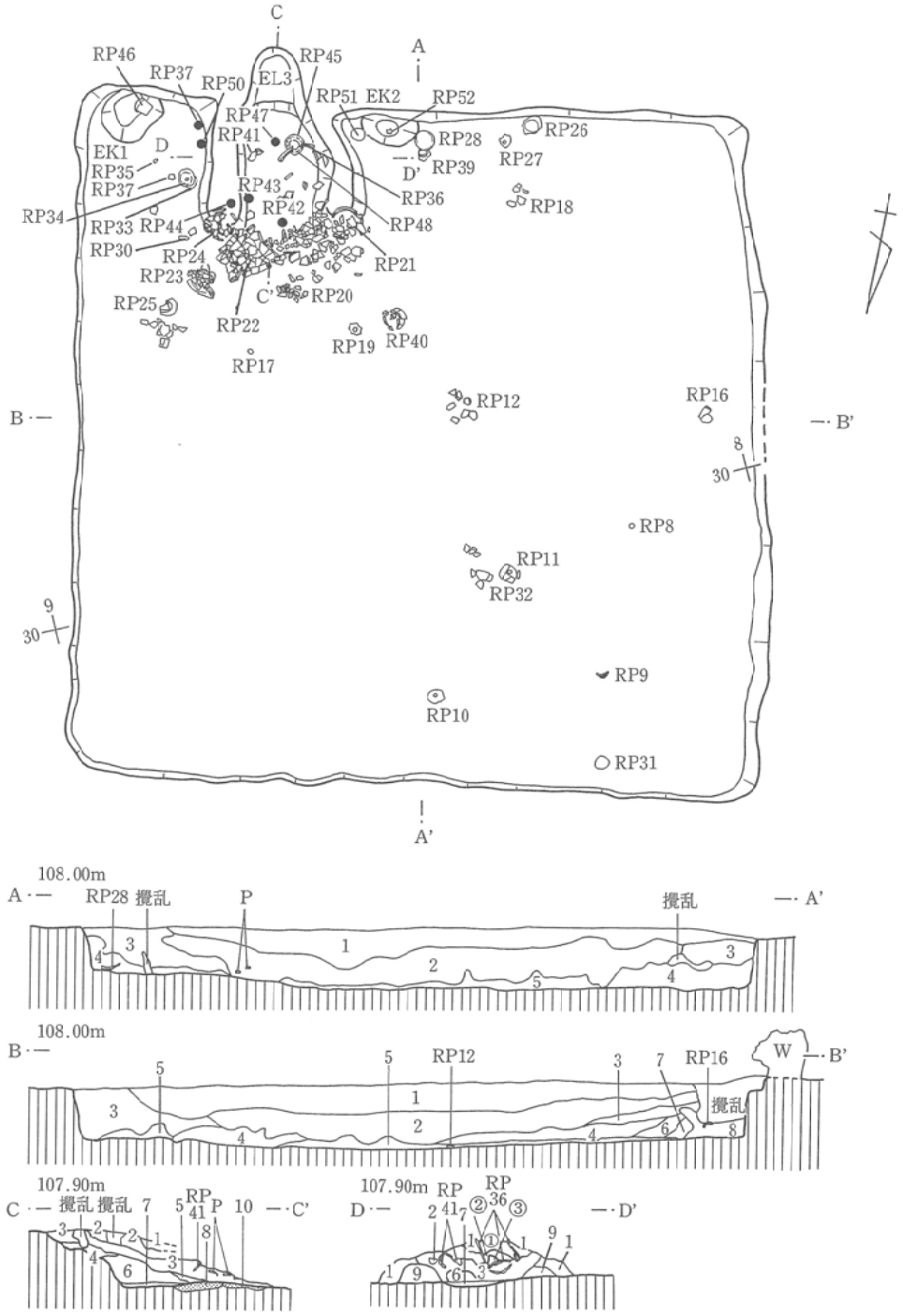
ＳＴ78住居跡（第９図　図版５）

Ｂ区南側12―25Ｇで検出され、ＳＫ106の西側に隣接する。平面プランは長辺約3.1m・短辺約2.7mの長方形を呈し、床面までの深さは確認面から約20cm、長辺の主軸はＮ―102°―Ｅを測る。壁は緩やかにに立ち上がり、床面は堅くしまり平坦である。柱穴が四方の角や壁面及び住居内側に13基検出された。遺物は、ＥＰ５付近から炭化物が出土したのみである。

住居の時期は土器の出土が無く、壁際の柱穴（ＥＰ１～４・６・７）が住居の主たる柱構成要素と考えられることなどから中世に属すると推測される。

ＳＴ80住居跡（第10図　図版６）

Ｂ区東側、14―26Ｇで検出された。平面プランは長辺約5.2～6.0m・短辺3.6mで、南側に張り出し部分を持つ不整長方形を呈し、床面までの深さは確認面から約30cm、長辺の主軸はＮ―９°―Ｅを測る。壁はほぼ直角に立ち上がり、床面は堅くしまり平坦である。柱穴が四方の隅や壁面及び住居内側に19基検出された。時期は、遺物の出土が無く、壁際の柱穴（ＥＰ１～４）が住居の主たる柱構成要素と考られること、新庄市の乱馬堂遺跡に本住居跡と類似する住居が掲載されていることから、中世に属すると考えられる。

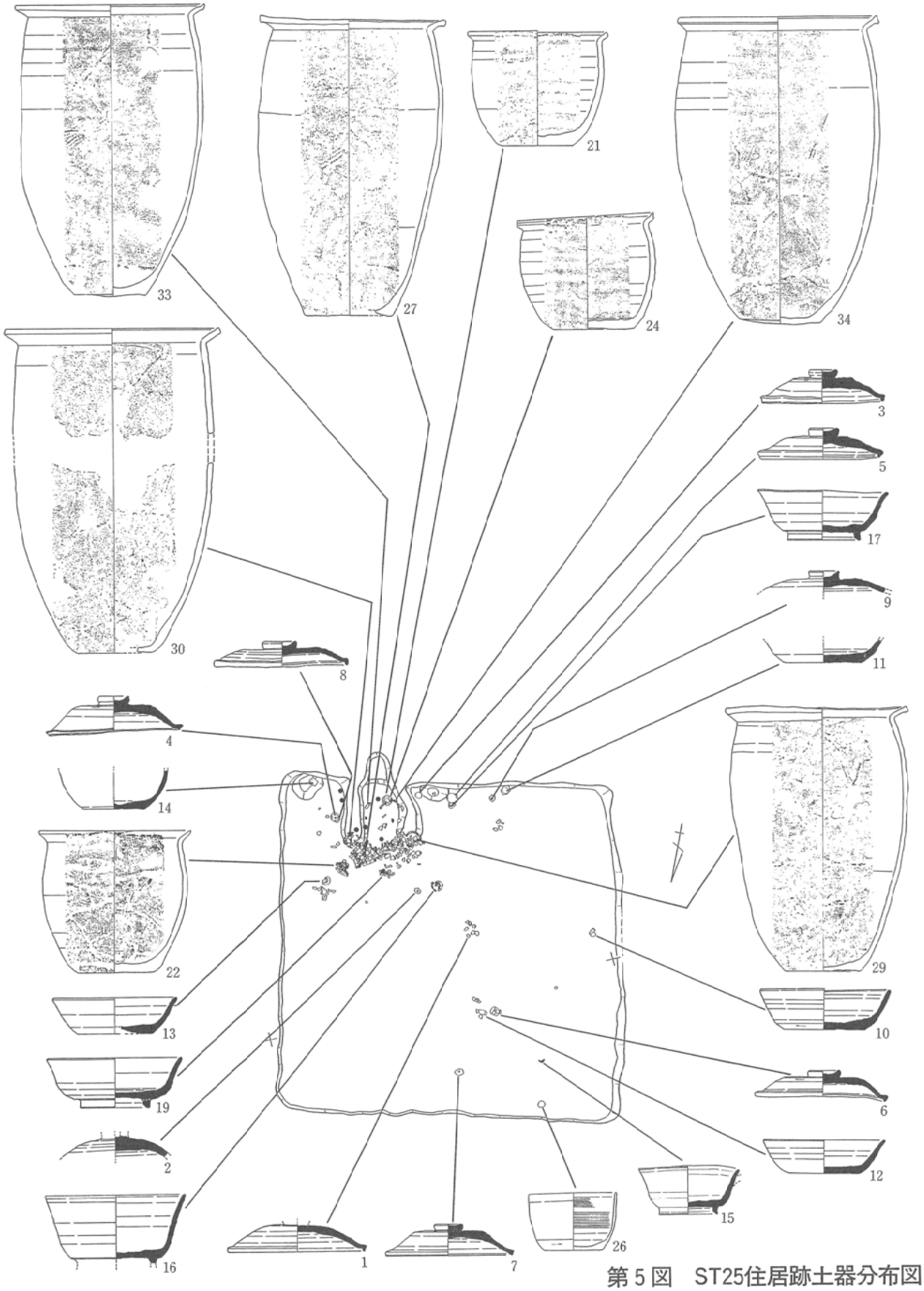


ST25
1．10YR2/2黒褐色砂質シルト（木の根を少量含み、ややしまる。）
2．10YR1.7/1黒色砂質シルト（木の根を多量に含む。ややしまる。）
3．10YR2/3黒褐色砂質シルト（木の根を少量含み、しまる。）
4．10YR2/3黒褐色砂質シルト（２の土を斑状に、暗褐色砂質シルトを粒状に含む。しまる。）
5．10YR1.7/1黒色砂質シルト（１と３の土を混入し、木の根を少量含む。しまる。）
6．10YR2/3黒褐色砂質シルト（１の土を粒状に含む。しまる。）
7．10YR2/2黒色砂質シルト（褐色のシルトを粒状に含む。しまる。）
8．10YR2/3黒褐色砂質シルト（１の土を粒状に、褐色シルトをブロック状に含む。やわらかい。）

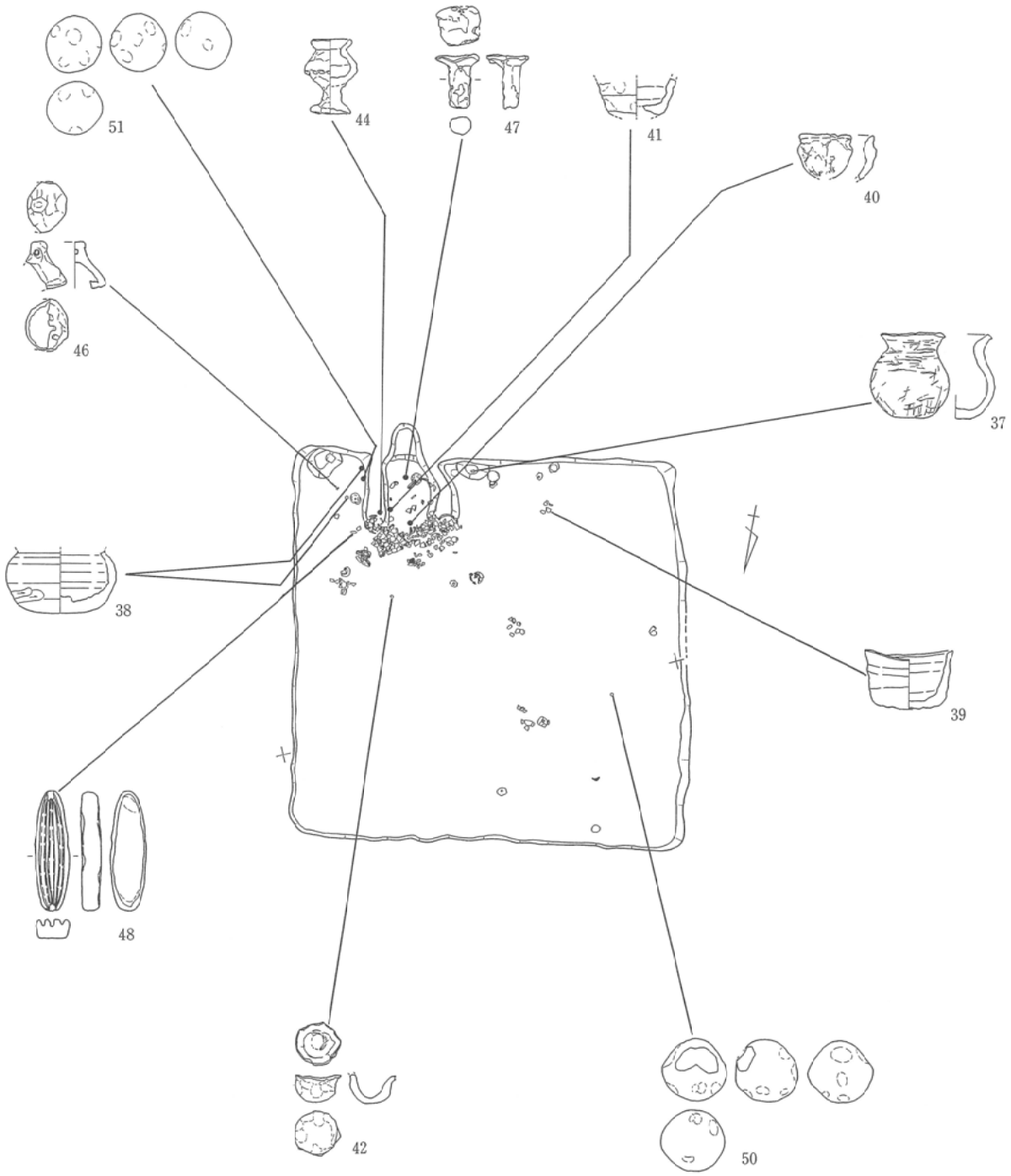
EL3
1．10YR2/3黒褐色砂質シルト（２の土を斑状に含み、焼土粒を微量含む。ややしまる。）
2．10YR3/4暗褐色砂質シルト（シルト質砂を粒状に少量含み、ややしまる。）
3．7.5YR3/4暗褐色シルト（黒褐色シルト質砂と焼土粒を微量含む。やわらかい。）
4．7.5YR3/4暗褐色砂質シルト（褐色砂質シルトをブロック状に含み、かたくしまる。）
5．5YR3/6暗赤褐色粘質シルト（極暗赤褐色粘質シルトを粒状に少量含む。かたくしまる。）
6．7.5YR4/4褐色砂質シルト（炭化粒を少量含み、かたくしまる。）
7．7.5YR3/4暗褐色粘質シルト（黒褐色粘質シルトを粒状に含み、かたくしまる。）
8．5YR3/6暗赤褐色焼土
9．10YR4/6褐色シルト質粘土（黒褐色砂質シルトを粒状に少量含む。かたくしまる。）
10．5YR3/4暗赤褐色焼土
①．10YR2/3黒褐色砂質シルト（②の土を斑状に含み、ややしまる。）
②．10YR3/4暗褐色砂質シルト（粘性あり、ややしまる。）
③．10YR2/2黒褐色砂質シルト（焼土を少量混入する。）

0　2m
1：50

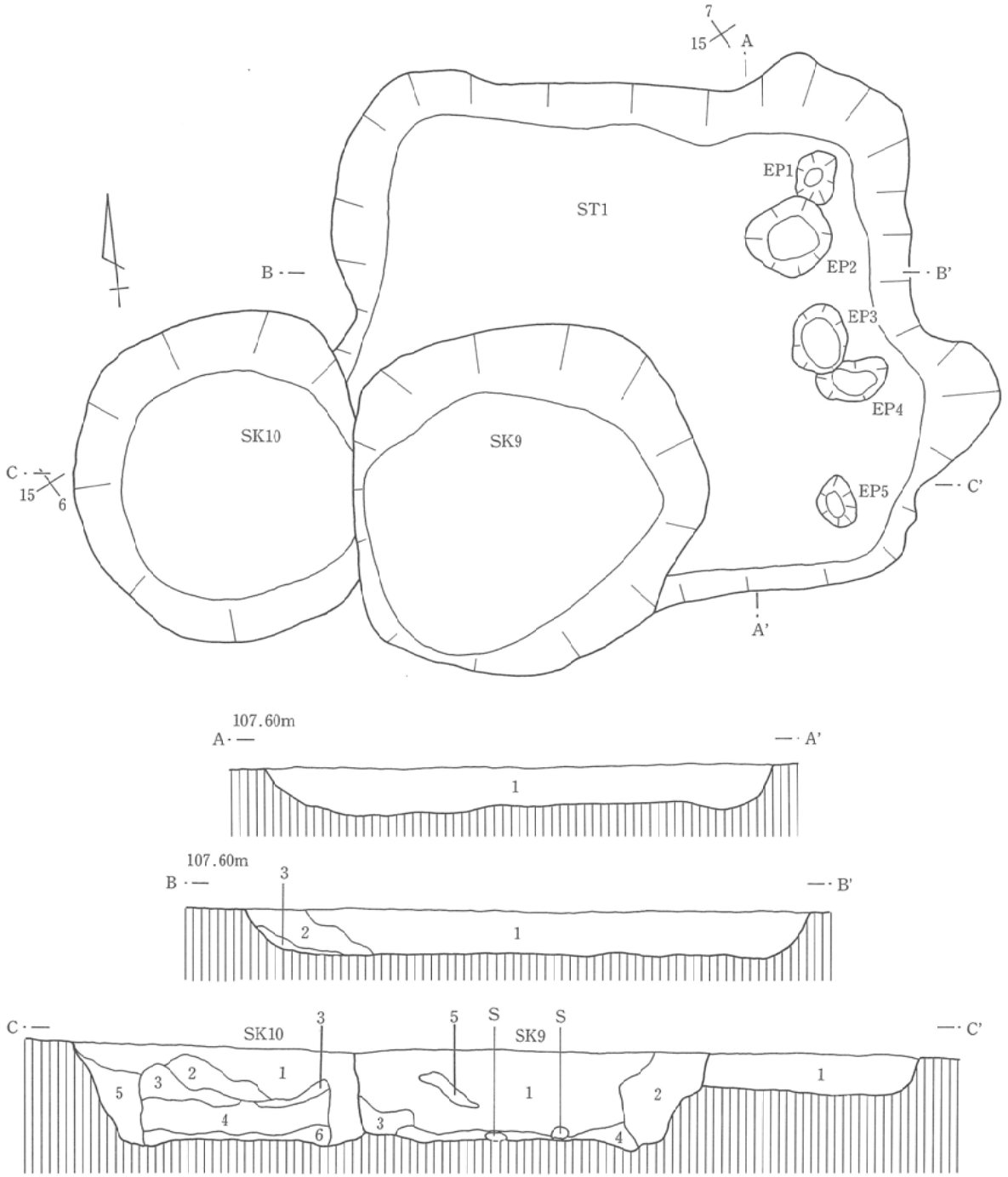
第４図　ST25住居跡



第５図　ST25住居跡土器分布図



第６図　ST25住居跡ミニチュア土器・土製品分布図



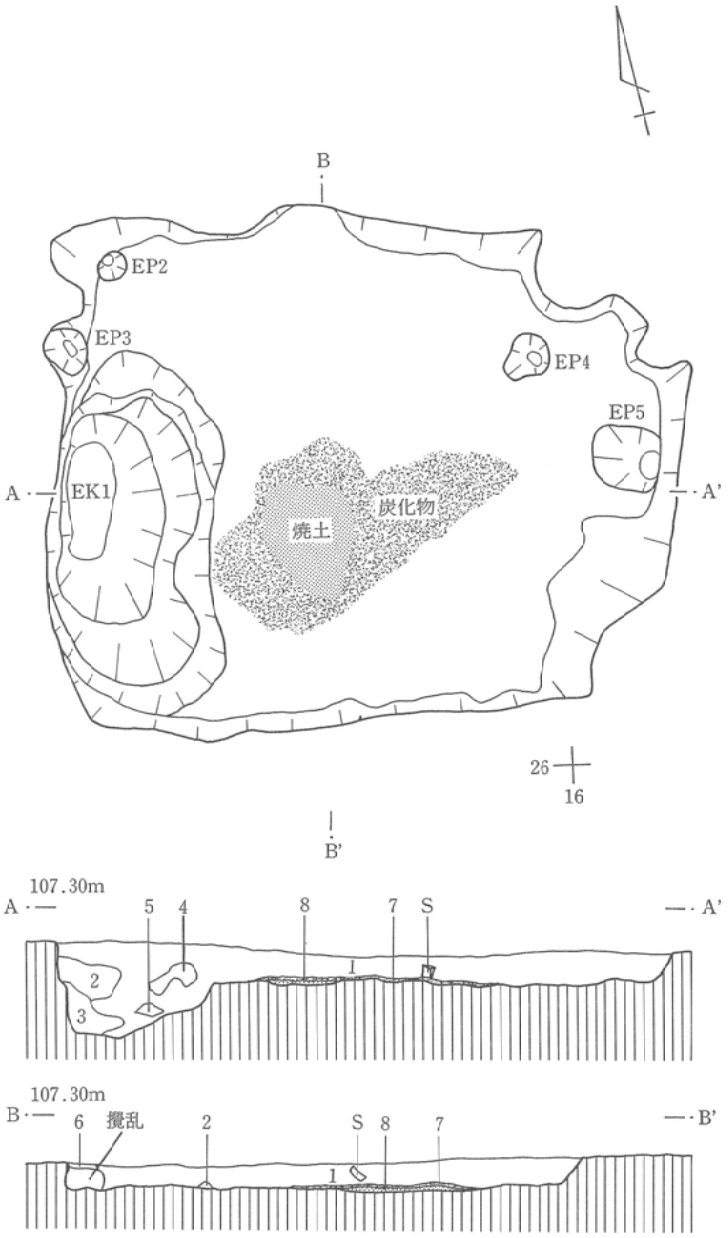
ST1
1．10YR5/8黄褐色砂質シルト（褐色、黒褐色、にぶい橙色の砂質シルトを帯状に含む。しまる。）
2．10YR2/3黒褐色砂質シルト（1の土をブロック状に含み、かたくしまる。）
3．10YR5/8黄褐色砂質シルト（褐色、黒褐色、にぶい橙色の砂質シルトを含む。しまる。）

SK9
1．10YR4/4褐色砂質シルト（にぶい黄橙色、明黄褐色、黒褐色の砂質シルトを粒状に含む。やわらかい。）
2．10YR3/4暗褐色砂質シルト（明黄褐色砂質シルトを混入し、灰白色、黄褐色のシルト質砂をブロック状に含む。）
3．10YR3/4暗褐色砂質シルト（明黄褐色、明褐色の砂質シルトをブロック状に含む。やわらかい。）
4．10YR3/4暗褐色砂質シルト（にぶい黄橙色、明黄褐色の砂質シルトを少量含む。やわらかい。）
5．10YR3/4暗褐色砂質シルト（にぶい黄橙色、黒褐色の砂質シルトを点状に少量含む。）

SK10
1．10YR3/4暗褐色砂質シルト（にぶい黄橙色、明黄褐色の砂質シルトをブロック状に含む。やわらかい。）
2．10YR3/4暗褐色砂質シルト（明黄褐色、明褐色の砂質シルトをブロック状に含む。やわらかい。）
3．10YR3/4暗褐色砂質シルト（にぶい黄橙色、明黄褐色の砂質シルトを少量含む。やわらかい。）
4．10YR4/4褐色砂質シルト（にぶい黄橙色、明黄褐色、黒褐色の砂質シルトを粒状に含む。やわらかい。）
5．10YR3/4暗褐色砂質シルト（にぶい黄橙色、黒褐色の砂質シルトを点状に含む。）
6．10YR3/4暗褐色砂質シルト（明黄褐色砂質シルトを点状に少量含む。）

0　1m
1：40

第7図　ST1住居跡・SK9・10土坑

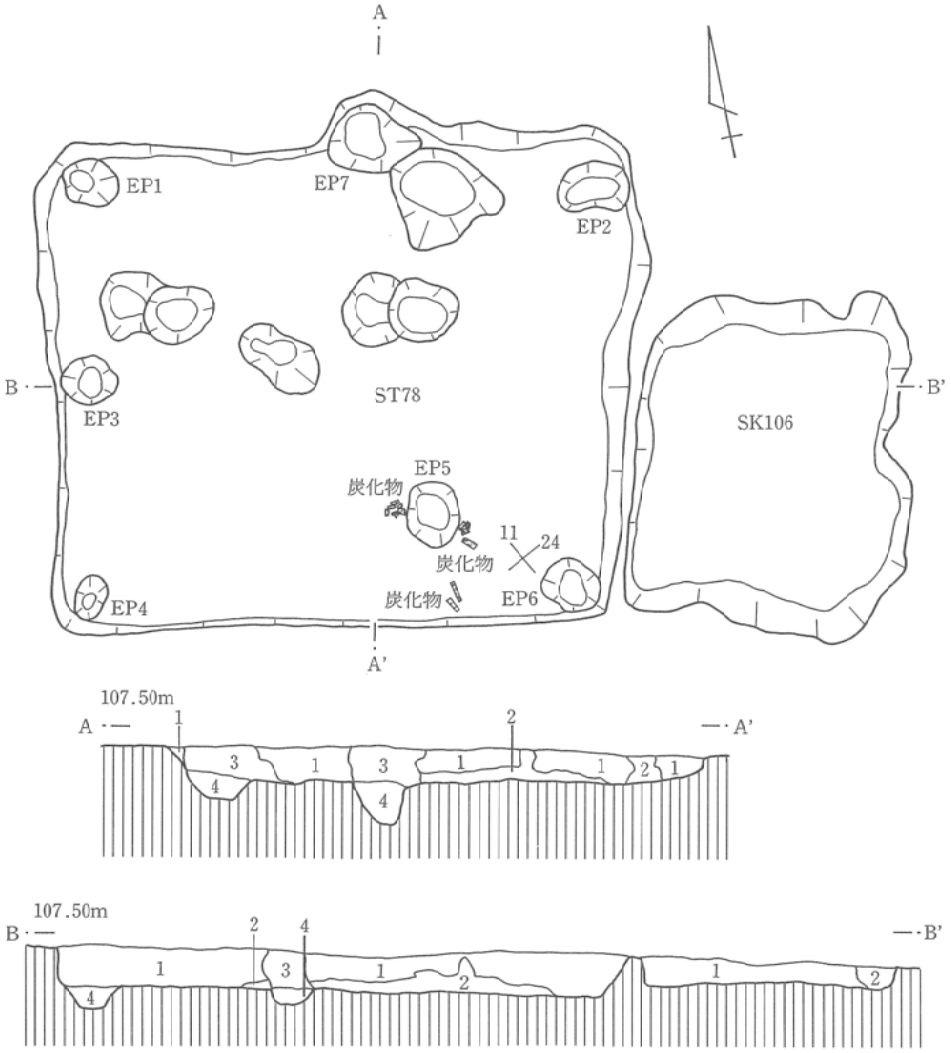


ST33

1．10YR2/3黒褐色砂質シルト（褐色、暗褐色の砂質シルトをブロック状に含み、しまる。）
2．10YR2/3黒褐色砂質シルト（暗褐色砂質シルトを斑状に、明赤褐色砂質シルトを微量混入する。やわらかい。）
3．10YR2/3黒褐色砂質シルト（暗褐色砂質シルトを斑状に、褐色砂質シルトをブロック状に含む。しまる。）
4．10YR4/6褐色砂質シルト（黒褐色砂質シルトを斑状に、黄褐色砂質シルトを少量含む。しまる。）
5．10YR8/4浅黄橙色砂質シルト（褐色と明黄褐色の砂質シルトを含む。しまる。）
6．10YR4/6褐色砂質シルト（粘性あり。かたくしまる。）
7．10YR1.7/1黒色炭化物層
8．5YR4/6赤褐色焼土

0　1m
1：40

第８図　ST33住居跡



ST78
1．10YR2/2黒褐色砂質シルト（暗褐色と褐色の砂質シルトを含む。ややしまる。）
2．10YR3/4暗褐色砂質シルト（黒褐色と褐色の砂質シルトを粒状に含む。やわらかい。）
3．10YR2/3黒褐色砂質シルト（暗褐色と褐色の砂質シルトを粒状に含む。しまる。）
4．10YR2/2黒褐色砂質シルト（２の土と褐色の砂質シルトを粒状に含む。かたくしまる。）

SK106
1．10YR3/4暗褐色砂質シルト（褐色シルトと黒褐色砂質シルトを粒状に少量含む。しまる。）
2．10YR3/4暗褐色砂質シルト（褐色砂質シルトを斑状に含む。しまる。）

0　1m
1：40

第９図　ST78住居跡・SK106土坑

ST80
1．10YR3/1黒褐色シルト（にぶい黄褐色シルトを斑状に含む。しまる。）
2．10YR5/6黄褐色粘質シルト（暗褐色シルトを斑状に含む。しまる。）
3．10YR3/3暗褐色シルト（2の土を点状に含む。しまる。）
4．10YR6/8明黄褐色シルト（にぶい黄褐色シルトを点状に含む。）

0　1m
1：40

第10図　ST80住居跡

(2)掘立柱建物跡（第11図　図版7）

今回の調査では、2棟の掘立柱建物跡が確認された。いずれもB区東隅に位置しており、時期を特定する遺物の出土が見られ無かったため詳細は不明であるが、建物の規模や周囲の遺構の存在時期を考慮すると、中世の建物跡と推測される。以下にその概略を述べる。

SB130掘立柱建物跡

B区東隅、14・15—25・26Gで検出された東西棟の建物跡である。桁行2間、梁行2間と推測されるが、西側のEB126に対応する柱穴は確認されなかった。主軸方向はN—87°—Eとなる。建物の規模は桁行5.0m、梁行4.3mで、柱間距離は、西側から桁行260cm、240cmを測り、梁行は215cmの等間隔となる。

柱穴のプランは径30〜50cmの円形または楕円形を呈し、確認面からの深さは地山面が低くなる東側のEB124・126・129は約20cm、他のEBは約40cmを測る。

SB136掘立柱建物跡

B区東隅、15—25Gで検出された東西棟で、桁行2間、梁行1間の小規模な建物跡と推測されるが、西側のEB131に対応する柱穴は農道部分に位置するため確認出来なかった。主軸方向はN—74°—Eとなる。建物の規模は桁行3.2m、梁行2.9mで、柱間距離は、西側から桁行160cmの等間隔となり、梁行は290cmを測る。

柱穴のプランは小さいものは径25cm、大きいものは径50cmの円形または楕円形を呈し、確認面からの深さは約20〜30cmを測る。

(3)井戸跡（第12図　図版7）

SE15井戸跡

A区北東側、9—17GでSE16南に隣接して検出された。平面プランは長径160cm、短径125cmの不整円形を呈する。確認面からの深さ約1.2mを測り、断面形は開口部が広く底が狭くなり、底面が平坦となる擂鉢状の形態となる素掘りの井戸と考えられる。

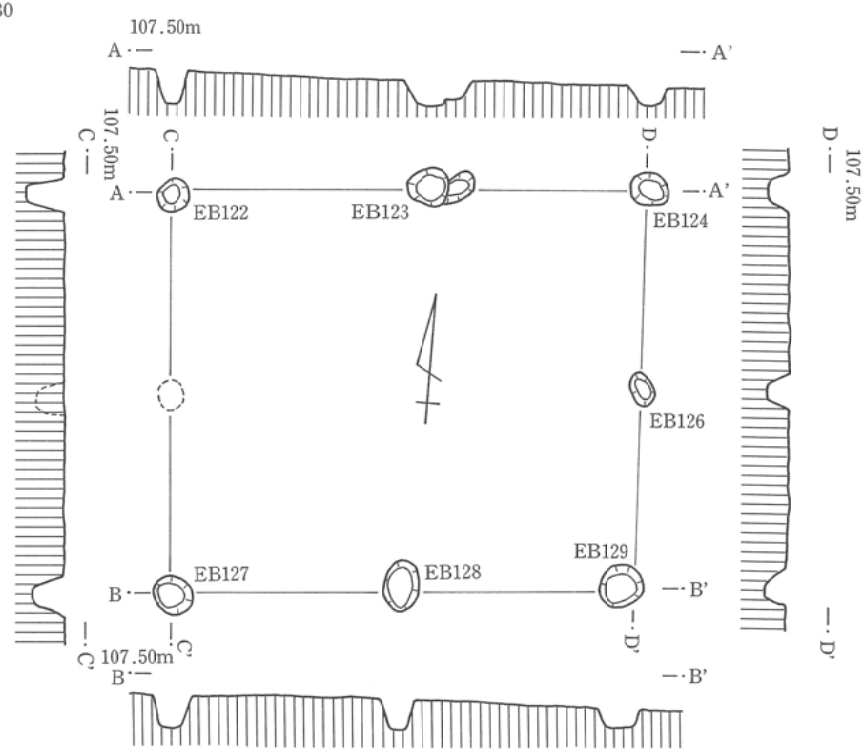
覆土は部分的に拳大の礫を含み上層がシルト、下層が粘土の2層に大別でき、さらに6層に細分される。1・2層は褐色シルトで砂質の土を混入する。また、3・4層は黒色粘土、5・6層は褐色粘土が堆積し、自然に埋没した様相を示す。遺物の出土は無かった。

SE16井戸跡

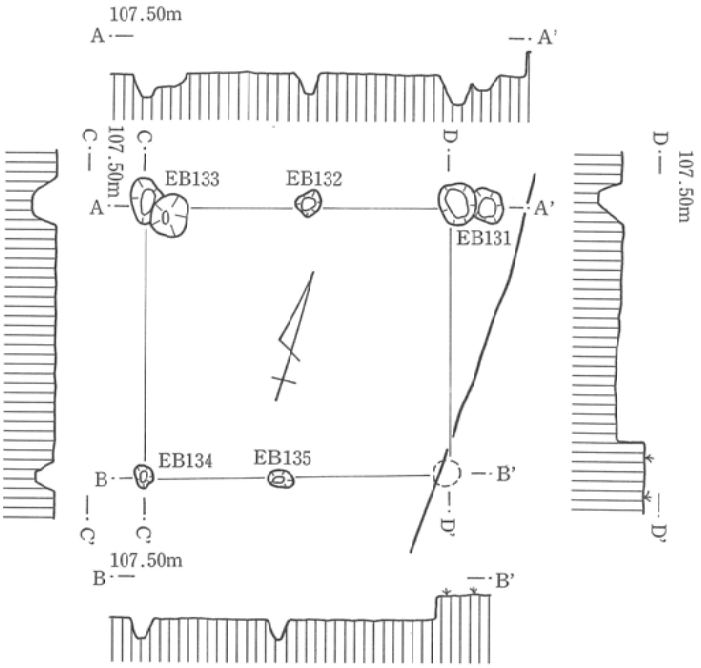
A区北東側、9—17GでSE15北に隣接して検出された。平面プランは長径200cm、短径160cmの不整楕円形を呈する。確認面からの深さ約1.6mを測り、断面形は開口部が広く、斜めに掘り込まれ底が狭くなり、底面が平坦となる円錐状の形態となる素掘りの井戸と考えられる。

覆土は上層がシルト質粘土、下層が粘土の2層に大別でき、さらに6層に細分される。1〜4層は褐色シルト質粘土で1・2層に黄褐色シルト質粘土を混入し、3・4層は褐色粘土を含む。また、5・6層は黒色粘土で5層に炭化物を混入する堆積層を示し、自然に埋没した状況が伺える。遺物の出土は無かった。

SB130

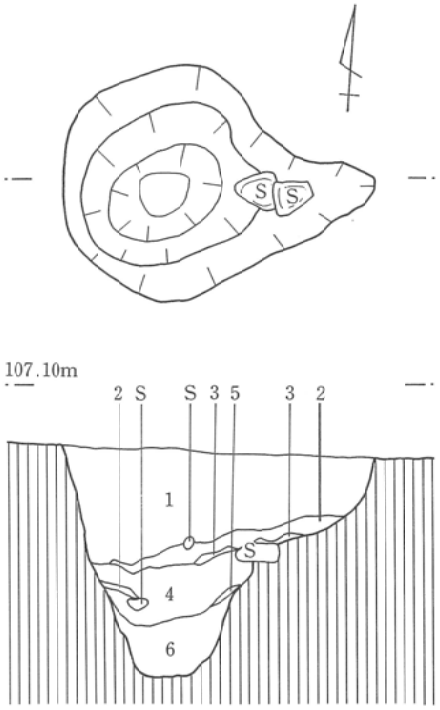


SB136



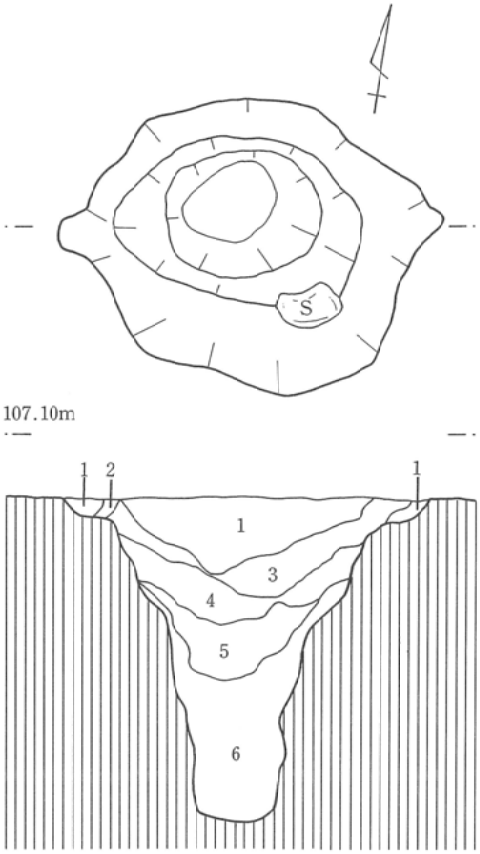
第11図　掘立柱建物跡

SE15



SE15
1．10YR2/3黒褐色粘質シルト（暗褐色砂質シルトを斑状に含み、かたくしまる。）
2．7.5YR3/4暗褐色砂質シルト（1の土と褐色粘質シルトを含む。）
3．10YR1.7/1黒色粘土（かたくしまる。）
4．10YR1.7/1黒色粘土（明赤褐色シルト質粘土と淡黄色粘土を粒状に含む。）
5．10YR4/1褐灰色粘土（黒色粘土と明赤褐色シルト質粘土を粒状に少量含む。しまる。）
6．2.5Y5/4黄褐色粘土（黒色粘土を斑状に含む。やわらかい。）

SE16



SE16
1．10YR2/3黒褐色シルト質粘土（黄褐色シルト質粘土を粒状に多量含み、明黄褐色砂質シルトを微量含む。）
2．10YR3/4暗褐色シルト質粘土（黄褐色シルト質粘土を斑状に含む。しまる。）
3．10YR2/3黒褐色シルト質粘土（褐色粘土をブロック状、暗褐色粘質シルトを粒状に含む。しまる。）
4．10YR2/2黒褐色シルト質粘土（褐色粘土を粒状に、黒色粘土をブロック状に含む。しまる。）
5．10YR1.7/1黒色粘土（明赤褐色シルト質粘土とにぶい黄褐色粘土を粒状に含み、炭化物を混入する。）
6．10YR1.7/1黒色粘土（淡黄色粘土をブロック状に含む。）

0 1m
1：40

第12図　井戸跡

(4)土坑・性格不明遺構（第13～15図　図版8～10）

調査では50基を越える土坑・性格不明遺構が検出された。その大半はA・B区に分布しC区では10基に満たない。しかし、時期を判断できる遺物が出土した土坑・性格不明遺構は、C区で検出されたものに限られるという特徴が見られた。以下に主なものの概略を述べる。

ＳＫ４土坑

A区西側、7－14Gで検出された。平面プランは径1.2mの不整円形を呈し、確認面からの深さは1.1mを測る。断面形は北東壁がほぼ垂直に堀りこまれ、南西壁は堀り方途中に段を形成する。底面は平坦となる。

覆土は2層に別れ、概ね黒褐色シルトとなるが締まりがなくやわらかい土質となる。

ＳＫ７土坑

A区東側、8－14Gで検出された。平面プランは長径1.0m・短径0.8mの楕円形を呈し、確認面からの深さは最深部で45cmを測る。断面形は斜めに堀り込まれ、底面は段差があり西半で深くなる。

覆土は3層に分かれるが、第2・3層はブロック状に第1層に混入する様相を示し、土質は概ね褐色砂質シルトとなる。

ＳＫ８土坑

A区中央部、8－15GでＳＴ１東側に隣接して検出され、東側をＳＰ38に切られる。平面プランは長径1.2m・短径1.1mの不整楕円形を呈し、確認面からの深さは90cmを測る。断面形はU字状になり、底面は平坦となる。

覆土は4層に分かれ、土質は第2層が褐色砂質シルトとなる他は黒褐色砂質シルトとなる。

ＳＫ９土坑

A区7－15Gで検出され、ＳＴ１とＳＫ10を切る。平面プランは径2.2mの円形を呈し、確認面からの深さは60cmを測る。断面形は西側と南側が垂直に堀り込まれ、堀り方途中に段を形成する。底面は若干の凹凸はあるが、ほぼ平坦となる。また、底面に拳大の礫が数点確認された。覆土は5層に分かれ、第4層が帯状に5cmの厚さで底に堆積する。土質は概ね暗褐色砂質シルトとなる。

ＳＫ10土坑

A区7－15Gで検出され、ＳＴ１を切り、ＳＫ９に切られる。平面プランは径2.1mの円形を呈すると考えられ、確認面からの深さは60cmを測る。断面形は台形状を呈する。底面はほぼ平坦となる。また、ＳＫ９同様に底面に拳大の礫が数点確認された。

覆土は6層に分かれるが、第2～4・6層が第1・5層中に内包される特異な堆積を示す。土質は概ね暗褐色砂質シルトとなる。

ＳＫ18土坑

A区北側、8－22Gで北半を現況の水路に切られ、南半部分のみ検出された。規模は検出部分で長径1.7m・短径1.5m、確認面からの深さは40cmを測る。平面プランは楕円形であったと考えられる。断面形は緩やかに立ち上がり、底面は若干の凹凸がある。覆土は3層に分かれ、

第３層は帯状に底面に堆積する。土質は概ね黒色又は褐色シルトとなる。

ＳＫ82土坑

Ｂ区東側隅、14―25ＧでＳＴ80に隣接し検出された。平面プランは長径2.2m・短径2.0mの不整円形を呈し、確認面からの深さは80cmを測る。断面形は堀り方途中に段を形成して掘り下げられている。底面はほぼ平坦となる。

覆土は４層に分かれ、全ての層に炭化粒を混入する。また、第３層は帯状に10cm程の厚さで堆積する。土質は第３層のみ褐色粘質シルトとなるが、他は黒褐色のシルトまたは粘質シルトとなる。

ＳＫ86土坑

Ｂ区北東側、16―29Ｇで検出された。平面プランは長径85cm・短径70cmの楕円形を呈し、確認面からの深さは30cmを測る小規模な土坑である。断面形は緩やかに立ち上がるレンズ状となり、底面はやや丸底状となる。

覆土は３層に分かれ、第２層は帯状に２～５cm程の厚さで堆積する間層となる。土質は黒色または黒褐色の砂質シルトとなる。

ＳＫ88土坑

Ｂ区北東側、15―30Ｇで検出された。平面プランは長径90cm・短径80cmの楕円形を呈し、確認面からの深さは26cmを測る小規模な土坑である。断面形は垂直的に堀り込まれ底面中央部がやや落ち込む形態をしめす。

覆土は３層に分かれ、第３層は帯状に５cm程の厚さで堆積する。土質は黒色または暗褐色の砂質シルトとなる。

ＳＫ106土坑

Ｂ区南側、12―24・25ＧでＳＴ78東側に隣接して検出された。平面プランは長辺1.8m・短辺1.4mの長方形を呈し、確認面からの深さ10cmを測る。断面形は壁が垂直的に堀り込まれ底面が平坦となる形態を示す。覆土は２層に分かれ暗褐色砂質シルトとなる。

ＳＫ111土坑

Ｂ区東側、13―24Ｇで検出された。長径2.0m・短径1.3mの不整楕円形を呈し、確認面からの深さは浅い部分で８cm、最深部で40cmを測る。掘り方の壁面は垂直または緩やかに立ち上がり、底面は一定せず、部分的に高く地山を残し焼土塊が含まれている。従って、断面形も不整形となる。覆土は焼土を除くと２層に分かれ暗褐色または褐色の粘質シルトとなり第１層には焼土をブロック状に混入する。

ＳＸ65性格不明遺構

Ｃ区北調査区、北東端18―25Ｇで東半は調査区外となり、西側半部のみ検出された。平面プランは長辺2.7m・短辺1.1m以上の不整方形を呈すと推測される。確認面からの深さは14～20cmを測る。断面形は壁面が緩やかに立ち上がり、底面は中央部が高くなる眼鏡形の形態を示す。覆土は４層に分かれ、第２層はブロックで第１層に混入し、第４層が厚さ５cmで底面に帯状に堆積する。土質は、黒色または黒褐色の砂質シルトとなる。

ＳＫ66土坑

Ｃ区北側調査区、北東端18―25ＧのＳＸ65南側で、東半は調査区外となり、西側半部のみ検出された。平面プランは長辺1.7m・短辺1.2m以上の楕円形を呈すと推測される。確認面からの深さは浅い部分は６㎝、深い部分で25㎝を測る。断面形は中央部が深くなり、壁面が緩やかに立ち上がる形態で、底面は西側がやや窪む。覆土は２層に分かれ、第２層は厚さ４㎝で底面に帯状に堆積する。土質は黒色の砂質シルトとなる。

時期は、青磁の破片１点が覆土中から出土していることから中世に属すると考えられる。

ＳＫ74土坑

Ｃ区北側調査区、東側16―22Ｇで検出された。平面プランは長辺1.9m・短辺1.5mの楕円形を呈す。確認面からの深さは40㎝を測る。断面形は、壁面が緩やかに立ち上がるレンズ状を示し、底面はほぼ平坦となる。覆土は３層に分かれ、土質は第２層が黒色のシルト質砂となり、第１・３層は黒色砂質シルトとなる。

時期は、底面から漆塗りの木製皿が出土していることから中世に属すると考えられる。この漆皿の内面には漆紙が付着していた。

ＳＫ75土坑

Ｃ区北側調査区、西側端17―24Ｇで検出された。平面プランは径約50㎝の円形を呈し、確認面からの深さは25㎝を測る小規模な土坑である。断面形は、壁面が斜めに掘り込まれ底面はほぼ平坦となる逆台形状を示す。覆土は４層に分かれ、第３層の灰オリーブ色砂質シルトが帯状に上層に混入し、第１・２・４層は黒色砂質シルトとなる。

時期は、第４層から漆塗りの木製碗の他、板状・棒状の木製品が出土していることから中世に属すると考えられる。但し、出土遺物から土坑として登録したが、規模等を考慮すると柱穴の可能性も否定できない。

ＳＫ101土坑

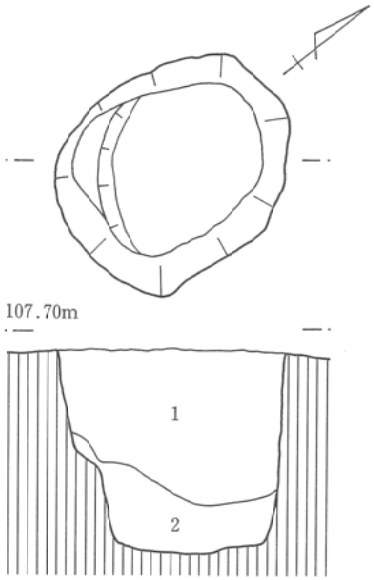
Ｃ区中央調査区、西側端11―14Ｇで検出された。平面プランは径約80㎝の円形を呈し、確認面からの深さは30㎝を測る小規模な土坑である。断面形は、壁面が斜めに掘り込まれ底面は若干の凹凸が見られるが、ほぼ平坦となる逆台形状を示す。覆土は１層のみで黒色粘土となり、オリーブ灰色シルトをブロックで混入する。

ＳＫ104土坑

Ｃ区中央調査区、北端14―19Ｇで検出された。平面プランは径約85㎝の円形を呈し、確認面からの深さは最深部で90㎝を測る小規模な土坑である。断面形は、壁面が垂直に掘り込まれ底面に段差があり東半で一段深くなる形態を示す。覆土は１層のみで黒色粘質シルトとなり、明褐色シルトを帯状に混入する。

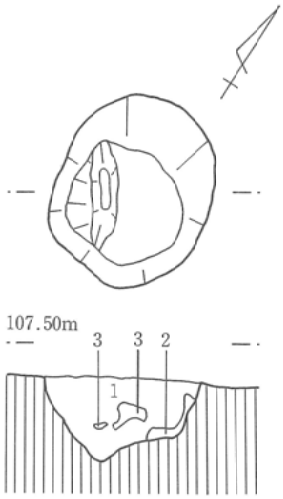
時期は、覆土の下層から漆塗りの木製皿の他、板状・棒状の木製品が出土していることから中世に属すると考えられる。

SK4



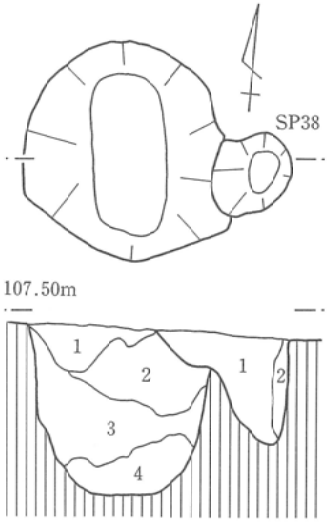
SK4
1．10YR2/2黒褐色砂質シルト（明黄褐色砂質シルトと褐色砂質シルトを粒状に少量含む。やわらかい。）
2．10YR2/2黒褐色シルト（明黄褐色と明褐色の砂質シルトを少量含む。やわらかい。）

SK7



SK7
1．10YR2/2黒褐色砂質シルト（暗褐色と黄褐色の砂質シルトをブロック状に含む。しまる。）
2．10YR4/6褐色砂質シルト（黒褐色砂質シルトを含み、かたくしまる。）
3．10YR4/6褐色砂質シルト（黒褐色と明黄褐色の砂質シルトを斑状に含む。しまる。）

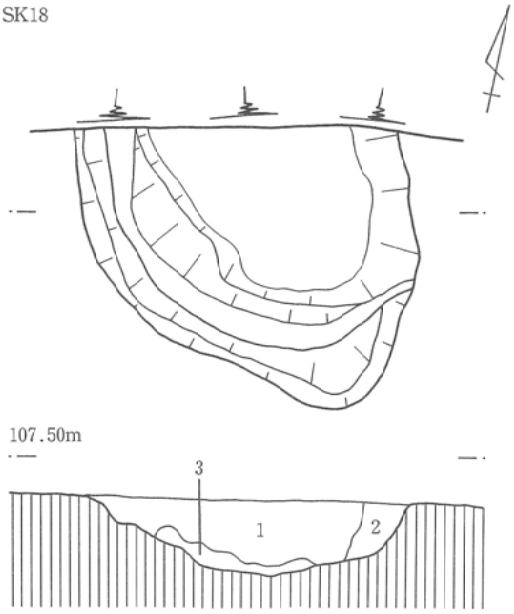
SK8



SK8 1．10YR2/3黒褐色砂質シルト（褐色砂質シルトをブロック及び粒状に含む。しまる。）
2．10YR4/6褐色砂質シルト（黒褐色砂質シルトを斑状に含む。しまる。）
3．10YR2/2黒褐色砂質シルト（褐色砂質シルトをブロック状に含む。しまる。）
4．10YR2/3黒褐色砂質シルト（褐色砂質シルトを点状に混入する。しまる。）

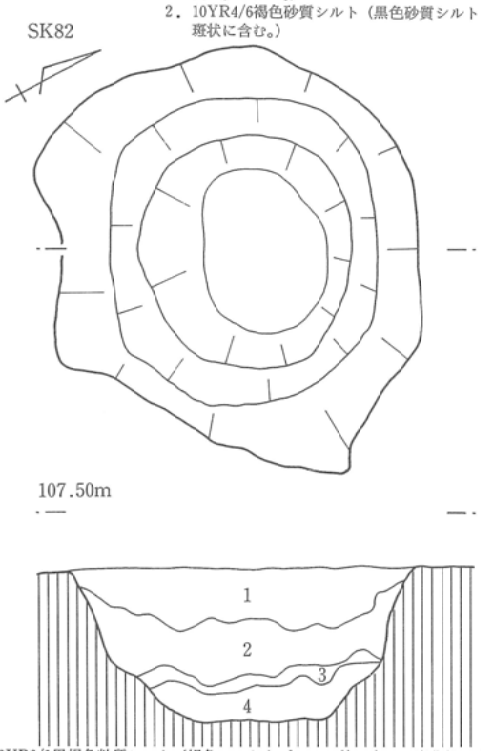
SP38 1．10YR2/2黒色砂質シルト（褐色砂質シルトを含む。しまる。）
2．10YR4/6褐色砂質シルト（黒色砂質シルトを斑状に含む。）

SK18



SK18
1．10YR1.7/1黒色シルト（3の土を点状に微量含み、木の根、草の根を多く含む。しまる。）
2．10YR3/3暗褐色シルト（1の土をブロック状に微量含む。かたくしまる。）
3．7.5YR3/1黒褐色シルト（明褐色シルトを10％混入する。しまる。）

SK82

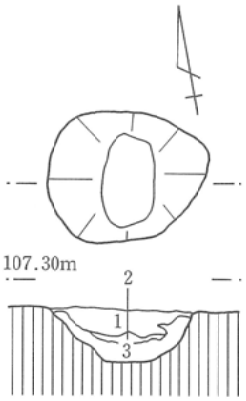


SK82
1．10YR3/1黒褐色粘質シルト（褐色シルトをブロック状に含み、炭化粒を点状に多量含む。）
2．10YR2/3黒褐色粘質シルト（褐色粘質シルトを20％斑状に含み、炭化粒を点状に含む。）
3．10YR4/6褐色粘質シルト（黒褐色粘質シルトを斑状に15％含み、炭化粒を点状に少量含む。）
4．10YR2/2黒褐色シルト（褐色シルトを点状に含み、炭化粒を少量含む。）

0　1m
1：40

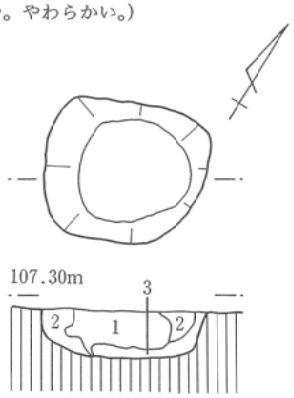
第13図　SK 4・7・8・18・82土坑

SK86



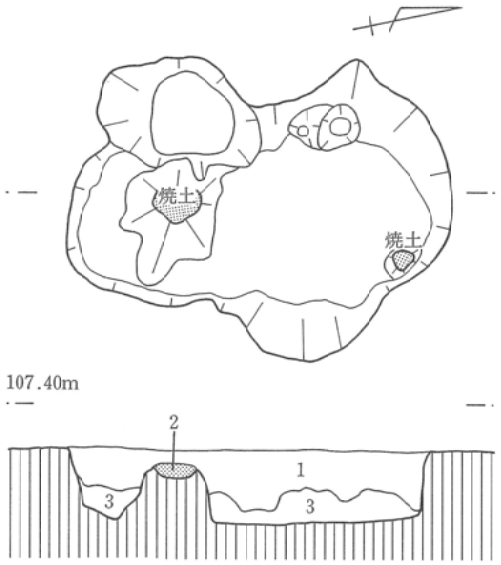
SK86
1．10YR2/1黒色砂質シルト（褐色砂質シルトを粒状に少量含む。やわらかい。）
2．10YR2/3黒褐色砂質シルト（黒色と褐色の砂質シルトの混合土を含む。やわらかい。）
3．10YR2/1黒色砂質シルト（2の土と暗褐色砂質シルトをブロック状に含む。やわらかい。）

SK88



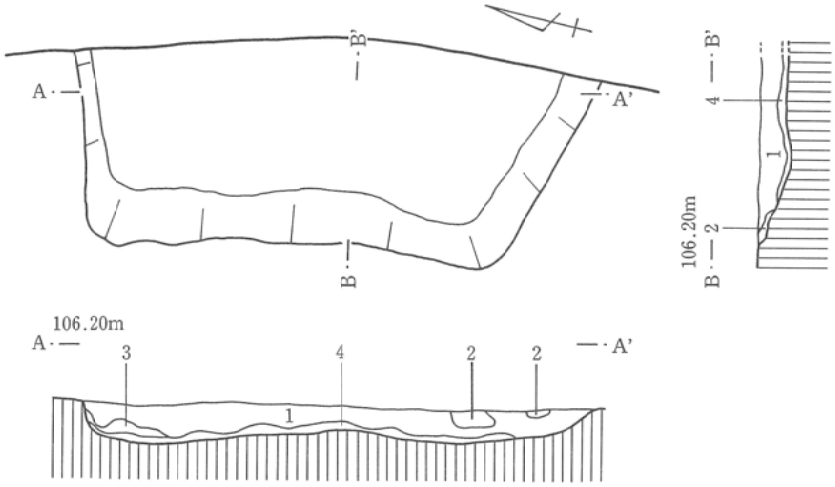
SK88
1．10YR2/2黒褐色砂質シルト（褐色砂質シルトを粒状に微量含む。ややしまる。）
2．10YR2/3黒褐色砂質シルト（褐色砂質シルトを粒状に少量含む。しまる。）
3．10YR3/4暗褐色砂質シルト（褐色砂質シルトを粒状に少量含む。ややしまる。）

SK111



SK111
1．10YR3/4暗褐色粘質シルト（褐色砂まじり粘質シルトを斑状に含み、2の焼土をブロック状に含む。）
2．5YR4/6赤褐色焼土
3．10YR4/6褐色粘質シルト（暗褐色とにぶい黄橙色の粘質シルトを含む。かたくしまる。）

SX65

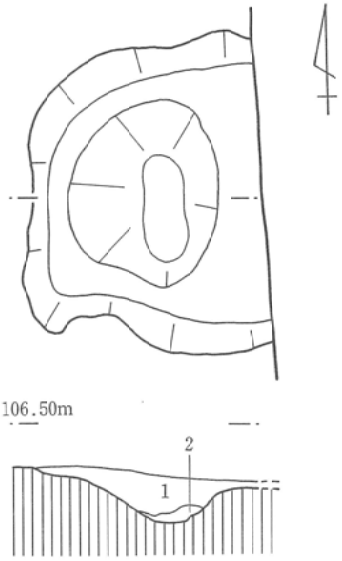


SX65
1．10YR1.7/1黒色砂質シルト（にぶい黄橙色と黒褐色の砂質シルトを粒状に微量含む。）
2．10YR3/2黒褐色砂質シルト（にぶい黄橙色と黄褐色の砂質シルトを多く混入する。）
3．10YR3/2黒褐色砂質シルト（赤褐色砂質シルトを帯状に含む。）
4．10YR1.7/1黒色砂質シルト（にぶい黄橙色と赤褐色の砂質シルトを少量含む。しまる。）

0　1m
1：40

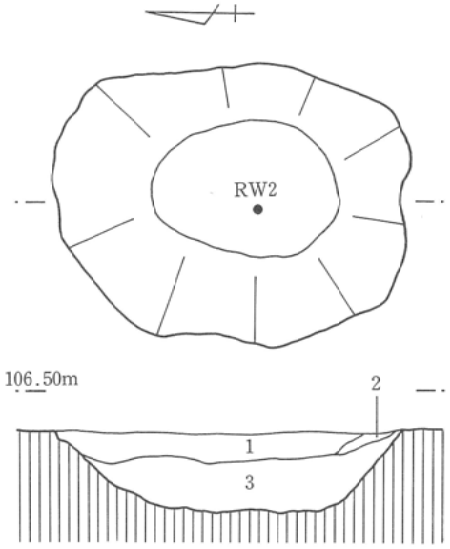
第14図　SK86・88・111土坑・SX65性格不明遺構

SK66



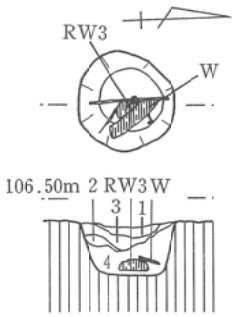
SK66
1．10YR1.7/1黒色砂質シルト（黄褐色と明赤褐色の砂質シルトを少量含む。しまる。）
2．10YR1.7/1黒色砂質シルト（灰白色シルトを質砂をブロック状に、明赤褐色シルトを粒状に含む。）

SK74



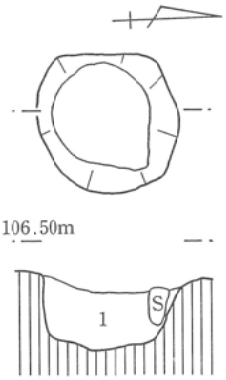
SK74
1．10YR1.7/1黒色砂質シルト（にぶい黄橙色と黄褐色の砂質シルトを混入する。しまる。）
2．10YR1.7/1黒色シルト質砂（にぶい黄橙色砂質シルトを微量含む。しまる。）
3．10YR1.7/1黒色砂質シルト（黒褐色砂質シルトをブロック状に含む。しまる。）

SK75



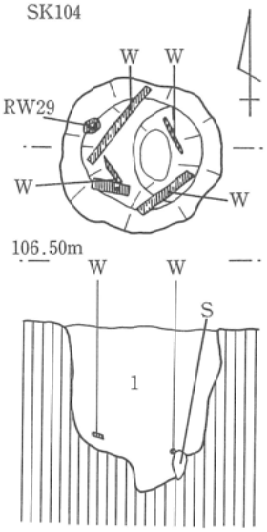
SK75
1．10YR1.7/1黒色砂質シルト（黄褐色砂質シルトを多く含み、3の土を微量含む。やわらかい。）
2．10YR1.7/1黒色砂質シルト（黄褐色砂質シルトを少量含む。やわらかい。）
3．5YR5/2灰オリーブ色砂質シルト（2の土を斑状に含む。）
4．10YR1.7/1黒色砂質シルト（灰オリーブ色砂質シルトを粒状に含む。やわらかい。）

SK101



SK101
1．2.5Y2/1黒色粘土（オリーブ灰色シルトをブロック状に、少量含む。）

SK104



SK104
1．10YR1.7/1黒色粘質シルト（明褐色粘質シルトを帯状に含む。やわらかい。）

0　1m
1：40

第15図　SK66・74・75・101・104土坑

(5)溝跡・河川跡（第16～18図　図版11～13）

ＳＤ22溝跡

Ａ区中央、6～10―14～17Ｇで検出され、Ａ区を長さ23ｍに渡り東西に横断する溝跡である。幅約1.0～1.4ｍ、確認面からの深さ40～75cmを測り、西側にかけて深くなり、断面形は東側で逆台形、中央でＵ字形、西側でＶ字形となる様相を示す。遺物は青磁片が１点出土している。

この溝跡はＢ区で検出されたＳＤ31溝跡と西側の調査区外で直角に交わると推測され、ＳＤ31の性格等を考慮すると、中世に機能していた集落を区画する溝と考えられる。

ＳＤ23溝跡

Ａ区中央、６～８―17ＧのＳＤ22北側で検出された。幅50～80cm、確認面からの深さ８～15cmを測る。調査区内での長さ11.5ｍで、さらに西側へ延びると考えられる。規模及び覆土等を考慮すると、この溝跡はＳＤ22より新しいと推測される。

ＳＤ31溝跡

Ｂ区中央、6～14―25～33Ｇで検出され、Ｂ区を長さ55ｍに渡り南北に縦断する溝跡で、ＳＤ97溝跡に切られる。幅1.7～2.4ｍ、確認面からの深さ0.9～1.1ｍを測る。断面形は底面がかなり狭くなるＶ字状を呈する。この溝跡は集落を区画するためのものと考えられる。また、さらに南北両方向に延びＡ区で検出されたＳＤ22と西側の調査区外で直角に交わると推測される。

遺物は、流れ込みと考えられる縄文時代の石器が上層から総数27点（尖頭器：23点・石篦・石匙・掻削器：各１点）の他、土師器甕片・須恵器甕片、陶器片（越前焼）が出土している。時期は、遺物より平安時代から中世まで機能していたと考えられる。

ＳＤ96溝跡

Ｂ区中央、11～15―24～29Ｇで検出され、幅50～60cm、確認面からの深さ15～20cmを測り、長さ23.5ｍの東西方向の溝跡である。断面形は壁が垂直に堀り込まれ底面が平坦となる様相を示す。規模・覆土等がＳＤ97と類似し、ＳＤ31より新しくＳＤ97と同時期に機能していたと考えられる。

ＳＤ97溝跡

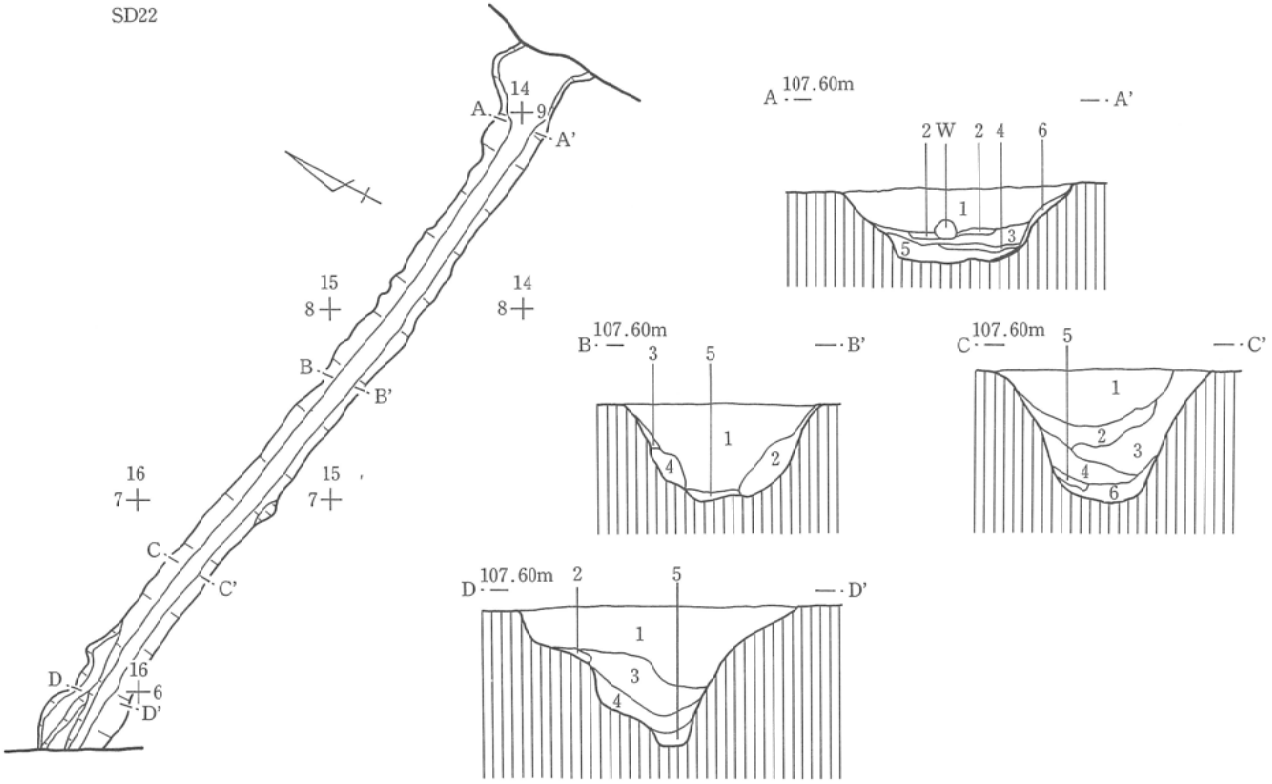
Ｂ区北側、12～15―29～31Ｇで検出され、ＳＤ31を切る。幅50～55cm、確認面からの深さ15cmを測り、西側で直角に曲がり、さらに北側で曲がりＳＤ31に交わる。長さ20ｍの東西方向の溝跡である。断面形は壁が緩やかに立ち上がり中央が深くなるレンズ状を呈する。規模・覆土等がＳＤ96と類似し、ＳＤ31より新しくＳＤ96と同時期に機能していたと推測される。

遺物は、流れ込みと考えられる縄文時代の尖頭器１点の出土がある。

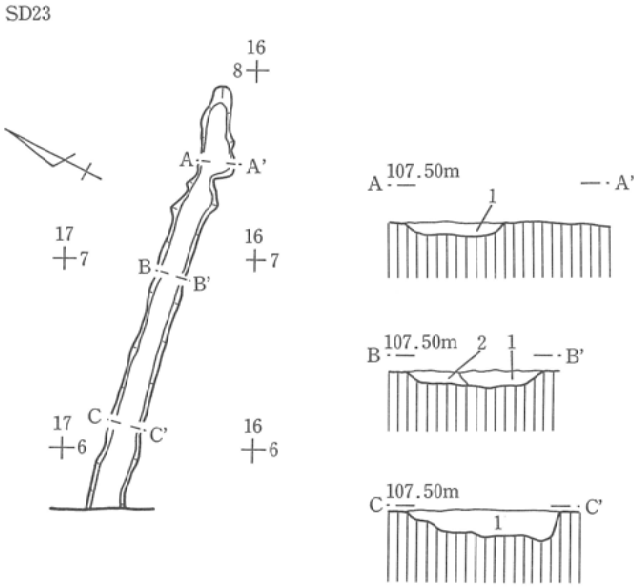
ＳＧ119河川跡

Ｃ区中央調査区、11～13―14～16Ｇで検出され、Ｃ区を東西に横断する。幅３～５ｍ、確認面からの深さ50cmを測り、長さ11ｍでさらに東側に延びると推測される。断面形は逆台形状を呈し、底面は平坦となる。

遺物は、流れ込みと考えられる縄文時代の石器３点（尖頭器：２点・石匙：１点）の他、青白磁の破片が出土した。磁器片から中世頃に機能していたと推測される。



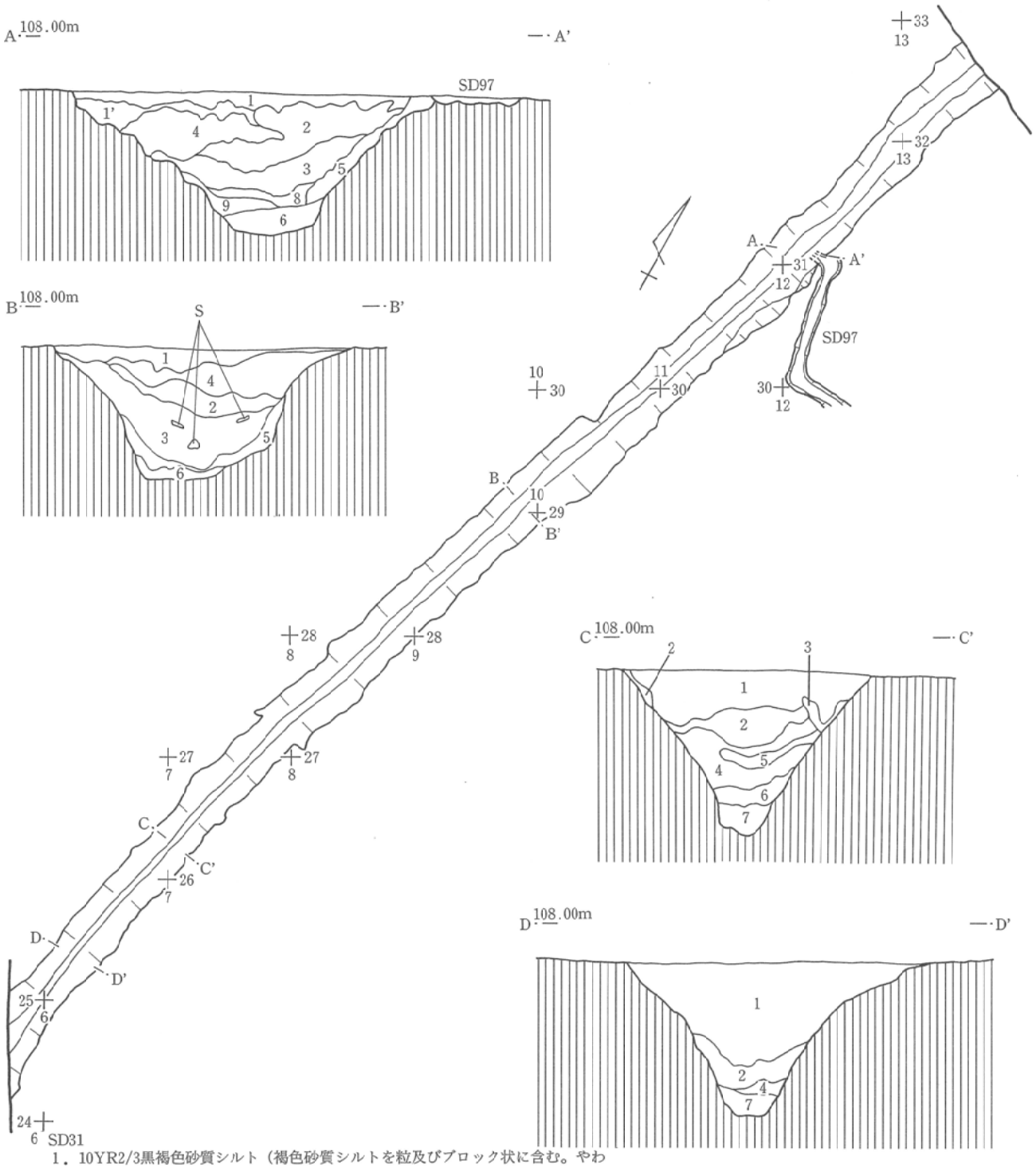
SD22
1．10YR2/3黒褐色砂質シルト（黄褐色と明黄褐色の砂質シルトを粒状に含む。しまる。）
2．10YR5/6黄褐色砂質シルト（黒褐色砂質シルトを少量混入する。しまる。）
3．10YR4/6褐色砂質シルト（黒褐色砂質シルトを少量含む。）
4．10YR3/4暗褐色砂質シルト（黄褐色と黒褐色の砂質シルトを少量含む。やわらかい。）
5．10YR6/4にぶい黄橙色砂質シ　ト（黄褐色と暗褐色の砂質シルトを多く混入する。やわらかい。）
6．10YR3/2黒褐色砂質シルト（灰褐色と明褐色の砂質シルトを少量含む。やわらかい。）



SD23
1．10YR2/3黒褐色砂質シルト（褐色シルト質砂を粒状に少量含む。かたくしまる。）
2．10YR2/3黒褐色砂質シルト（褐色砂質シルトを含む。かたくしまる。）

遺構平面図 0 5m 1：200
遺構断面図 0 1m 1：40

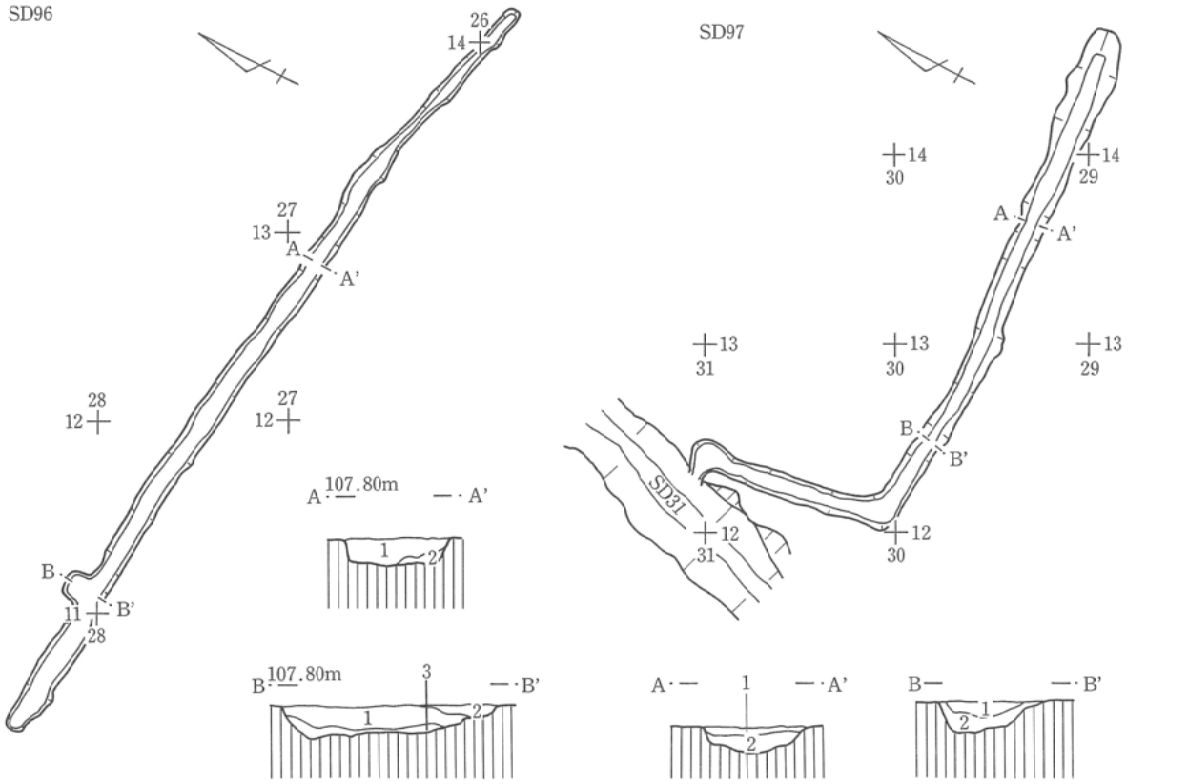
第16図　SD22・23溝跡

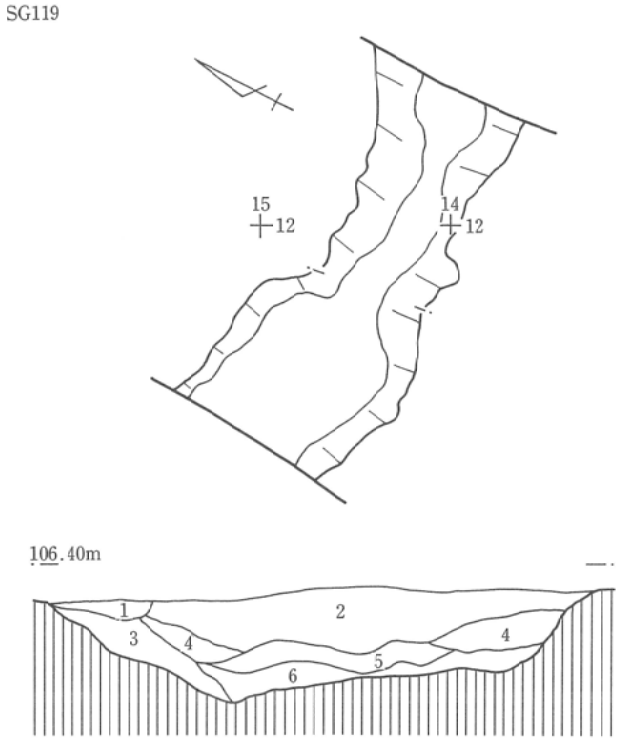


1．10YR2/3黒褐色砂質シルト（褐色砂質シルトを粒及びブロック状に含む。やわらかい。）
1'．10YR2/3黒褐色シルト（褐色シルトを粒状に含む。ややしまる。）
2．10YR2/3黒褐色砂質シルト（褐色と暗褐色の砂質シルトをブロック及び帯状に含む。やわらかい。）
3．10YR3/4暗褐色砂質シルト（黒褐色砂質シルトを斑状に含む。やわらかい。）
4．10YR2/3黒褐色砂質シルト（褐色砂質シルトを粒状に少量含む。やわらかい。）
5．10YR2/2黒褐色砂質シルト（褐色砂質シルトを多く混入する。しまる。）
6．10YR2/2黒褐色砂質シルト（にぶい黄橙色砂質シルトをブロック状に、明褐色シルトを少量混入する。しまる。）
7．10YR3/3暗褐色シルト質砂（浅黄橙色と黄橙色のシルト質粘土をブロック状に含む。しまる。）
8．10YR2/3黒褐色砂質シルト（褐色砂質シルトをブロック状に含む。やわらかい。）
9．10YR3/4暗褐色砂質シルト（黒褐色砂質シルトをブロック状に、褐色シルトを粒状に少量含む。しまる。）

遺構平面図 0 10m 1：250
遺構断面図 0 1m 1：40

第17図　SD31溝跡





SD96
1．10YR2/2黒褐色砂質シルト（褐色砂質シルトをブロック状に含む。しまる。）
2．10YR3/4暗褐色砂質シルト（褐色シルトを粒状に少量含む。しまる。）
3．10YR2/3黒褐色砂質シルト（褐色シルトを点状に微量含む。しまる。）

SD97
1．10YR2/3黒褐色砂質シルト（暗褐色砂質シルトを斑状に含み、かたくしまる。）
2．10YR3/4暗褐色砂質シルト（褐色砂質シルトを斑状に含み、黒褐色砂質シルトを点状に含む。しまる。）

SG119
1．5Y2/1黒色粘土(細砂、炭化粒、砂利を含む。やわらかい。)
2．5Y2/2オリーブ黒色シルト(明黄褐色シルトをブロック状に含む。かたくしまる。)
3．5Y2/2オリーブ黒色粘土（炭化粒と砂利を含む。やわらかい。)
4．5Y3/2オリーブ黒色砂質シルト(2の土をブロック状に含み、砂利を少量含む。やわらかい。)
5．5Y3/2オリーブ黒色砂質シルト（炭化物を含み、砂利を混入する。かたくしまる。)
6．10YR2/1黒色砂（砂利を多量に含み、草の根を多く混入する。かたくしまる。)

遺構平面図 0 5m 1：200
遺構断面図 0 1m 1：40

第18図　SD96・97溝跡・SG119河川跡

3　出土遺物

今回の調査では石器・須恵器・土師器・土製品・陶磁器・木製品など、縄文時代・奈良・平安時代・中世の遺物が整理箱にして45箱出土した。その主な分布は、縄文時代の石器がＳＤ31とＣ区包含層から、奈良・平安時代の土器・土製品はＳＴ25住居跡、そして中世の陶磁器・木製品はＢ・Ｃ区の遺構内から多く出土するという状況を示す。

以下に各遺物を遺構毎もしくは器種毎に特徴を述べる。なお、本報告書では山形県埋蔵文化財センター調査報告書第52集「平野山古窯跡群第12地点遺跡　第２次調査報告書」の土器分類を踏襲し、土器を須恵器と土師器に大別し、従来の「赤焼土器」という用語は使わず、土師器の範疇として扱うこととする。なお、土師器に黒色処理を施した黒色土器も便宜上、土師器に区分した。これは高松III遺跡においても同様である。

(１)平安時代の遺物

本遺跡の平安時代の遺物の大半はＳＴ25住居跡から出土していることから、ここではＳＴ25出土遺物とその他の出土遺物に分け、図化したものを中心に概略を述べる。

ＳＴ25竪穴住居跡出土遺物（第５・６図・第19図１～第23図51）

ＳＴ25からは、須恵器、土師器の他にミニチュア土器や土製品も出土している。遺物はカマド付近に多く分布し、カマド内にも土師器鉢が二個体逆位に重ねた形で設置してあり、支脚として使用していたと考えられるものの出土もある。また、貯蔵穴からの出土もみられた。

須恵器の器種には蓋・坏・双耳坏・高台付坏がある。各器種毎の形態分類を中心に、製作・調整技法などの特徴を述べる。

蓋は、形態から天井部が丸味をもつ山笠タイプ（１・２）と天井部と体部の境が角をなす平笠タイプ（３～９）に大別できる。さらに、平笠タイプは器高が高く口縁部が直立するもの（３)、器高が高く口縁部が屈曲するもの（４)、器高がやや高く口縁部が直立するもの（７)、同じく口縁部が屈曲するもの（５・６）と器高が低いもの（８・９）に細分できる。また、１・２は天井部にナデ調整が施され、３～９は天井部に回転ヘラ削り調整が施され、６・９の内面には重ね焼き痕がみられる。

坏は形態と調整技法から、外面下部にヘラ削り調整が施され体部が直線的に立ち上がるもの（10・11）と器高と底径がやや小さく体部が直線的に外反するもの（12・13）に分けられる。底部は全て回転ヘラ切りで、切り離し後にヘラ削り調整を施している。また、11の内面には藁の焼成痕がある。13・14はカマド周辺から出土したもので、二次加熱を受けて色調が赤褐色を呈しており、遺存状態は余り良くない。

15は双耳坏と思われるものである。口径が小さい有台坏で、外面全体に焼成時の自然釉が付着している。但し、外面上半の一部が半円形状に自然釉が剝がれており、その対極にあたる部分の破片も欠落している。おそらく双耳坏の斜方向に付く把手部分が剝がれてしまったものであろう。

高台付坏は、形態から口径がやや大きく軽い稜をもつもの（17・19）と、器高が高く体部が直線的に立ち上がるもの（16）に分けられる。全て、底部の切り離しは回転ヘラ切りで、切り

離し後にナデ調整を施している。19はカマド周辺から出土したもので、二次加熱を受けて色調が赤褐色を呈している。18は高台をもつ底部片で、底部外面に墨痕が多くみられることから硯に転用したものと思われる。

土師器の器種には、黒色土器・椀・鉢・甕・甑があり、煮沸形態である鉢・甕が多く、供膳具形態である坏類は少ないという特徴を示し、二次加熱を受けているものも多くみられる。各器種毎に概要を述べる。

黒色土器は内黒土器の坏（20）１点のみで、土師器や須恵器の坏と比較して大形となる。体部が丸みをもち、口唇部がやや外反する形態で、外面下半に手持ちヘラ削り痕が認められ、底部もヘラ削り調整が施される。内面を磨いて黒色処理を施している。

椀（26）も１点のみの出土である。身が深く体部は直線的に立ち上がる形態で、内面にカキ目が、外面下部に回転ヘラ削りが認められ、底部もヘラ削り調整が施される。二次加熱を受けているため遺存状態は良くない。

鉢は全てロクロ整形で、口径が146～166㎜、器高が70～87㎜の小型のものである。形態から、体部が丸みをもち口縁部が強く外反するもの（21･22）、体部は丸みをもち肩部が張り出し、口縁部が緩やかに外反するもの（23）、体部が丸みをもち口唇部が外反するもの（24）に分けられ、他に体部資料（25）がある。24は回転ヘラ切りの底部切り離しが認められ、23・24は底部ヘラ削りの調整が施される。また、23は内面に刷毛目が外面にはヘラ削りの調整が施されている。そして、22の外面にはカキ目が認められた。21・22・25は二次加熱を受けており、遺存状態が悪く表裏面に剝落がみられるものもある。

甕はロクロ使用で、外面にタタキ・削り・カキ目の調整が、内面にカキ目・刷毛目の調整が施されている。底部が平底になるものが多く、丸底様となるのは２点のみで、口縁部資料が１点ある。形態から、体部が細長く口縁部が強く外反するもの(27)、体部が下膨らみで口縁部が強く外反し、ほぼ水平になるもの（28)、器高が高く口縁部が外反するもの（29～32)、器高が高く口唇部が内湾し、底部が丸底様となるもの（33･34)、そして口縁部が緩やかに外反し、口唇部が内湾するもの（35）に分けられる。33は底部にナデ調整が施され、35を除いて二次加熱を受けている。

甑は底部破片資料（36）１点のみ出土している。無底式に属するもので内外面にナデ調整が施され、体部との継ぎ部には指圧痕がみられる。二次加熱を受けている。

ミニチュア土器･土製品は、器の形態をとるものをミニチュア土器（37～45)、それ以外は土製品（46～51）として扱った。全てＳＴ25住居跡から出土したもので、合計15点を数える。

ミニチュア土器は、大半が手捏ねとなるが、数点ロクロを使用したものがある。

37は壺形で、外面と底部にヘラ削り調整が施され、内面頸部に指圧痕がみられる。38は頸部･口縁部が欠損しているが、壺形と考えられる。ロクロで作り出した後に外面下部と底部にヘラ削り調整を施し整形している。39もロクロ調整となり、内面にカキ目調整が施される。また、底部に凹痕が認められる。40は鉢形で頸部に指圧痕がみられる。41は体部のみの資料であり、底部と口縁部が欠損している。42は口縁部を欠く資料で、内面にヘラの調整傷がみられ、外面

に指圧痕が認められる。残存部から、口縁部が外反する形態になると推測される。43は器台の脚部と考えられるが、詳細は不明である。底部は内側へ折り返し整形している。44は脚付の器で、器部と脚部を別々に制作してから接合している。脚部の底面に工具の調整傷がみられ、器外面中央部には押爪痕が全周に施されている。45は外面に工具の削り痕がみられ、内面と頸部の破損面には指圧痕が認められた。

46は体部を一部欠く資料で、土鈴と推定される。ツマミ部分に径2.5㎜程の紐を通す穴が開けられ、底部にも３ヶ所の穴が認められる。47はキノコ形土製品と考えられる。表面が部分的に剝落し、二次加熱を受けたと推測される。48は細長い楕円状の形態で、外面は削り調整が施され、内面に幅2.3㎜・深さ３～４㎜の溝が３本作成されている。また、長辺の両端は意図的に開口されていると思われる。形態から墨の模造品とも考えられるが、詳細は不明である。

49は棒状土製品で表面に指圧痕が認められ細長く伸ばし整形している。中央部にこぶ状の突起がみられ、二次加熱を受けている。50・51は土製の玉で表面に整形の際についたものか、指圧痕が認められる。51に比較して50は一回り大きい。50は二次加熱を受けており、表面が一部剝落している。

ミニチュア土器・土製品は、一部を除き使用目的が不明であるために、推測の域をでないが、祭祀関係の遺物ではないかと考えられる。併せて、このＳＴ25も通常の住居と異なり祭祀に関係する住居と考えられる。

以上、ＳＴ25の出土遺物は土器の形態・調整技法・底部切離しなどから、概ね９世紀前半（第１四半期）に属すると推測される。ミニチュア土器・土製品もこの時期の土師器や須恵器と共伴することから同時期に比定できると考えられる。

その他の出土遺物（第24図52～55）

他の平安時代の遺物は極めて少ないことから、主に遺構内出土の図示可能な須恵器について述べる。土師器も数点出土したが、破片のみであること、遺存状態が悪いことから掲載できず割愛した。

52は須恵器壺の底部資料でＳＫ74から出土した。ロクロ整形で、底部切り離しは回転ヘラ切りとなる。

53は須恵器壺等の底部を再加工したものと考えられ、口唇部を擦って整形したことが伺える。口唇部が平らになり、こね鉢に似た器形となる。底部は回転糸切りで、ＳＴ25の出土遺物より新しい時期のものと推定される。包含層出土の土器である。

54・55は須恵器の大形甕体部の破片資料である。外面に平行タタキ目痕があり、内面には青海波アテ痕が認められる。55の内外面の頸から肩部にかけて、ロクロナデの調整がみられる。54はＳＫ104、55はＳＤ31からの出土である。

(2)中世の遺物

本遺跡から出土した中世の遺物は、陶器・磁器・木製品である。その大半はC区から出土しているが、ST33やSD31からも数点、陶磁器の出土がある。以下に各種の概要を述べる。

陶　器（第24図56～58）

56・57は越前焼である。56は甕の口縁部で頸部が外反し、端部は内側に引き出される。図示しなかったが同一個体の体部資料も出土している。外面に自然釉が付着し、割れ面には漆接ぎ痕が認められる。57は擂り鉢の口縁部資料で内面に4本の卸目が認められる。58は瓷器系陶器で壺の底部資料と考えられ、底部にヘラ削り調整が施される。

磁　器（第24図59～66）

59～65は青磁碗の破片資料が大半を占め、65のみ梅瓶の破片資料となる。59は片切彫の鎬蓮弁文をもち内面見込みにも文様が入る。60も片切り彫の鎬連弁文をもつ。61は口縁部が外反する器形で内面見込みに沈線がめぐり草花文が入る。62は全面に施釉後、畳付部分と高台内の釉を削り取っているが一部畳付けに釉が流れる。文様は不明。63は内面見込みにスタンプ文が入り、高台内の釉を輪状に掻き取っている。64も全面に施釉後の高台内の釉掻き取りがみられる。文様は不明。この他に掲載できなかったが、片切彫の連弁文が確認できる青磁碗の口縁部破片資料がSD22から1点出土している。63のみ釉が厚く胎土は白色を呈するが、他は釉が比較的薄く、胎土が灰色を呈する。

以上の青磁は竜泉窯の所産と推定され、「貿易陶磁研究№2」(1982) の上田秀夫氏の分類から59・60はB類、62はA類、そしてD－I類に属すと考えられる。時期は、概ね14世紀後半～15世紀初頭と推測される。

65は高麗青磁の梅瓶と考えられる。外面に施釉され、内面は露体となる。外面にスタンプ文と沈線が入る。胎土は灰色を呈する。66は青白磁の壺か瓶と考えられる。外面のみに施釉され、細描連弁文をもち畳付部分の釉を削り取っている。また、高台内に重ね焼きを示す砂目が付着する。胎土は白色を呈し、内面にロクロ目が残る。

木製品（第25図67～71）

全部で5点の出土があり、C区の遺構内出土である。漆器は皿（67・68）、椀（69）で黒色漆が塗られる。

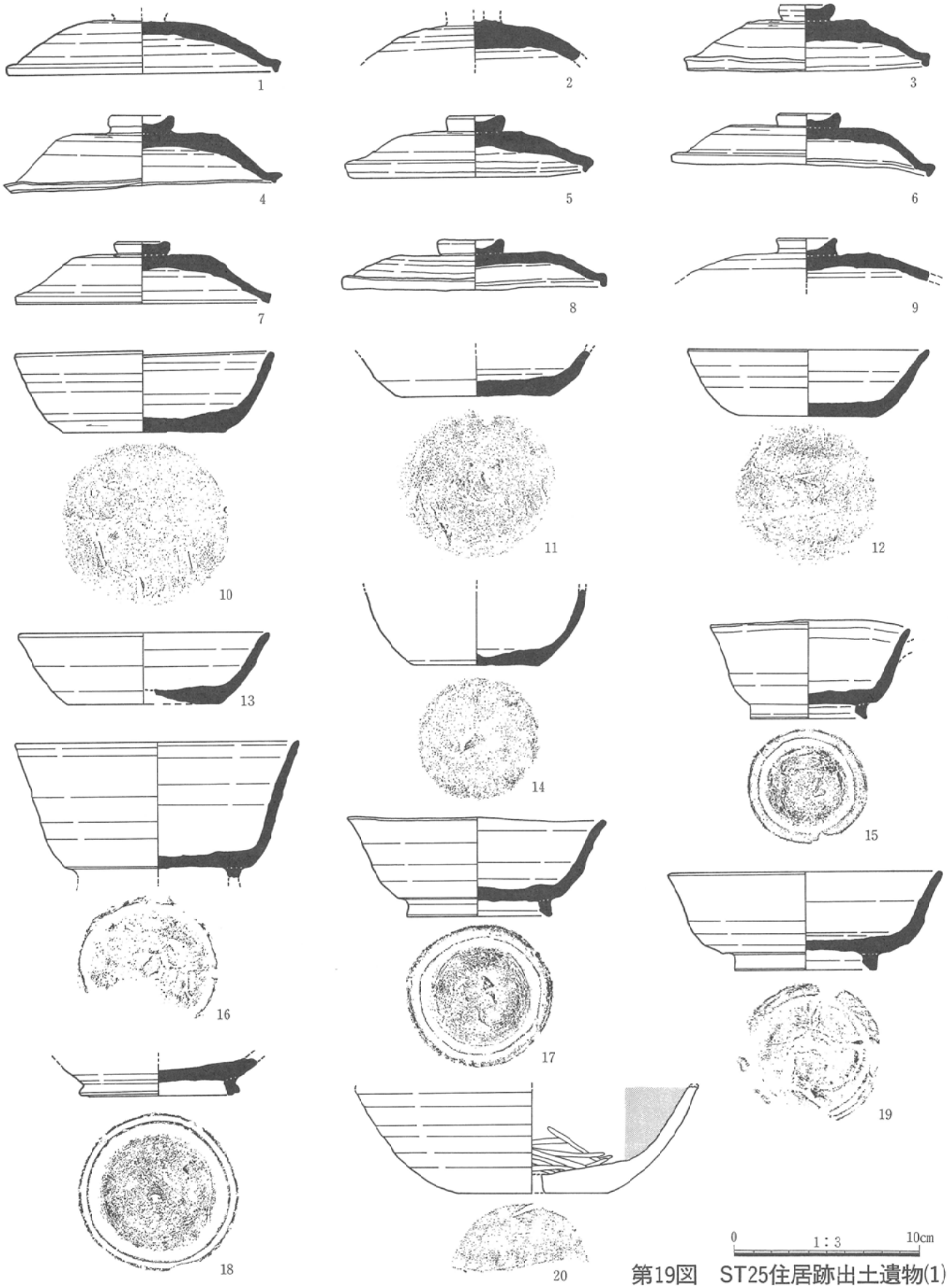
67は高台底面に漆は塗られず、口径90㎜・底径40㎜・器高22㎜を測る。SK104からの出土である。

68は口縁部が欠損する資料である。高台底面も含め全面に漆が塗られ、内面に漆紙が付着している。この漆紙に文字は確認できなかった。底面にはロクロの刺痕が残る。残存部の口径87㎜・底径59㎜・器高14㎜を測る。SK74からの出土である。

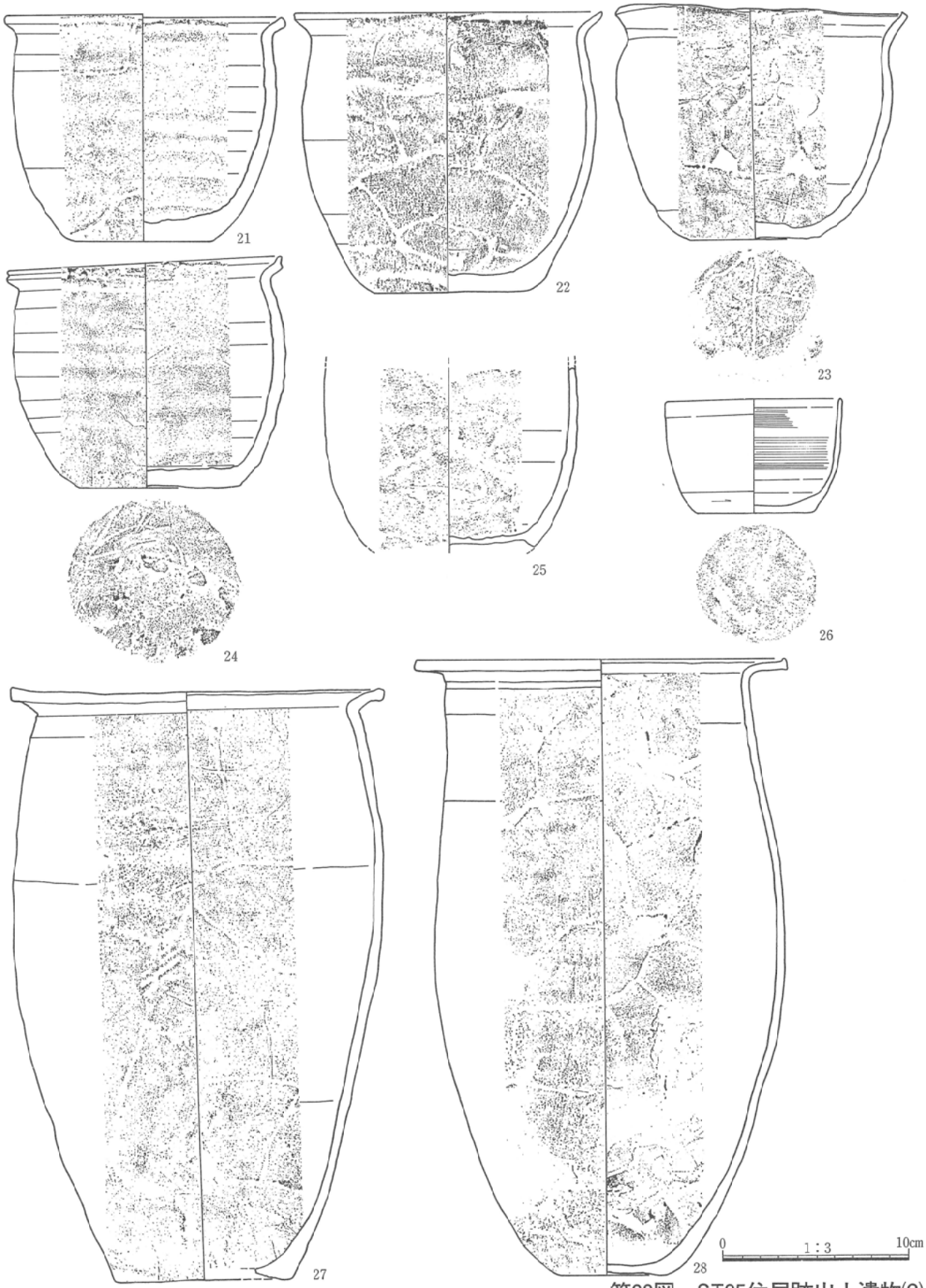
69は口縁部の大半が欠損する資料で、高台底面に漆は塗られない。口径150㎜・底径65㎜・器高50㎜を測る。SK75からの出土である。

70はワッパの底で長径207㎜・短径96㎜を測る楕円形を呈する。SG119から出土した。

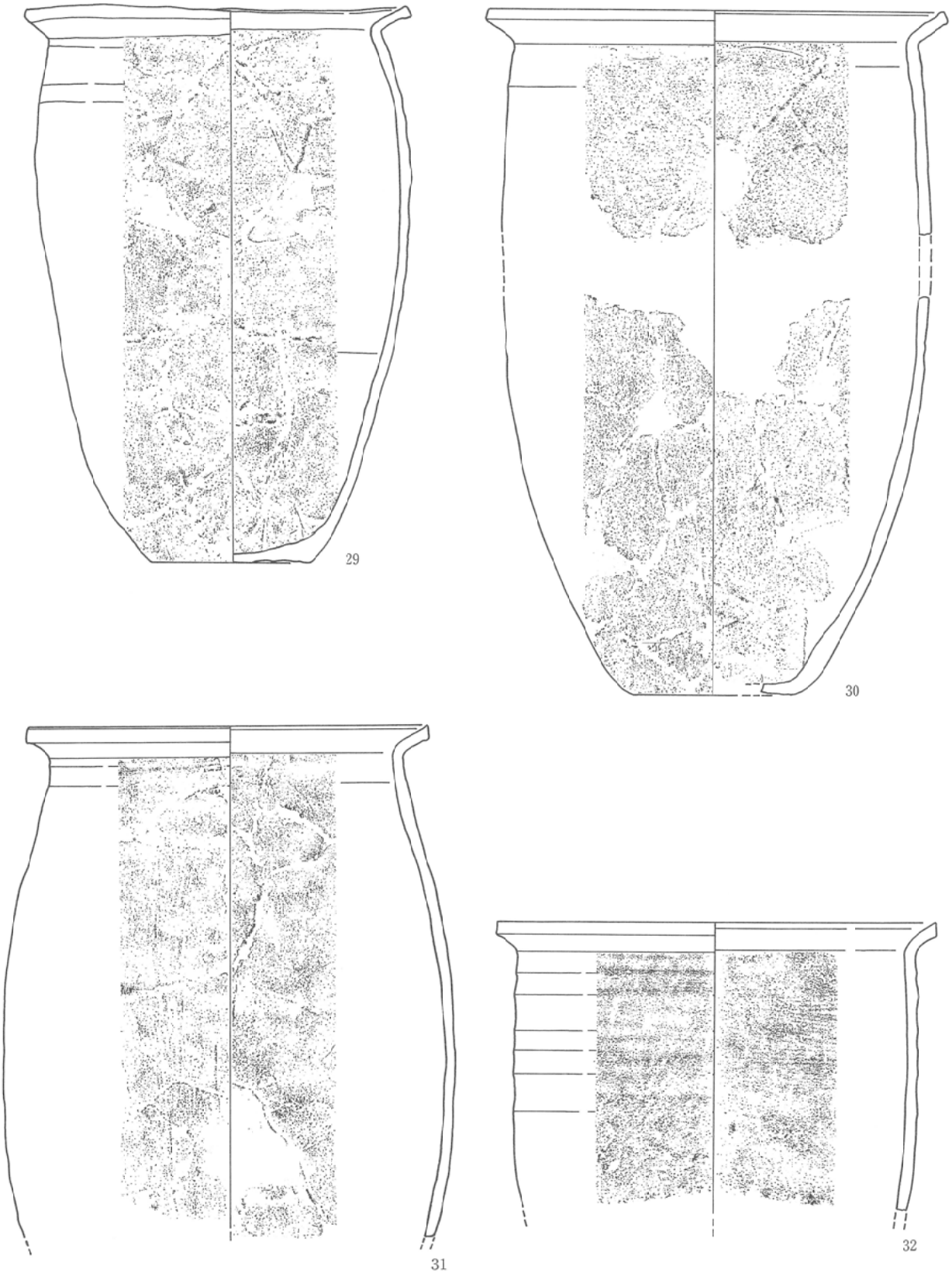
71は下駄で中央左側に円形の緒穴痕が認められる。残存長216㎜でSP69から出土した。



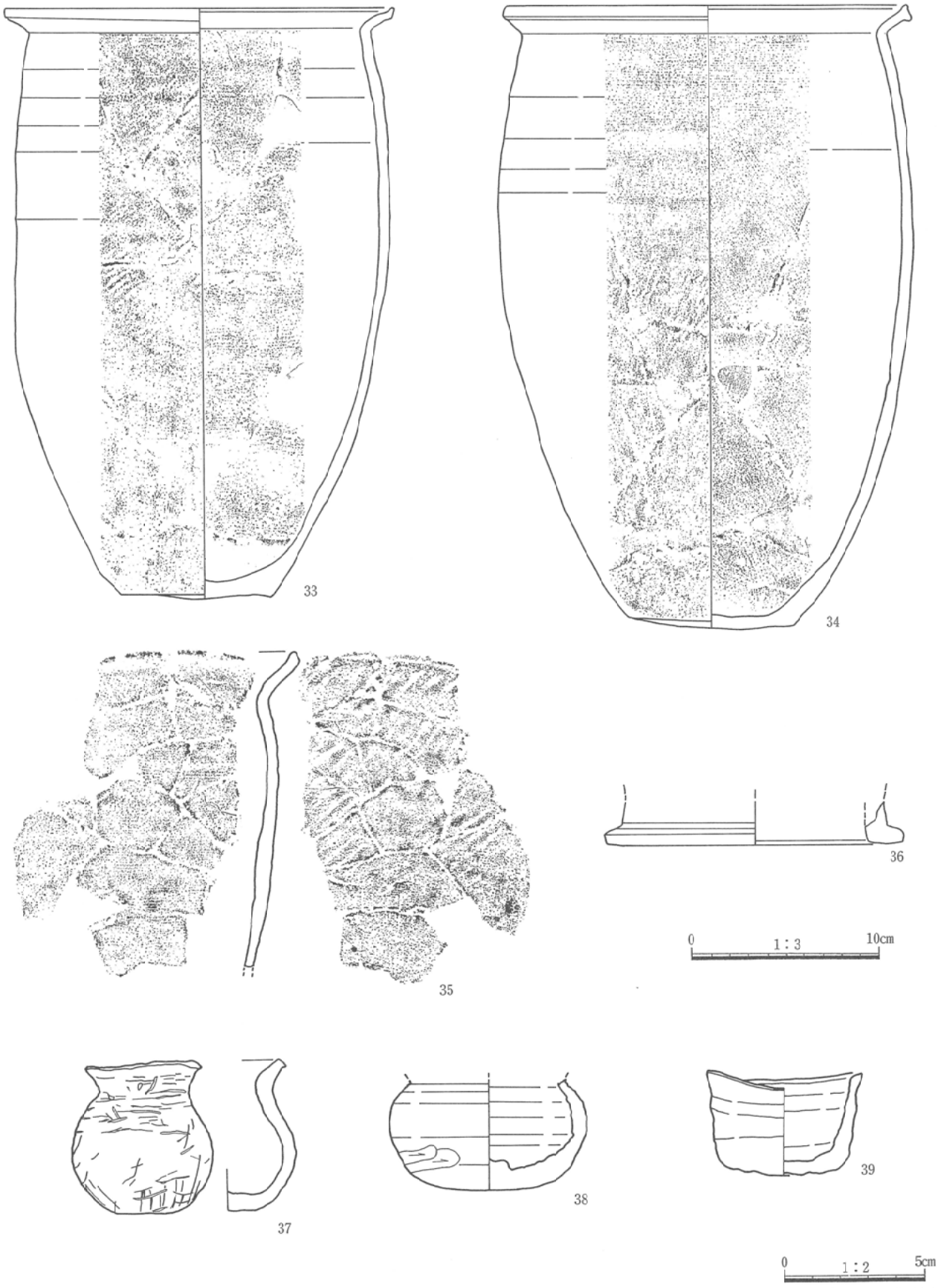
第19図　ST25住居跡出土遺物(1)



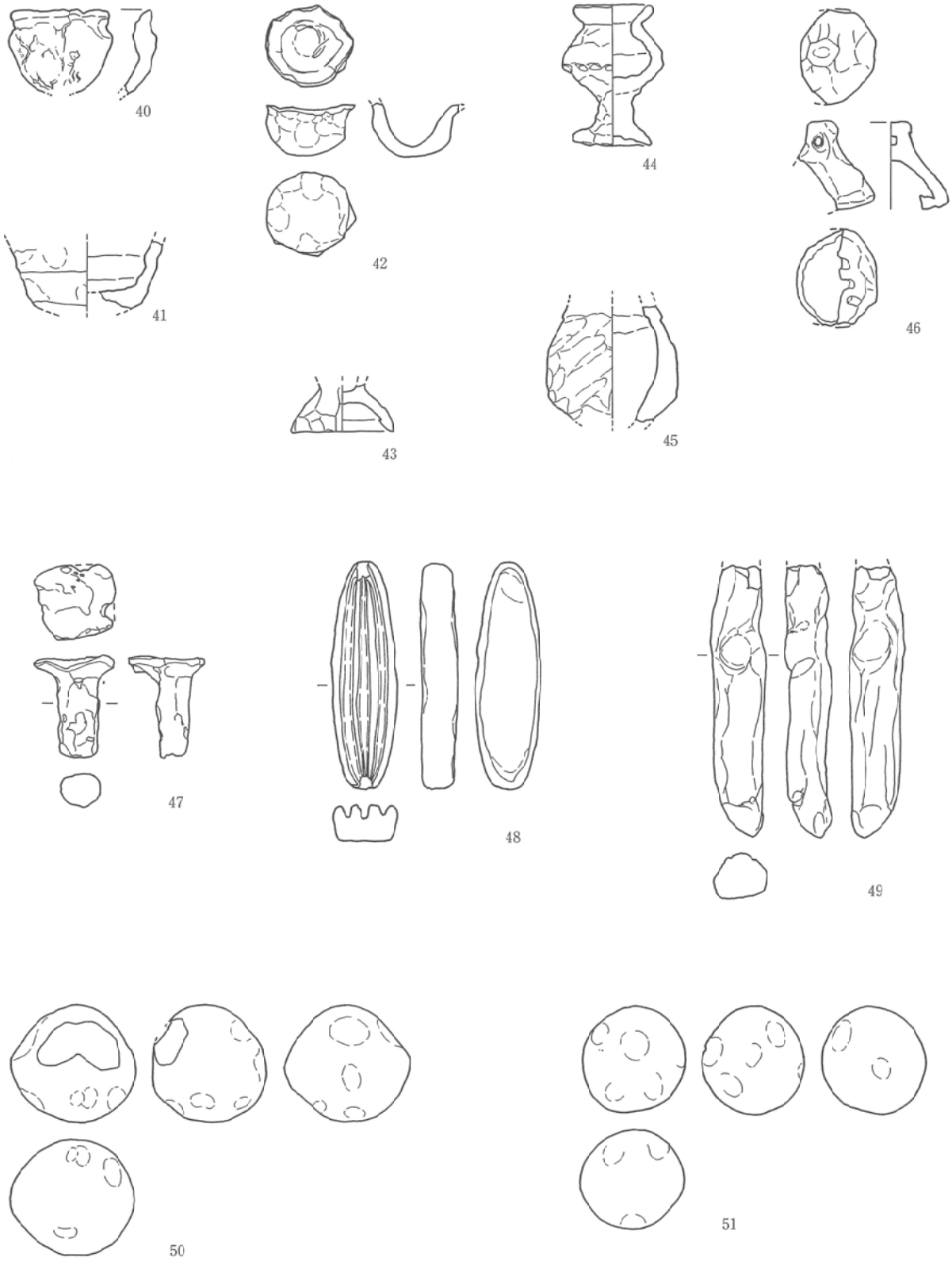
第20図　ST25住居跡出土遺物(2)



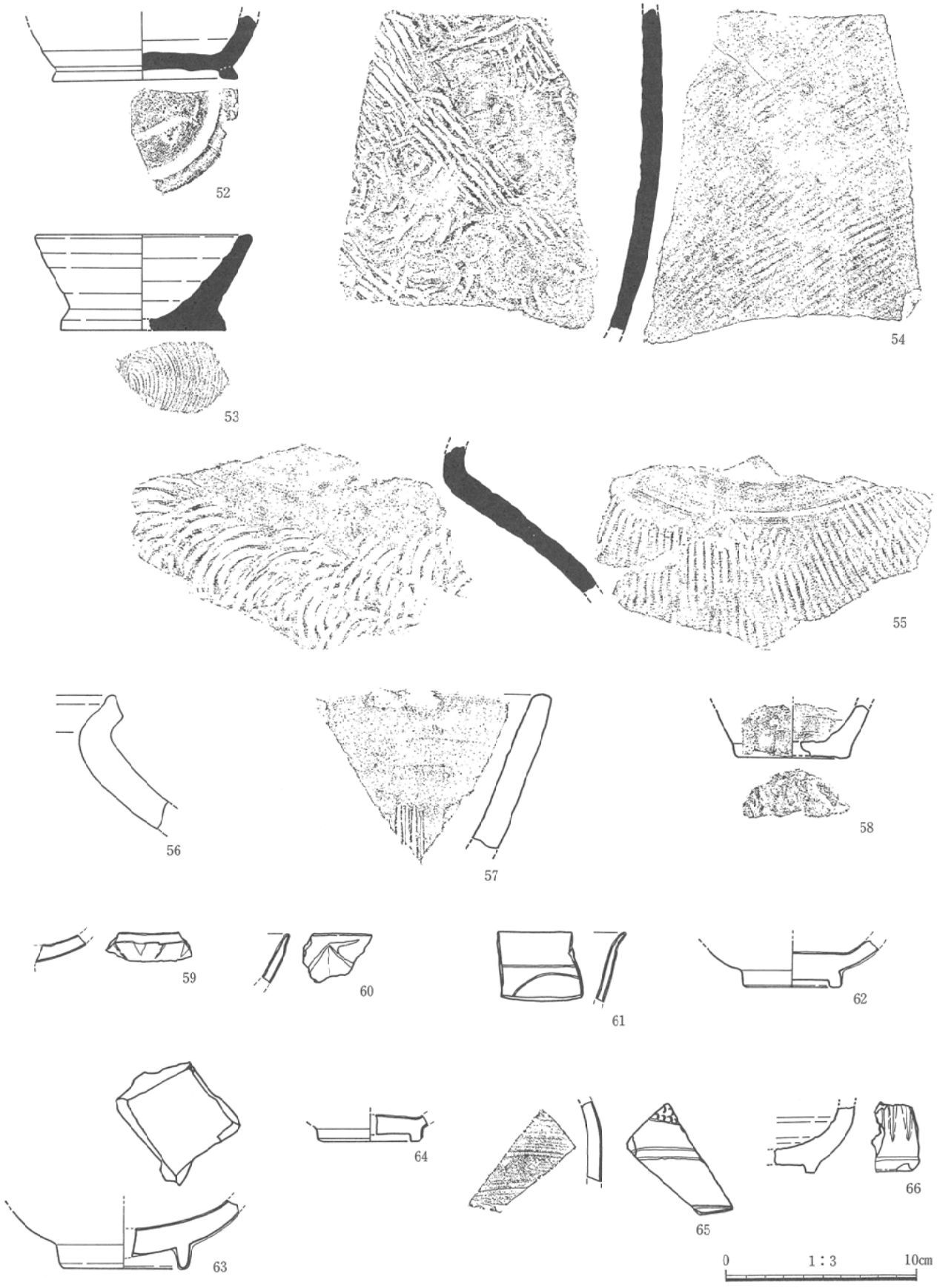
第21図　ST25住居跡出土遺物(3)



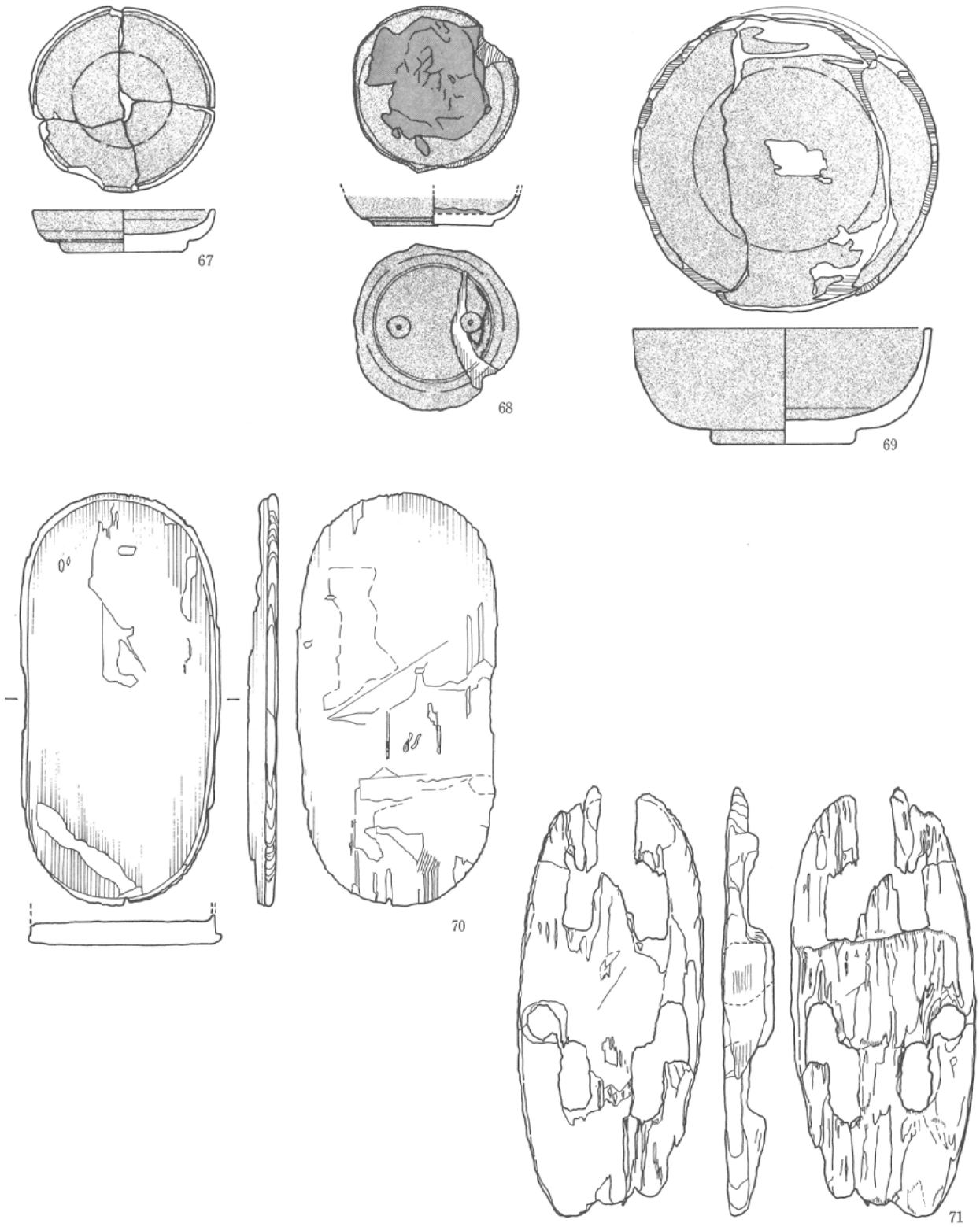
第22図　ST25住居跡出土遺物(4)



第23図　ST25住居跡出土遺物(5)



第24図　遺構・包含層出土遺物



第25図　木製品

(3)縄文時代の遺物

石　器

今回の調査では、46点の剝片素材のtoolと多量の石器製作にかかわる剝片・砕片・石核の他、礫素材の石器が1点出土した。器種は、剝片を素材とするものに尖頭器・石錐・石匙・石箆・掻器・削器がある。石材は凝灰岩製が1点のみで、他は全て珪質頁岩製となる。また、礫素材の石器は砥石である。

出土した場所はＳＤ31・97・ＳＧ119の他、Ｃ区の包含層（水田盤土）であるが、Ｃ区包含層からは剝片・砕片・石核が多量に出土し、toolは6点と少ない。遺構内からはＳＧ119に少量の石核が含まれるものの、主に尖頭器・石錐・石箆などのtoolが出土するという特徴が見られた。さらに、ＳＤ31からは24点の尖頭器が一括して出土し、まとめて廃棄された様相を示す。

時期は、縄文時代と考えられるが、本遺跡からは縄文土器の出土は無く、縄文時代の遺構も検出されていないことと、出土した層が主にＣ区の包含層や遺構覆土の上層であり、下層から新しい時期の遺構や遺物が見つかっていることを考慮すると、後世の二次的混入の可能性もある。以下に、石器各器種の概要を述べる。

尖頭器（第26図1～第29図28）

両面加工によって尖った先端部を作出するもの、あるいは尖った先端部を作出していると推定される石器を尖頭器とした。ＳＤ31から23点、ＳＤ97から1点、ＳＧ119から2点そして、Ｃ区包含層から4点の出土があり、図示し得なかったものも含め30点出土した。完形・略完形品は4点と少ない。石材は全て珪質頁岩製となる。

これらは、大きさと加工の相違によって以下に分類される。

Ｉ類：両面に調整加工が施され、全長が10cm未満のもの。3点の出土で全て完形・略完形となる。形態によりさらに細分される。

ａ：細長い形態で薄身となるもの（第26図1）。1点の出土。

ｂ：中間部に最大幅をもち、木葉形で厚身となるもの（第26図2）。1点のみ出土。

ｃ：尖頭部下端に最大幅をもち茎状の基部を作出するもの(第26図3)。薄身で精巧な調整加工が施される。1点の出土。

II類：両面に調整加工が施され、推定の最大長が10cm以上の大形となるもの。24点の出土で、全て折損品となり、ほとんどが基部資料である。形態によりさらに細分できる。

ａ：細長い形態で薄身となるもの(第26図4～第27図14)。12点の出土があり、基部が直線状をなすもの（13）と丸味を帯びるもの（14）が各1点ある。

ｂ：細長い形態となるが、厚身となるもの(第27図15～第28図23)。9点の出土で、尖頭部資料が2点（15・16）含まれる。

ｃ：幅広の形態で薄身となるもの(第29図24)。1点の出土で精巧な調整加工が施されている。

ｄ：幅広の形態で厚みとなるもの。(第29図25)。図示しなかったものを含め2点の出土。

III類：両面に調整加工が施されるが、片面もしくは両面に表皮や素材面を残すもの。3点の

出土で形態によりさらに細分できる。

a：背面側は全面加工となるが、主要剥離面側には素材面を残すもの(第29図26)。１点のみ出土で、幅広の形態で薄身となる。

b：主要剥離面側は全面加工となるが、背面側に表皮を残すもの(第29図27)。１点の出土で、幅広の形態で薄身となる。

c：背面側は一部表皮を残すがほぼ全面加工となり、主要剥離面側は周縁部加工となるもの（第29図28)。完形品１点の出土で、厚身で幅広の形態となる。

石　錐（第30図29）

素材となった剥片の縁辺に調整加工を施して、その一端に尖った先端部を作出した石器を石錐とした。１点のみＳＤ31覆土中から出土した。石材は珪質頁岩製で略完形品である。両面が周縁部加工となり、主要剥離面に素材面を残し、背面側に表皮を残す。形態は尖頭部がしだいに細くなり基部との境が不明瞭となる。大きさは、全長101.6㎜、最大幅45.3㎜、最大厚20.6㎜を測る。

石　匙（第30図30～32）

相対する２つのノッチを入れることによって作出されたつまみをもつ石器を石匙とした。３点が出土している。つまみを上方に置いたとき側縁が刃部となる縦型のもの（30・31）と下端の縁片が刃部となる横形もの（32）がある。石材は全て珪質頁岩製となる。

30は右側縁部と末端を欠損しているが、左側縁は直線状となる形態で、残存部の調整加工はつまみ及びノッチ、左側縁も両面縁辺加工が施される。31は左側縁は凹弧状から直線状、右側縁が凸弧状をなす形態で、調整加工は主要剥離面のノッチ部と右側縁上部に周縁加工が、背面側の右側縁はノッチ部のみ加工が施され、素材の形をほとんど変えていない。32は左側縁は凹弧状、右側縁が凸弧状となる形態で、調整加工はノッチが両面周縁加工となり、刃部は背面側下端にに周縁部加工が施される。

石　箆（第30図33・34）

素材となった剥片の背面と主要剥離面の両面に調整加工が施され、その長軸の末端が刃部になると考えられるもの、また、主要剥離面のみの片面加工であっても、刃部と考えられる末端の刃角が小さく掻器とはなり得ないものもここで扱った。この定義にあてはまる石器は２点出土している。石材は珪質頁岩製と凝灰岩製が各１点である。

33は末端が一部欠損し、撥形の形態で刃部は片刃状となる。調整加工は、背面側・主要剥離面側とも周辺加工となり、両面に素材面を大きく残す。34は刃部のみの資料で、主要剥離面は全面調整加工が施されるが、背面側は刃部を含め大きく素材面を残す側縁部加工となる。刃部は丸味を帯びる。

掻　器（第30図35～37）

急角度の調整加工によって刃部を作出した石器を掻器とした。この定義にあてはまる石器は縦長剥片を素材とした３点が出土した。素材は全て珪質頁岩製となる。

35は完形品で一縁辺を除く三縁辺が刃部となり得る。36は基部が欠損している資料で、残存

部は末端部及び両側縁の三縁辺が刃部となり得る。37は略完形品で素材の背面側全周に丁寧な調整加工が施される。素材全周が刃部になるラウンドスクレイパーと考えられる。

削　器（第31図38～42）

剥片の縁辺に連続的な調整加工を施して、刃部を作出した石器を削器とした。素材の形を大きく変えることがないため不定形である。縦長剥片を素材とするものが全部で５点出土し、素材は全て珪質頁岩製となる。

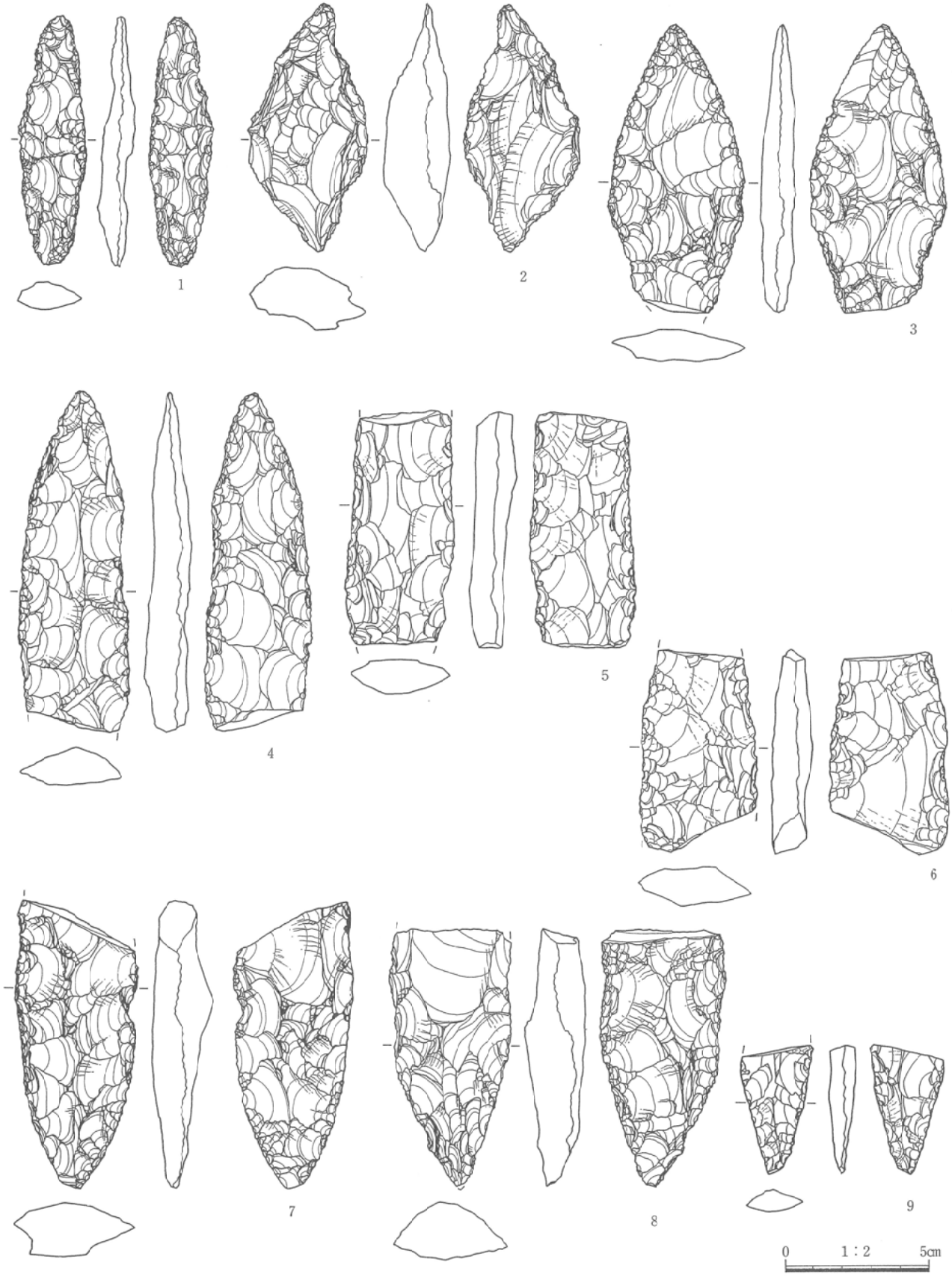
38は剥片の片面ほぼ全縁辺に連続的な調整加工を施し刃部とする。39は素材の両側縁と先端部に背面側のみ調整加工が施され、三縁辺が刃部となる。40は先端部が欠損する資料で、残存部は背面側の左側縁下部と右側縁に調整加工が施される。41は先端が尖る形態をなし、背面側は両側縁と先端部に、主要剥離面側は右側縁部に調整加工が施されるが刃部となり得るのは左側縁から先端部にかけての一縁辺のみである。42は背面側の左側縁に調整加工が施されるのみであるが、先端と左側縁の二縁辺が刃部となり得る。

加工痕のある剥片（第31図43～46）

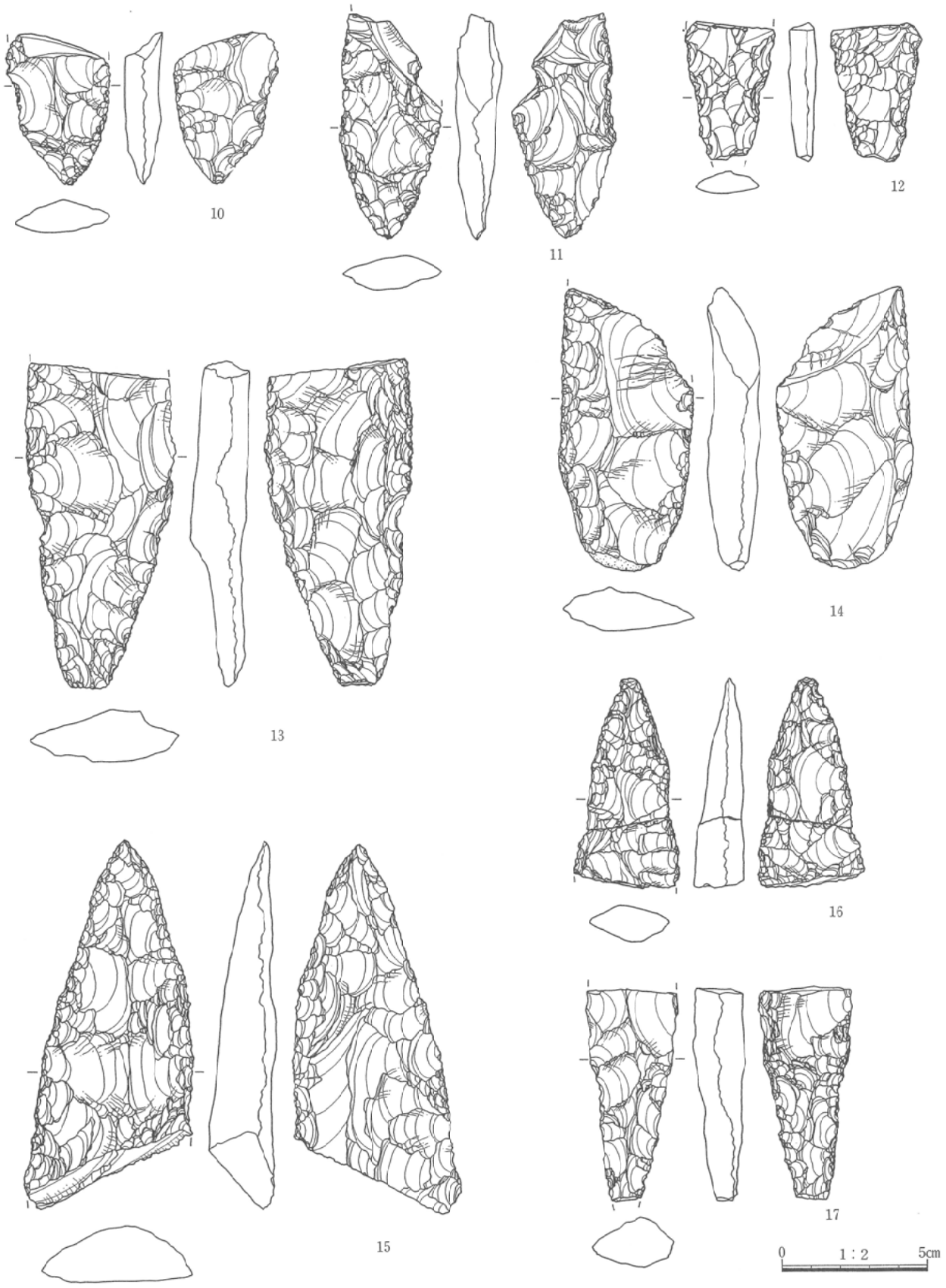
剥片に二次的な加工を施しながらも、刃部を形成するような連続した加工とはなっていないものが、ＳＤ31から１点とＳＧ119から３点の計４点出土している。43は主要剥離面側と背面側の両面全体に調整加工が施され、大きさは全長112.4㎜・最大幅63.8㎜・最大厚30.9㎜を測る木葉形の石器である。44は背面側が周縁部加工で、主要剥離面は右側縁部のみ周縁加工となり、両面に素材面を大きく残す石器で、大きさは全長102.8㎜・最大幅54.3㎜・最大厚26.4㎜を測る。45は幅広の剥片を素材として主要剥離面の周縁部に調整加工が施される石器で、大きさは全長70.8㎜・最大幅82.3㎜・最大厚11.4㎜を測り、両面に火跳ねの痕が見られる。46は背面側が両側縁と先端部に周縁加工が、主要剥離面は周縁に部分的な調整加工が施され、両面に素材面を大きく残す石器で、大きさは全長94.2㎜・最大幅69.4㎜・最大厚22.5㎜を測る。石材は全て珪質頁岩製となる。

砥　石（第31図47）

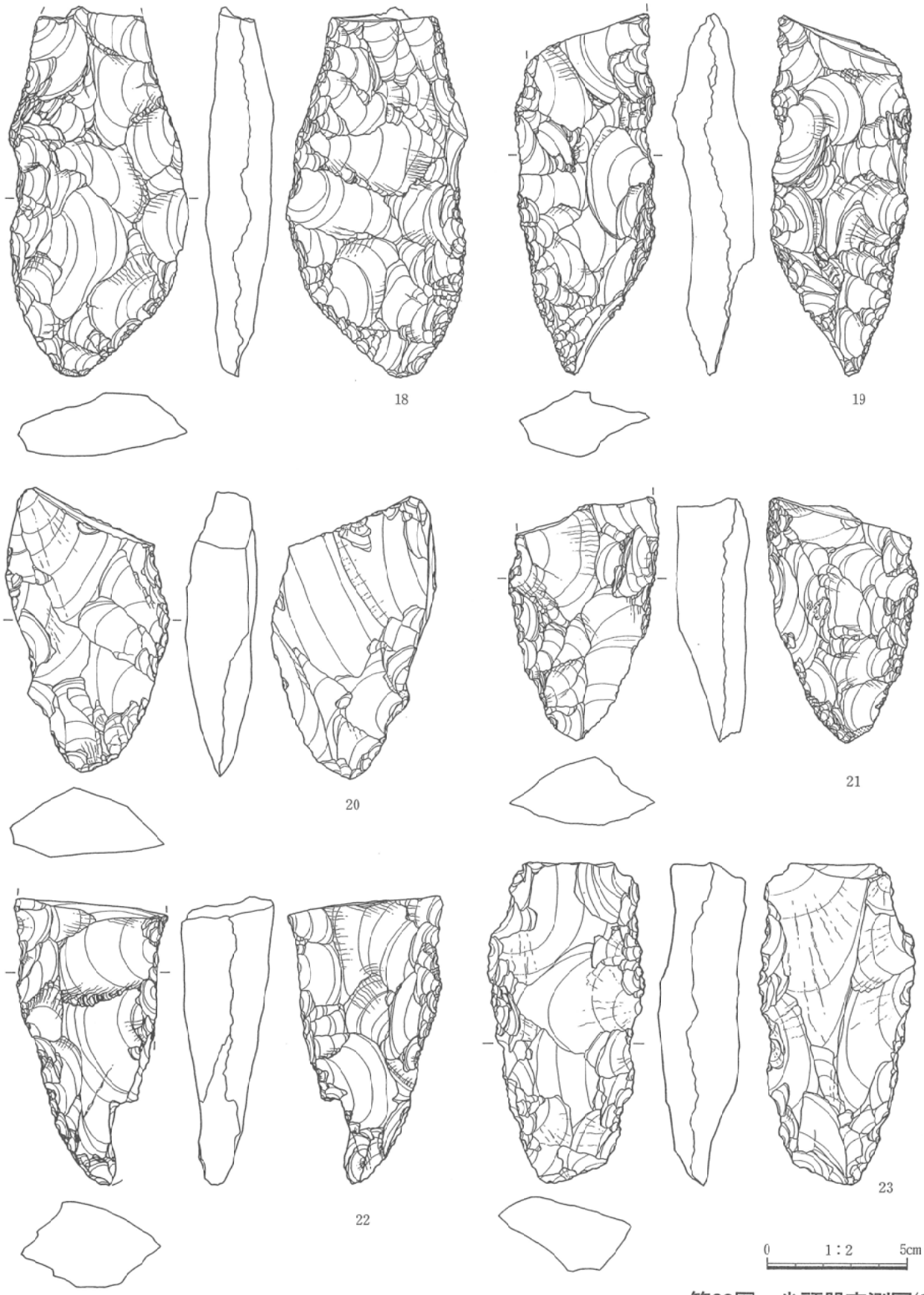
石材は砂岩製で下半部が欠損する資料である。表裏面・側面に擦痕が見られ整形していると考えられる。但し、砥石として使用した面は表面のみで、上部より下部の厚さが薄くなり、下部が使い込まれている様子が伺える。残存部の大きさは、長さ49.2㎜・幅36.2㎜・最大厚10.7㎜を測る。



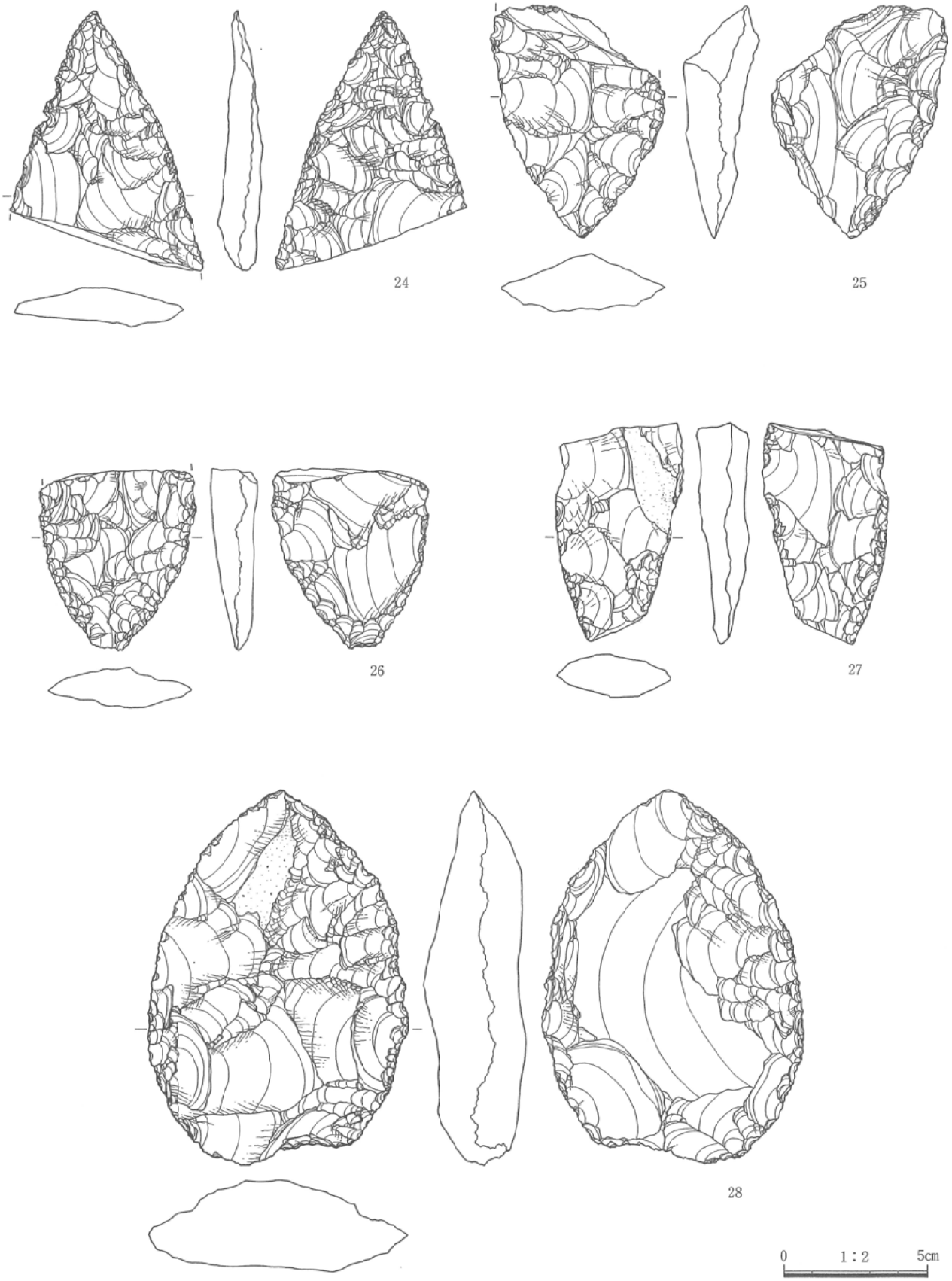
第26図　尖頭器実測図(1)



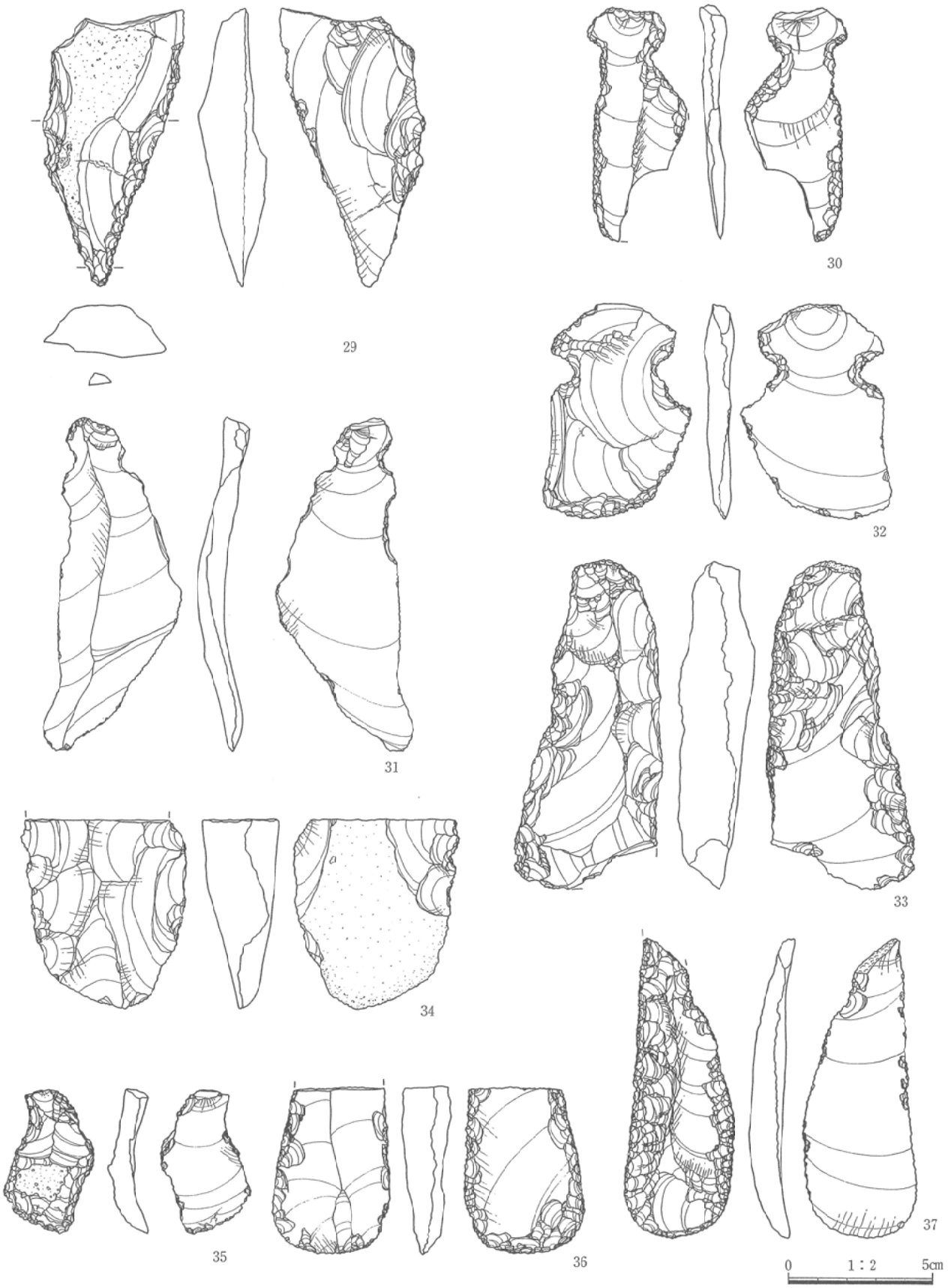
第27図　尖頭器実測図(2)



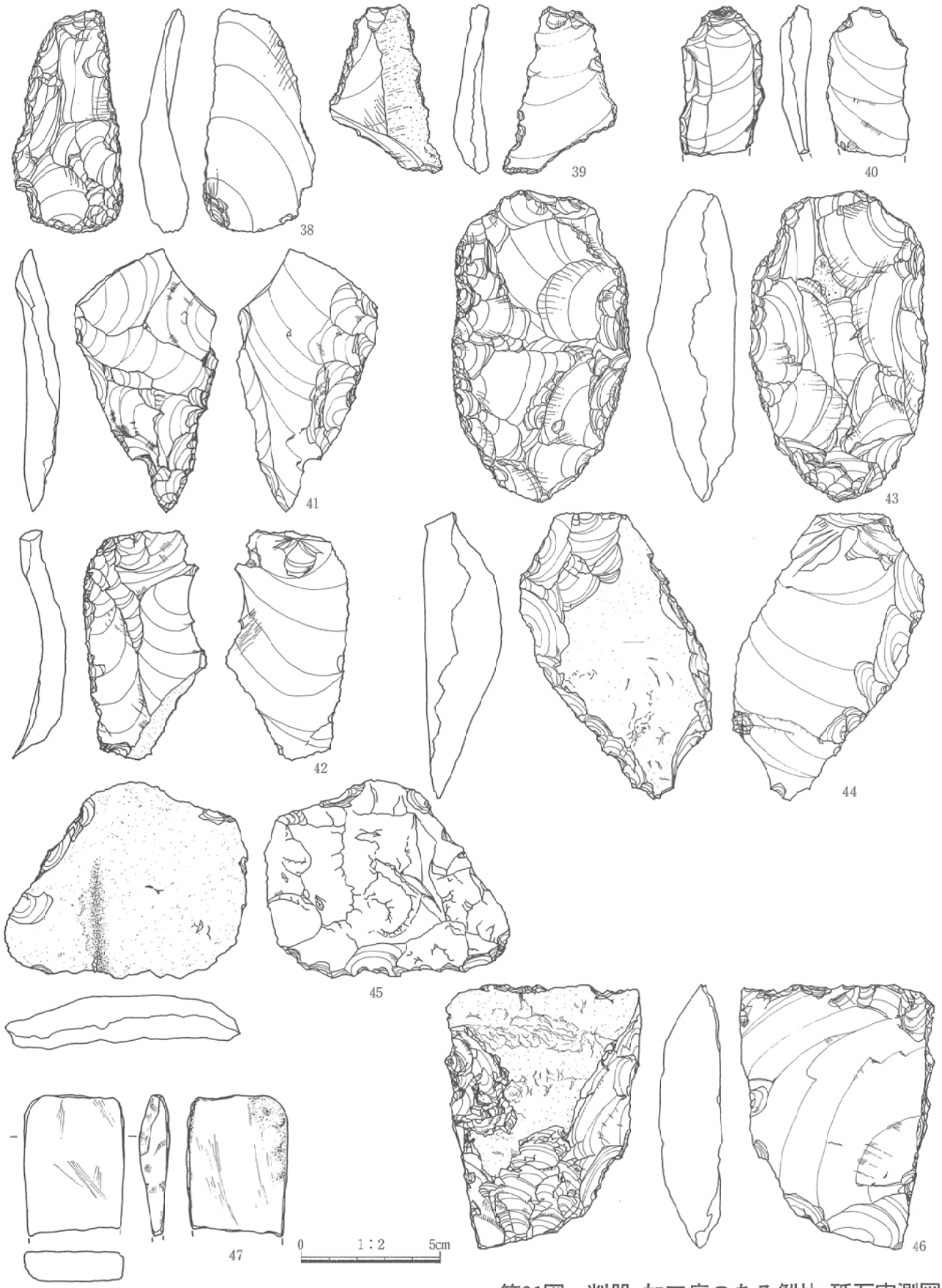
第28図　尖頭器実測図(3)



第29図　尖頭器実測図(4)



第30図　石錐・石匙・石箆・掻器実測図



第31図　削器・加工痕のある剥片・砥石実測図

表一1　土器・土製品観察表

挿図番号	遺物番号	種別	器種	計測値(mm) 口径	底径	器高	器厚	底部切離	調整技法 外面	内面	出土地点登録番号	備考
第19図	1	須恵器	蓋	144		(29)	6		ロクロ	ロクロ	ST25F5 RP12	天井部ナデ、ツマミ欠損
	2	須恵器	蓋			(24)	7		ロクロ	ロクロ	ST25F5 RP19	天井部ナデ
	3	須恵器	蓋	130		36	5		ロクロ	ロクロ	ST25Y RP51	天井部回転ヘラ削り
	4	須恵器	蓋	142		42	6		ロクロ	ロクロ	ST25F4 RP34	天井部回転ヘラ削り
	5	須恵器	蓋	128		33	5		ロクロ	ロクロ	ST25F4 RP28	天井部回転ヘラ削り
	6	須恵器	蓋	139		34	4		ロクロ	ロクロ	ST25Y RP11	天井部回転ヘラ削り
	7	須恵器	蓋	136		33	5		ロクロ	ロクロ	ST25F4 RP10	天井部回転ヘラ削り、内面重ね焼き痕・自然釉
	8	須恵器	蓋	141		27	5		ロクロ	ロクロ	ST25F4 RP33	天井部回転ヘラ削り
	9	須恵器	蓋			(23)	5		ロクロ	ロクロ	ST25Y RP27	天井部回転ヘラ削り、内面重ね焼き痕・釉煙
	10	須恵器	坏	139	86	44	4	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	ST25F8 RP15	外面下部と底部ヘラ削り
	11	須恵器	坏		81	(23)	5	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	ST25F4 RP25	内面に藁の焼成痕、底部・外面下部ヘラ削り
	12	須恵器	坏	130	76	36	5	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	ST25Y RP32	底部ヘラ削り
	13	須恵器	坏	134	(81)	38	4		ロクロ	ロクロ	ST25F4 RP25	二次加熱有り
	14	須恵器	坏		66	(40)	4	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	ST25-EK1 RP45	二次加熱有り
	15	須恵器	双耳坏	108	63	53	4	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	ST25F4 RP9	内外面に自然釉
	16	須恵器	高台付坏	153	(86)	(73)	5	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	ST25Y RP40	
	17	須恵器	高台付坏	139	78	53	6	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	ST25Y RP39	
	18	須恵器	高台付坏		77	(18)	6	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	ST25F	転用硯
	19	須恵器	稜椀	146	76	53	5	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	ST25F5 RP20	生焼け状態
	20	黒色土器	坏	(182)	(80)	(52)	7		ロクロ・削り	ロクロ・ミガキ	ST25F4	内面黒色処理、底部ヘラ削り
第20図	21	土師器	鉢	149	78	123	6		ロクロ	ロクロ	ST25-EL3 RP45	二次加熱有り
	22	土師器	鉢	166	80	152	5		ロクロ・カキ目	ロクロ	ST25F5 RP23	二次加熱有り
	23	土師器	鉢	152	70	128	6		ロクロ・削り	ロクロ・刷毛目	ST25Y	底部ヘラ削り
	24	土師器	鉢	146	87	125	6	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	ST25-EL3 RP48	底部ヘラ削り
	25	土師器	鉢			(97)	5		ロクロ	ロクロ	ST25Y	二次加熱有り
	26	土師器	碗	94	63	62	3		ロクロ	ロクロ・カキ目	ST25F4 RP31	底部ヘラ削り
	27	土師器	甕	200	94	325	5		タタキ・削り	カキ目	ST25F5～Y RP22	内外面ロクロ調整、二次加熱有り
	28	土師器	甕	198	60	335	5		削り	カキ目	ST25F5	二次加熱有り
第21図	29	土師器	甕	192	80	285	5		タタキ・削り	カキ目	ST25-EL3 RP21	外面ロクロ調整、二次加熱有り
	30	土師器	甕	230	(82)	(350)	6		カキ目・削り	刷毛目	ST25-EL3 RP24	外面ロクロ調整、二次加熱有り
	31	土師器	甕	204		(275)	5		カキ目・削り	カキ目	ST25F5	外面ロクロ調整、二次加熱有り
	32	土師器	甕	224		(145)	5		タタキ・削り	カキ目	ST25F5	外面ロクロ調整、二次加熱有り
第22図	33	土師器	甕	205	78	315	5		タタキ・削り	カキ目	ST25-EL3 RP41	内外面ロクロ調整、底部ナデ、二次加熱有り
	34	土師器	甕	210	88	332	6		タタキ・カキ目・削り	カキ目・刷毛目	ST25-EL3 RP36	内外面ロクロ調整、二次加熱有り
	35	土師器	甕			(167)	7		タタキ・削り	カキ目	ST25F	
	36	土師器	甑		(156)	(23)			ナデ	ナデ	ST25F	二次加熱有り
	37	ミニチュア	壺	40	20	54	4		削り		ST25-EK2 RP52	手捏、底部ヘラ削り
	38	ミニチュア			30	(38)	5		ロクロ・削り	ロクロ	ST25F4 RP37	底部ヘラ削り
	39	ミニチュア		55	40	37	4		ロクロ	カキ目・ロクロ	ST25F5 RP18	底部に凹痕
第23図	40	ミニチュア		(32)		(28)	5				ST25-EL3 RP42	手捏、頸部指圧痕
	41	ミニチュア				(23)	4				ST25-EL3 RP43	手捏
	42	ミニチュア			8	(17)	6			ヘラ	ST25Y RP17	外面に指圧痕
	43	ミニチュア	器台?		33	(16)	3				ST25-EL3	手捏
	44	ミニチュア		(25)	25	47	4				ST25-EL3 RP44	手捏、脚付、外面押爪痕
	45	ミニチュア				(38)	6				ST25Y EK2	外面削り痕
	46	土製品	鈴			30	4				ST25F5	手捏
	47	土製品	キノコ形	長 34		茎厚 13					ST25-EL3 RP47	手捏、二次加熱有り
	48	土製品		長 76 幅 22 厚 12					削り		ST25F5	墨の模造品?、内側に深さ3～4mmの溝
	49	土製品	棒	長 (91) 幅 18 厚 15					指圧痕		ST25-EL3	手捏
	50	土製品	玉	径 41					指圧痕		ST25F4	手捏
	51	土製品	玉	径 35					指圧痕		ST25-EL3	手捏
第24図	52	須恵器	壺		96	(33)	8	回転ヘラ	ロクロ		SK74F	
	53	須恵器	鉢	(104)	(84)	51	12	回転糸	ロクロ	ロクロ	14—19G	壺等の下部を再加工カ?
	54	須恵器	甕				9		平行タタキ目	青海波アテ	SK104F	
	55	須恵器	甕				12		平行タタキ目	青海波アテ	SD31F	内外面の頸～肩部にロクロナデ

表一2　陶磁器観察表

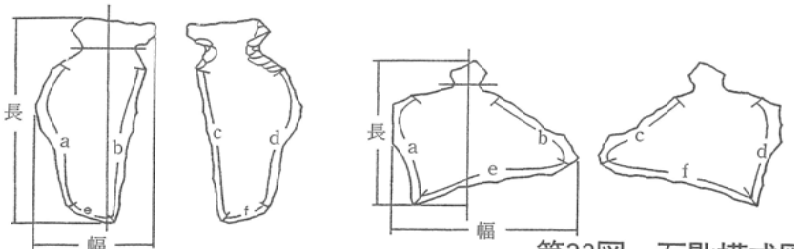
挿図番号	遺物番号	種別	器種	計測値(mm) 口径	底径	器高	器厚	色調 内面	外面	胎土	出土地点登録番号	備考
第24図	56	越前	甕				18	5YR4/2灰褐色	5YR3/2暗赤褐色	10YR5/1褐灰色	SD31F	灰かぶり、断面に漆による接合痕
	57	越前	擂鉢				13	2.5YR赤灰色	2.5YR3/1暗赤灰色	5YR6/2灰褐色	17—24G	内面に卸目
	58	瓷器系	壺		(60)	(28)	8	2.5YR5/2灰赤色	5YR4/2灰褐色	5Y5/1灰色	11—22G	底部ヘラ削り
	59	青磁	碗			(14)	7	10Y6/2オリーブ灰色	10GY7/1明緑灰色	N7/ 灰白色	ST33F	蓮弁文、釉切れ
	60	青磁	碗			(26)	5	2.5GY6/1オリーブ灰色	2.5GY6/1オリーブ灰色	N6/ 灰色	SK74F	蓮弁文
	61	青磁	碗				5	5GY6/1オリーブ灰色	7.5GY6/1緑灰色	N6/ 灰色	SX98F	内面に草花文
	62	青磁	碗		48	(25)	9	7.5GY6/1緑灰色	5GY6/1オリーブ灰色	N6/ 灰色	SK74F	高台内露胎
	63	青磁	碗		67	(36)	10	10GY7/1明緑灰色	10GY7/1明緑灰色	N8/ 灰白色	X—0	高台内輪状に釉掻き取り
	64	青磁	碗		(53)	(14)	6	7.5Y5/3灰オリーブ色	7.5Y5/3灰オリーブ色	7.5Y5/1灰色	18—24G	高台内釉掻き取り
	65	青磁	梅瓶			(42)	8	N6/ 灰色（露体）	7.5GY6/1緑灰色	N6/ 灰色	13—16G	高麗青磁、内面露胎
	66	青白磁	壺or瓶			(35)	10	7.5Y7/1灰白色（露体）	5GY8/1灰白色	7.5Y7/1灰白色	SG119F	蓮弁文、高台内に砂目付着

属性表注
1　大きさ　　長、幅は第32図に示したように、その全長なにびに最大幅である。厚は最大厚とした。折損品については（ ）を付し残存値を示した。
2　最大幅の位置　　全長を二分した場合、その上半部にあるものをA、下半部にあるものをBとし、下端にあるものはB'とした。
3　側縁　　先端部を上に向け、調整加工がより入念な方を上にして置いた時の左側を左、右側を右とし、尖頭部から基部までの側縁の形態を、直線状を示すa、凸弧を描くb、凹弧をc、「く」の字状となるdの四種類に分けて示した。
4　残存部位　　全長を三等分して先端部をA、中央部をB、基部側をCとして、折損品の残っている部分を示した。

第32図　尖頭器模式図

表ー3　尖頭器属性表

No	出土区	石材	大きさ(mm)			重量(g)	最大幅の位置	側縁		残存部位	分類	挿図
			長	幅	厚			左	右			
1	SG119 F	頁岩	87.7	22.7	10.6	17.4	A	b	b		Ia	26—1
2	SD31 F	頁岩	86.9	41.5	20.6	53.8	B	b	b		Ib	26—2
3	SD31 F	頁岩	99.2	47.3	11.1	49.6	B	d	d		Ic	26—3
4	SD31 F	頁岩	(118.1)	38.3	15.1	(61.1)	B	b	d	A・B	IIa	26—4
5	SD31 F	頁岩	(82.8)	37.2	14.0	(45.2)		—	—	B	IIa	26—5
6	SD31 F	頁岩	(70.9)	(41.2)	13.2	(44.3)		—	—	B	IIa	26—6
7	SD31 F	頁岩	(101.3)	41.5	21.2	(68.8)		b	b	B・C	IIa	26—7
8	SD31 F	頁岩	(92.6)	44.0	21.3	(70.7)		d	d	C	IIa	26—8
9	SD31 F	頁岩	(45.5)	(25.1)	(8.4)	(7.4)		—	—	C	IIa	26—9
10	SD31 F	頁岩	(50.7)	(35.8)	(12.2)	(20.4)		d	b	C	IIa	27—10
11	SD31 F	頁岩	(77.9)	(35.7)	(15.3)	(32.1)		b	—	C	IIa	27—11
12	SD31 F	頁岩	(46.9)	(30.8)	(9.3)	(13.6)		—	—	C	IIa	27—12
13	SD31 F	頁岩	(112.7)	52.3	18.7	(94.6)		b	b	B・C	IIa	27—13
14	SD31 F	頁岩	(98.3)	(47.2)	(17.2)	(75.9)		b	b	C	IIa	27—14
15	SD31 F	頁岩	(128.5)	(58.6)	(22.1)	(121.5)		b	b	A	IIb	27—15
16	SD31 F	頁岩	(72.8)	(36.5)	(17.4)	(35.3)		b	d	A	IIb	27—16
17	18—24	頁岩	(73.0)	(31.8)	(17.6)	(34.4)		b	b	C	IIb	27—17
18	SD31 F	頁岩	(130.2)	63.1	21.6	(183.7)	B	b	b	B・C	IIb	28—18
19	SD31 F	頁岩	(128.2)	48.9	24.9	(124.2)		b	d	B・C	IIb	28—19
20	12—15	頁岩	(101.5)	56.7	24.8	(130.6)		b	b	C	IIb	28—20
21	SD31 F	頁岩	(86.8)	(51.8)	(24.2)	(102.1)		b	b	C	IIb	28—21
22	SD31 F	頁岩	(104.3)	(54.4)	(33.9)	(137.4)		b	b	C	IIb	28—22
23	SD31 F	頁岩	(114.0)	54.9	25.6	(172.3)		d	a	B・C	IIb	28—23
24	12—15	頁岩	(76.4)	(69.3)	(12.0)	(52.9)		—	—	A	IIc	29—24
25	SD31 F	頁岩	(92.5)	(60.5)	(23.7)	(77.7)		b	b	C	IId	29—25
26	12—15	頁岩	(63.6)	(54.1)	(14.8)	(48.9)		b	b	C	IIIa	29—26
27	SD31 F	頁岩	(79.2)	(43.6)	(18.1)	(52.5)		d	b	C	IIIb	29—27
28	SG119 F	頁岩	132.1	91.3	33.1	374.3	B	b	b		IIIc	29—28



第33図　石匙模式図

属性表注

1　大きさ　第33図に示したように、長は左右のノッチの最深部を結んだ線に垂線を引き、上端、下端の最も突出する位置から、この垂線に直交する線を引きその距離を計測した。幅はこの垂線を軸として、左右の最も突出する位置から、垂線に平行な線を引き、その距離を計測した。したがって、長、幅ともみかけの大きさとなる。厚は最大厚をとった。

2　加工部位と種類　第33図のように素材の背面を上にして、つまみ部を上方に置いた場合、表面の左側をa、右側をb、裏面の左側をc、右側をd、また、表面の下縁をe、その裏面をfとし、それぞれの部位の加工状況を示した。先端の尖るものは、e、f欄に×を入れ、加工のないものは－とした。加工の種類は1：通常剥離　2：フルーティング様剥離　3：奥行き2㎜前後の微細な剥離の三種類に分け、縁辺の全長にわたるものについてはA、縁辺を三等分した場合、その1/3以上が加工されているものをB、1/3未満のものをCとして、その組み合わせで表記した。また一縁辺が異なる種類の剥離で加工されているものは、上部から順に、3・1・Aのように記した。なお、加工素材の中央部に達する面的な加工が施されているものは、数字を○で囲み、縁辺全体が加工されているが、折損しているものは ' を付した。折損によって縁辺の失われたものは空欄とした。

3　縁辺の状況と平均刃角　　縁辺が直線状となるものをA、凸弧を描くものをB、凹弧を描くものをCとし、たとえば第33図のa・dのように凸弧を二つもつものについてはB・Bというように上部から順に表記した。また刃角についてはa・d・b・c、e・fによって構成される角縁辺について、加工の有無を問わずに2㎝に1ヶ所ずつ、5度ごとにキザミを入れたボール紙を使って計測しその平均値を記した。

表―4　石匙属性表

No	出土区	石材	大きさ(mm)			重量(g)	加工部位と種類						縁辺状況と平均刃角						折損部位	挿図
			長	幅	厚		a	b	c	d	e	f	a・d	刃角	b・c	刃角	e・f	刃角		
1	8－4	頁岩	(81.9)	(36.3)	7.1	(16.9)	1A			3・1A			A	50					右側・末端	30―30
2	SG119 F	頁岩	116.8	45.7	8.8	35.2	—	—	3C	3C	—	—	C・A・C	33	A・A・B	37	B	35		30―31
3	SD31 F	頁岩	74.6	52.8	8.6	33.4	—	3B	3C	—	1A	—	C	52	A	28	B	51		30―32

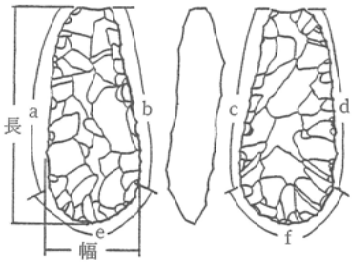
属性表注

1　大きさ　第34図に示したように、石器の軸線を基準として、その全長を長さ、みかけの幅を幅、最大厚を厚の欄に記した。

2　加工部位と種類　原則として素材の主要剥離面側を下に、基部側を上位に置いた時の左側縁をa、右側縁をb、末端をe、この状態から正位で裏返しした時の左側縁をc、右側縁をd、末端をfと区分した。加工の種類は石匙と同じである。なお、完全に両面加工となっていて、素材の背面、主要剥離面の違いがわからないものについては、末端にフルーティングなど入念な加工が施されている方を表面とした。末端の形状でもなお、表・裏の区別がつかないものは、任意に表面側を決定した。

3　縁辺の状況と平均刃角　縁辺の状況については石匙と同様であるが、平均刃角は調整加工のある部分を石匙に準じて記した。

4　残存部位　完形品は空欄、上部が残存しているものはA、中間部資料はB、末端部資料はCと記した。



第34図　石箆模式図

表―5　石箆属性表

No	出土区	石材	大きさ(mm)			重量(g)	加工部位と種類						縁辺状況と平均刃角						残存部位	挿図
			長	幅	厚		a	b	c	d	e	f	a・d	刃角	b・c	刃角	e・f	刃角		
1	X―0	頁岩	(115.1)	(50.4)	24.3	(134.9)	1A	①A	①B	1A			B・B	72	A	77			A＋B	30―33
2	SD31 F	凝灰岩	(67.7)	59.1	22.0	(77.4)	①A	①A	1B'	1B'	①A	—	A	69	B	66	B	60	C	30―34

属性表注

1　大きさ　素材の背面側を表、主要剥離面側を裏とし、基部側を上位に置いた時の全長を長、最大幅を幅、最大厚を厚に記した。

2　加工部位と種類　1と同様、素材の背面側を表、基部側を上位に置いた時の左側縁をa、右側縁をb、末端をeとし、c、d、fは、石匙、石箆と同様である。また、その記載方法も石匙に準じた。

3　残存部位　完形品は空欄、上部が残っているものはA、中間部資料はB、末端部資料はCと記した。

表―6　掻器・削器属性表

No	出土区	石材	大きさ(mm)			重量(g)	加工部位と種類						縁辺状況と平均刃角						残存部位	挿図
			長	幅	厚		a	b	c	d	e	f	a・d	刃角	b・c	刃角	e・f	刃角		
1	SD31 F	頁岩	50.4	30.5	9.0	12.5	1A	1A	—	—	1A	3C	C・A	53	C・C	65	B	62		30―35
2	11―12	頁岩	(58.6)	41.6	11.8	(32.1)	1A'	1B'	1A'	1A'	1B	1A	A	63	A	51	B	54	C	30―36
3	8－5	頁岩	(104.9)	39.5	11.0	(43.9)	①A'	1A'	—	3C'	1A	—	C	51	B	42	B	42	B＋C	30―37
1	18―24	頁岩	79.8	40.4	10.6	33.0	①A	①A	1C	—	3・1A	—	B・B・C	58	C	55	B	52		31―38
2	SG119F	頁岩	61.1	39.3	10.4	17.7	1A	3B	3C	—	1B	3C	A	55	A・C	65	C・C	78		31―39
3	12―14	頁岩	(54.9)	30.5	11.2	(15.0)	1C'	1・3B'	—	—			C・A	55	B	60			A＋B	31―40
4	SD31 F	頁岩	94.8	51.8	11.4	48.1	①A	①A	—	①B	×	×	A・C	57	C・C・A	71	×	—		31―41
5	1トレンチ	頁岩	82.8	44.6	11.1	33.6	1A	—	—	—	3C	—	B	45	C・C	56	A	36		31―42

4　調査のまとめ

今回の調査は、東北横断自動車道酒田線建設工事に伴う、高松II遺跡の発掘調査である。調査によって得られた成果を述べる。

高松II遺跡は山形県寒河江市大字柴橋字高松に所在し、最上川左岸の河岸段丘に立地する。今回の発掘調査は、東西約60m・南北約250mの遺跡範囲内の遺跡にかかる事業実施部分約6,000㎡を対象に実施した。その結果、遺跡の性格は縄文時代の石器包蔵地、平安時代の集落跡、中世の集落跡であることが明らかになった。出土遺物は整理箱にして45箱出土した。以下に各時代の遺構・遺物について要約する。

1）縄文時代の石器について

石器は、剝片素材となる46点のtool・加工痕のある石器の他に、多量の石器製作に関わる剝片・砕片・原石が出土した。しかし、本遺跡では縄文土器の出土は無く、縄文時代のものと考えられる遺構も検出されなかったことと、その出土の大半がＳＤ31溝跡の上層や、Ｃ区包含層（水田盤土）であることから他地域からの二次的混入と推測される。剝片・砕片が多く出土したＣ区包含層の下層から中世の遺物を含む遺構が検出され、ＳＤ31の下層から陶器や土師器が出土していることからも、それが伺える。但し、ＳＤ31溝跡上層の約２m四方から出土した尖頭器群のまとまりは異常であり、縄文時代の土坑群が後世に壊された可能性も残しておきたい。近年、これに似た尖頭器を特徴とする石器群は、西川町のお仲間林遺跡や山居遺跡からも出土しており、縄文時代中期大木8a式～10式の土器も共伴している。３遺跡とも尖頭器の作り方が粗雑で、石匙や石篦が一緒に出土していることなどから必ずしも中期旧石器時代に限定することなく、縄文時代中期に属する可能性を含めて今後検討をしていきたい。

石器の所属時期については共伴する縄文土器が無いため特定できない。今後、周辺の最上川沿いに分布する縄文時代の遺跡との関係をふまえた、石器自体のもつ属性の検討による時期認定が課題となる。

2）平安時代の遺構と遺物について

遺構はＢ区西側に分布する、竪穴住居１棟（ＳＴ25）と溝１条（ＳＤ31）が出土遺物から当該期にあたると考えられ、さらにＢ区西側の調査区外に広がると推測される。

住居の時期は、出土土器から概ね９世紀前半と考えられる。また、本住居からは須恵器・土師器の供膳形態・煮沸形態の土器以外に、ミニチュア土器と土製品が計15点出土し、当該期の通常の住居跡の出土遺物とは異なる様相を示す。類例はあまりないが、この住居は祭祀に関係する住居であると考えられる。

溝跡は、集落を区画するためのものと推測され、同様の溝が本遺跡南東に位置する落衣長者屋敷遺跡や高瀬山遺跡II期からも検出されている。明確な時期を確定できる古代の遺物の出土はなかったが、須恵器と土師器の甕片が覆土と底面付近から出土していることを考慮すると、住居と同時期には利用されていたと考えられる。

遺物の大半はＳＴ25竪穴住居から出土し、その多くはカマド付近に分布する。特に、土師器鉢・甕は二次加熱を受けているものがほとんどを占めることから、煮炊きに使用されていたことが伺える。また、須恵器蓋の点数に比較して、それと対になる高台付坏の点数がやや少ないという傾向を示している。須恵器坏•高台付坏は、「平野山古窯跡群第12地点遺跡第２次発掘調査報告書」の灰原Ｐブロック出土のＡ―５類及びＢ―１・２類に類似するが、法量が小さく、体部下半と底部の境がやや丸みをもつものが特徴である。この種の土器群は天童市押切遺跡ＳＴ７住居跡にもみられ、ヘラ切り離しの坏類の中では新しい頃のものと考えられる。これらのことから、遺物の時期は９世紀前半（第１四半期）頃と推定しておきたい。

そして、特徴的なものはミニチュア土器と土製品の存在である。共伴する土器から、その時期は特定されるが何に使用されたのか不明である。現時点では、祭祀もしくは呪術関係に使われていたとしか考えられない。しかし、未調査区はあるものの本遺跡で唯一の当該期の住居跡であり、１棟のみ独立して存在しているという特異性も考慮し、他の出土遺物も含めてさらなる検討が必要である。

３）中世の遺構と遺物について

Ｂ区東側・Ｃ区中央及び北側に検出された遺構が当該期に比定されると考えられる。Ａ区の遺構は、ＳＤ22溝跡の青磁片の他は、出土遺物が無いことから断定はできないが検出状況と覆土の状況から同時期と推測される。従って、竪穴住居４棟・掘立柱建物跡２棟・井戸２基・河川跡１条・溝５条・土坑16基などが中世の遺構と考えられる。集落は、Ｃ区東側の調査区外にに広がると推測される。

竪穴住居は、遺物を伴うものはＳＴ33のみであるが、本県新庄市の乱馬堂遺跡で検出されている中世の竪穴住居と同様に、部分的に張り出し部をもち、壁際に柱穴を有し、遺物の出土が極めて少ないなどの特徴から、中世のものと考えられる。時期は、ＳＴ33・ＳＫ74他から出土した陶磁器や木製品から、概ね14世紀後半から15世紀初頭に属すると推測される。中世の住居形態を考える上で貴重な資料である。また、ＳＤ31は、越前焼の甕が覆土中より出土していることから平安時代から中世までの長い期間利用されていたことが伺える。

遺物について、陶磁器では、越前焼や瓷器系の国産陶器や中国は竜泉窯所産の青磁や朝鮮半島産で、李朝時代のものと考えられる高麗青磁などが十点余出土している。これらは通常、楯跡や館跡からその出土がみられるもので、集落からの出土は極めて珍しいといえる。特に輸入磁器の多さは特徴的である。

木製品は全てＣ区から出土し、漆器３点・ワッパの底・下駄がある。漆器皿には、内面に漆紙が付着しているものがあるが、文字等は確認できなかった。

本県で類例が少ないこれら中世の集落跡の資料は寒河江市を含む村山地域の中世を考えるうえで貴重なものとなる。ただし、青磁・青白磁・漆器など通常の集落ではほとんどみられない遺物がどのように流通してきたのか、本遺跡の南東700ｍに位置する落衣長者屋敷遺跡からも同時期の青磁が出土していることから、周辺の遺跡を含めて今後の検討が必要である。

Ⅴ　高松Ⅲ遺跡

1　遺構と遺物の分布

今回の発掘調査で検出された主な遺構は、竪穴住居跡・掘立柱建物跡・井戸跡・土坑・溝跡・落ち込み状遺構等である。分布状況は、調査区西半は掘立柱建物跡１棟と柱穴のみに対し、東半に竪穴住居跡・井戸跡等の遺構が集中する傾向が見られる。但し、東側でも北側に主要な遺構が密集し、南側は落ち込み状遺構が３基と希薄になる。

遺物は、整理箱22箱出土した。縄文時代の石器は、調査区西側８・９―94・95Ｇで出土した他、剝片が西端の礫層に混在していた。但し、これらは明らかな遺構の覆土からは出土せず、縄文土器の共伴が無いことから二次的混入と考えられる。奈良・平安時代の土師器・須恵器は北側の遺構が集中している区域から多量の出土があり、特にＳＸ18・32からは、土器捨て場の様相を示す出土状況がみられた。他には、南側の落ち込み状遺構及び、その付近から少量の出土があったのみである。また、木柱と考えられる大形の木製品が１点、ＳＥ３から出土した。

以上から、主要な遺構・遺物は調査区北東部に密集しているが、今年度の調査区は遺跡の東端にあたることを考慮すると、集落の中心は調査区西側にあると推測される。

2　検出遺構

今回の調査で検出された遺構は、竪穴住居跡１棟・掘立柱建物跡１棟・井戸跡１基・柵列跡１条・溝跡３条・土坑５基・性格不明遺構・柱穴などである。遺構は東側に集中し、西側は希薄になる傾向が見られた。また、柱穴は調査区中央部に数多く分布している。遺構の時期は概ね奈良・平安時代と推測される。以下に主な遺構の概略を述べる。

(1)竪穴住居跡

ＳＴ１住居跡（第36図　図版29）

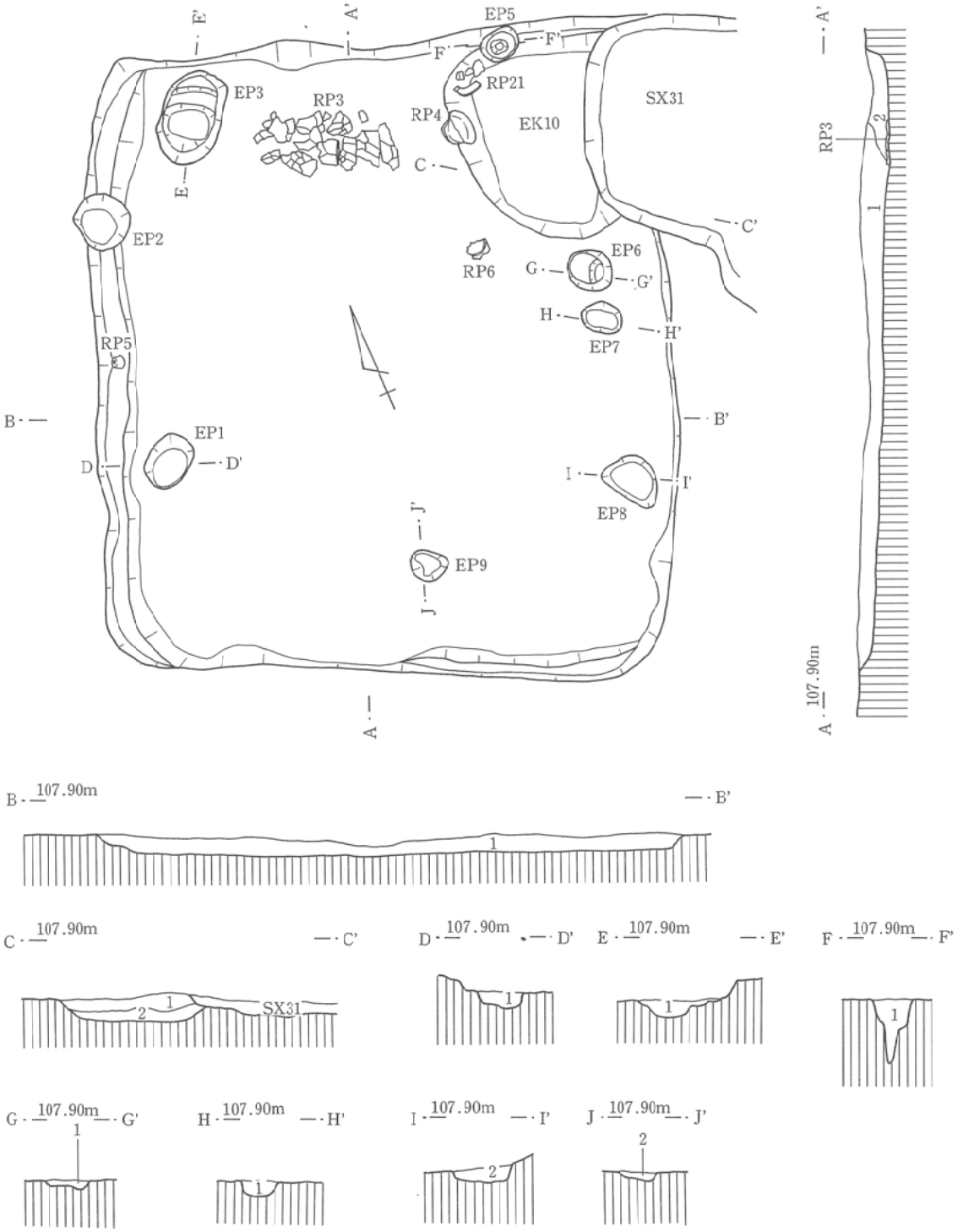
調査区北東端９―95Ｇで検出され、ＳＸ31に北東隅を切られる。平面プランは長辺3.0m・短辺2.7mの方形を呈し、床面までの深さは確認面から約８～12cmを測る。長辺の主軸方位はＮ―23°50′―Ｅを測る。壁は北壁の一部と西壁に段を形成するが、概ね緩やかに立ち上がり、床面は堅くしまり平坦である。

内部施設はカマドや炉は無く、長径90cm・短径60cm以上、深さ12cmを測る貯蔵穴（ＥＫ10）が北東角に１基確認されたのみである。ＥＫ10は西側部分をＳＸ31により切られている。そして、柱穴は床面に６基（ＥＰ１・３・６～９）と西壁に１基（ＥＰ２）、北壁に１基（ＥＰ５）の計８基検出された。

遺物は、覆土及び床面から、須恵器の高台付坏・坏、土師器の甕、紡錘車が、ＥＫ10壁際から須恵器の高台付坏・坏が出土した。土師器甕は潰れた様相で出土し、須恵器坏には二次加熱が見られるものもある。

住居跡の時期は、出土した土器から８世紀末葉頃と考えられる。

第35図　高松III遺跡遺構配置図(S＝1：300)



ST1
1．2.5YR2/1黒色粘土（赤褐色と褐灰色の粘土を点状に含み、炭化粒を少量含む。しまる。）
2．10YR4/2灰黄色粘土（赤褐色シルトを帯状に含み、炭化粒を点状に微量含む。しまる。）
EP1・3・5～9
1．10YR2/1黒色シルト質粘土（黄褐色シルト質粘土を帯状に含む。）
2．10YR2/1黒色砂混じり粘土（にぶい黄褐色粘土を粒状に含む。）
EK10
1．7.5YR3/1黒褐色粘土（黄褐色粘土を斑状に含む。かたくしまる。）
2．10YR2/1黒色粘土（黄褐色と黄橙色の粘土を点状に含む。しまる。）

0　1m
1：30

第36図　ST１住居跡

（２）掘立柱建物跡

ＳＢ20掘立柱建物跡（第37図　図版30）

調査区西角、５・６―98・99Ｇで検出された東西棟で、桁行２間以上、梁行２間の建物跡と推測されるが、西側の柱穴が調査区外となるため確認出来なかった。主軸方向はＮ―85°―Ｗとなる。建物の規模は桁行2.5ｍ以上、梁行3.0ｍで、柱間距離は、桁行が西側から約140cm、160cmの間隔となり、梁行は約180cmの等間隔となる。柱穴のプランは、径20～35cmの円形または楕円形を呈し、確認面からの深さは約10～15cmを測る。

（３）井戸跡

ＳＥ３井戸跡（第37図　図版30）

調査区東側、８―93Ｇで検出された。平面プランは長径230cm、短径140cmの不整円形を呈する。確認面からの深さ約1.1ｍを測り、断面形は開口部が広く、堀り方途中で若干の段を形成し、底面が平坦になる形態の素掘り井戸と考えられ、調査中も水が湧き出ていた。

覆土は大きく３層に分けられ、上層は黒色粘質シルトで、中層が砂利・砂を多く混入する黒褐色の粘土質シルト、そして下層は砂利を含む灰色砂となる。井戸の中央から、井戸を廃棄する際に置かれたと考えられる直径50cmを測り底部に加工痕が見られる柱根が検出されている。遺物は、柱根・板材の他に須恵器蓋・坏の破片が各１点出土した。

この井戸の廃絶時期は、須恵器片から８世紀末葉頃と推測される。

（４）土　坑（第38図　図版31）

ＳＫ２土坑

調査区東側、９―94Ｇで検出され、ＳＸ31を切る。平面プランは長径1.9ｍ・短径1.3ｍの不整楕円形を呈し、確認面からの深さは20cmを測る。断面形は堀り方途中で段を形成し、中央部が深くなる形態となる。底面は平坦となる。覆土は１層のみで黒色粘土となる。

遺物は須恵器蓋の破片が１点出土している。

ＳＫ４土坑

調査区東側、７―93Ｇで検出された。平面プランは長辺1.8ｍ・短辺1.2ｍを測る台形状を呈し、確認面からの深さは６cmと浅い。断面形は緩やかに立ち上がり底面は平坦となる。覆土は１層のみで黒褐色の粘質シルトとなる。

遺物は土師器鉢の体部破片が１点出土し、ＳＤ11から出土した土師器鉢底部と接合した。

ＳＫ７土坑

調査区東側、７―94Ｇで検出された。平面プランは長径1.0ｍ・短径0.5ｍを測る不整楕円形を呈し、確認面からの深さは８cmの小規模な土坑である。断面形は緩やかに立ち上がり、底面は凹凸があり北東側が深くなる。覆土は１層のみで黒褐色の粘質シルトとなる。

ＳＫ21土坑

調査区北東隅、11―94Ｇの礫層が堆積する区画の北側で検出された。平面プランは径95cmを測る円形を呈する。断面形は緩やかに立ち上がり底面はほぼ平坦となる逆台形状となる。覆土は２層に分かれ、第２層には多量に炭化物を混入する。

ＳＫ32土坑

調査区北東側、10―94・95Ｇで検出された。平面プランは長径1.9m・短径1.6mの不整円形を呈し、確認面からの深さは25cmを測る。断面形は緩やかに立ち上がり、逆台形状を呈し底面は平坦となる。遺物は、須恵器甕の破片と土師器の鉢・甕・鍋が出土し、土師器鉢・甕には二次加熱を受けたものも見られる。

（５）柵列跡

ＳＡ８柵列跡（第39図　図版32）

調査区北東側、８・９―93～96Ｇで検出された、調査区北東端を楕円を描くように巡る溝状の柵列跡である。南西側の一部分が途切れ、幅15～20cmで長さ12.9m、確認面からの深さ10～30cmを測る。南側でＳＤ12に切られる。また、北側は調査区外に延びると推測され、東側は礫層で検出されなかった。断面形は北側から南側は逆三角形をなし、西側から東側は逆台形状を呈する。数ヶ所に板状のものを刺した痕跡が認められる。ＳＴ１他の遺構を囲むように巡ることから、これらの遺構を区画するための柵とも考えられるが、遺物の出土が無いため詳細は不明である。

（６）溝　跡（第40図　図版32）

ＳＤ10溝跡

調査区東側、７・８―92・93Ｇで検出された南北方向の溝跡である。幅60～80cm・長さ８m、確認面からの深さ20cmを測る。断面形は壁面が緩やかに立ち上がり、底面が平坦となる逆台形状を呈する。

ＳＤ11溝跡

調査区東側、７―93Ｇで検出された東西方向の溝跡である。幅40～60cm・長さ2.2m、確認面からの深さ20cmを測る。断面形は壁面が緩やかに立ち上がり、底面が平坦となる逆台形状を呈する。遺物は土師器鉢の底部が１点出土し、ＳＫ４から出土した土師器鉢体部片と接合した。

ＳＤ12溝跡

調査区東側、８―94Ｇで検出され、ＳＡ８を切る南北方向の溝跡である。幅30cm・長さ3.8m、確認面からの深さ10cmを測る。断面形は壁面が緩やかに立ち上がり、底面は東側が若干深くなる様相を示す。

（７）性格不明遺構（第40～42図　図版33～35）

今回の調査では、20基以上の落ち込み状の遺構が検出された。それらは、平面形や規模などから土坑や溝跡に区分できず、覆土・床面に遺物を含むものもあることから性格不明遺構として登録した。主な性格不明遺構の概略を述べる。

ＳＸ15性格不明遺構

調査区南東端、５・６―91・92ＧでＳＸ14西側に検出された、北東から南西に長い落ち込み

である。平面プランは幅1.4～1.8m・長さ6.4m以上の不整形を呈し、西側の調査区外にさらに延びると推測される。確認面からの深さは10～25cmを測り、南西半部で深くなる。

遺物は覆土中から須恵器の蓋が、床面から須恵器の坏が出土した。

ＳＸ16性格不明遺構

調査区５・６―92・93ＧでＳＸ15西側に検出された。平面プランは長径3.8m・短径3.4mの不整楕円形を呈し、確認面からの深さ10～20cmを測る。土師器・須恵器の甕破片が出土した。

ＳＸ14性格不明遺構

調査区南東端、５～７―90～92ＧでＳＸ15東側に検出された。幅2.2～6.2m・長さ11m以上を測る大規模な落ち込みで、西側の調査区外にさらに延びると考えられる。確認面からの深さは浅い部分で10cm、最深部で50cmを測る。平面プランは不整長方形で、底面も一定せず凹凸が部分的に存在する。覆土は８層に分けられ、第３層に他の層がブロック又は帯状に混入する。

遺物は、覆土中及び床面から須恵器の蓋・高台付坏・稜碗・甕、土師器の鉢・甕・堝など10点余りが出土し、須恵器蓋には完形品が１点含まれる。

ＳＸ17性格不明遺構

調査区中央、６・７―94ＧでＳＸ19西側に検出された。幅0.3～2.0m・長さ４mを測る不整形の落ち込みである。確認面からの深さ10cmを測る。

ＳＸ19性格不明遺構

調査区中央、７―94ＧでＳＸ17東側に検出された。幅40～60cm・長さ２mを測る南北に長い溝状の落ち込みである。確認面からの深さ10cmを測る。

ＳＸ18性格不明遺構

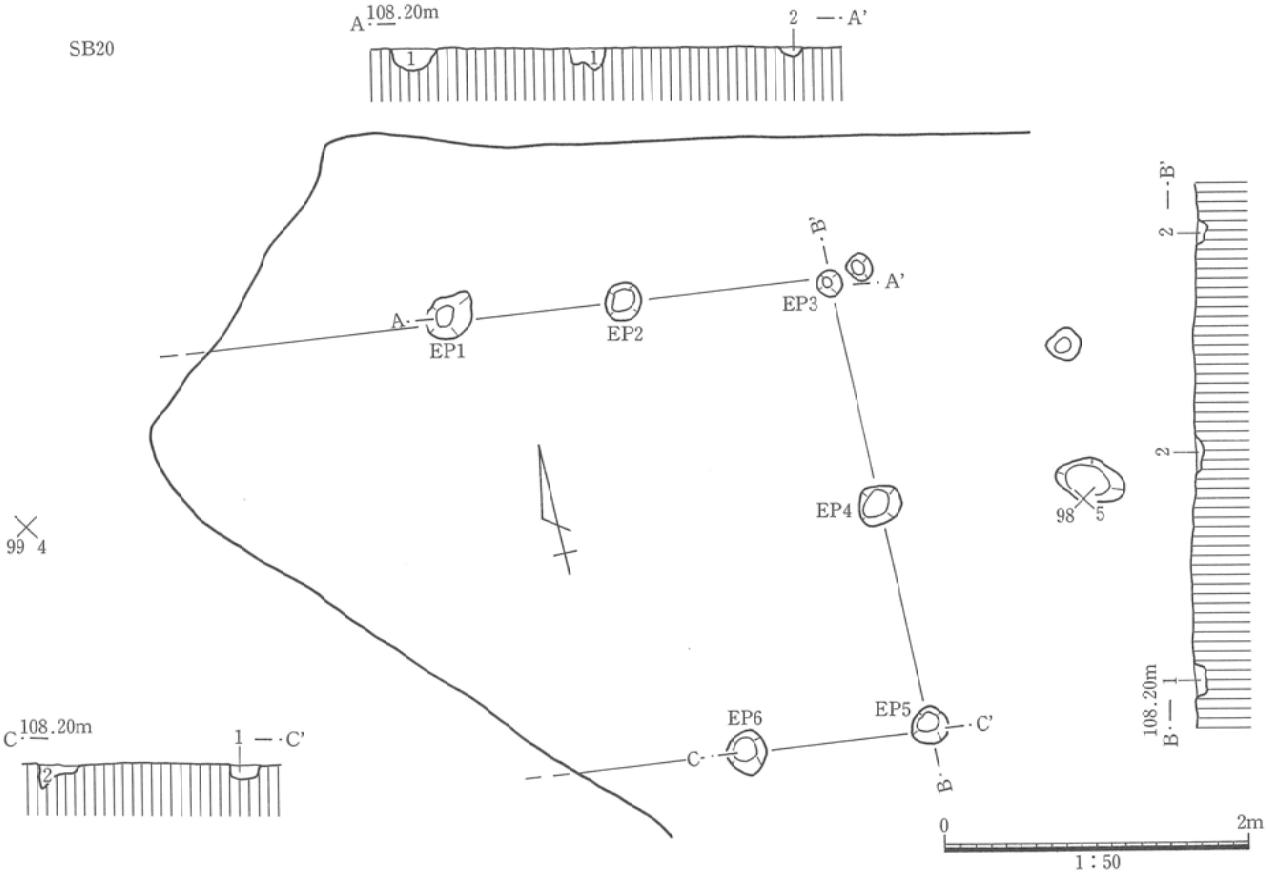
調査区北東隅、９・10―95ＧでＳＴ１北東側に検出された。南側の一部をＳＫ32に切られる落ち込み状の遺構である。平面プランは長径4.8m・短径2.2mの不整楕円形を呈し、確認面からの深さ20～30cmを測る。覆土中に多量の土器を含み、土器捨て場の様相を示す落ち込みである。覆土は３層に分かれるが、第１層の黒色粘土に第２・３層のオリーブ褐色粘土と黄灰色粘土がブロック状に混入する堆積となる。遺物は、覆土中から須恵器の坏・高台付坏・稜碗・壷・甕、土師器の鉢・甕・堝が破片を含めて40点以上の出土があり、生焼け状態の須恵器稜碗や二次加熱を受けた土師器鉢・甕・堝も含まれる。

ＳＸ30性格不明遺構

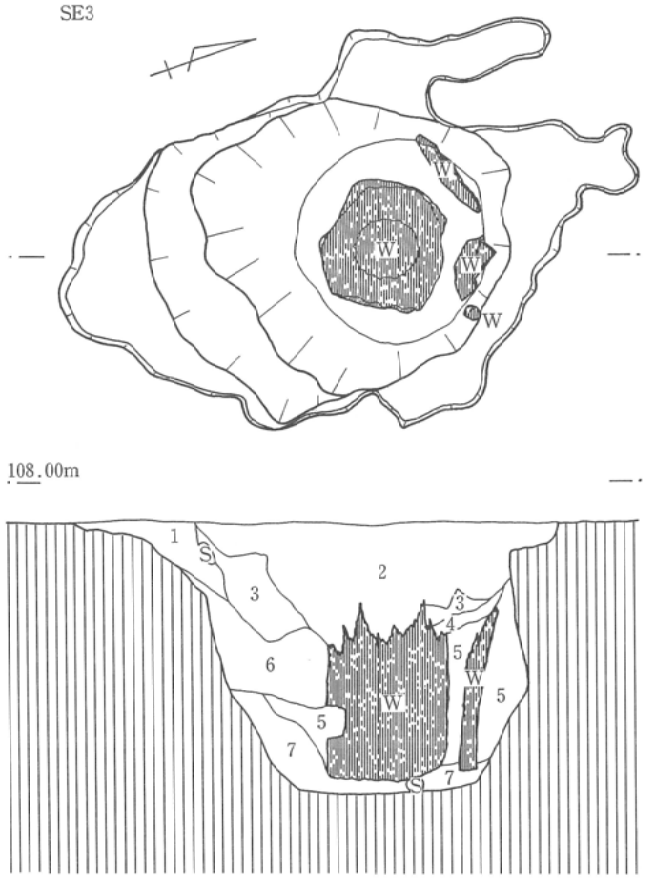
調査区北東端、９・10―95・96Ｇで検出された。西端をＳＡ８に切られ、幅0.6～１m・長さ4.8mを測る東西に長い溝状の落ち込みである。確認面からの深さ30cmを測る。

ＳＸ31性格不明遺構

調査区北東側、９・10―94・95ＧでＳＸ18南側に検出された。西側でＳＴ１を切り、北東側をＳＫ32、南側でＳＫ２に切られる。平面プランは幅1.8～3.0m・長さ3.0mを測る不整形を呈する。確認面からの深さ10～20cmを測る。

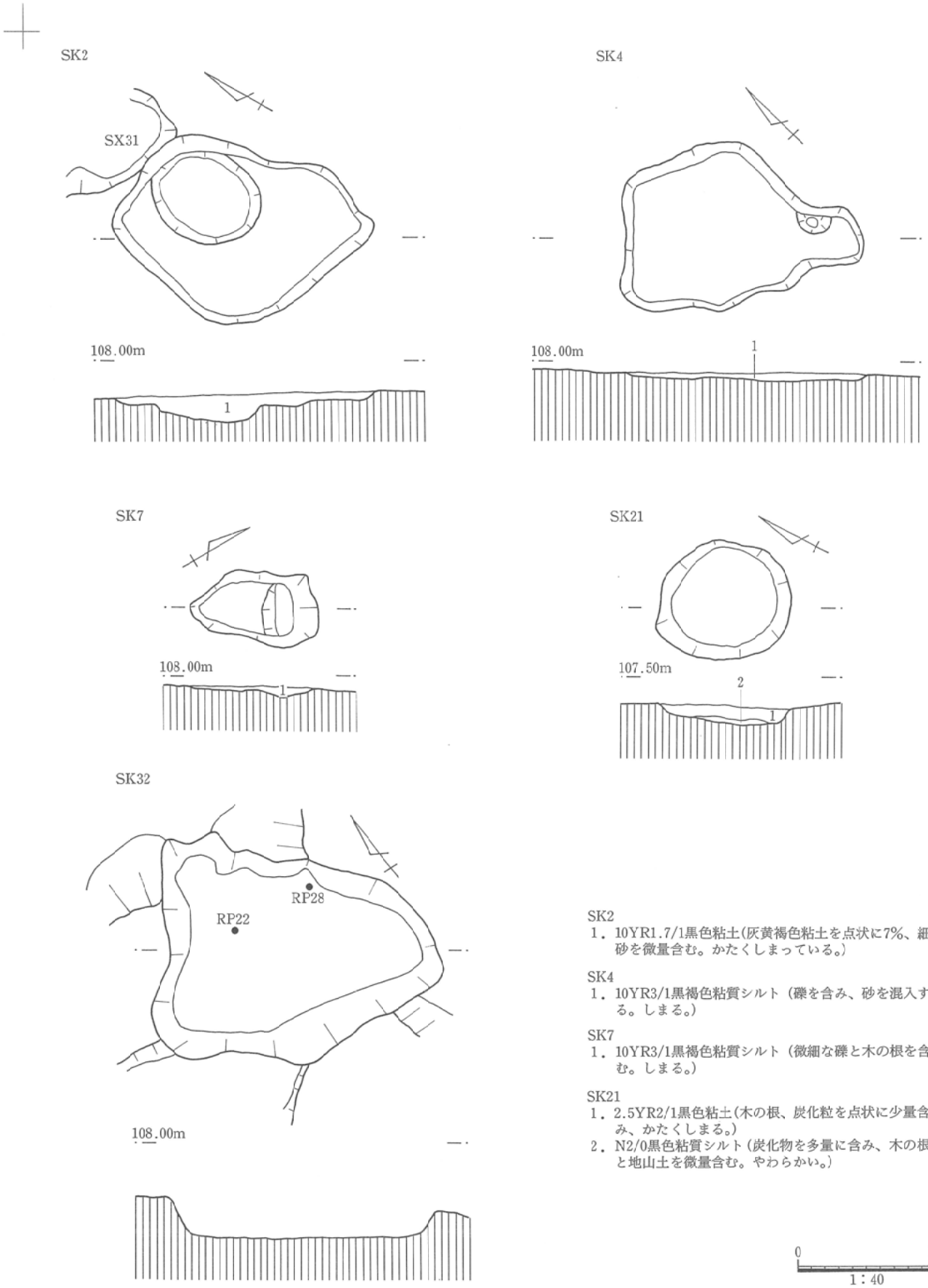


SB20
1．10YR2/2黒褐色シルト質粘土（暗褐色シルト質粘土とにぶい黄褐色粘質シルトをブロック状に含む。）
2．10YR2/2黒褐色シルト質粘土（暗褐色シルト質粘土を粒状に少量含む。）



SE3
1．5YR1.7/1黒色粘質シルト（明赤褐色シルトを微量含む。しまる。）
2．10YR2/1黒色粘質シルト（明赤褐色シルトを点状に、細礫を上層に含む。やわらかい。）
3．2.5YR3/1黒褐色粘質シルト（砂利を多量に含む。粘質が強く、やわらかいがしまる。）
4．2.5YR3/1黒褐色砂質シルト（多量の砂利を含み。しまっている。）
5．2.5YR2/1黒色粘土質シルト（砂、砂利を多く含む。やわらかい。）
6．5Y2/1黒色粘土質シルト（砂、砂利を少量含む。やわらかい。）
7．10YR5/1灰色砂（砂利を多く含む。しまっているが崩れやすい。）

第37図　SB20掘立柱建物跡・SE 3 井戸跡



SK2
1．10YR1.7/1黒色粘土(灰黄褐色粘土を点状に7%、細砂を微量含む。かたくしまっている。)

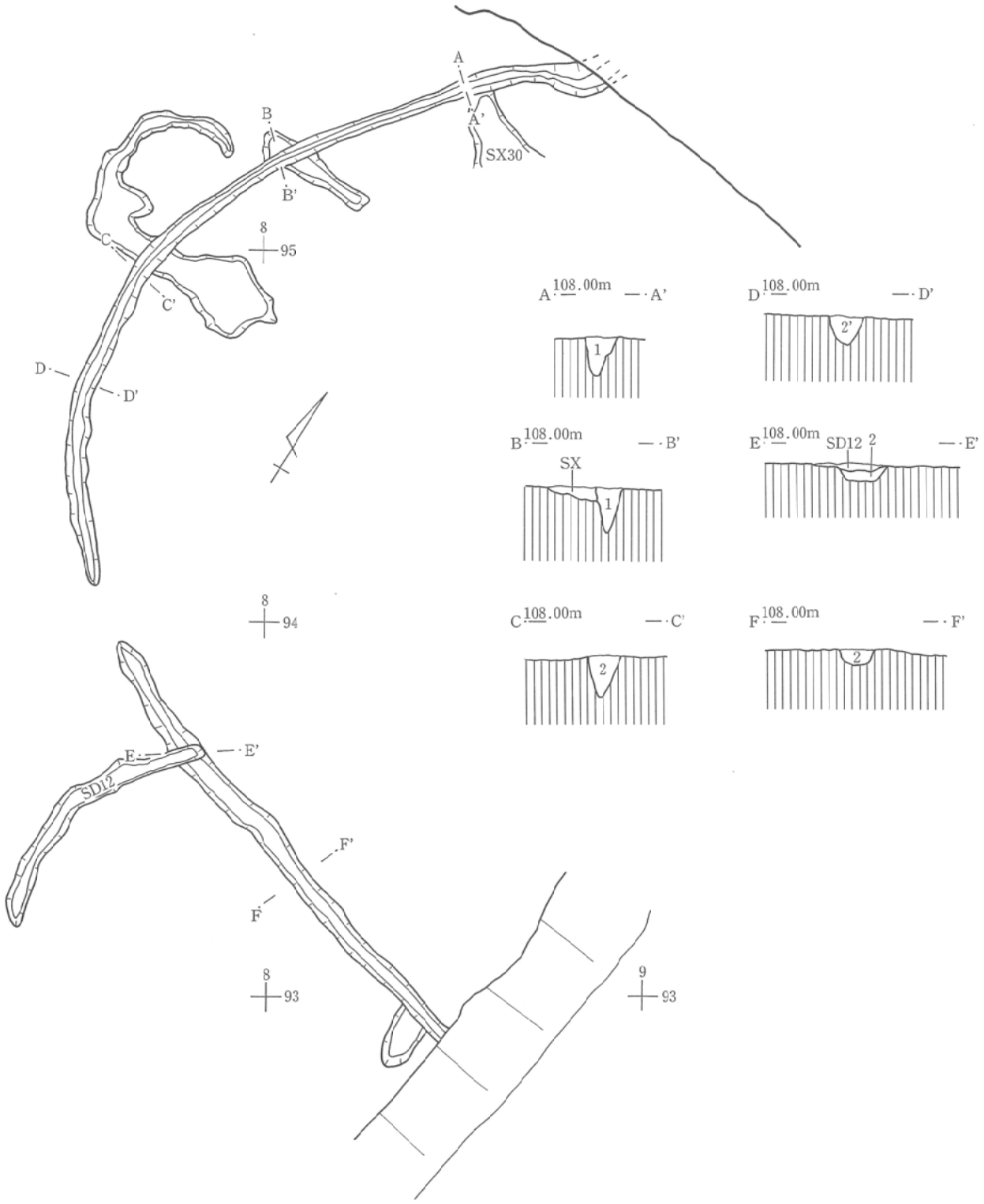
SK4
1．10YR3/1黒褐色粘質シルト（礫を含み、砂を混入する。しまる。)

SK7
1．10YR3/1黒褐色粘質シルト（微細な礫と木の根を含む。しまる。)

SK21
1．2.5YR2/1黒色粘土(木の根、炭化粒を点状に少量含み、かたくしまる。)
2．N2/0黒色粘質シルト(炭化物を多量に含み、木の根と地山土を微量含む。やわらかい。)

0　1m
1：40

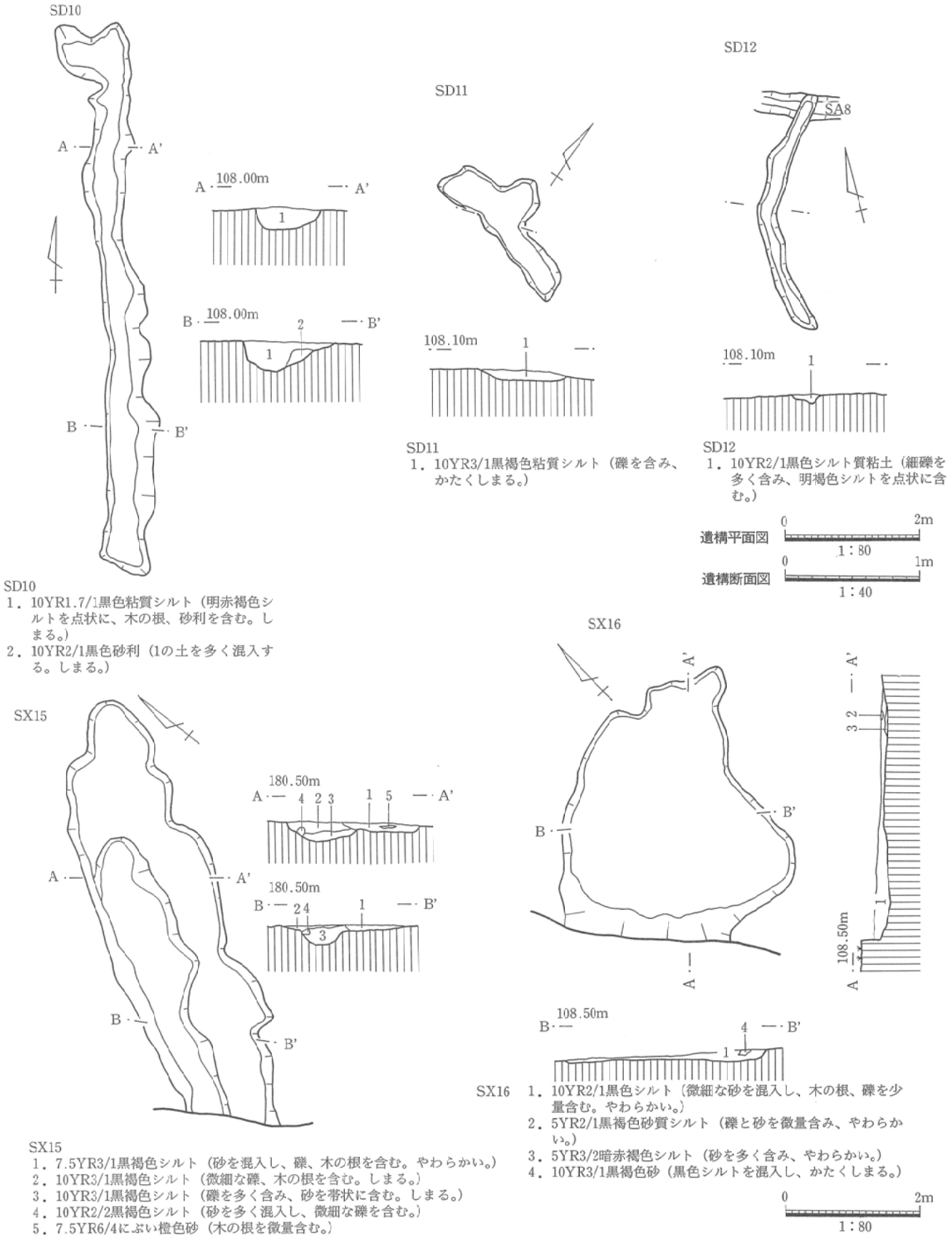
第38図　SK 2・4・7・21・32土坑



SA8
1．10YR1.7/1黒色粘土（黄褐色粘土を点状に含む。しまる。）
2．7.5YR1.7/1黒色シルト質粘土（細礫を多く含み、明褐色シルトを点状に混入する。）
2'．7.5YR1.7/1黒色シルト質粘土（地山土を帯状に含み、かたくしまる。）

遺構平面図 0 2m 1：80
遺構断面図 0 1m 1：40

第39図　SA 8 柵列跡



SD10
1．10YR1.7/1黒色粘質シルト（明赤褐色シルトを点状に、木の根、砂利を含む。しまる。）
2．10YR2/1黒色砂利（1の土を多く混入する。しまる。）

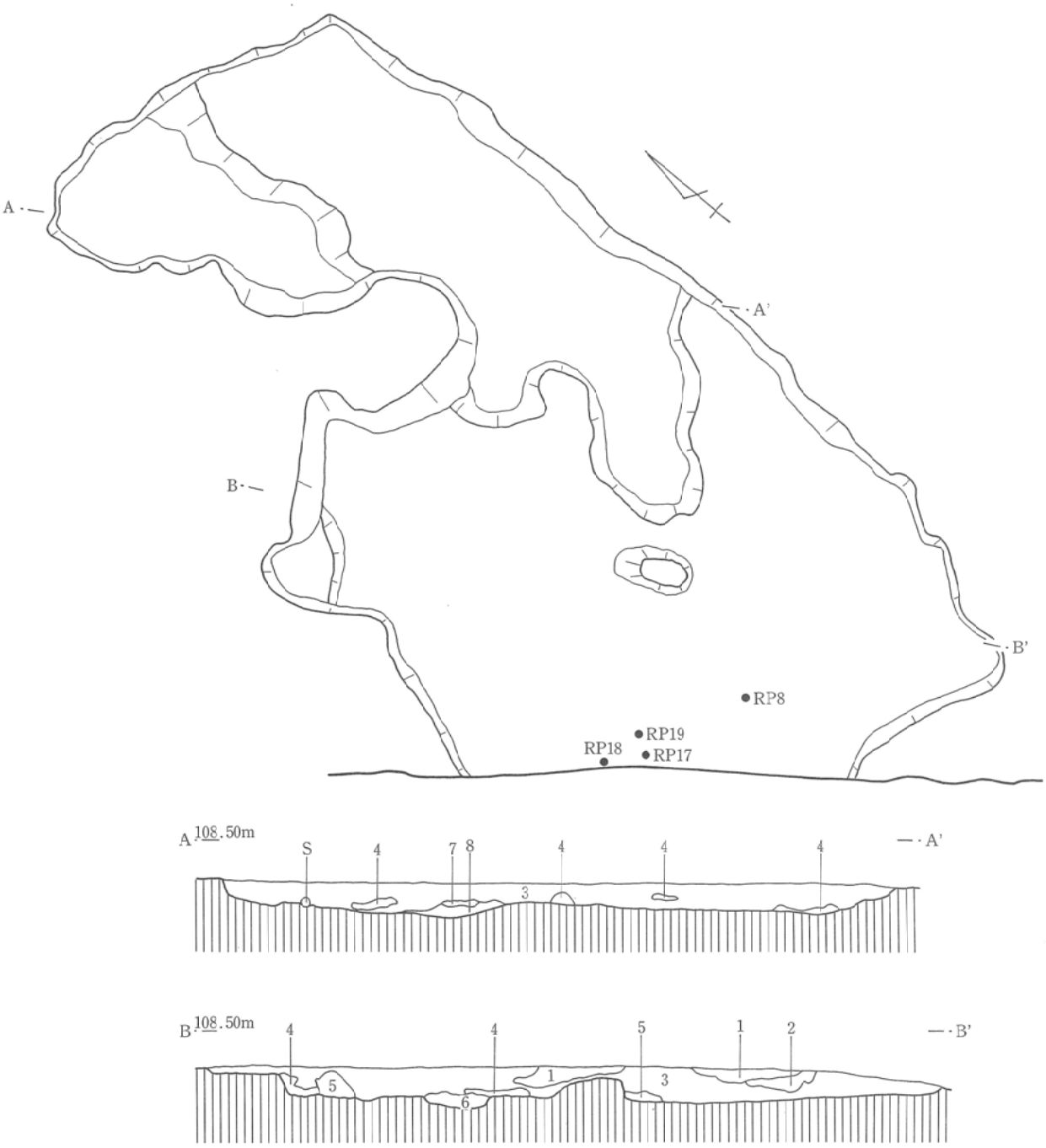
SD11
1．10YR3/1黒褐色粘質シルト（礫を含み、かたくしまる。）

SD12
1．10YR2/1黒色シルト質粘土（細礫を多く含み、明褐色シルトを点状に含む。）

SX15
1．7.5YR3/1黒褐色シルト（砂を混入し、礫、木の根を含む。やわらかい。）
2．10YR3/1黒褐色シルト（微細な礫、木の根を含む。しまる。）
3．10YR3/1黒褐色シルト（礫を多く含み、砂を帯状に含む。しまる。）
4．10YR2/2黒褐色シルト（砂を多く混入し、微細な礫を含む。）
5．7.5YR6/4にぶい橙色砂（木の根を微量含む。）

SX16
1．10YR2/1黒色シルト（微細な砂を混入し、木の根、礫を少量含む。やわらかい。）
2．5YR2/1黒褐色砂質シルト（礫と砂を微量含み、やわらかい。）
3．5YR3/2暗赤褐色シルト（砂を多く含み、やわらかい。）
4．10YR3/1黒褐色砂（黒色シルトを混入し、かたくしまる。）

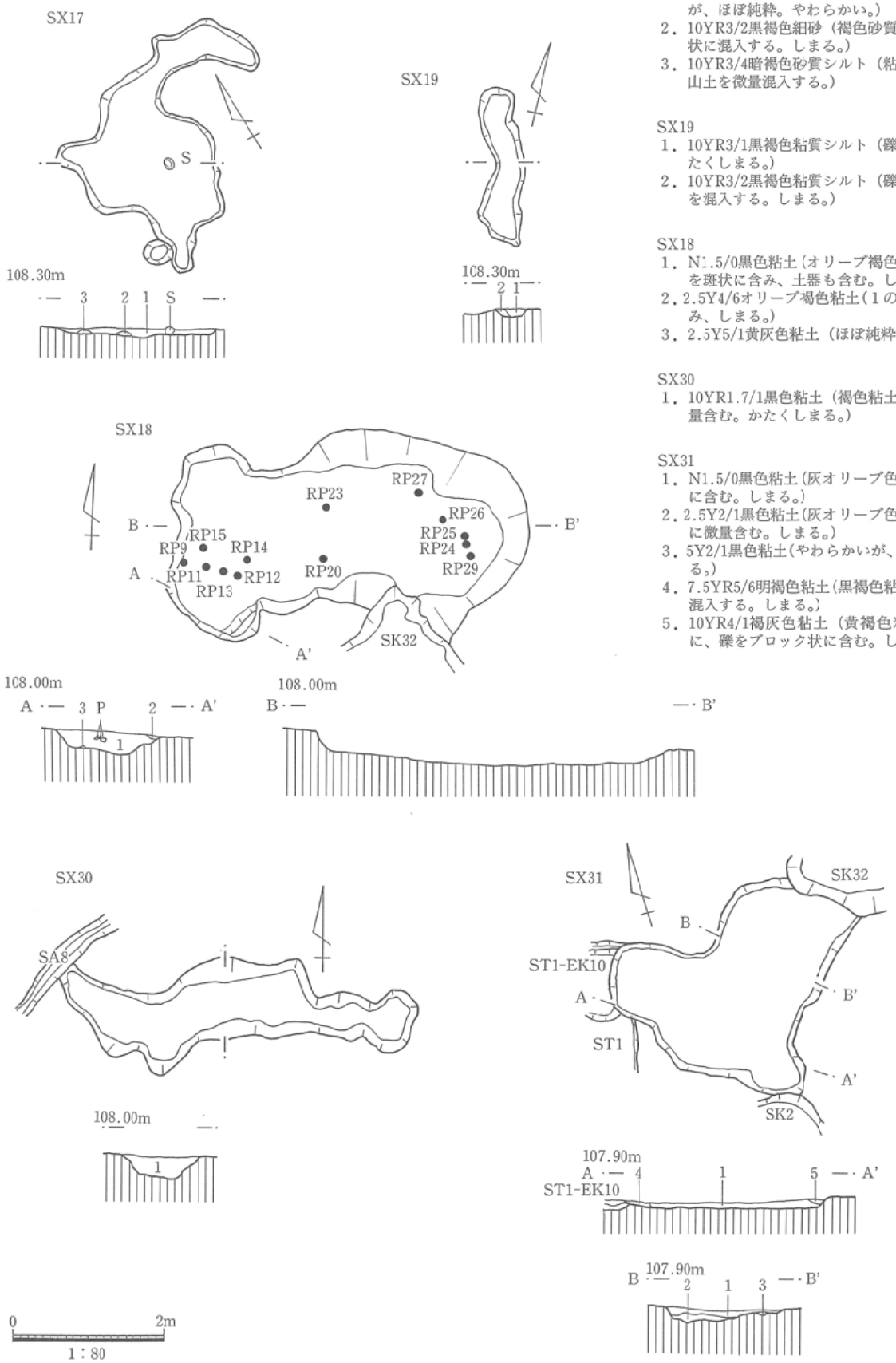
第40図　SD10～12溝跡・SX15・16性格不明遺構



SX14
1．10YR2/2黒褐色シルト（黄褐色シルトをブロック状に含み、木の根を含む。しまる。）
2．10YR3/1黒褐色シルト（黄褐色シルトをブロック状に含み、木の根、微細礫を含む。）
3．10YR2/1黒色シルト（微細礫と木の根を含む。しまる。）
4．2.5YR3/3暗オリーブ褐色砂（3の土と微細礫、木の根を含む。しまる。）
5．2.5Y4/3暗オリーブ褐色砂（礫を含み、かたくしまる。）
6．2.5Y2/1黒色粘質シルト（微細礫を点状に含む。）
7．10YR2/1黒色砂混じりシルト（かたくしまる。）
8．7.5YR2/1黒色粘質シルト（砂を混入し、しまる。）

0　2m
1：80

第41図　SX14性格不明遺構



SX17
1．5Y2/1黒色粘質シルト（微細礫を微量含むが、ほぼ純粋。やわらかい。）
2．10YR3/2黒褐色細砂（褐色砂質シルトを斑状に混入する。しまる。）
3．10YR3/4暗褐色砂質シルト（粘性強く、地山土を微量混入する。）

SX19
1．10YR3/1黒褐色粘質シルト（礫を含み、かたくしまる。）
2．10YR3/2黒褐色粘質シルト（礫を含み、砂を混入する。しまる。）

SX18
1．N1.5/0黒色粘土（オリーブ褐色粘質シルトを斑状に含み、土器も含む。しまる。）
2．2.5Y4/6オリーブ褐色粘土（1の土を20%含み、しまる。）
3．2.5Y5/1黄灰色粘土（ほぼ純粋。）

SX30
1．10YR1.7/1黒色粘土（褐色粘土を斑状に少量含む。かたくしまる。）

SX31
1．N1.5/0黒色粘土（灰オリーブ色粘土を斑状に含む。しまる。）
2．2.5Y2/1黒色粘土（灰オリーブ色粘土を点状に微量含む。しまる。）
3．5Y2/1黒色粘土（やわらかいが、しまっている。）
4．7.5YR5/6明褐色粘土（黒褐色粘土を斑状に混入する。しまる。）
5．10YR4/1褐灰色粘土（黄褐色粘土を点状に、礫をブロック状に含む。しまる。）

第42図　SX17～19・30・31性格不明遺構

3　出土遺物

今回の調査では石器・須恵器・土師器・土製品・木製品・陶器など、縄文時代・奈良・平安時代・中世の遺物が整理箱にして22箱出土した。その主な分布は、縄文時代の石器が調査区北東端の包含層から、奈良・平安時代の土器・土製品・木製品は調査区東側の遺構内及び包含層から、陶器は包含層から出土している。以下に各遺物を遺構毎もしくは器種毎に特徴を述べる。なお、高松II遺跡で前述のとおり「赤焼土器」という用語は使わず、土師器の範疇として扱うこととする。

(1)縄文時代の遺物

石　器

今回の調査では、調査区東側の礫層や包含層から石器生産にかかわる剥片・砕片・石核が多量に出土したが、toolは2点のみである。器種は、剥片を素材とする石匙•削器が各1点で、石材は全て珪質頁岩製となる。縄文時代と考えられる遺構は検出されず、縄文土器の出土も無いことから、これら石器は二次的混入と推測される。以下に概要を述べる。

石　匙（第43図1）

相対する2つのノッチを入れることによって作出されたつまみをもつ石器を石匙とした。つまみを上方に置いたとき側縁が刃部となる縦型のものが1点出土した。石材は珪質頁岩である。

資料はは左側縁の上部と末端を欠損している。残存部は右側縁が直線状となる形態で、調整加工の状況は、主要剥離面にはつまみとノッチ以外に調整加工は見られず、背面側は全面に丁寧な調整加工が施される。残存部の大きさは、長さ71.3㎜・幅31.0㎜・厚さ7.9㎜を測る。

削　器（第43図2）

剥片の縁辺に連続的な調整加工を施して、刃部を作出した石器を削器とした。幅広の縦長剥片を素材とする完形品1点が出土し、石材は珪質頁岩である。

資料は剥片の背面側はほぼ全面に調整加工が施されるが、主要剥離面は両側縁のみの調整加工となり素材面を大きく残す。素材のほぼ全縁辺が刃部となり得る石器である。大きさは全長83.8㎜・最大幅54.5㎜・最大厚16.9㎜を測る。

(2)奈良・平安時代の遺物

本遺跡の奈良・平安時代の遺物は大半がＳＴ・ＳＫ・ＳＸなどの各遺構から出土し、完形品が極めて少ないことから、形式分類は行わず各遺構毎及び包含層の出土遺物として図化したものを中心に概略を述べる。

ＳＴ１・ＳＥ３出土土器（第44図3～10）

ＳＴ１からは須恵器・土師器・土製品が出土している。須恵器は坏・高台付坏があり、坏は口径・底径が大きく、器高が低く体部が直線的に立ち上がるもの（３・４）である。底部は回転ヘラ切りで、３は生焼け状態、４は二次加熱を受ける。４はＥＫ10からの出土となる。

高台付坏は底径が大きく、体部がやや丸みをもって立ち上がるもの（５）と底径・口径がやや小さく、軽い稜をもつもの（６）がある。６は高台部分が剥落している。

土師器は二次加熱を受けている甕が１点のみで、口縁部がくの字状に外反し、外面にヘラ削り、内面にカキ目調整が施されるもの（８）である。土製品は紡錘車（７）で、外面に削り調整が施され、内部の穴は径7.5㎜を測る。

ＳＥ３からは須恵器蓋（９）•坏（10）の破片が出土した。蓋は天井部にヘラ削り調整が入り口縁部が軽く直立する。

ＳＫ２・４・32出土土器（第44図11～第45図19）

ＳＫ２からは平笠タイプで口縁部が直立する須恵器蓋（11）が出土したのみである。

ＳＫ４からはロクロ整形でヘラ削り調整が施された土師器鉢（12）が出土した。12はＳＫ４出土の体部と、ＳＤ11出土の底部が接合したものである。

ＳＫ32の須恵器は口縁部が直立する蓋（13）と底部の切り離しが回転ヘラ切りとなる高台付坏（14・15）及び、外面に平行タタキ目痕・内面に青海波アテ痕が認められる大形の甕（16）体部片がある。なお、15は高台部分が剝落している。

土師器はタタキの後にヘラ削り調整を施す甕体部（17）と削り調整が施される甕下部（18）、そしてロクロ整形で外面にカキ目・削り、内面にカキ目調整が施される埵（19）の口縁部資料がある。19は口径356㎜を測る。また、17・18は二次加熱を受けている。

ＳＸ14・15・16・18・31出土土器（第46図20～第52図71）

ＳＸ14の須恵器は蓋・稜碗・高台付坏・甕がある。蓋は、天井部に回転ヘラ削りが施され、平坦となり、口縁部が軽く直立するもの（20・21）で、稜碗は回転ヘラ削りにより稜を作出しているもの（22）である。高台付坏は３点あり、底径が大きくなるもの（23・24）とやや小さいもの（25）がある。体部はほぼ直線的に立ち上がる。23のみ略完形品である。また、23・24の底部は回転ヘラ切りの後にナデ調整を施す。26は甕体部片で外面に平行タタキ目、内面に青海波アテ痕がみられる。

土師器は、支脚と考えられる27と頸部に回転ヘラ削りが入り、口唇部に段が付き、口縁部が内湾する鉢（28）や口縁部が強く外反する甕（29）の他に内面に煤煙が付着し、二次加熱を受けている埵（30）がある。

ＳＸ15からは、須恵器蓋・坏が各１点あり、蓋は天井部回転ヘラ削りで口縁部が直立するもの（31）である。坏は底径がやや小さく器高が高いもの（32）で口縁部は緩く外反する。底部の切り離しは回転ヘラ切りとなる。

ＳＸ16の須恵器には、外面に平行タタキ目•内面にカキ目と青海波アテ痕が認められる甕(33)体部片がある。

土師器は口縁部が強く外反し、外面にタタキと削り調整が認められる甕(34)と外面に削り・内面にカキ目が認められ、底部もヘラ削りを施す埵（35）である。

ＳＸ18から出土した須恵器には坏・稜碗・高台付坏・甕・壺があり、坏は底径が大きく体部が直線的に立ち上がるもの（36・37・39）と口縁部資料となるもの（38）がある。36・39は底部切り離しが回転ヘラ切りで、37は底部にヘラ削り調整を施している。

稜碗は回転ヘラ削りで稜を作出し、体部が直線的に立ち上がるもの（40）で底部切り離しが

回転ヘラ切りとなる。生焼け状態の資料である。高台付坏は身が深く底径がやや小さいもの(41)と底径が大きく高台が低いもの（42）がある。41は体部が碗形を呈する。両者とも底部切り離しは回転ヘラ切りで体部下部に回転ヘラ削り調整が認められる。

甕は全て体部の破片資料となり、外面に平行タタキ目・内面に青海波アテ痕が認められるもの(44～49)と外面は平行タタキ目が認められるが、内面はアテ痕としか判別できないもの(43)がある。44は外面に自然釉が付着し、47は頸部にナデ調整が施される。その器厚から全ての甕が大形のものと考えられる。壺（50）は外面にタタキ目が認められる体部資料である。

土師器は、鉢・甕・鍋が出土した。鉢には器高が低く、体部が丸みをもつもの（51～53）があり、51・52は頸部が強く外反し口縁部が垂直に立ち上がり、53は口縁部が緩やかに立ち上がる。他に、器高が低く体部が直線的に立ち上がり口縁部が内湾するもの(54)、器高が高く体部に丸みをもち口縁部が外反するもの(55)、器高が高く体部が直線的に立ち上がり口縁部がやや外反するもの（56）がある。51・54は底部にヘラ削り調整が施される。また、底部切り離しは55が静止糸切りで、56は回転糸切りとなる。53～56は二次加熱を受けている。

甕は頸部と体部の境が明瞭で、口縁部が強く外し、口唇部が明確に作出されるもの(57～65)、口縁部が強く外反するもの（66・67)、器高が低く、底径が大きく、口縁部が緩やかに外反し、頸部と体部の境が不明瞭なもの（68）がある。57・58・60・63・65は外面にタタキ目が認められ、頸部に59はカキ目が60は回転ヘラ削り調整が施される。57～59・64・65は二次加熱を受けている。

鍋は体部が直線的に立ち上がり口縁部が強く外反し、ほぼ水平になるもの（69）と体部が丸みをもち口縁部が外反するもの（70）があり、70は把手が付き、二次加熱を受けている。

ＳＸ31からは、土師器甕の底部資料が１点のみ出土し、外面下部に回転ヘラ削り調整を施し器台様の底部をもつもの（71）である。二次加熱を受けている。

ＳＰ・包含層出土土器（第53図72～第54図98）

ＳＰからは、須恵器高台付坏と土師器甕が出土している。72・73は須恵器の高台付坏で、72は体部に丸みをもつ器形となるもの。73は生焼け状態で、器形は口縁部がやや外反し碗形になる。72はＳＰ29から、73はＳＰ27の出土である。74・75は土師器の甕で、74は口縁部が内湾する器形で、75は外面に削り調整が施され、二次加熱を受けている。74はＳＰ25から、75はＳＰ28の出土である。

包含層出土の奈良・平安時代の土器は須恵器の蓋・坏・高台付坏・稜碗・甕・壺、土師器の甕などがある。最初に須恵器であるが、蓋は天井部に回転ヘラ削り調整が施される山笠タイプとなるもの（76～78）であるが、76はツマミが疑宝珠形となる。78の口縁部は軽く直立する。

坏は底径が大きく体部が直線的に立ち上がるもの(79)、底径がやや小さく体部が直線的に立ち上がるもの（80･81)、底部に稜をもち、身が深く口縁部が外反するもの（82）がある。底部の切り離しは79～81は回転ヘラ切りとなり、82は回転ヘラ削り調整が施される。高台付坏は、体部が直線的に立ち上がるもの（83・84）と身が深く碗形となるもの（85）がある。85は生焼け状態となる。

86・87は稜碗と考えられる資料で、外面下部に稜を有する。86は底部回転ヘラ切りの後ナデ調整を施している。甕は体部の破片である。全て外面には平行タタキ目痕があり、内面は88～90が青海波アテ痕があり、91～93は条線状のアテ痕が認められる。93は内面が、にぶい赤褐色を呈し生焼けの状態となる。94は壺の口縁部資料で、内外面に自然釉が付着している。

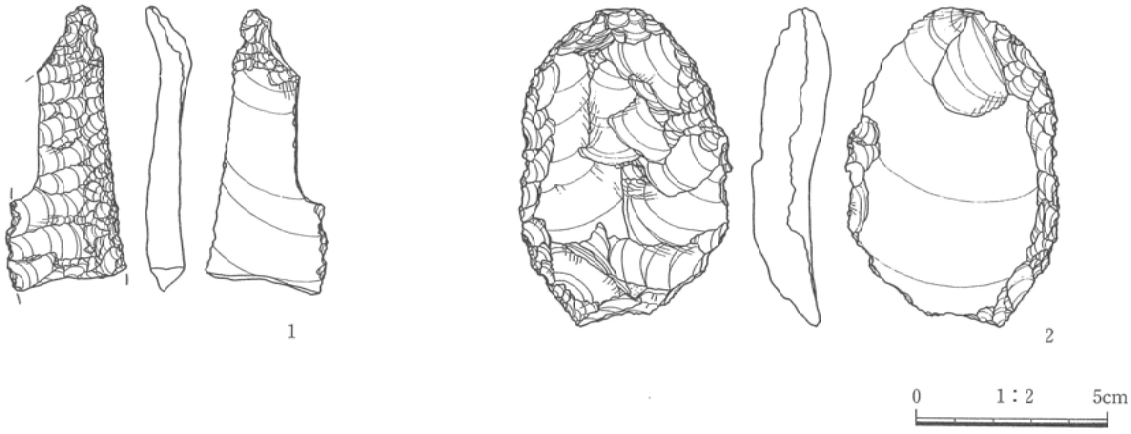
土師器は甕の資料のみで、口縁部が強く外反し、口唇部が直立するもの(95)、口縁部が強く外反して、口唇部も外反するもの(96)、口縁部が緩やかに外反し、口唇部が内湾するもの(97・98）がある。96は体部が直線的で中形の甕と考えられる。

柱　根（図版43）

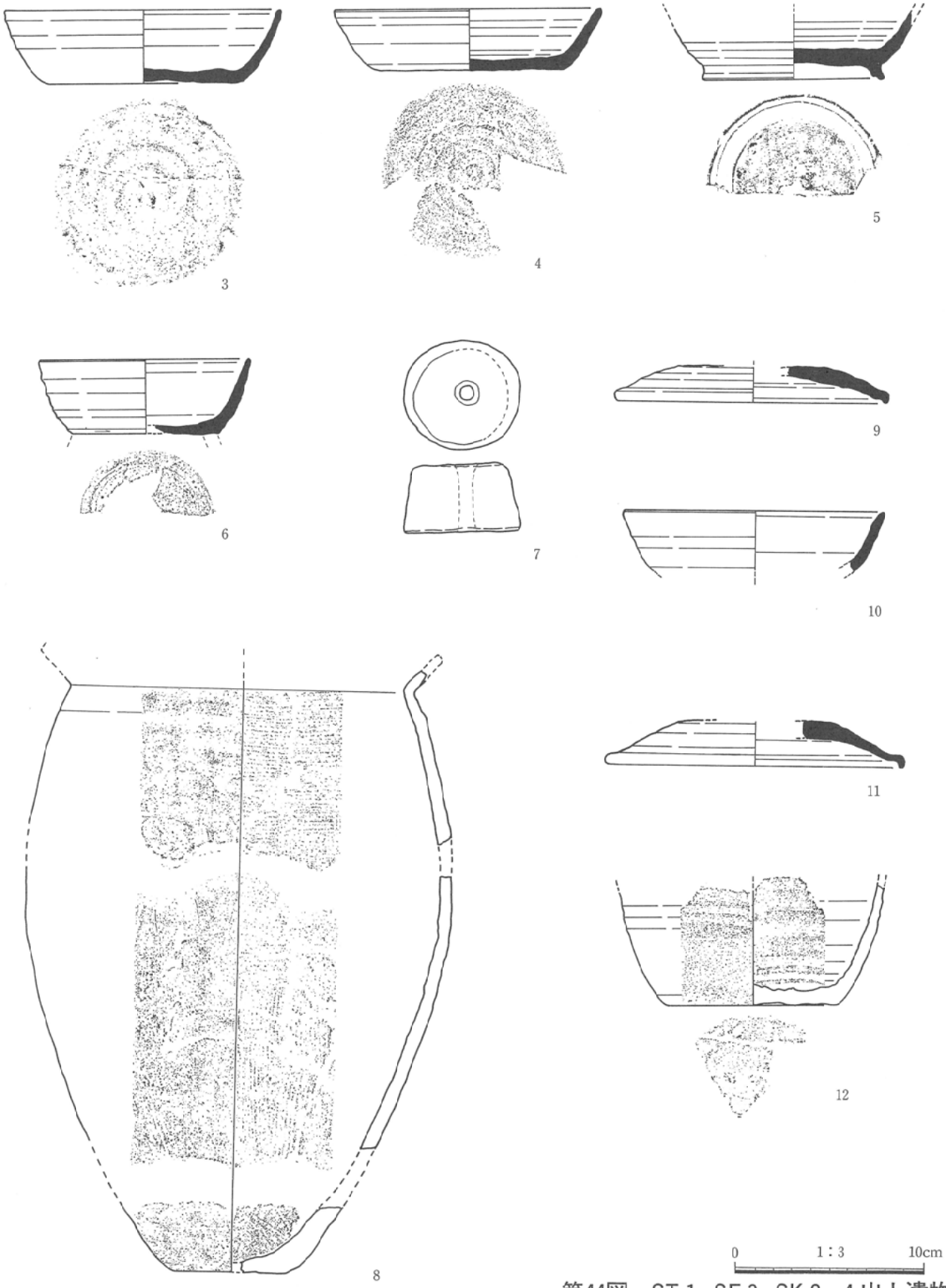
ＳＥ３から木柱根が出土した。円柱で、直径約50cm、長さ約75cmが残存していた。柱根の整形は、側面に削り跡が認められる。底部には方形の貫通した穴が２ヶ所開けてあり、底面は斜めに切り込まれている。柱根は建物に使用していたものを、井戸を廃棄する際に置いたと考えられる。形態がよく似た柱根が本県酒田市の本川遺跡で出土している。

（３）中世の遺物（第54図99）

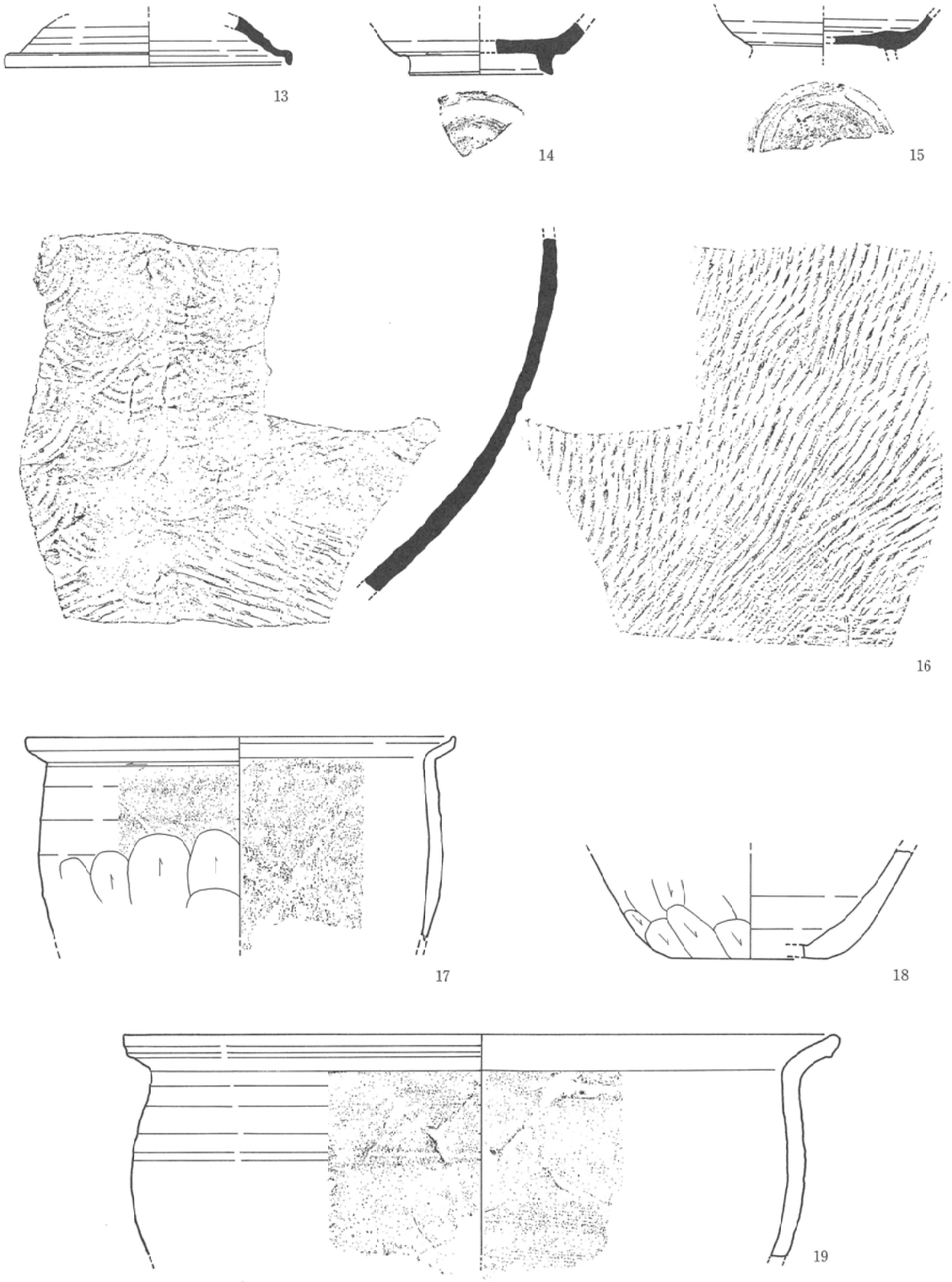
珠洲系陶器の擂り鉢が１点出土している。口縁部の資料で、内面に卸目が入れられ片口が作られている。また、口縁部内面に波状沈線文が描かれる。時期は15世紀頃と推定される。



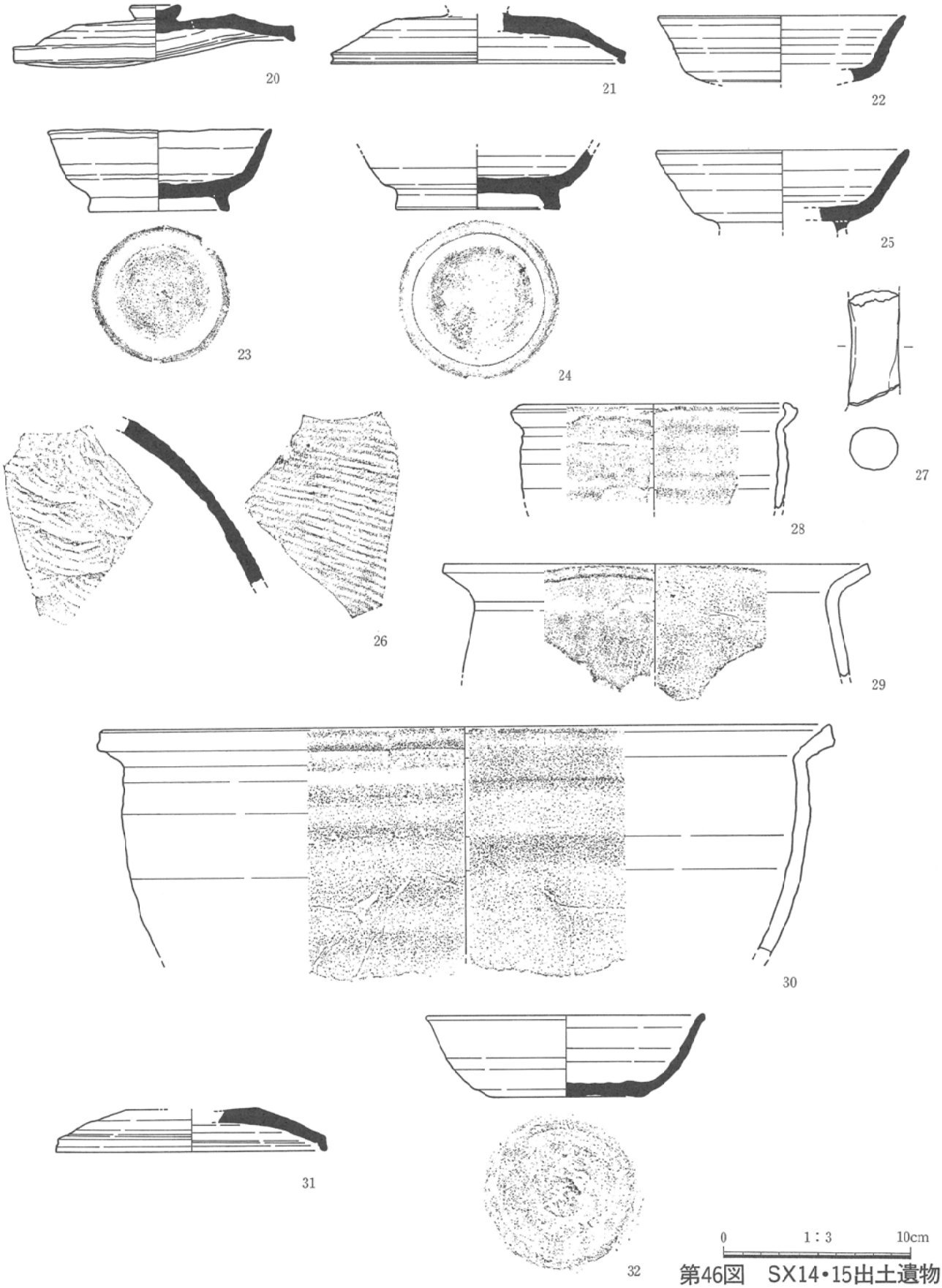
第43図　石匙・削器実測図



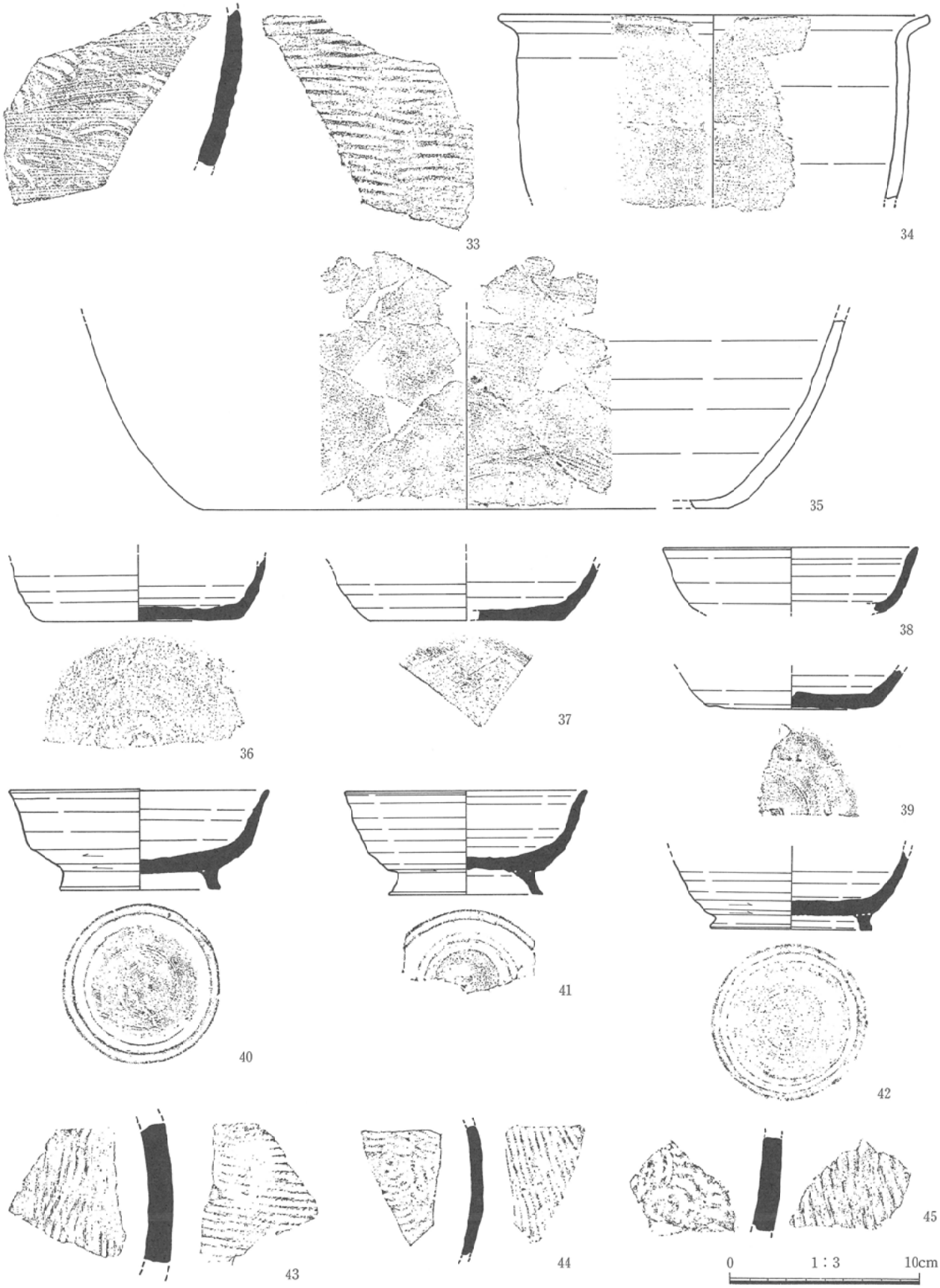
第44図　ST 1・SE 3・SK 2・4 出土遺物



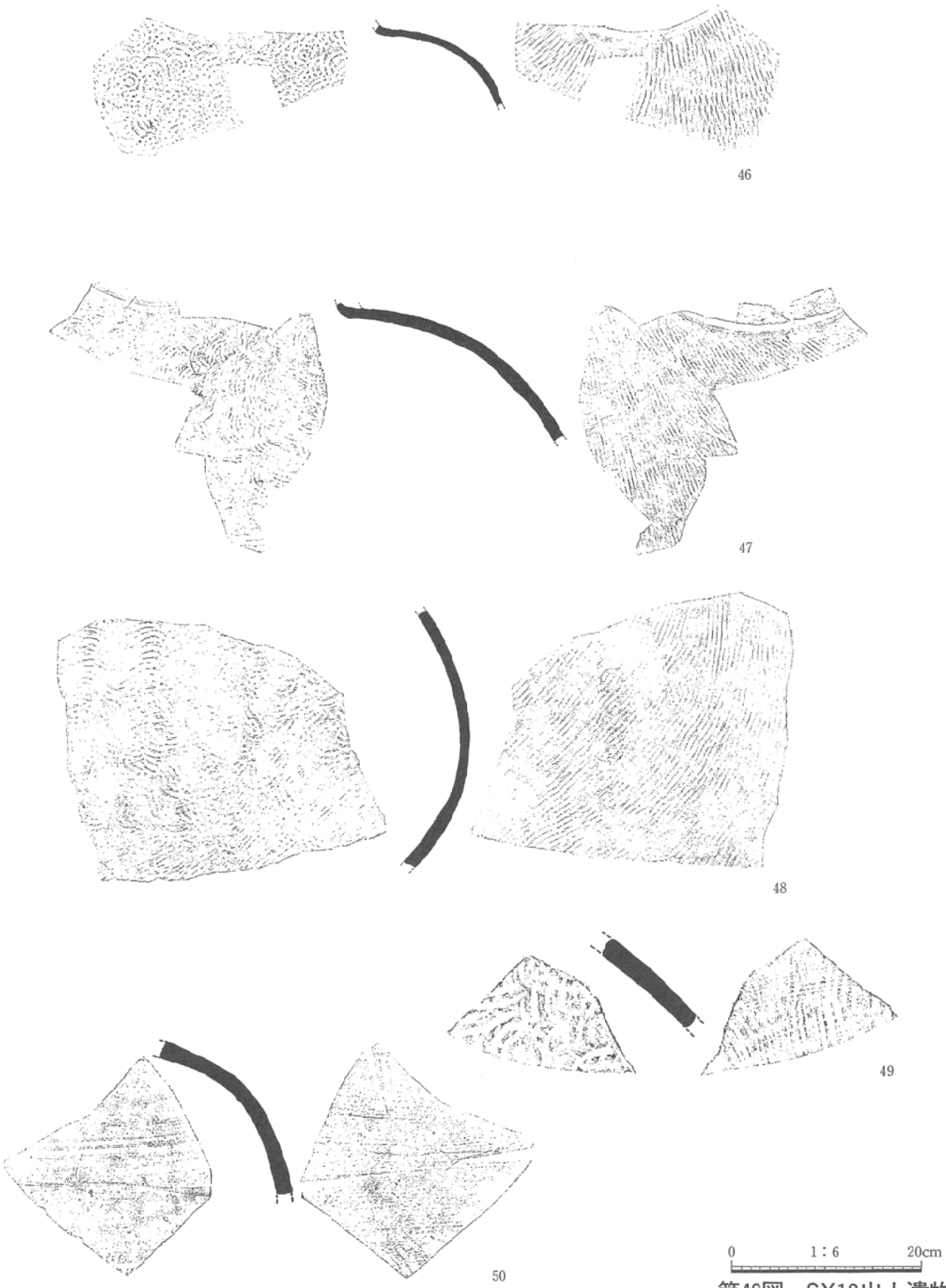
第45図　SK32出土遺物



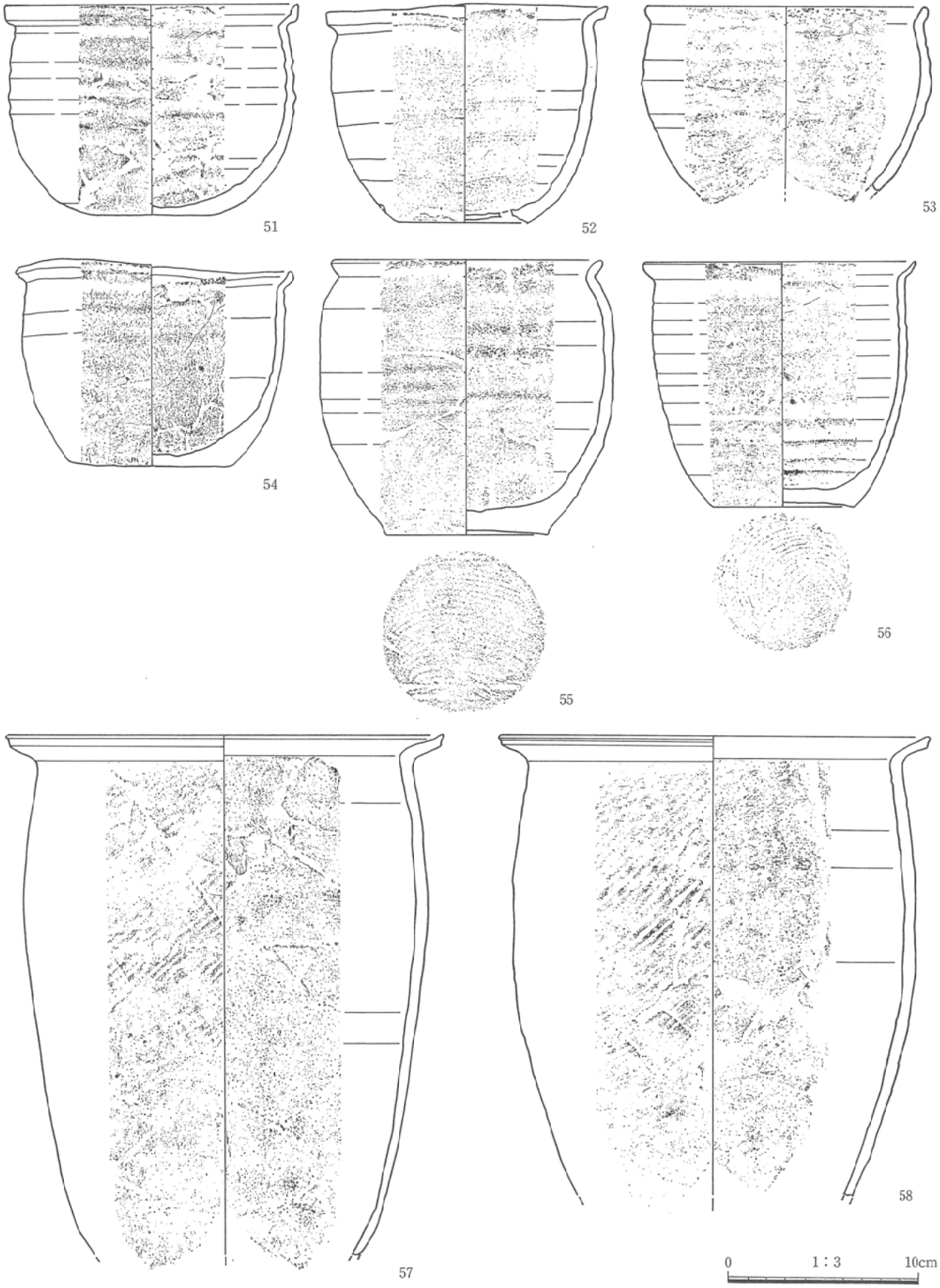
第46図　SX14・15出土遺物



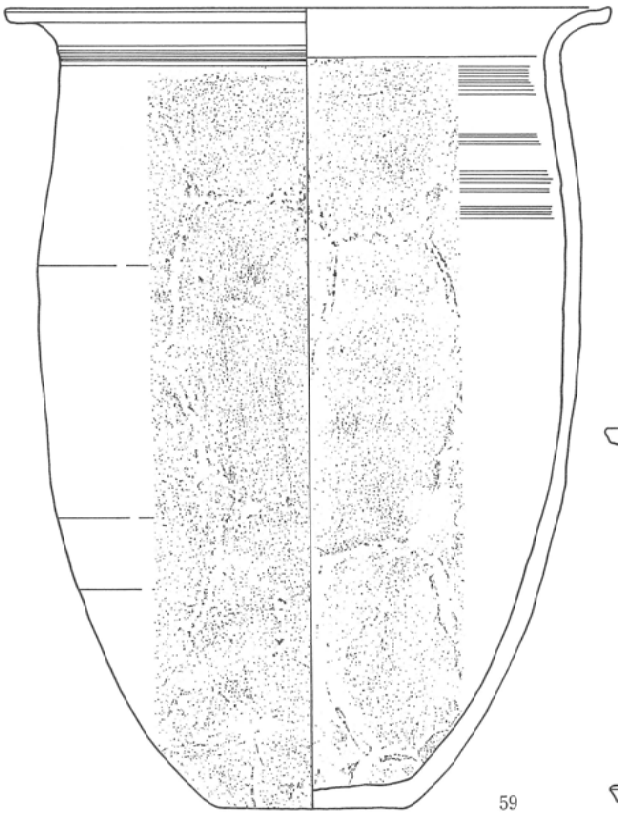
第47図　SX16・18出土遺物

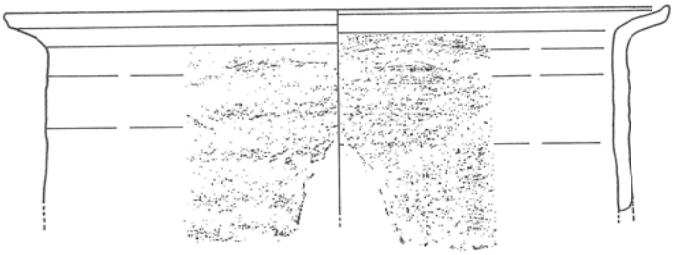


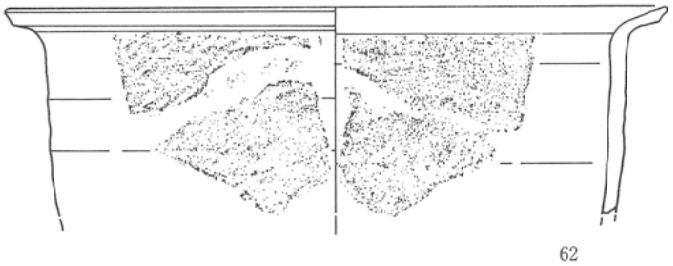
第48図　SX18出土遺物

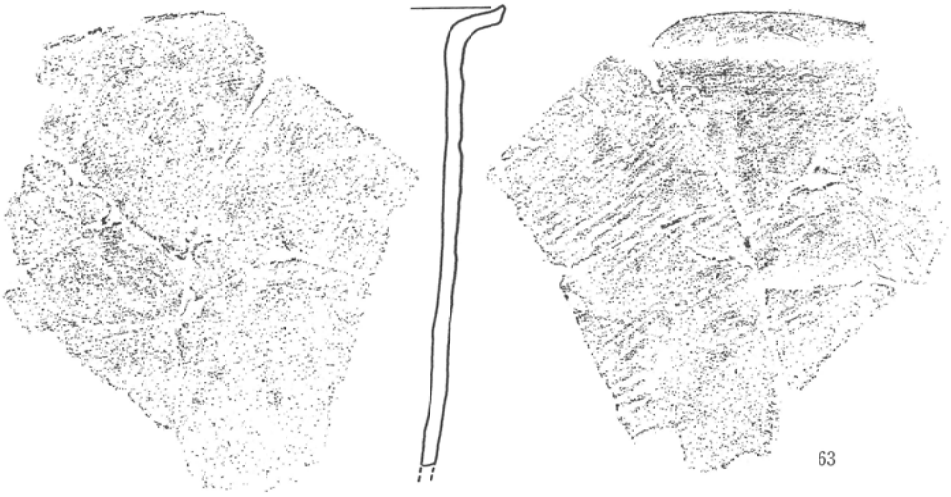


第49図　SX18出土遺物





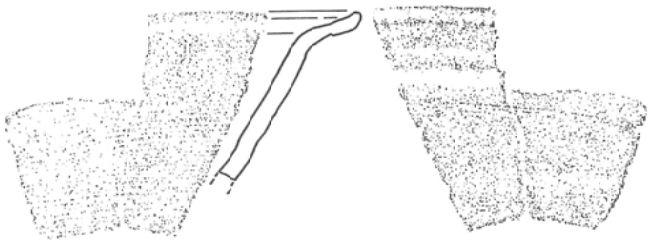


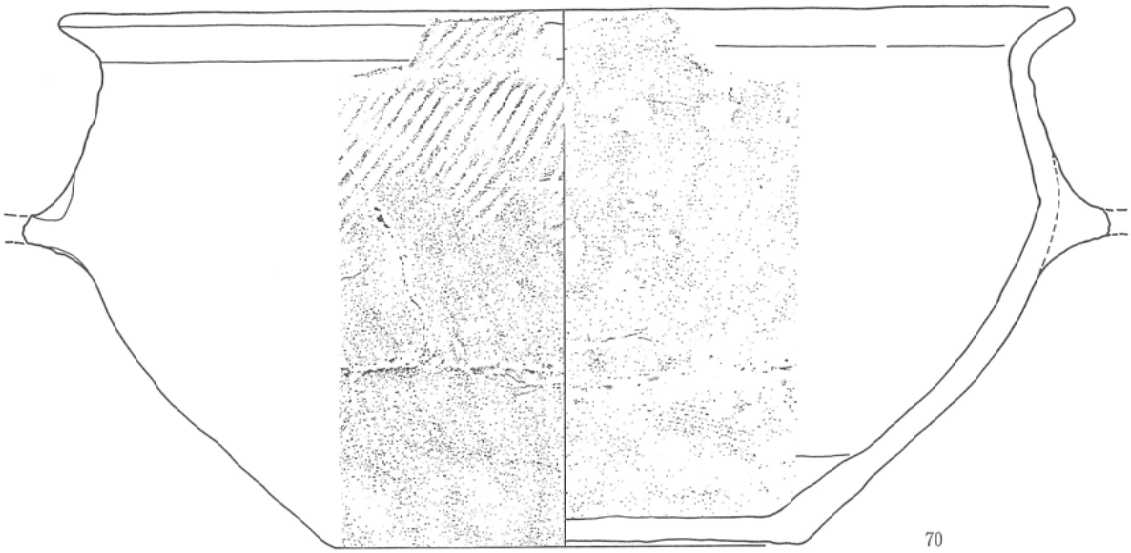


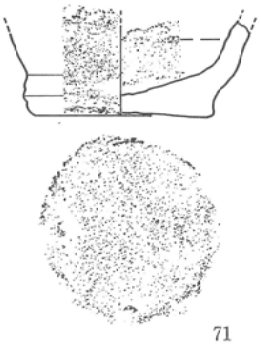
0　1：3　10cm

第50図　SX18出土遺物

第51図　SX18出土遺物

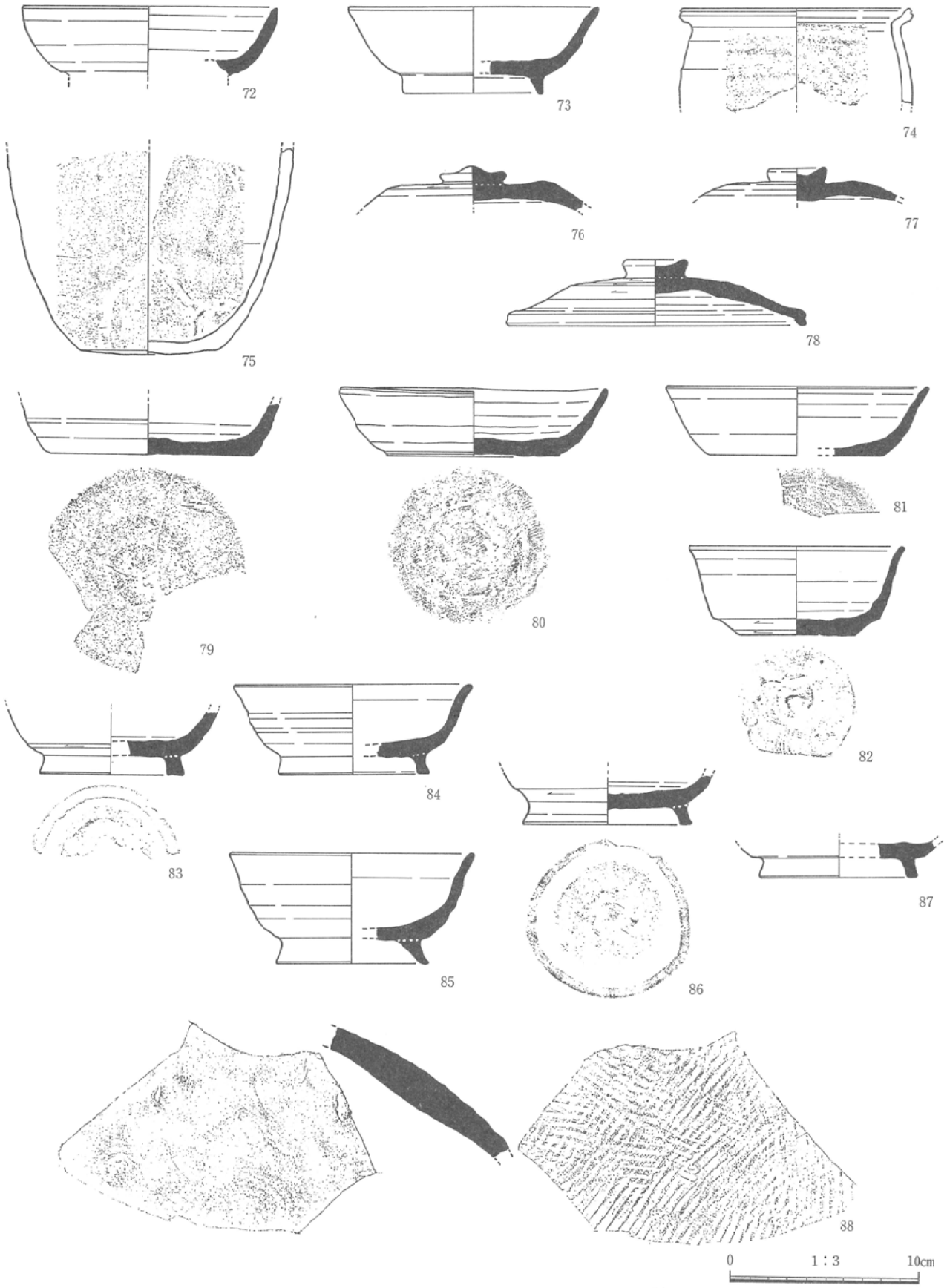




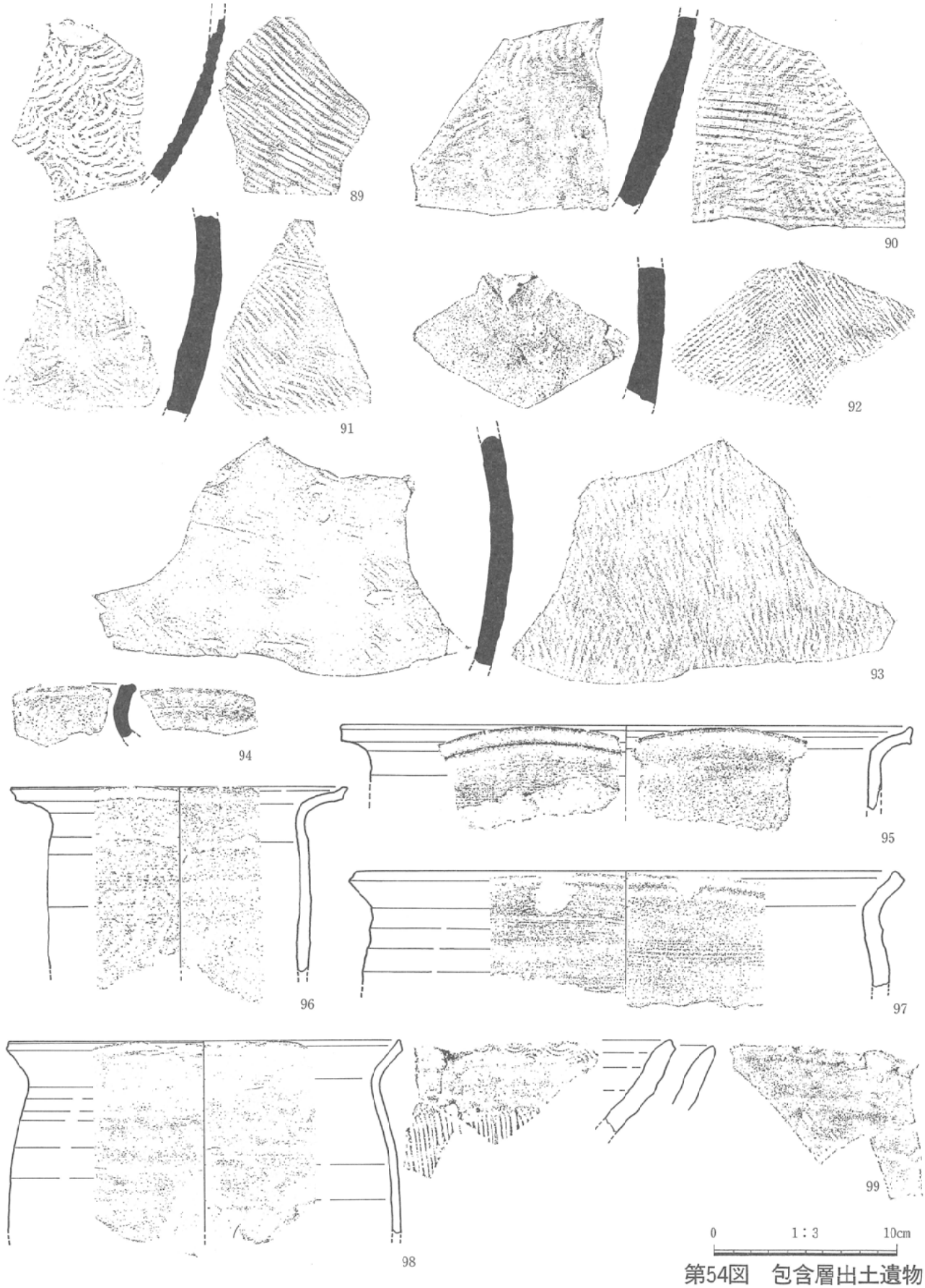


0　1：3　10cm

第52図　SX18・31出土遺物



第53図　SP・包含層出土遺物



第54図　包含層出土遺物

表―7　遺物観察表（1）

挿図番号	遺物番号	種別	器種	計測値(mm) 口径	底径	器高	器厚	底部切離	調整技法 外面	内面	出土地点登録番号	備考
第44図	3	須恵器	坏	146	98	39	4	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	ST1F1 RP4	口縁部ナデ
	4	須恵器	坏	140	100	33	5	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	ST1-EK10	二次加熱有り
	5	須恵器	高台付坏		96	(35)	6	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	ST1F1 RP6	底部ヘラ削り
	6	須恵器	高台付坏	(110)		(40)	5	回転ヘラ?	ロクロ	ロクロ	ST1-EK10	外面下部回転ヘラ削り
	7	土製品	紡錘車	上面径49	底面径60	高さ36			削り		ST1Y RP5	
	8	土師器	甕		(60)	(313)	7		ロクロ・削り	カキ目	ST1Y RP3	二次加熱有り
	9	須恵器	蓋	(142)		(19)	6		ロクロ	ロクロ	SE3F	
	10	須恵器	坏	(138)		(31)	4		ロクロ	ロクロ	SE3F	
	11	須恵器	蓋	(155)		(24)	5		ロクロ	ロクロ	SK2F	
	12	土師器	鉢		(90)	(63)	6		ロクロ	ロクロ	SK4F・SD11F	底部ヘラ削り
第45図	13	須恵器	蓋	(141)		(24)	5		ロクロ	ロクロ	SK32F	
	14	須恵器	高台付坏		(71)	(26)	6	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SK32F	外面下部回転ヘラ削り
	15	須恵器	高台付坏			(17)	3	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SK32F	
	16	須恵器	甕				8		平行タタキ目	青海波アテ痕	SK32F RP22	
	17	土師器	鉢	213		(102)	6		ロクロ・削り・タタキ		SK32F RP28	二次加熱有り
	18	土師器	甕		78	(54)	8		削り	ロクロ	SK32F RP28	二次加熱有り
	19	土師器	鍋	356		(110)	9		ロクロ・カキ目・削り	ロクロ・カキ目	SK32F RP28	
第46図	20	須恵器	蓋	151		30	7		ロクロ	ロクロ	SX14Y RP19	天井部回転ヘラ削り
	21	須恵器	蓋	(158)		(27)	5		ロクロ	ロクロ	SX14F3	天井部回転ヘラ削り
	22	須恵器	稜碗	(133)		(35)	5		ロクロ	ロクロ	SX14F3	
	23	須恵器	高台付坏	121	76	43	6	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SX14Y RP18	底部ナデ調整、内面に自然釉
	24	須恵器	高台付坏		88	(33)	7	回転ヘラ?	ロクロ	ロクロ	SX14Y RP17	底部ナデ調整
	25	須恵器	高台付坏	(136)	(67)	(46)	5		ロクロ	ロクロ	SX14F3	
	26	須恵器	甕				7		平行タタキ目	青海波アテ痕	SX14F	
	27	土師器	支脚?	径 25		長 (59)			削り		SX14F	把手とも考えられる
	28	土師器	鉢	(142)		(57)	5		ロクロ	ロクロ	SX14F3	
	29	土師器	甕	(226)		(61)	6		ロクロ・タタキ	ロクロ	SX14F3	
	30	土師器	鍋	388		(122)	7		ロクロ・削り	ロクロ	SX14F3 RP8	内面に媒付着、二次加熱有り
	31	須恵器	蓋	(146)		(33)	6		ロクロ	ロクロ	SX15F	天井部回転ヘラ削り
	32	須恵器	坏	150	82	44	4	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SX15Y RP7	底部ナデ調整
第47図	33	須恵器	甕				8		平行タタキ目	青海波アテ痕・カキ目	SX16F	
	34	土師器	甕	(224)		(97)	6		ロクロ・タタキ・削り	ロクロ	SX16F	
	35	土師器	鍋		(276)	(98)	6		削り	カキ目	SX16F	底部ヘラ削り
	36	須恵器	坏		(102)	(31)	5	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SX18F	
	37	須恵器	坏		(100)	(29)	4		ロクロ	ロクロ	SX18F	底部ヘラ削り
	38	須恵器	坏	(134)	(98)	(34)	4		ロクロ	ロクロ	SX18F	
	39	須恵器	坏		(85)	(19)	5	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SX18F	
	40	須恵器	稜碗	136	83	53	6	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SX18F RP29	外面下部回転ヘラ削り、生焼け状態
	41	須恵器	高台付坏	(126)	(80)	55	5	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SX18F	外面下部回転ヘラ削り
	42	須恵器	高台付坏		82	(41)	4	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SX18F RP14	外面下部回転ヘラ削り
	43	須恵器	甕				12		平行タタキ目	アテ痕	SX18F	
	44	須恵器	甕				6		平行タタキ目	青海波アテ痕	SX18F	外面に自然釉
	45	須恵器	甕				10		平行タタキ目	青海波アテ痕	SX18F	
第48図	46	須恵器	甕				7		平行タタキ目	青海波アテ痕	SX18F	
	47	須恵器	甕				12		平行タタキ目	青海波アテ痕	SX18F RP15	頸部ナデ調整
	48	須恵器	甕				10		平行タタキ目	青海波アテ痕	SX18F RP24	
	49	須恵器	甕				9		平行タタキ目・カキ目	青海波アテ痕	SX18F	
	50	須恵器	壺				7		ロクロ・タタキ目	ロクロ	SX18F	

表—8　遺物観察表（2）

挿図番号	遺物番号	種別	器種	計測値(mm) 口径	底径	器高	器厚	底部切離	調整技法 外面	内面	出土地点登録番号	備考
第49図	51	土師器	鉢	154	64	112	5		ロクロ・削り	ロクロ	SX18F RP15	底部ヘラ削り
	52	土師器	鉢	146	(68)	(116)	6		ロクロ・削り	ロクロ・カキ目	SX18F RP26	
	53	土師器	鉢	(148)		(97)	5		ロクロ		SX18F	二次加熱有り
	54	土師器	鉢	144	87	110	4		ロクロ・削り	ロクロ	SX18F RP13	底部ヘラ削り、二次加熱有り
	55	土師器	鉢	(140)	84	146	6	静止糸切	ロクロ	ロクロ	SX18F RP9	底部ヘラ削り、二次加熱有り
	56	土師器	鉢	143	74	130	4	回転糸切	ロクロ・削り	ロクロ	SX18F RP25	二次加熱有り
	57	土師器	甕	(228)		(275)	6		ロクロ・タタキ・削り	ロクロ・削り	SX18F RP20	二次加熱有り
	58	土師器	甕	(226)		(244)	7		タタキ・削り	刷毛目	SX18F RP20	二次加熱有り
第50図	59	土師器	甕	(235)	(74)	317	7		カキ目・削り	カキ目	SX18F RP23	外面に2次加熱有り
	60	土師器	甕	(226)		(68)	5		ロクロ・タタキ・削り	ロクロ・カキ目	SX18F	
	61	土師器	甕	(260)		(80)	6		ロクロ・削り	ロクロ	SX18F	
	62	土師器	甕	(256)		(81)	6		ロクロ・タタキ	ロクロ	SX18F RP20	
	63	土師器	甕			(180)	6		ロクロ・タタキ・削り	ロクロ	SX18F	
第51図	64	土師器	甕	(192)		(89)	7		ロクロ	ロクロ	SX18F	二次加熱有り
	65	土師器	甕	298	74	317	7		タタキ・削り	削り	SX18F	二次加熱有り
	66	土師器	甕	(268)	(80)	337	5		削り	刷毛目	SX18F	底部ヘラ削り
	67	土師器	甕	224		(154)	6		削り		SX18F RP23	
第52図	68	土師器	甕	222	121	206	8		削り	刷毛目	SX18F RP11	底部ヘラ削り
	69	土師器	鍋			(62)	7		ロクロ・カキ目・削り	ロクロ・カキ目	SX18F	
	70	土師器	鍋	(392)	182	210	10		タタキ・削り	刷毛目・指圧痕	SX18F RP12	把手付、二次加熱有り
	71	土師器	鉢		(70)	(37)	7		ロクロ	ロクロ	SX31F	下半部回転ヘラ削り、底部削り
第53図	72	須恵器	高台付坏	(132)		(36)	6		ロクロ	ロクロ	SP29F	
	73	須恵器	高台付坏	(132)	(71)	46	5				SP27F	生焼け状態
	74	土師器	鉢	(120)		(50)	5		ロクロ	ロクロ	SP25F	
	75	土師器	甕		(72)	(107)	6		削り		SP28F	二次加熱有り
	76	須恵器	蓋			(25)	6		ロクロ	ロクロ	X—0	天井部回転ヘラ削り
	77	須恵器	蓋			(18)	5		ロクロ	ロクロ	X—0	天井部回転ヘラ削り、内面に樣付着
	78	須恵器	蓋	(159)		35	6		ロクロ	ロクロ	6—91G	天井部回転ヘラ削り
	79	須恵器	坏		107	(27)	5	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	8—95G	外面下部回転ヘラ削り?
	80	須恵器	坏	140	90	36	6	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	6—92G RP2	底部ヘラ削り、ナデ
	81	須恵器	坏	(138)	(90)	37	5	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	6—89G	
	82	須恵器	坏	(112)	62	47	4		ロクロ	ロクロ	6—91G	外面下部回転ヘラ削り、底面回転ヘラ削り
	83	須恵器	高台付坏		76	(33)	6	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	10—89G	外面下部回転ヘラ削り
	84	須恵器	高台付坏	(124)	(78)	48	4		ロクロ	ロクロ	6—89G	
	85	須恵器	高台付坏	(128)	(80)	59	5		ロクロ	ロクロ	6—90G	生焼け状態
	86	須恵器	稜碗		90	(25)	5	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	6—90G	外面下部回転ヘラ削り
	87	須恵器	稜碗?		84	(19)	4		ロクロ	ロクロ	5—92G	外面下部回転ヘラ削り、生焼け状態
	88	須恵器	甕				16		平行タタキ目	青海波アテ痕	6—91G	
第51図	89	須恵器	甕				7		平行タタキ目	青海波アテ痕	6—89G	
	90	須恵器	甕				15		平行タタキ目	青海波アテ痕	6—91G	
	91	須恵器	甕				14		平行タタキ目	アテ痕	6—89G	
	92	須恵器	甕				14		平行タタキ目	アテ痕	X—0	
	93	須恵器	甕				12		平行タタキ目	アテ痕	6—90G	内面生焼け状態
	94	須恵器	壺			(29)	8		ロクロ	ロクロ	6—89G	内外面に自然釉
	95	土師器	甕	310		(45)	7		ロクロ	ロクロ	6—90G	
	96	土師器	甕	(184)		(110)	6		カキ目・タタキ		6—89G	
	97	土師器	甕	(294)		(63)	9		ロクロ・カキ目	カキ目	10—90G	
	98	土師器	甕	(212)		(106)	5		ロクロ	ロクロ	6—91G	
	99	珠洲系陶器	擂鉢				10		ロクロ	ロクロ・卸目	16—90G	片口、内面口縁部に波状沈線文

4　調査のまとめ

今回の調査は、東北横断自動車道酒田線建設工事に伴う、高松Ⅲ遺跡の発掘調査である。調査によって得られた成果を述べる。

高松Ⅲ遺跡は山形県寒河江市大字柴橋字高松に所在し、最上川左岸の河岸段丘に立地する。今回の発掘調査は東西約300m・南北約120mの遺跡範囲内の遺跡にかかる事業実施部分、約1,000㎡を対象に実施した。調査部分は遺跡の東端にあたる。調査の結果、奈良・平安時代の集落跡であることが明らかになった。出土遺物は整理箱にして22箱出土した。

検出遺構は、竪穴住居１棟・掘立柱建物跡１棟・井戸跡１基・土坑４基・柵列跡１条・溝跡３条・性格不明遺構８基などである。調査区内での遺構分布は、東側に集中し西側は希薄になる傾向がみられた。しかし、集落の範囲は調査区のさらに西側に広がることから、遺跡の中心は西側の未調査区部分に存在すると推測される。

特徴的な遺構としては、柱根が出土したＳＥ３がある。ＳＥ３は柱穴とも考えられたが、対応する他の柱穴が検出されなかったことと現在も水が湧き出すことなどから井戸跡と推測される。そして、柱根は井戸跡を廃絶する際に置いたものと思われる。但し、この柱根を使用していた建物の存在が問題となるが、西側の未調査区部分にその痕跡があると考えられる。

また、多量の土器が出土し捨て場様を呈するＳＸ18からは、一定規模をもつ集落の存在が推測できる。ＳＴ１はＳＸ18の土器出土量からみた場合規模が小さく、集落の主体部は西側の未調査区にあると考える方が自然である。

各遺構の所属時期は、出土土器の形態・調整技法から、ＳＴ１とＳＸ14・15・18・ＳＥ３が８世紀第４四半期頃と考えられる。ＳＫ２とＳＫ32の土器は、これよりやや新しい９世紀前半頃と推定される。包含層の土器は８世紀末葉の土器を主に、８世紀後半の土器もみられる。

従って、本遺跡の集落は概ね８世紀後半（第３四半期）から９世紀初頭（第１四半期）に営まれていたと推測される。但し、今回の調査が遺跡東端の1,000㎡という遺跡範囲の一部分ということを考慮すると、集落の継続時期については未調査区を含めての検討が必要である。

土器について、須恵器の器種には供膳形態の蓋・坏・高台付坏・稜碗と貯蔵形態の壺・甕が出土した。蓋は天井部に回転ヘラ削りを施し、器高がやや高いものが大半を占める。また、ツマミが疑宝珠形となるものも１点出土している。坏は底部切り離しが回転ヘラ切りで、底径・口径が大きく身が浅く口縁部が直線的に立ち上がるものと、底径がやや小さくなり身がやや深くなり、口縁部が緩やかに外反しているものが多くみられる。土師器の器種は煮沸形態の鉢・甕・堝が出土し、二次加熱を受けているものが多い。鉢には、底部切り離しが静止糸切りと回転糸切りになるものが各１点みられた。全てロクロ整形で、口縁部が外反するものが多い。甕もロクロ整形が多く、外面にタタキ目がみられるものも含まれる。堝は、体部が直線的に立ち上がるものと、丸みをもつものの２タイプがみられた。

柱根は、側面の削り跡や方形の貫通し穴、底面の加工などから、建造物の柱に使用されていたものである。酒田市本川遺跡（文献３）のＥＢ２から同様の柱根の出土がある。

縄文時代の遺物は、石器toolが２点（石匙・削器）と剝片が出土した。また、中世の珠洲系陶

器が１点みられた。しかし、石器に伴う縄文土器の出土が無かったことと遺構も検出されなかったこと、そして、珠洲系陶器は包含層の出土ということから、二次的混入と考えられる。但し、本遺跡の南東300mに位置する高松II遺跡からも縄文土器を伴わない石器群が出土し、14～15世紀の中世の集落跡が確認されていることから高松II遺跡との関連も推測される。

〈参考文献〉

（１） 新庄市教育委員会　1982「乱馬堂遺跡発掘調査報告書」　新庄市教育委員会報告書６
（２） 日本貿易陶磁研究会　1982「貿易陶磁研究No２」
（３） 山形県教育委員会　1989「手蔵田5・6・9遺跡　本川遺跡発掘調査報告書」　山形県埋蔵文化財調査報告書第138集
（４） 山形県教育委員会　1990「分布調査報告書(17)」　山形県埋蔵文化財調査報告書第148集
（５） 山形県教育委員会　1992「平野山古窯跡群第12地点遺跡発掘調査報告書」　山形県埋蔵文化財調査報告書第178集
（６） 山形県教育委員会　1992「高瀬山K遺跡第３次発掘調査報告書」　山形県埋蔵文化財調査報告書第179集
（７） (財)山形県埋蔵文化財センター　1994「押切遺跡発掘調査報告書」　山形県埋蔵文化財センター調査報告書第13集
（８） 山形県教育委員会　1995「分布調査報告書(22)」　山形県埋蔵文化財調査報告書第195集
（９） 寒河江市　1995「寒河江市史上巻（原始・古代・中世編）」
(10) (財)山形県埋蔵文化財センター　1995「お仲間林遺跡発掘調査報告書」　山形県埋蔵文化財センター調査報告書第20集
(11) (財)山形県埋蔵文化財センター　1998「平野山古窯跡群第12地点遺跡第２次発掘調査報告書」　山形県埋蔵文化財センター調査報告書第52集
(12) (財)山形県埋蔵文化財センター　1998「山居遺跡発掘調査報告書」　山形県埋蔵文化財センター調査報告書第53集
(13) 第25回古代城柵官衙遺跡検討会事務局　1999「第25回古代城柵官衙遺跡検討会資料」

報告書抄録

ふりがな	たかまつに・さんいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書名	高松II・III遺跡発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	山形県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第61集
編著者名	氏家信行
編集機関	財団法人　山形県埋蔵文化財センター
所在地	〒999-3161　山形県上山市弁天二丁目15番1号　TEL023-672-5301
発行年月日	1999年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
高松II遺跡 (たかまつにいせき)	山形県寒河江市 大字柴橋字高松 (やまがたけんさがえし おおあざしばはしあざたかまつ)	6206	平成元年度登録	38度21分22秒	140度18分09秒	19950807～19951027	6,000	東北横断自動車道酒田線（寒河江～西川間）建設工事
高松III遺跡 (たかまつさんいせき)	山形県寒河江市 大字柴橋字高松 (やまがたけんさがえし おおあざしばはしあざたかまつ)	6206	平成元年度登録	38度21分12秒	140度29分42秒	19950710～19950811	1,000	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
高松II遺跡 (たかまつにいせき)	包蔵地	縄文時代		石器(尖頭器・石錐・石匙・石篦・掻器・削器・加工痕のある剝片・砥石)	二次的混入と考えられるが、溝跡からまとまって尖頭器が出土した。
	集落跡	平安時代(9世紀)	竪穴住居 1 溝 1	土師器(坏・鉢・甕) 須恵器(蓋・坏・高台付坏) ミニチュア土器 9 土製品 6	竪穴住居から多くの土器と共に祭祀に使用したと考えられるミニチュア土器・土製品が出土した。
	集落跡	中世(14～15世紀)	竪穴住居 5 掘立柱建物跡 2 井戸 2 土坑 16 溝 5 河川 1	青磁(碗7・梅瓶1) 青白磁1 陶器(甕・擂鉢・壺) 木製品(皿2・碗1・下駄1)	本県でも検出例の少ない竪穴住居の他、遺物を含む土坑など中世の集落跡が確認された。 (総出土箱数：45)
高松III遺跡 (たかまつさんいせき)	集落跡	奈良・平安時代(8～9世紀)	竪穴住居 1 掘立柱建物跡 1 井戸 1 土坑 4 柵列 1 溝 3 性格不明遺構 8	土師器(鉢・甕・鍋) 須恵器(蓋・坏・高台付坏・稜碗) 土製品(紡錘車) 柱根	捨て場様の土坑、直径50cmを測る柱根が出土した井戸が検出された。 (総出土箱数：22)

図　　版

図版 1

調査区空中写真（真上から）

作業風景（南東から）

作業風景（北西から）

調査風景（南東から）

遺構検出全景（北から）

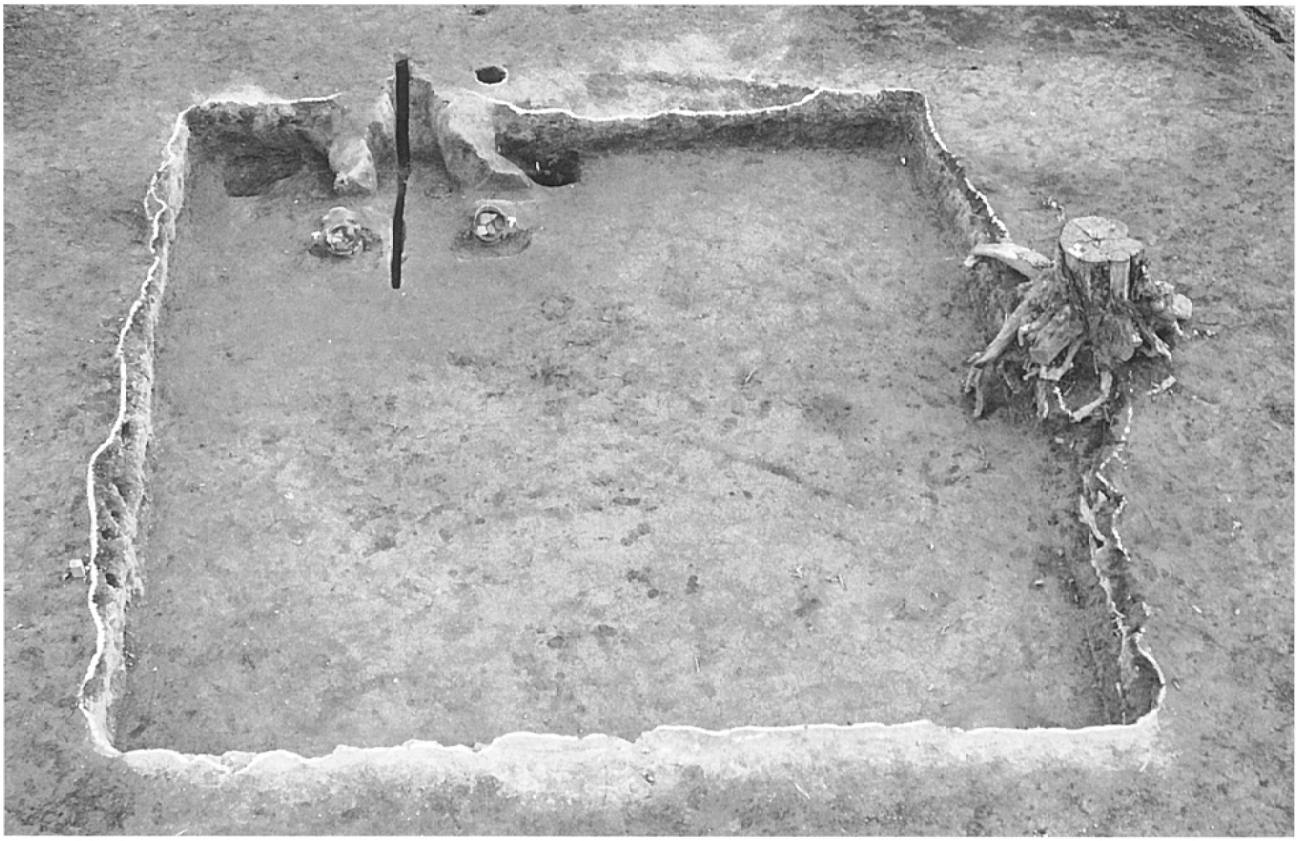
図版２

ST25 土層断面（南東から）

ST25 遺物出土状況（北から）

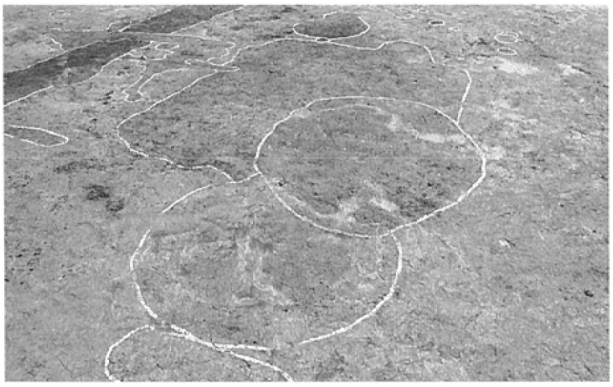
ST25-EL3 土層断面（東から）

ST25-EL3 精査状況（北から）

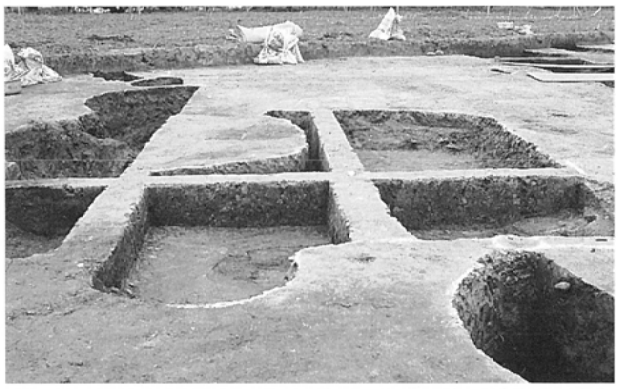


ST25 完掘状況（北から）

図版 3



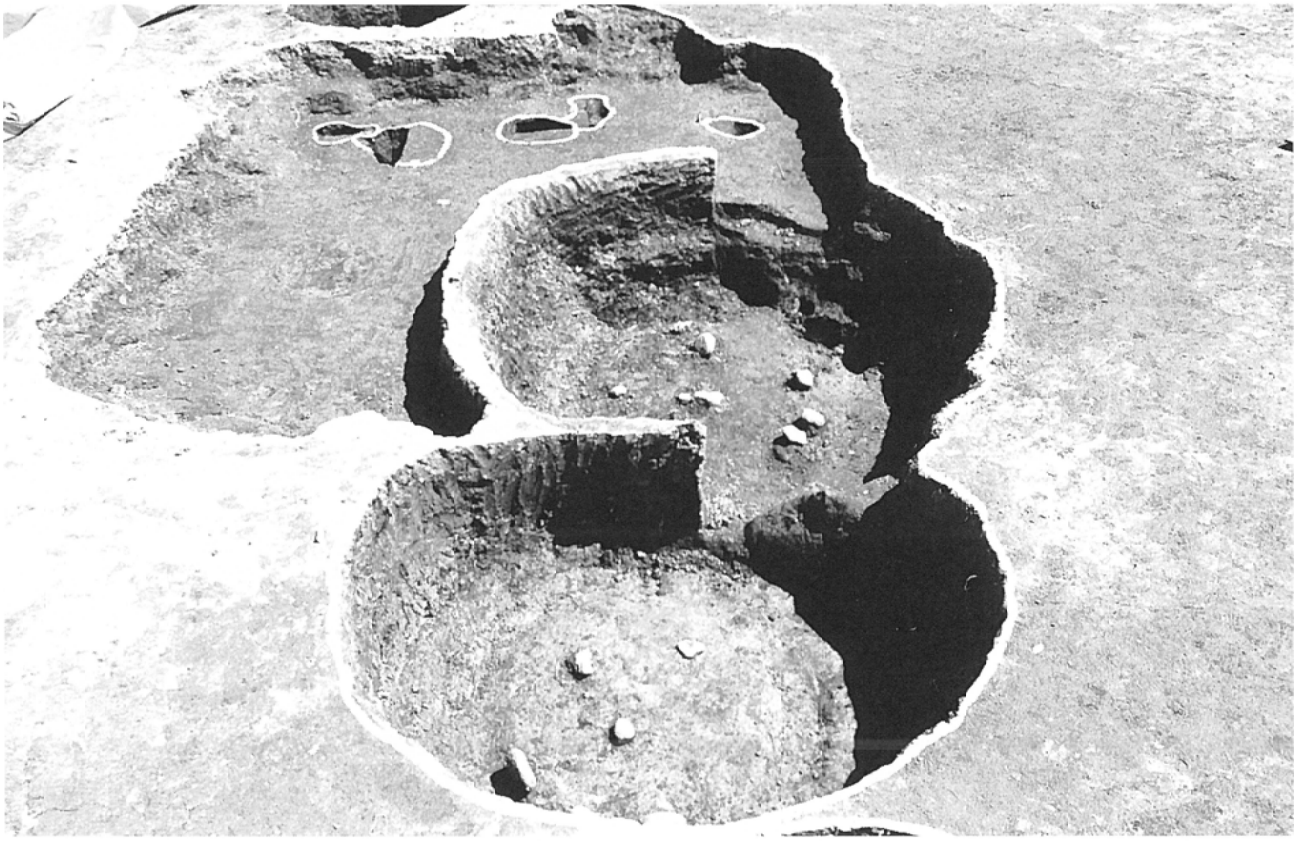
ST1・SK9・10 検出状況（西から）



ST1 土層断面（東から）

SK9 土層断面（南から）

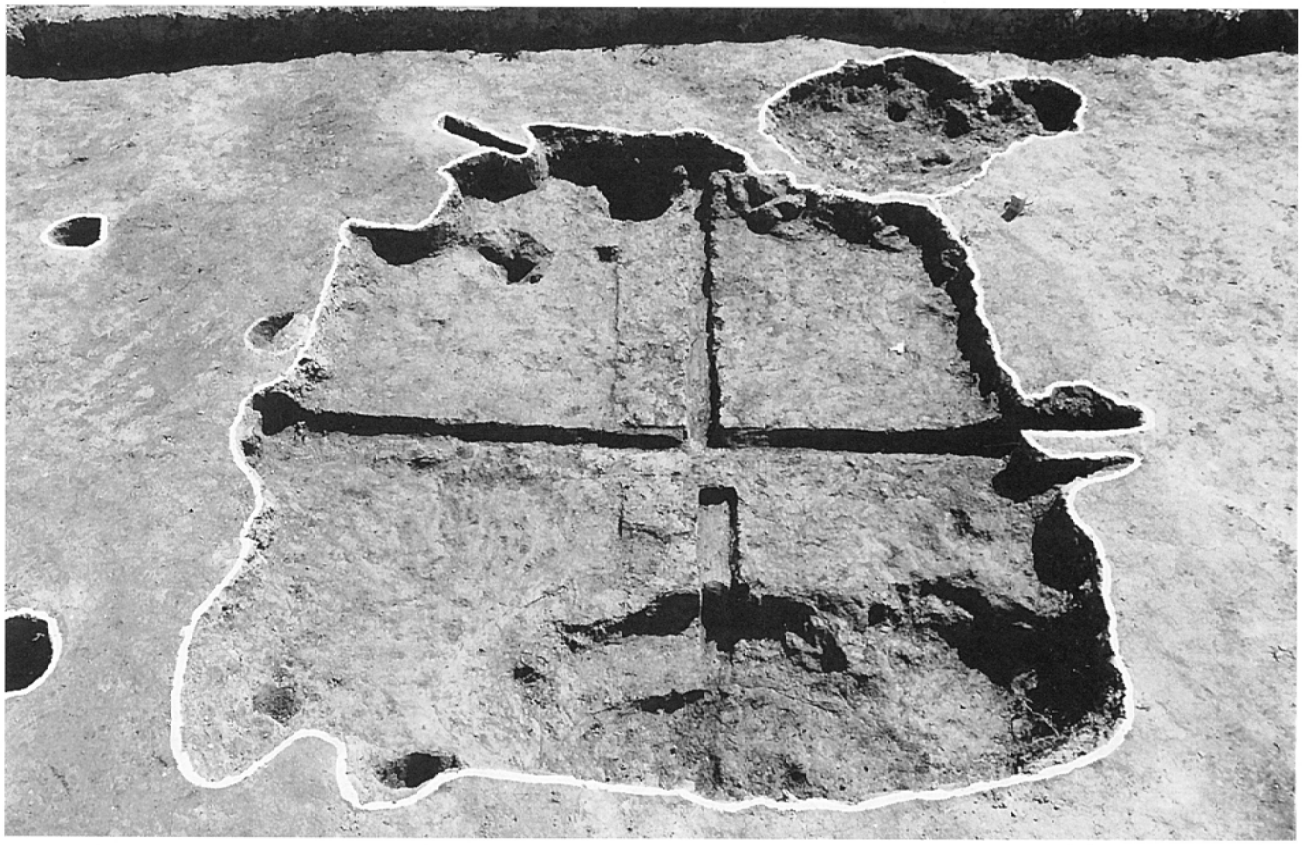
SK10 土層断面（南東から）



ST1・SK9・10 完掘状況（西から）

図版４

ST33 土層断面（南西から）



ST33 完掘状況（西から）

図版 5

ST78 土層断面（南東から）

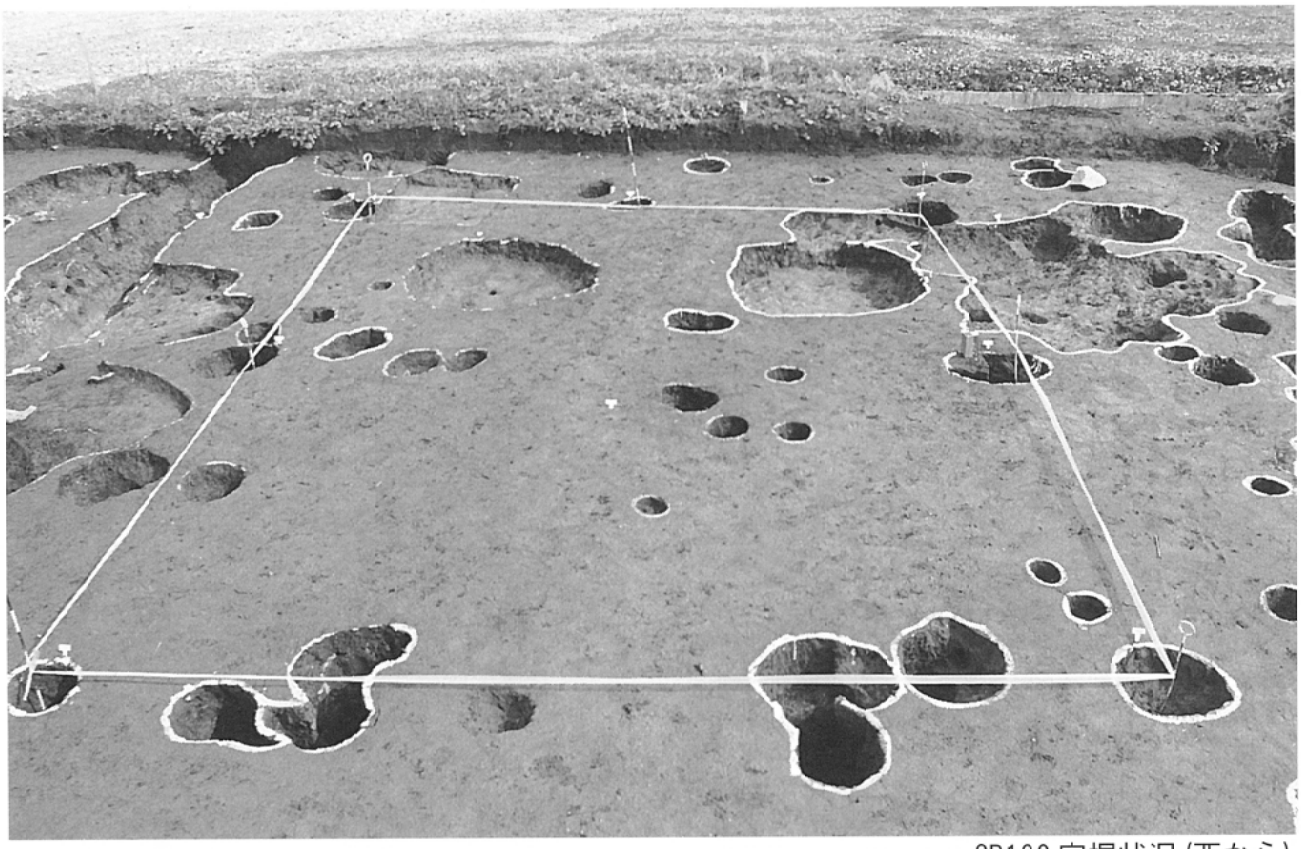
ST78 完掘状況（西から）

図版6

ST80 土層断面（北から）

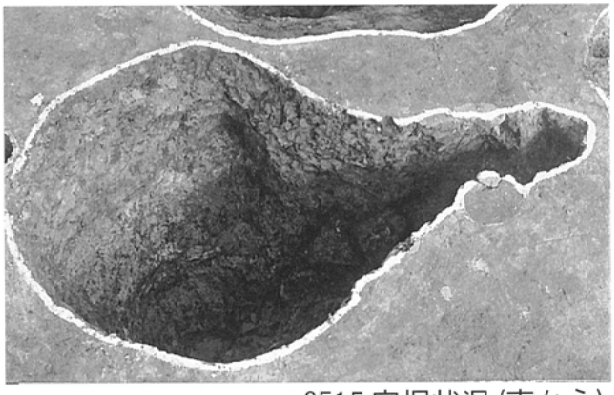
ST80 完掘状況（北から）

図版 7



SB130 完掘状況（西から）

SE15 土層断面（南から）



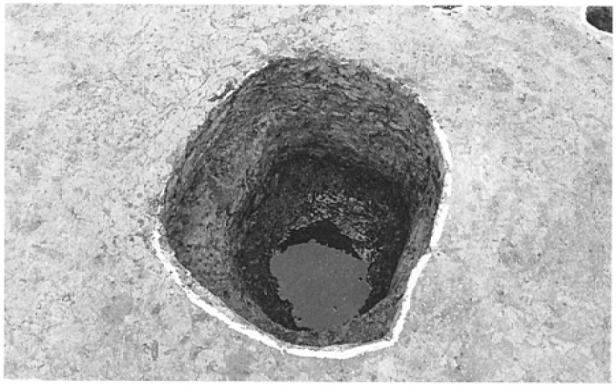
SE15 完掘状況（南から）

SE16 土層断面（南から）

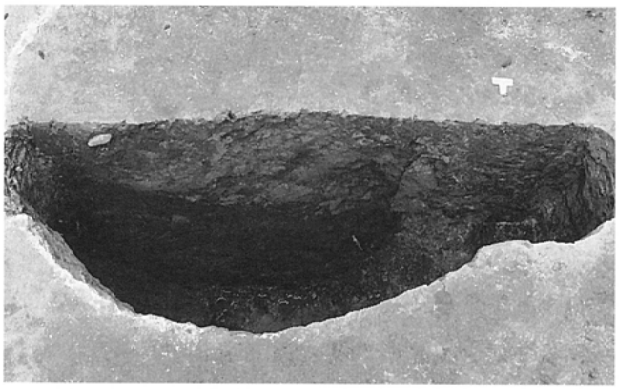
SE16 完掘状況（南から）

図版８

SK4 土層断面（南東から）

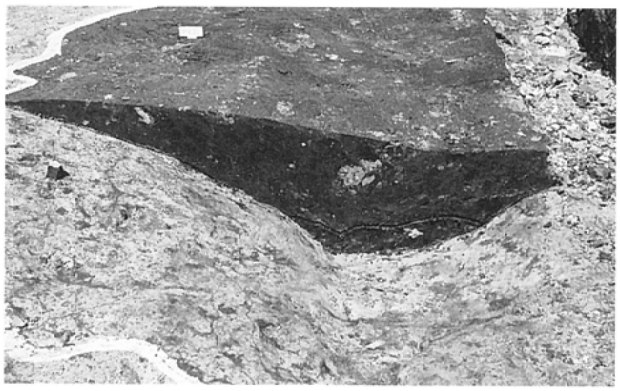


SK4 完堀状況（南から）

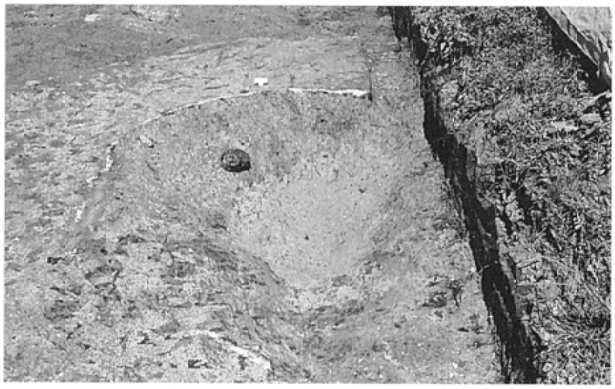


SK8・SP38 土層断面（南から）

SK8・SP38 完掘状況（南から）



SK66 土層断面（南から）

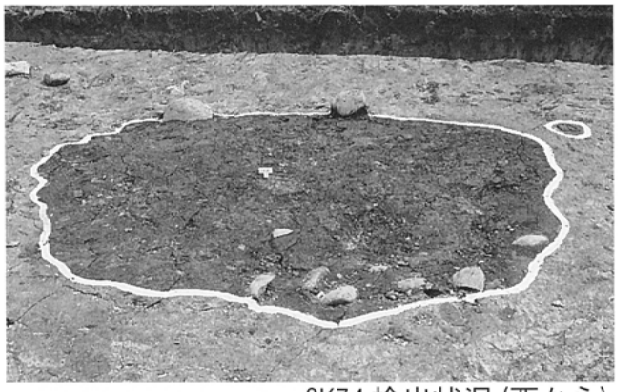


SK66 完堀状況（南から）

SK7 完堀状況（南東から）

SK18 土層断面（南東から）

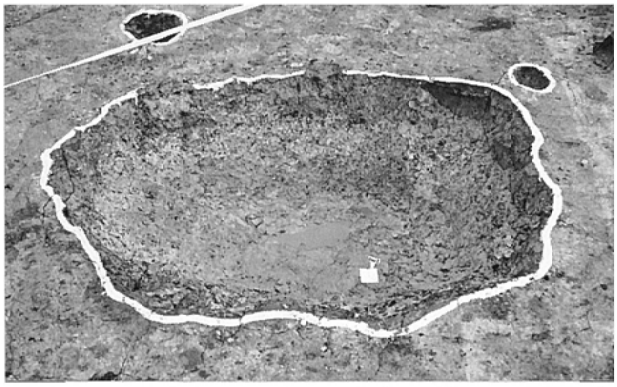
図版 9



SK74 検出状況（西から）

SK74 土層断面（西から）

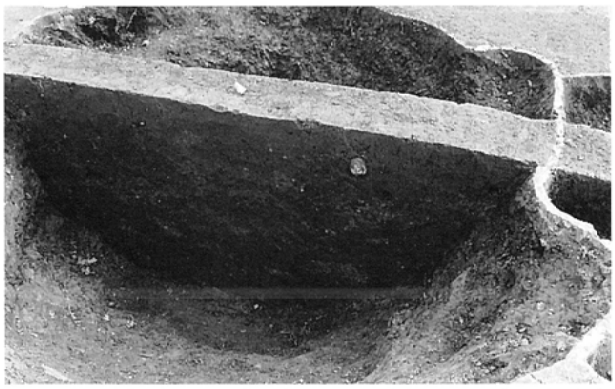
SK74 漆皿出土状況（西から）



SK74 完堀状況（西から）

SK75 木製品出土状況（南東から）

SK75 完堀状況（南東から）



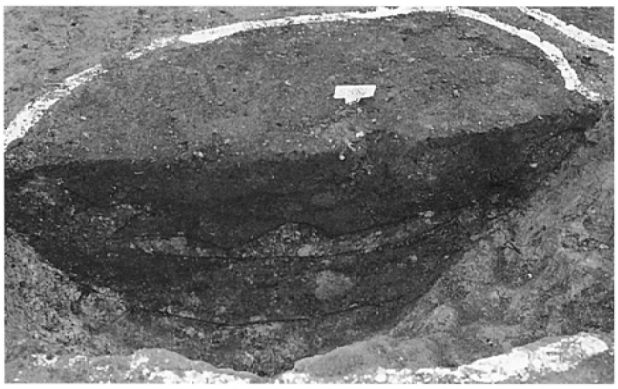
SK82 土層断面（西から）

SK82 完堀状況（北から）

図版10

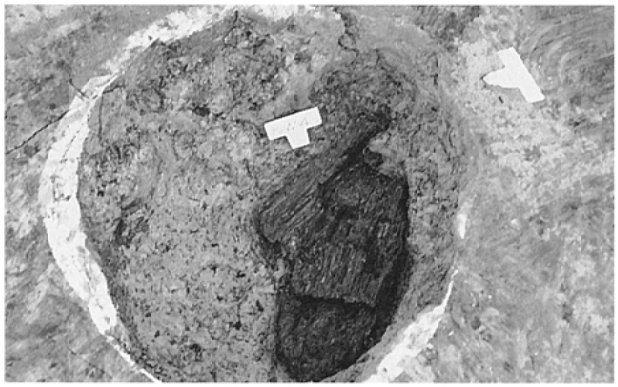
SK111 土層断面（東から）

SK111 焼土塊出土状況（北から）



SK86 土層断面（北から）

SK106 完堀状況（南から）



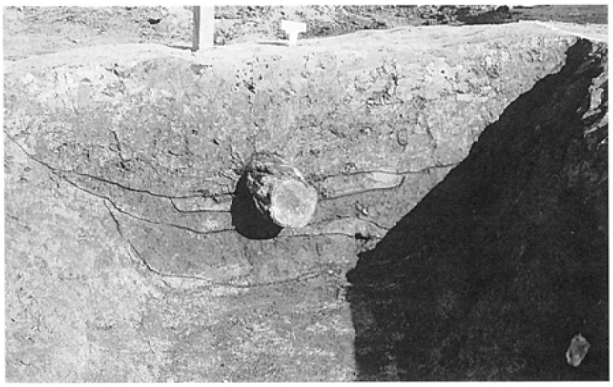
SP69 下駄出土状況（南東から）

SK104 木製品出土状況（南から）

SX65 土層断面（南西から）

SX65 完堀状況（南西から）

図版11



SD22　A-A’土層断面(西から)

SD22　B-B’土層断面(西から)

SD22　D-D’土層断面(西から)

SD22 完掘状況(西から)

SD23　A-A’土層断面(西から)

SD23　B-B’土層断面(西から)

SD23　C-C’土層断面(西から)

SD23 完掘状況(東から)

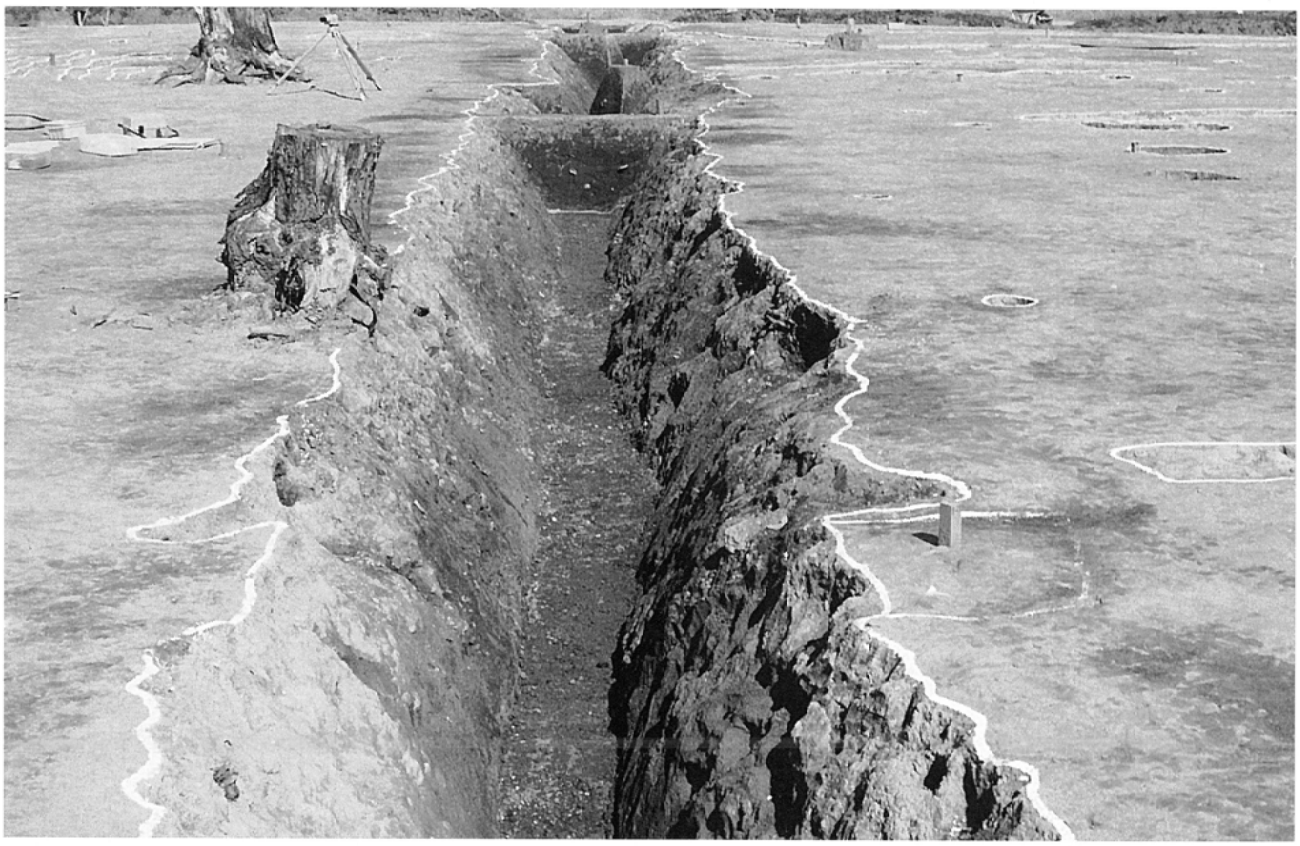
図版12

SD31　A-A’　土層断面(南から)

SD31　B-B’　土層断面(南から)

SD31　C-C’　土層断面(南から)

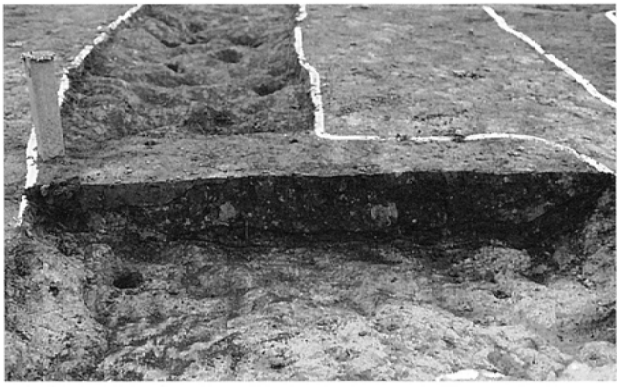
SD31　D-D’　土層断面(南から)



SD31 完堀状況(南から)

図版13

SD96　A'-A 土層断面(東から)

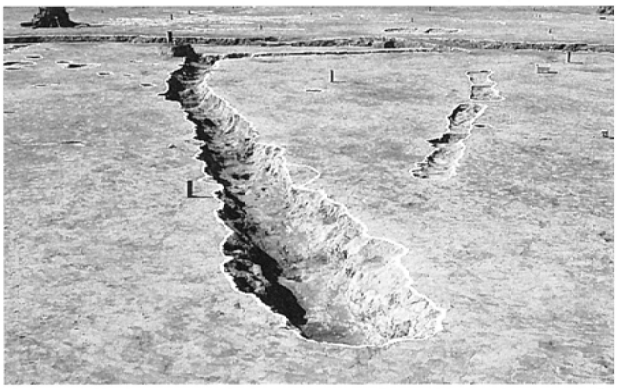


SD96　B'-B 土層断面(東から)

SD96 完堀状況(東から)

SD97　A'-A 土層断面(東から)

SD97　B'-B 土層断面(東から)



SD97 完堀状況(西から)

SG119 土層断面(西から)

SG119 完堀状況(東から)

図版 14

A 区完堀全景（北西から）

B 区完堀全景（北から）

C 区北端完堀全景（南から）

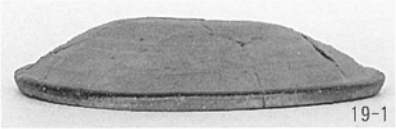
トレンチ完堀状況（南から）

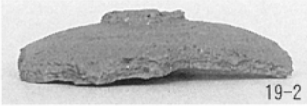
空中写真撮影状況

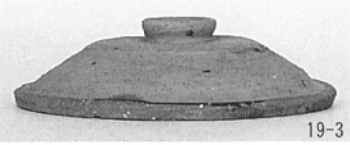
調査説明会

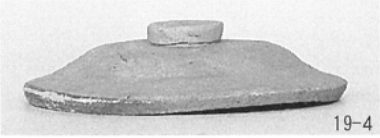
調査説明会

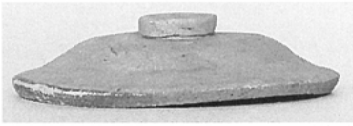
図版 15


19-1

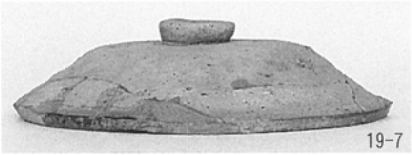

19-2


19-3

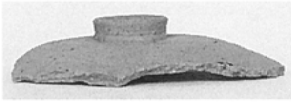

19-4

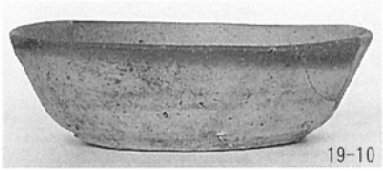

19-5

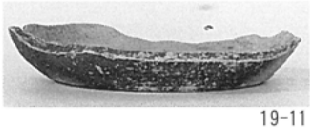
19-6

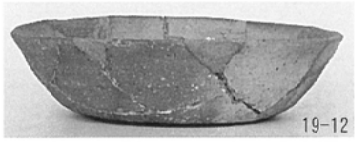

19-7

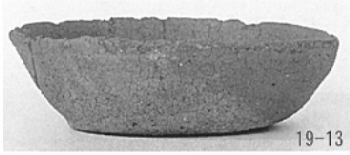
19-8

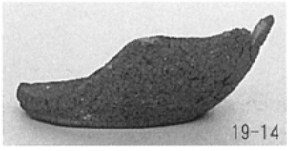

19-9


19-10


19-11

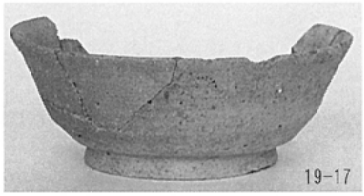

19-12

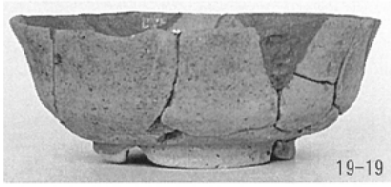

19-13

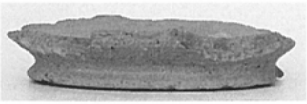

19-14

19-15

19-16


19-17


19-19


19-18

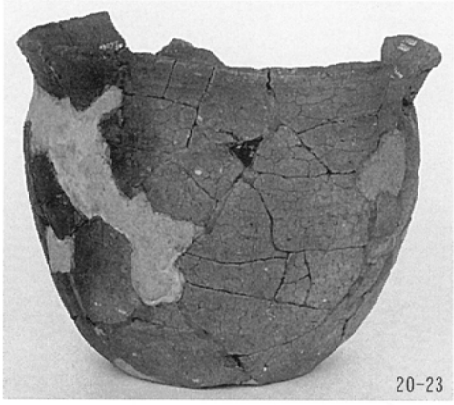
19-20

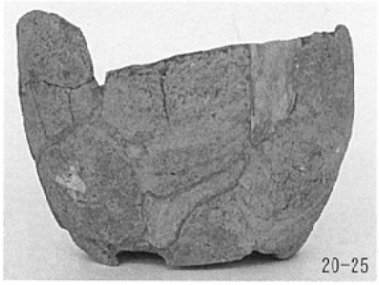
20-21

出土土器 (1)

図版 16

20-22


20-23


20-25

20-24

20-26

20-27

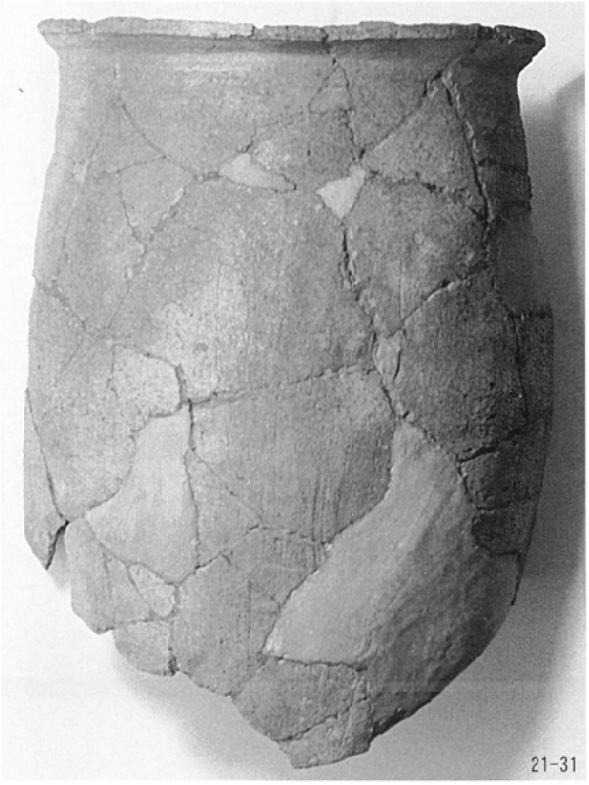
20-28

出土土器 (2)

図版 17

21-29

21-30


21-31

21-32

出土土器 (3)

図版 18

22-33

22-34

22-35

22-37

22-38

22-39

23-41

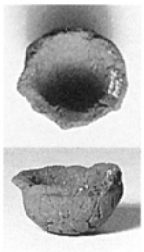
23-40 23-45

22-36

23-46

23-47

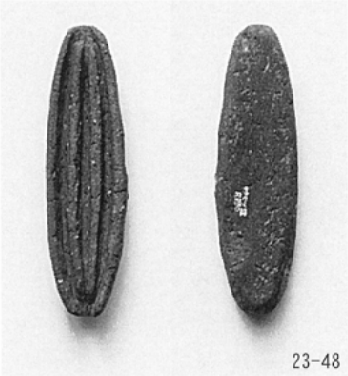
23-44


23-42

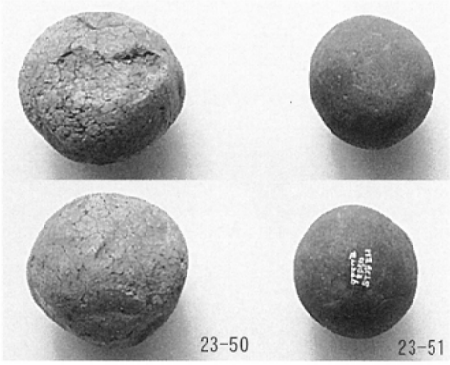
23-43

出土土器 (4)

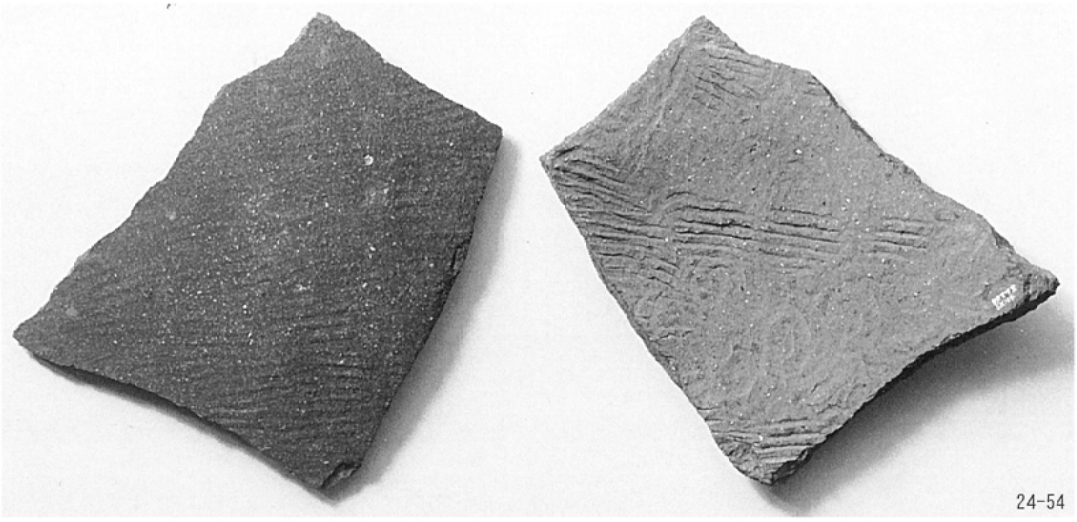
図版19


23-48

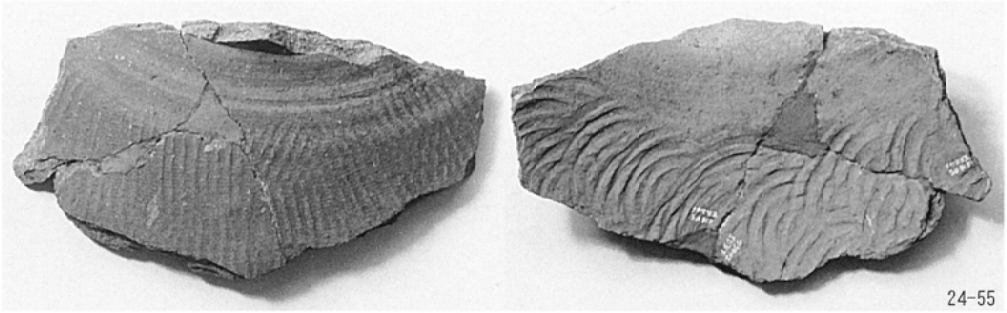
23-49


23-50 23-51

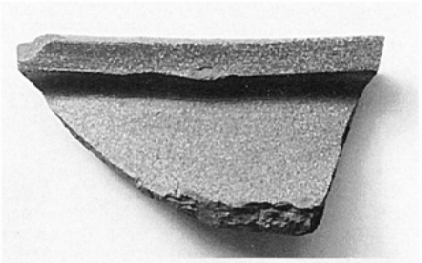
24-52

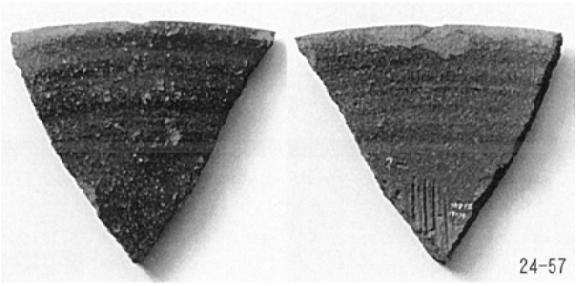

24-54

24-53


24-55

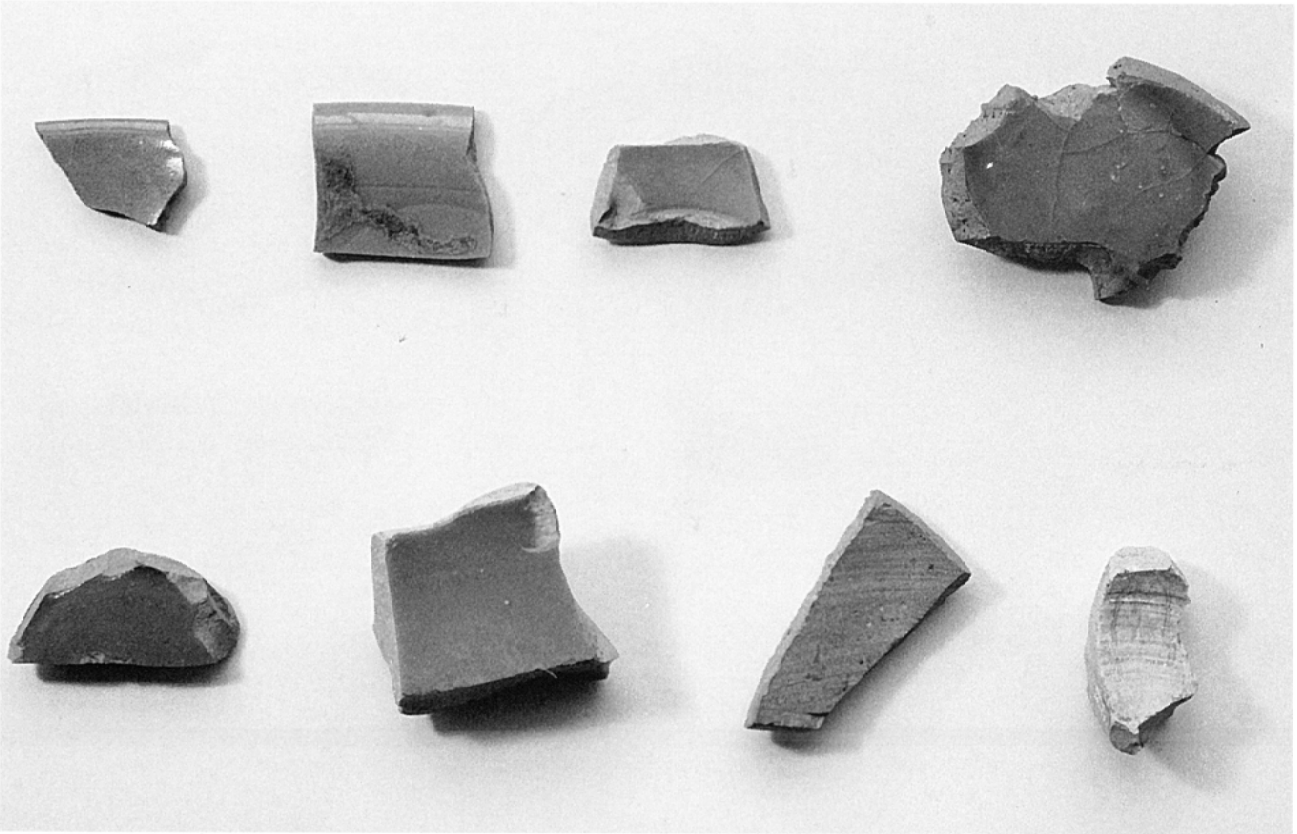
24-58


24-56


24-57

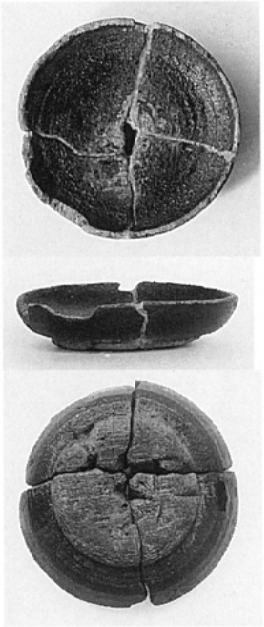
出土土器(5)・陶器

図版 20



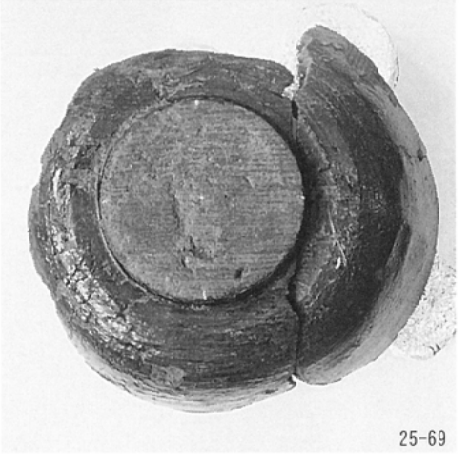
青磁・青白磁

図版21



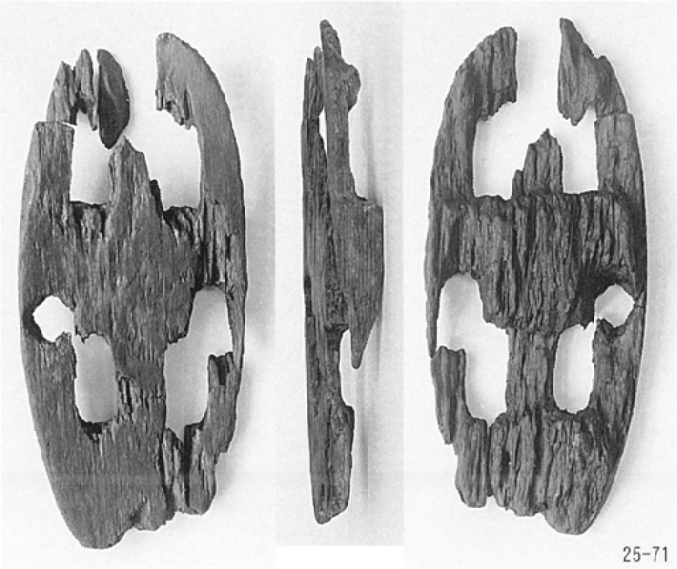
25-67

25-68



25-69

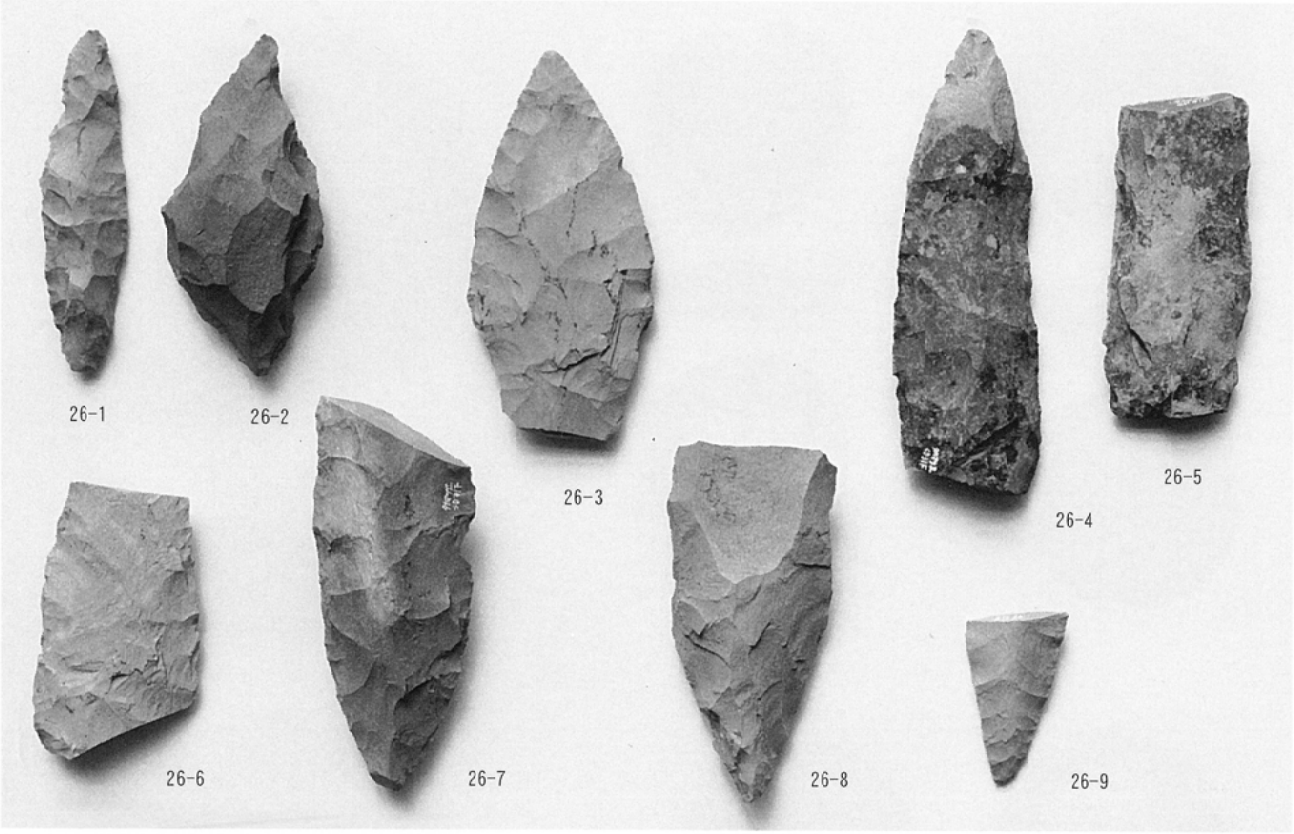
25-70

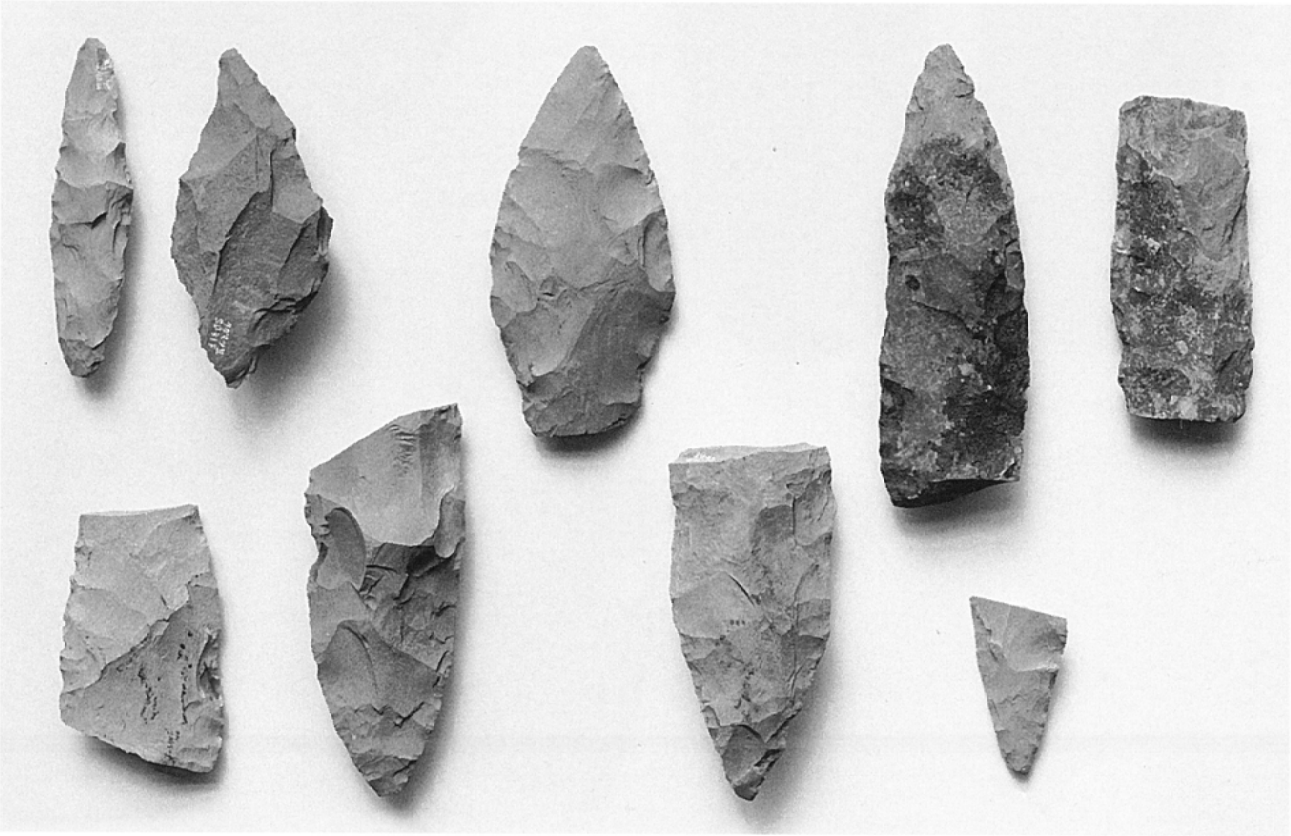


25-71

木製品

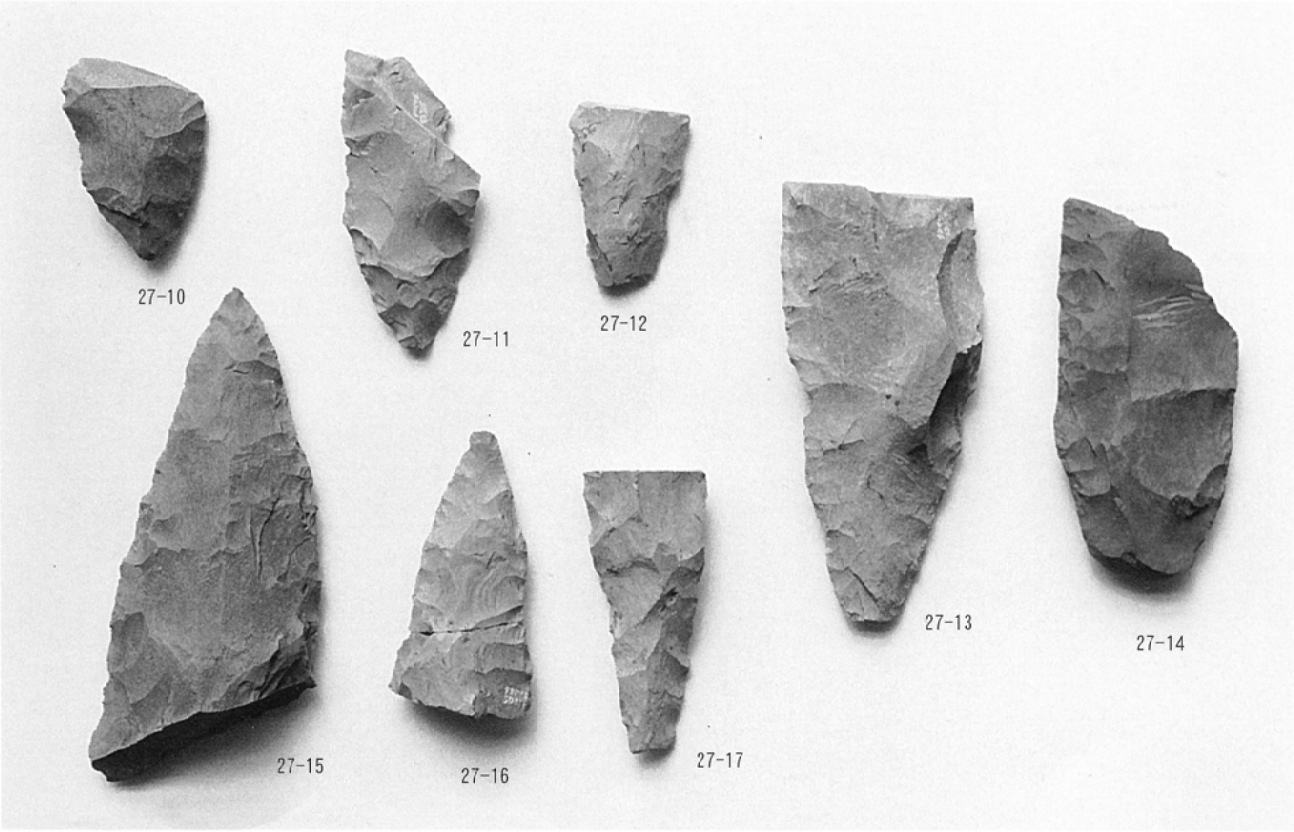
図版 22





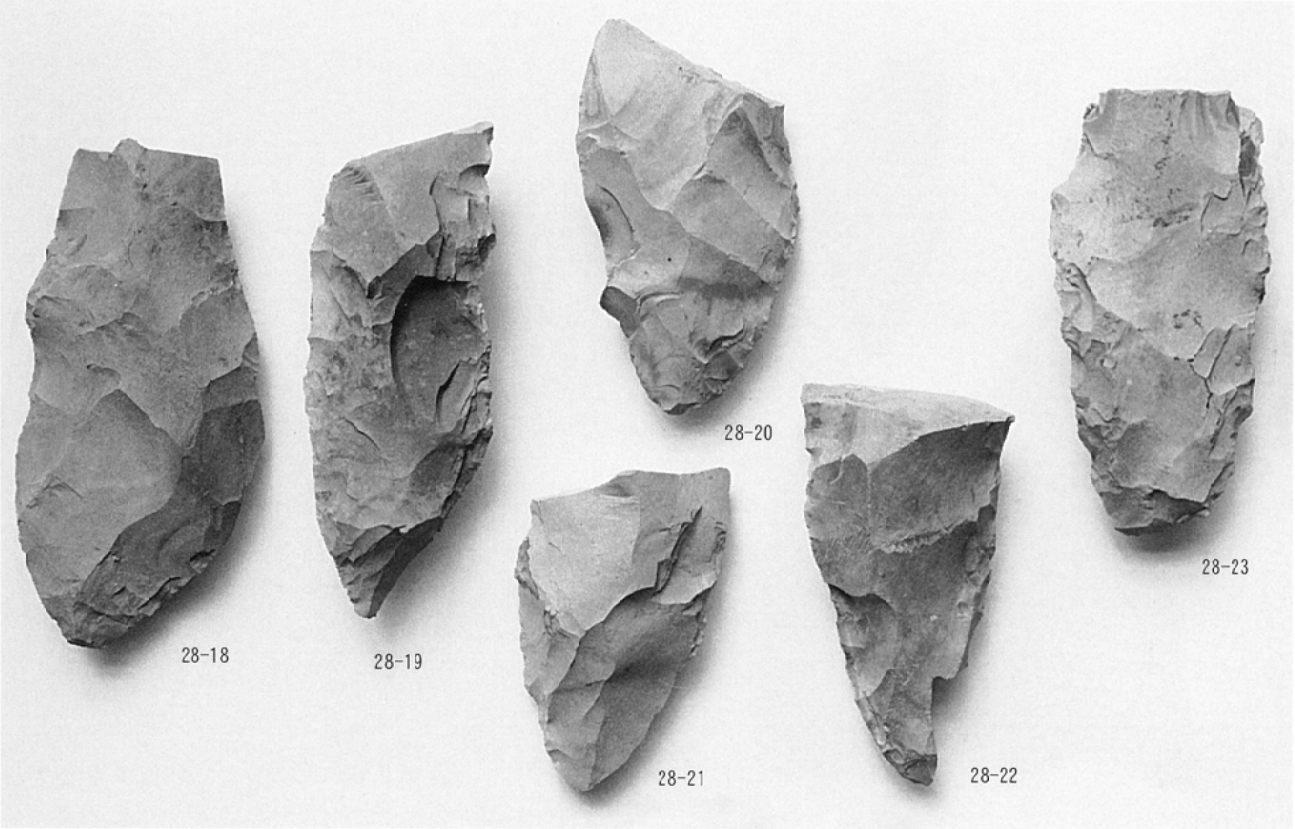
尖頭器 (1)

図版 23



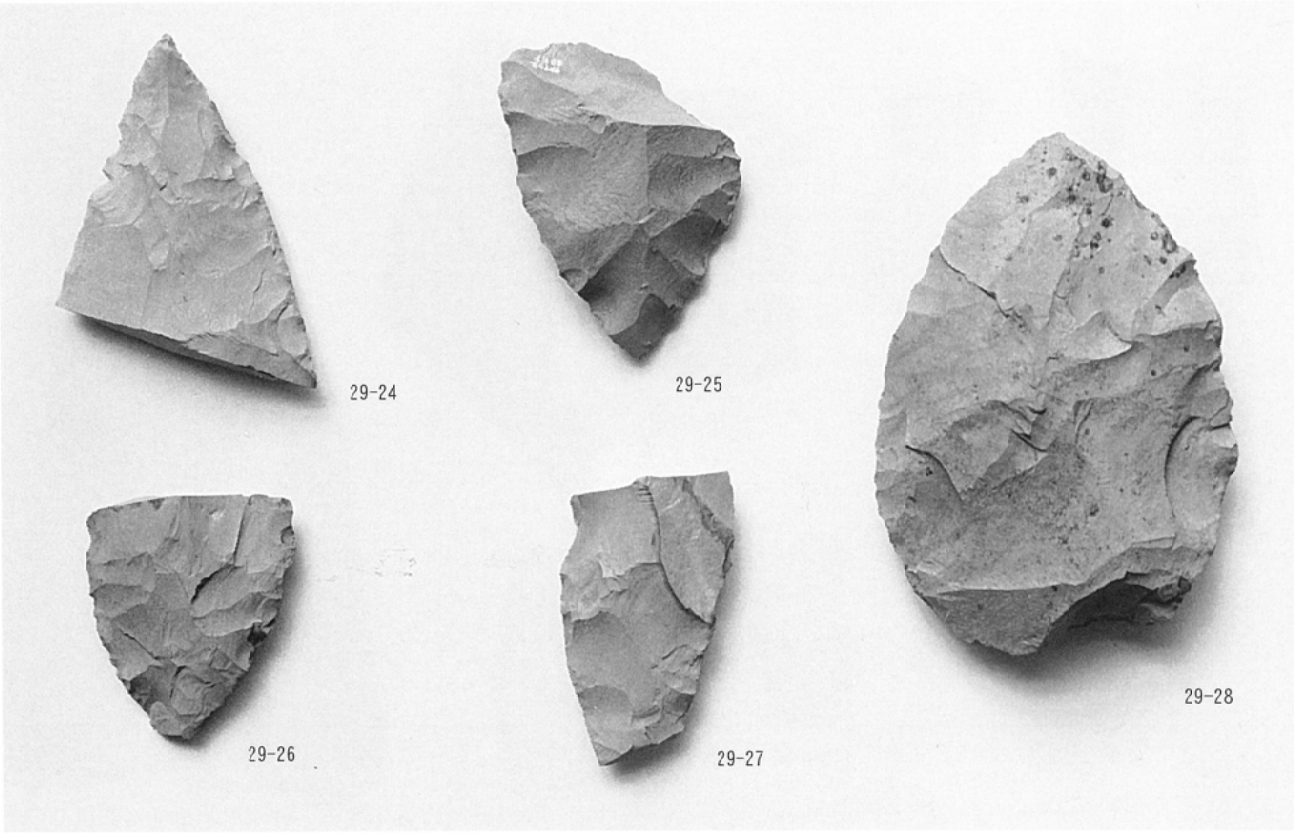
尖頭器 (2)

図版 24



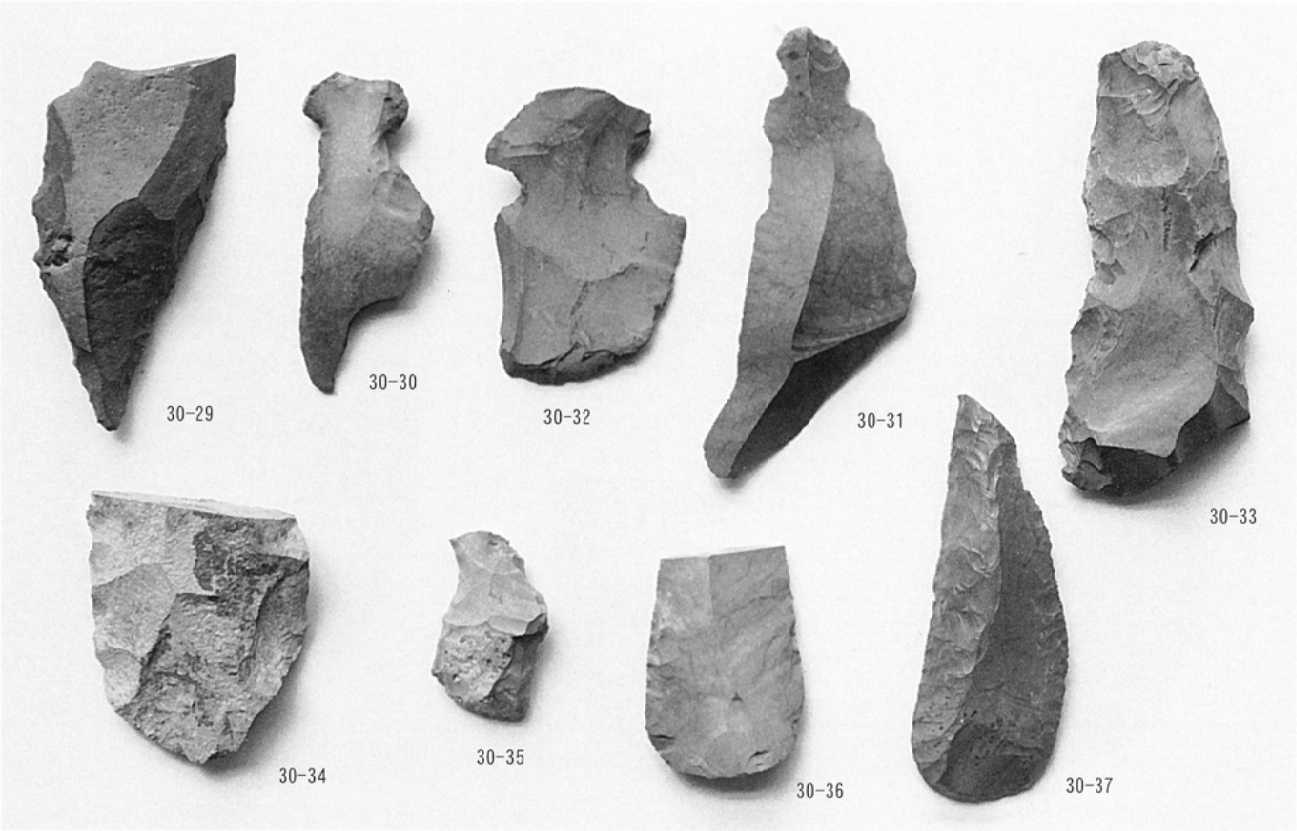
尖頭器 (3)

図版 25



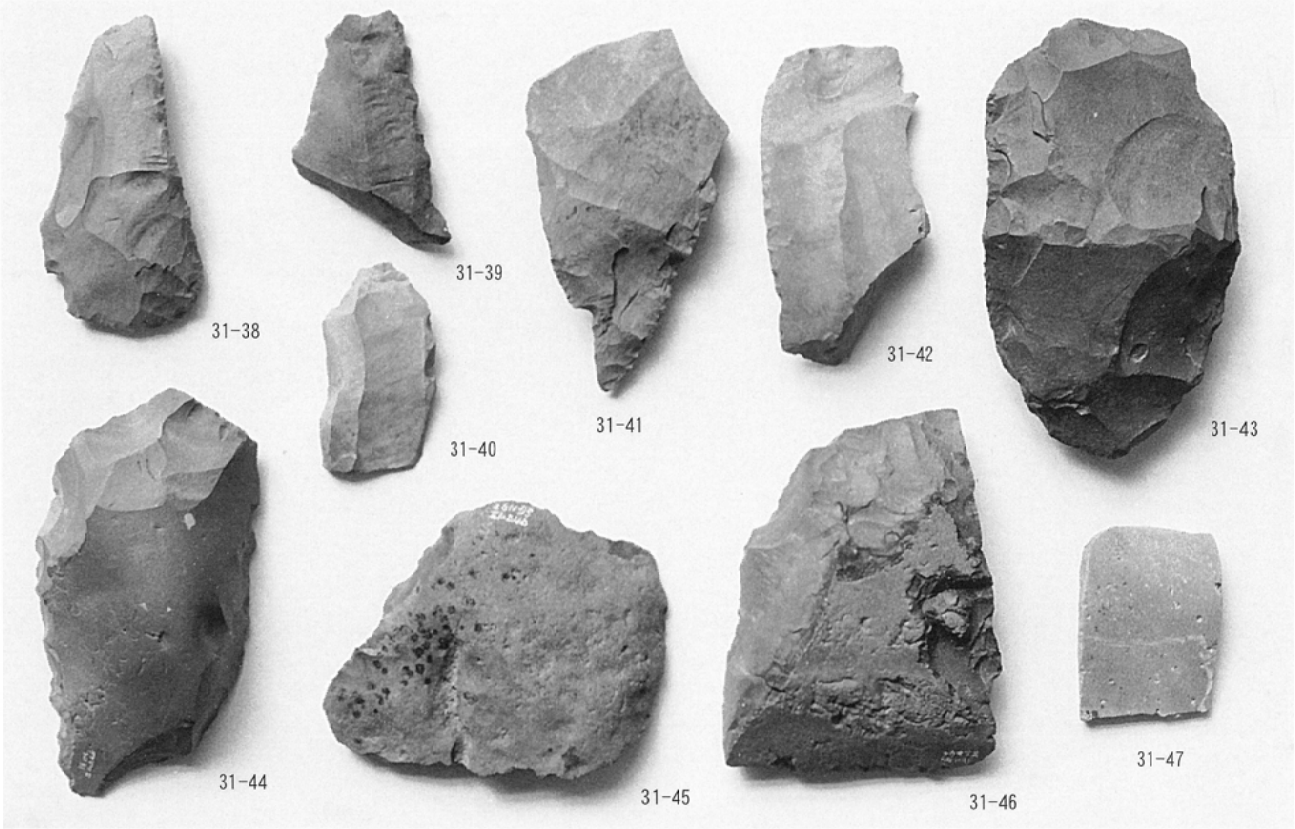
尖頭器 (4)

図版 26



石錐・石匙・石箆・掻器

図版 27



削器・加工痕のある剥片・砥石

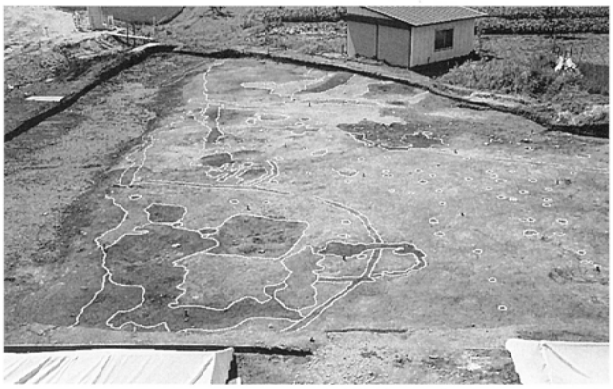
図版 28

俯瞰写真（南東から）

作業風景（南から）

作業風景（北東から）

調査風景（南西から）



遺構検出全景（北から）

図版 29

ST1 検出状況（西から）

ST1 土層断面（南から）

ST1 遺物出土状況（南西から）

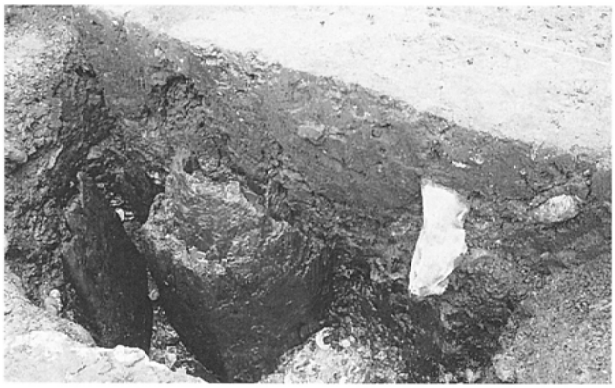
ST1 遺物出土状況（南東から）

ST1 完掘状況（南から）

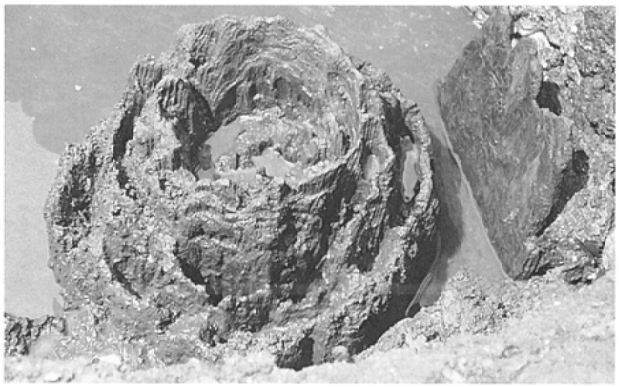
図版 30

SB20 完掘状況（南東から）

SE3 掘り下げ状況（西から）



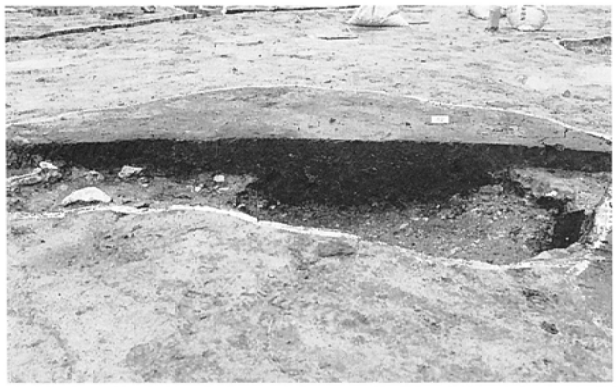
SE3 土層断面（南西から）



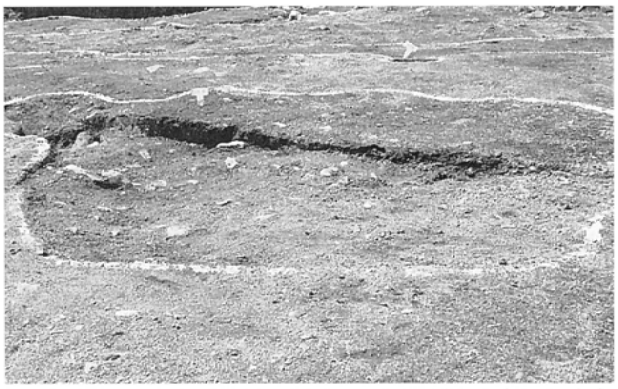
SE3 柱根出土状況（北西から）

SE3 完掘状況（北西から）

図版31



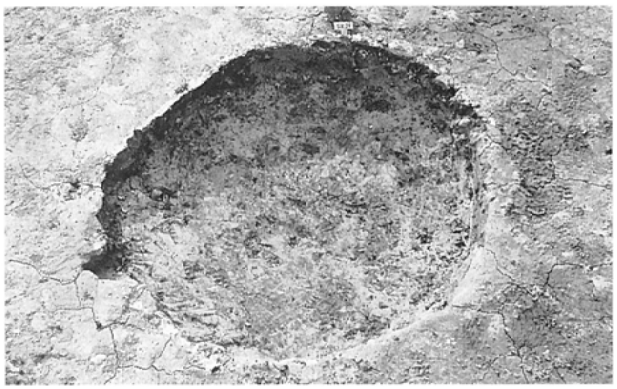
SK2 土層断面（東から）



SK4 土層断面（東から）

SK7 土層断面（南から）

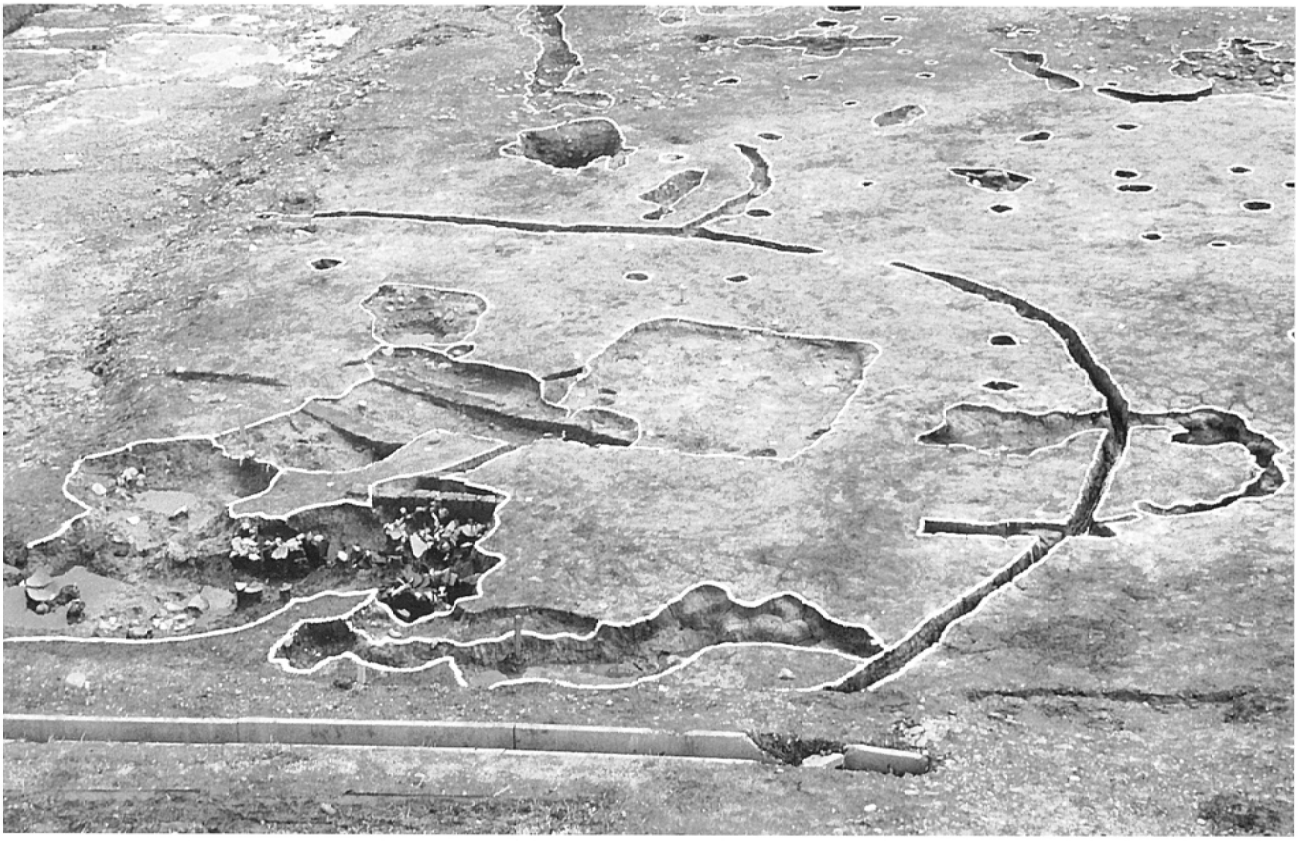
SK21 土層断面（南東から）



SK21 完掘状況（南東から）

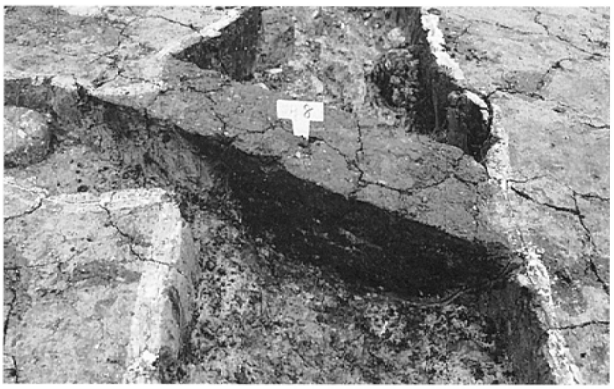
SK32 遺物出土状況（南から）

図版 32



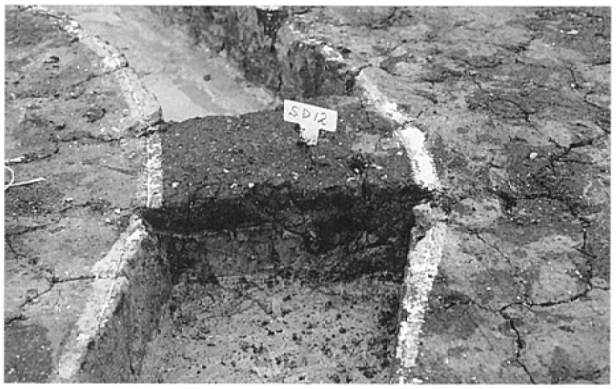
調査区北東部全景（北から）

SA8　A-A'土層断面（北西から）



SA8　E-E'土層断面（南から）

SD10　B'-B土層断面（北から）

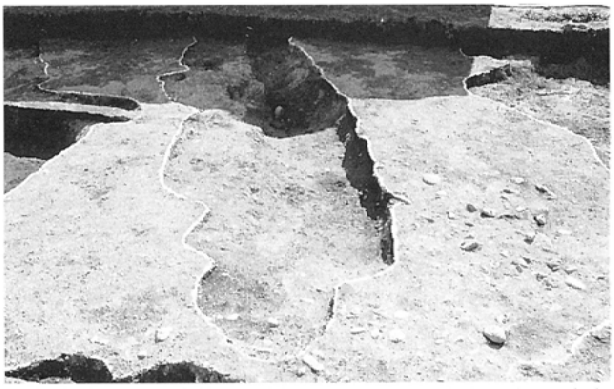


SD12土層断面（東から）

図版 33

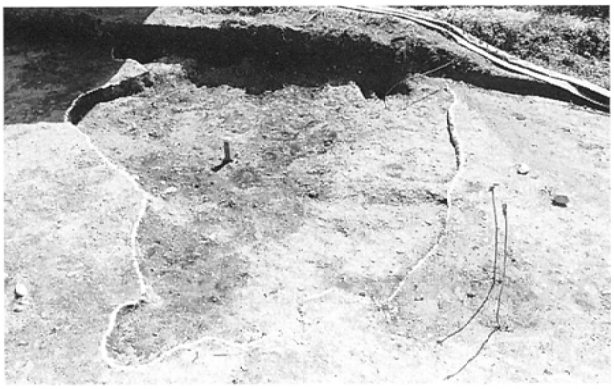
調査区南西部全景（北から）

SX15 土層断面（西から）



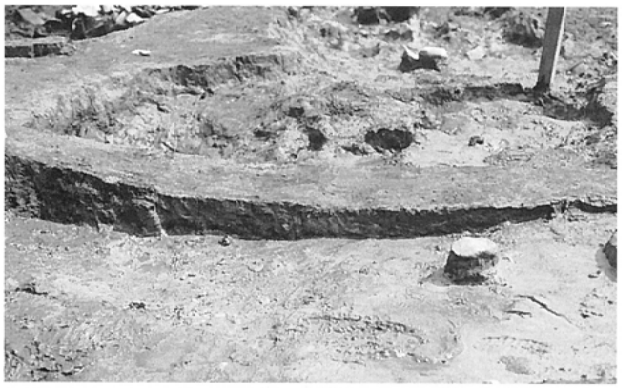
SX15 完掘状況（北東から）

SX16 土層断面（南西から）



SX16 完掘状況（東から）

図版 34



SX31 土層断面（西から）

SX14 土層断面（南東から）

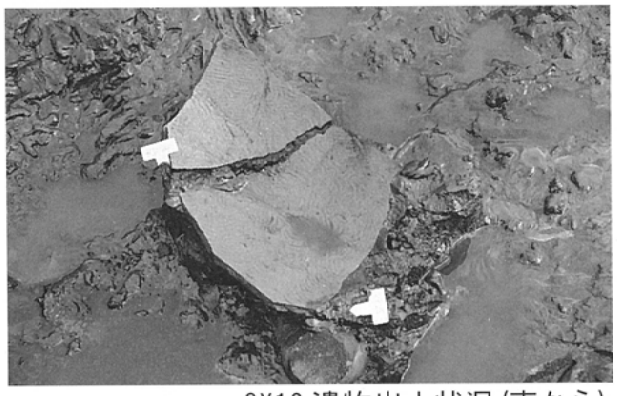
SX14 遺物出土状況（東から）

SX14 遺物出土状況（西から）

SX18 遺物出土状況（北西から）

SX18 土層断面（西から）

SX18 遺物出土状況（南西から）

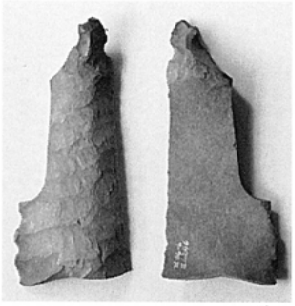


SX18 遺物出土状況（東から）

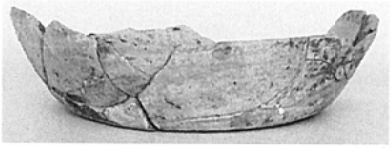
SX18 遺物出土状況（東から）

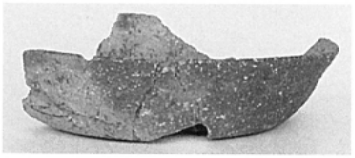
調査区完掘全景（北から）

図版 36


43-1

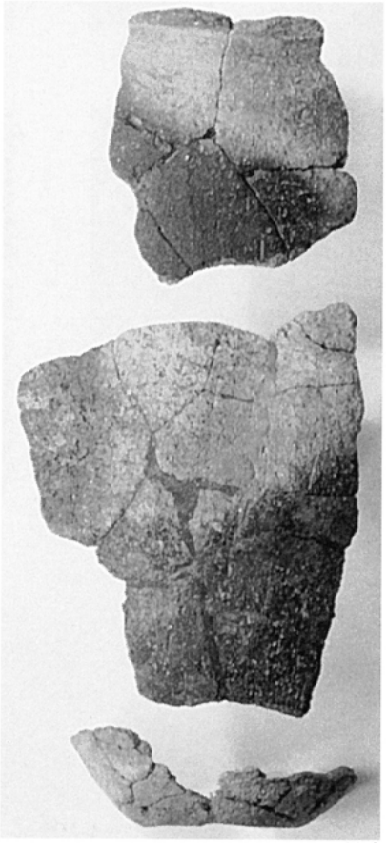
43-2


44-3

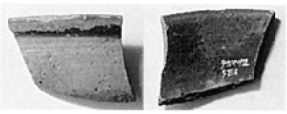

44-4

44-5

44-7

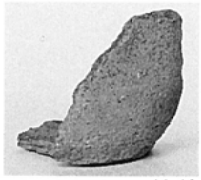

44-8

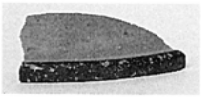
44-9

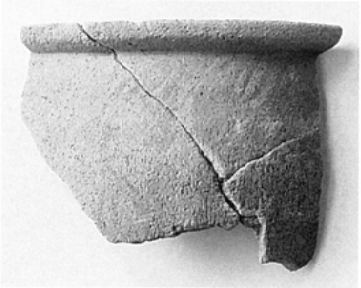

44-10

44-6

44-11


44-12

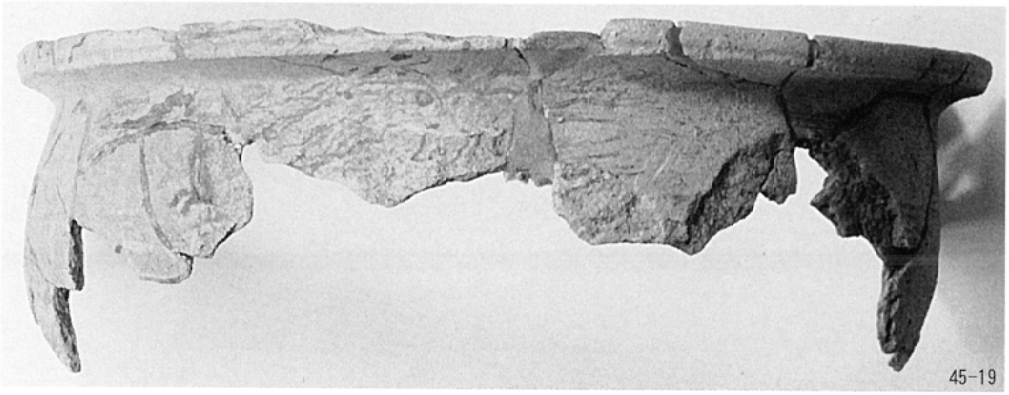

45-13


45-17

45-14

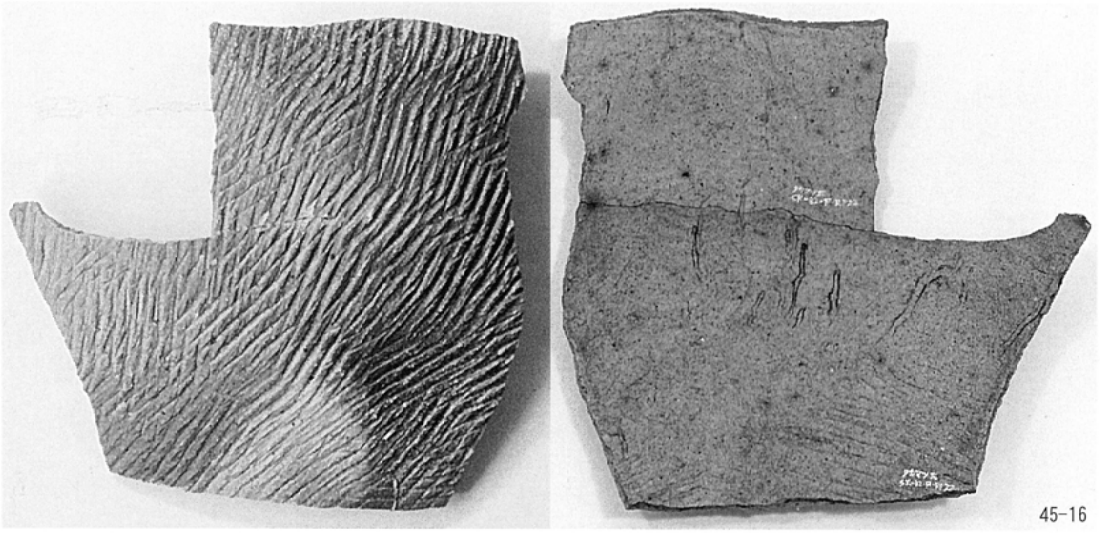
45-15

45-18


45-19

石匙・削器・出土土器(1)

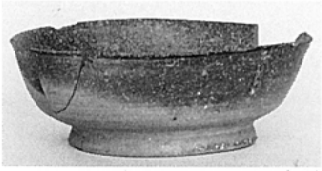
図版 37


45-16

46-20

46-21

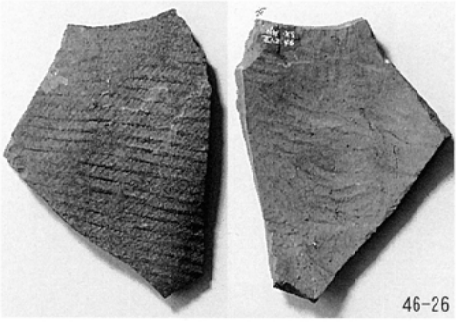
46-22

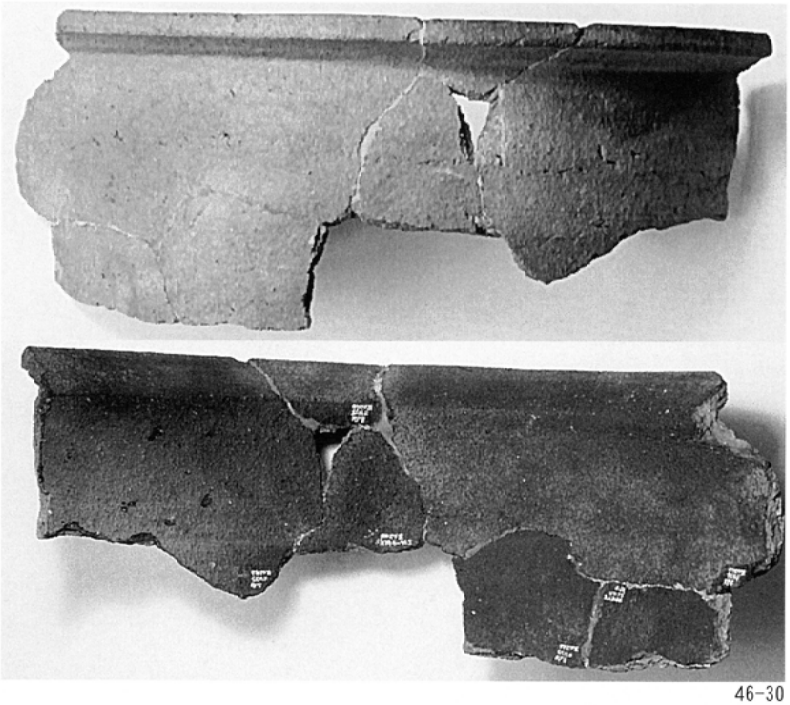

46-23

46-24

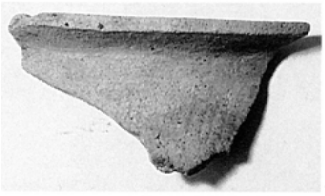
46-25

46-27

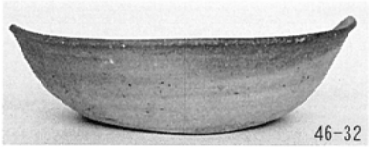

46-26


46-30

46-28

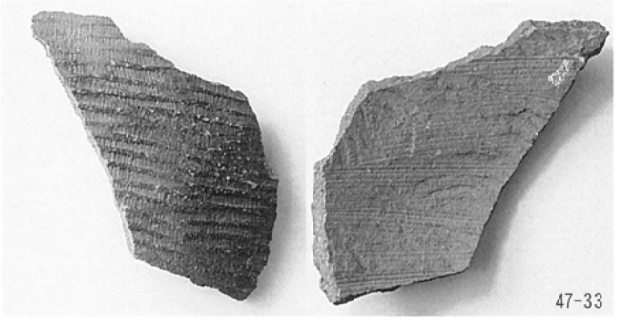

46-29

46-31


46-32

出土土器 (2)

図版 38


47-33

47-34

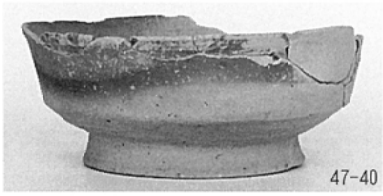
47-35

47-36

47-37

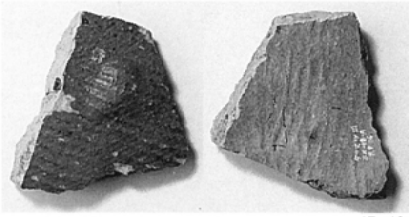
47-38

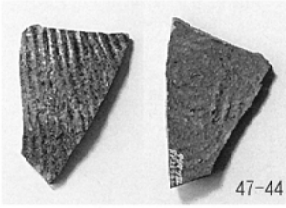
47-39

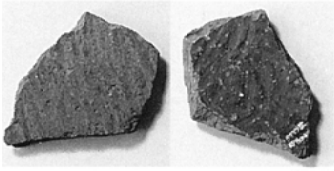

47-40

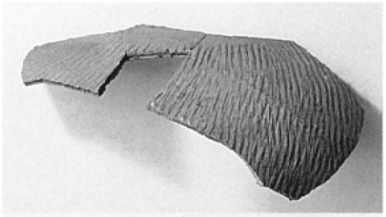
47-41

47-42

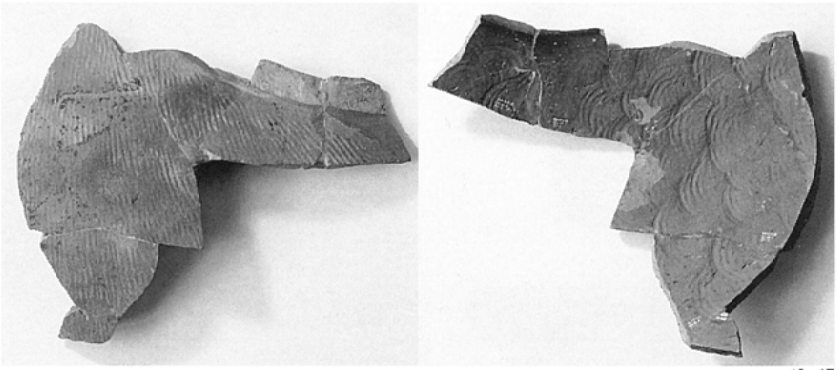

47-43

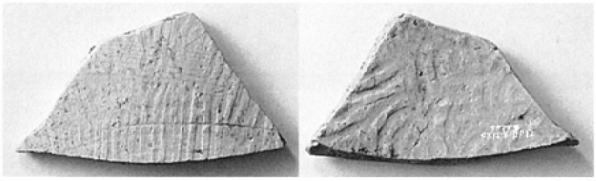

47-44


47-45

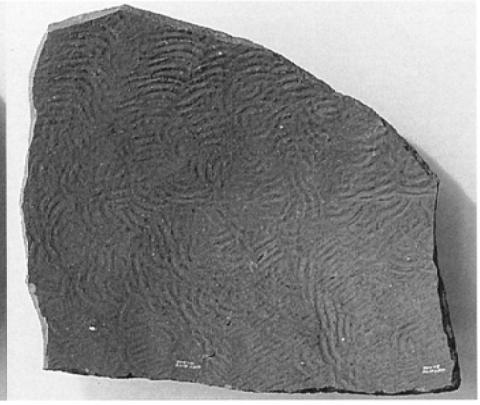


48-46

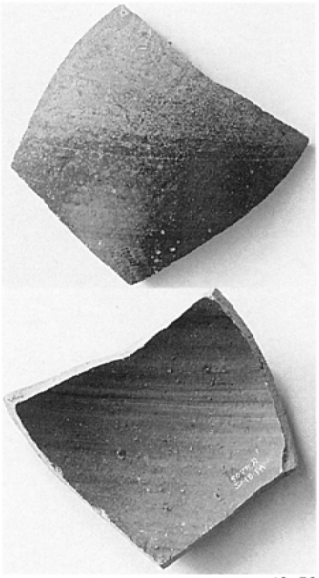

48-47


48-49

出土土器 (3)



48-48



48-50

49-51

49-52

49-53

49-54

49-55

49-56

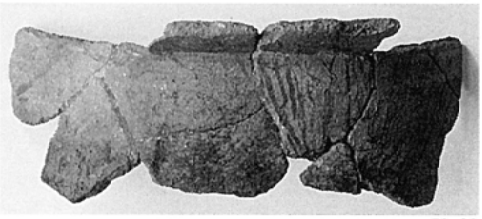
49-58

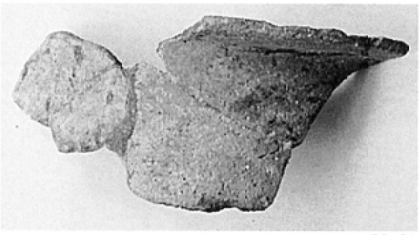
出土土器 (4)

図版 40

49-57

50-59


50-60


50-61

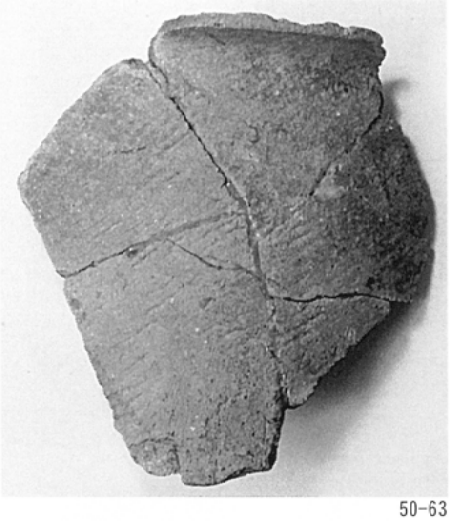
50-62

51-64

51-65

出土土器 (5)

図版 41



50-63

51-66

52-69

51-67

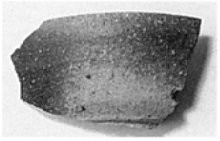
52-68

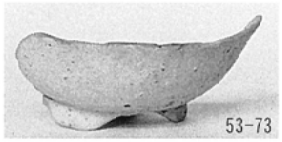
出土土器 (6)

図版 42

52-70

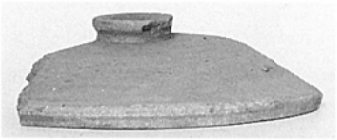
52-71

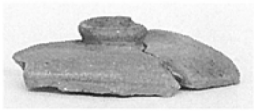

53-72


53-73

53-74

53-76


53-78


53-77

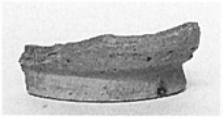
53-75

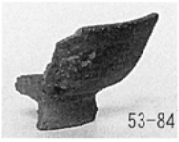
53-81

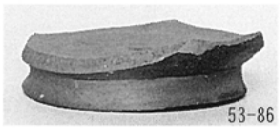
53-80

53-82

53-79

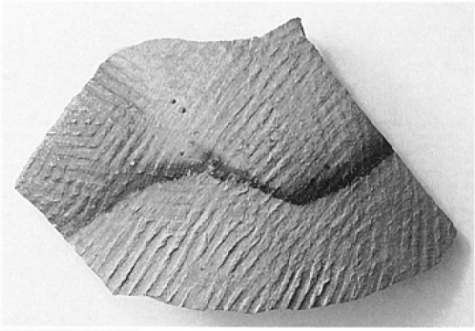

53-83

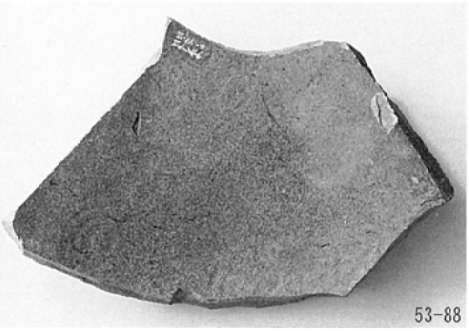

53-84

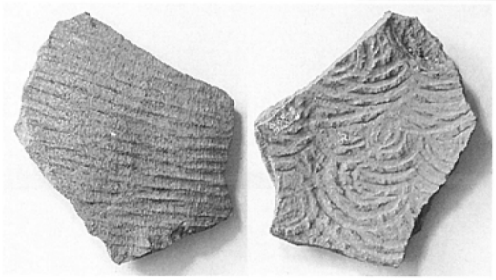

53-86

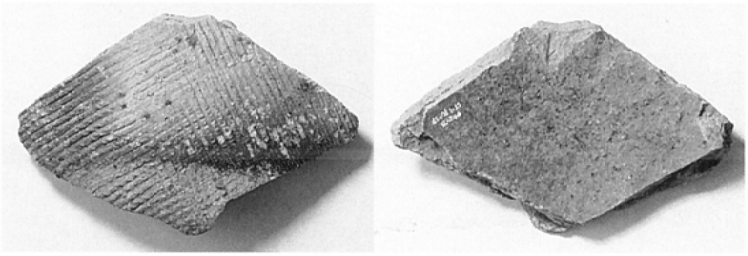
53-85

53-87



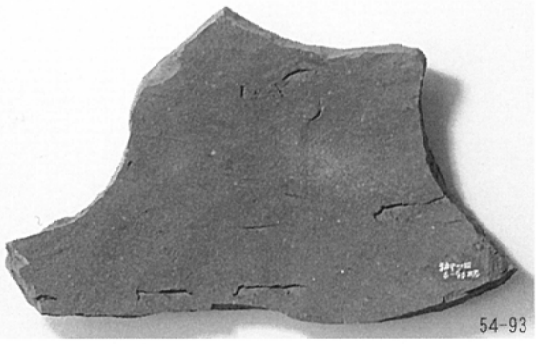

53-88


54-89


54-92

出土土器 (7)

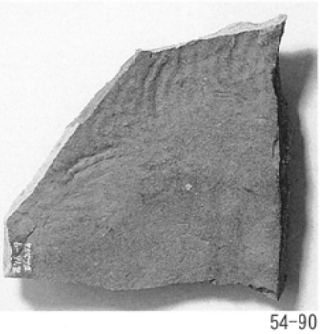
図版43



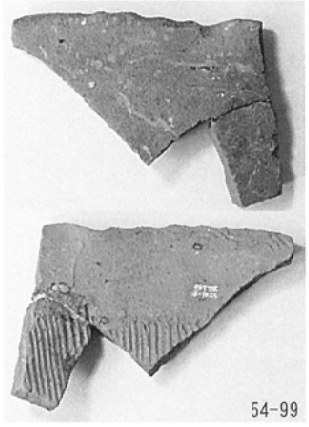
54-93

54-94

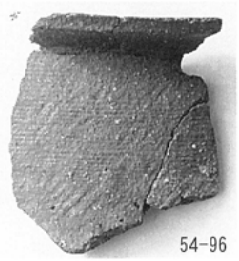
54-91



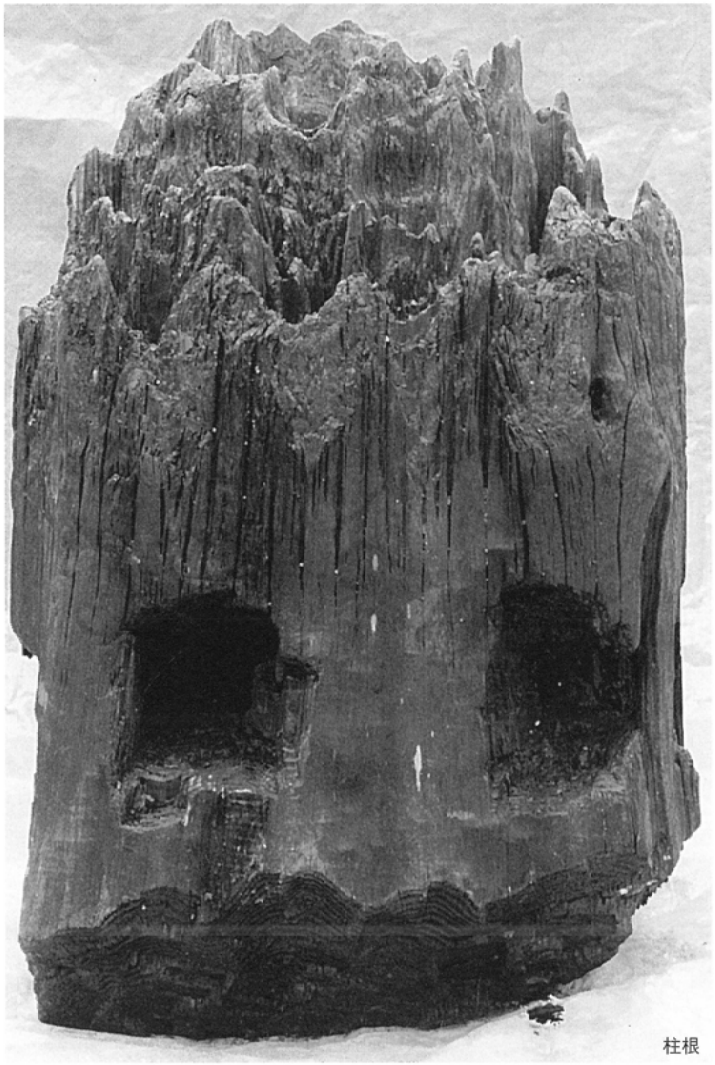
54-90



54-99



54-96



柱根

54-98

54-95

54-97

出土土器(8)・陶器・柱根

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第61集

高松(たかまつ)Ⅱ・Ⅲ遺跡発掘調査報告書

1999年3月31日発行

発行　財団法人　山形県埋蔵文化財センター
〒999-3161　山形県上山市弁天二丁目15番1号
電話　023-672-5301
印刷　藤庄印刷株式会社